日本語研究

E・D・ポリワーノフ著　村山七郎編訳

弘文堂

TRANSLATIO JAPONICA

MEMORIAE E.D.POLIVANOV

DEDICATA

E. D. ポリワーノフの思い出（1976年3月）

ニコラス・ポッペ

ペトログラード・レニングラード大学の私の最も早いころの思い出のひとつは，ポリワーノフに関係のあるものである。1918年1月のある日のことであるが，新学期のはじめに私は大学に出かけた。ポリワーノフの講義を聞くためであった。これが彼との最初の出会いであった。私は新入生で，以前にポリワーノフを見たことがなかった。噂によると卓越した学者で，その講義はすばらしいということであった。ロシアにとって第1次世界大戦は終ったばかりであったが，内乱がはじまっていた。そこで大学に来る学生も少なかった。

その日に集まった学生は多くなかったが，長く待つ間もなく，教授が姿をあらわした。しかし，何という姿だったろう！　ひげもそらず，乱れ髪で，顔を洗ったのは何日も前のようであった。教室は寒かったので，ポリワーノフはオーバーを着たままだったが，そのオーバーたるや古びた軍隊の大外套で，汚れていて，いくつもボタンが無くなっており，数ヵ所が破れていた。ポリワーノフの顔は腫れぼったく，目は血ばしっていた。見るからに恐ろしい姿で，とても大学教授とは見えなかった。スラム街から来た浮浪者としか思えなかった。それに，片手であることに私は気付いた。酒に酔って市電のプラットフォームから倒れたとき，片手を失くしたことをずっと後に知った。ポリワーノフから受けた第一印象は破滅的であった。すぐに教室から脱け出して，二度と来まいというのが私の最初の衝動であった。しかしラテン語の諺にあるように，Species fallit.（外観はあざむく。人は見かけによらぬもの）。すぐに，私は教室を脱け出してはならないどころか，再び来なければならないこと，そしてこのすばらしい教授の講義を規則正しく聞かなければならないことをさとった。

後になって私はポリワーノフの過去と現在をくわしく知った。私はポリワーノフの人物について，またその性格のいくつかの細部については後に述べることにして，先ず，ポリワーノフがソ連の最大の言語学者のひとり，また

世界の一流の言語学者のひとりであったことを述べておきたいと思う。1891年に生れ，サンクト・ペテルブルグ大学を1912年に卒業した。フォネーマ（音素）という概念をはじめて導入した学者のひとりであった有名な言語学者ド・クルトネー（Baudouin de Courtenay）のもとで研究した。1914年にマスターの学位を得てから，母校で日本語の助教授に任命された。

ポリワーノフは私がこれまで出会った最も輝かしい学者のひとりであった。諸言語について該博な知識をもち，訓練された言語学者として，進んだ方法を完全にマスターしており，多数の言語にそれを応用して成功した。ペテルブルグ大学の公式の地位は日本語の教授だった。しかし，日本語と琉球語にかんする研究のほかに，印欧諸語にかんする諸論文，シナ語とドゥンガン語(1)の文法を他の学者と共著で出版し，トルコ語における本源的長母音にかんする論文のような一連のすぐれたトルコ学研究，ウズベク語その他のトルコ諸語の文法及び方言学的研究を発表したが，ポリワーノフのライフワークは何と言っても『言語学概論』である。これはとくに東洋語研究の学生のためのものである。じっさい，それは音韻論及び音声学に重点をおいた一般言語学の分野における高い水準の研究書である。

ポリワーノフは多面的な東洋学者，言語学者のひとりであった。この点で彼は有名なフィョードル・コルシュ（1843～1915年）(2) を除いて誰にもひけをとらなかった。1918年に私が出会ったポリワーノフはこのような学者であった。すばらしい教師だった。その講義では事実を豊富にあげ，おびただしい知識を提供した。多くの有名な学者たちの講義と対照的に，ポリワーノフの講義は非常に興味があった。学生たちは何時間もぶっつづけに彼の講義に耳をかたむけ，日の暮れるのも忘れていた。大学の言語学研究会や考古学協会東洋部——東洋学協会は当時そう呼ばれていた——の集会で彼が発表するときは，いつも聴衆が多かった。彼は非常に博学な学者であっただけでなく，話しも上手であった。

一流の言語学者のひとりとして，ポリワーノフは1927～29年に N. Ya. マルのいわゆる「新言語学説」に猛烈に反対した。この説は政府の支持する公式の言語学説と目され，言語学におけるマルクス主義そのものと見られていた。マルの考えがおかしいのでマルを攻撃した人々は，危険な論敵をたおそうとして，つらい目に会っていた。

ポリワーノフは初期において，革命運動に積極的であった。十月革命後，外務人民委員の代理となり，ペトログラード・レニングラードの帝制時代の外務省の建物（複数）を接収した。外務省の官吏や使用人はソヴィエト当局に協力することを拒んだ。ポリワーノフは彼らを新しい人員でおきかえ，それと同時に官吏を全部，外務省の官舎から追立てた。追立てをくった人々の中には有名な学者，即ちペルシア研究の V. A. ジューコフスキー教授や歴史家の N. I. ヴェセロフスキーもいた。彼らは外務省の東洋語学校で教えていて，官舎に住む資格を与えられていたのだった。追立てがあったのは冬だった。ヴェセロフスキーは街頭に追立てられて，肺炎にかかって死んだ。この乱暴な出来事に大学の他の教授たちが大いに憤慨したのは言うまでもない。1919年にポリワーノフは共産党に入党した。そのために彼とペトログラード大学のたいていの同僚たちとの不和が決定的となった。当時は多数の学者が共産体制に反対していた。ペトログラード大学をやめて，1921年1月にモスクワに移ったのは，ペトログラードで周囲の人々の反感を買い，いたたまれなくなったためではなかろうかと思う。しかし気の毒にもモスクワの研究機関で仕事が見つからなかった。その代わりコミンテルンの極東部の副部長として働き，東洋勤労者共産大学(KUTV)で教えた。幸いにもモスクワには長くいないで，数ヵ月後にはウズベキスタンに転勤させられた。そこでタシケント大学で再び学者および教師としての活動をはじめた。数年後，1926年にポリワーノフは再びモスクワに移った。今度はいろいろな研究所で働き，貴重な一連の論文を書いた。しかし，モスクワに戻らなかった方が彼のためによかったであろう。そのころ，言語学界では完全にマルの「新言語学説」が支配していた。この説は全く反学問的であった。不幸なことに，それはまもなくソヴィエト当局の支持する公式の言語学説になった。あまり良心的でない言語学者たちは，敢えて公然とマルの言語学に反対することはしなかった。

このような学者のあるものは，マルの学説を立身出世のスプリングボードにしようとし，マル学説反対者を公然と非難し，政治的な疑惑をかけて自分の出世をはかっていた中で，ポリワーノフはマルをはげしく攻撃した。輝かしい言語学者として，また少なくとも学者としての信条にかんするかぎり，まじめな学者として，ポリワーノフは，学問的な説を装ったマルのナンセンスに我慢できなくて，公然とそれを批評した。1931年にポリワーノフの『マ

ルクス主義的言語学』が出版された。この本の中で彼はマル言語学を完全にうちたたいた。この論争は非常に真剣にうけとられて，多くの公開討論会が開かれ，ポリワーノフとその反対者たちは意見をのべあい，しばしば非常に興奮した場面が見られた。この論争の結果は，ポリワーノフによいものは何ひとつなかった。1929年にはモスクワで凡ての職を失っていた。そこでウズベキスタンにもどり，1937年3月に逮捕されるまでそこにいた。ポリワーノフがマル学説を攻撃したこと，マル追随者に対する論争を堂々と行なったことが，だいぶ投獄の原因となっていたのではなかろうかとおもう。しかし，マル自身は，まったく公平に言って，復讐心に燃えていなかったし，卑劣な人でもなかったことをはっきり言っておきたい。しかし，マル追随者たちの中には多くの日和見主義者や不まじめな分子がいて，これらの人がマルとその権威を自分たちの利己的目的に悪用したのである。王様以上に王党的であって (plus royaliste que le roi), 危険なライバル〔ポリワーノフ　訳者〕をやっつける手段としてこの論争を悪用したのはマルでなくて，幾人かのマル追随者であった。

他方，ポリワーノフは，ウズベキスタンの当時の指導者であったウズベク共和国政府の首相ファイズルラフ・ホジャーエフ，ウズベク共産党中央委員会書記イクラム・ザーデによって学者として大いに尊敬され崇拝されていた。この二人が他の数百の有力者とともに逮捕され1937年に銃殺されたとき，ポリワーノフは庇護者を失ってしまい，投獄されたのであった。

ポリワーノフはいろいろな欠点に加えて，麻薬常習者であった。1920年ころ大学の寮に住んでいたが，泥酔して又は麻薬で興奮して，しばしば口論をはじめたり，女子学生の室に闖入しようとしたりした。有名なソ連作家カヴェリン (Kaverin) の『乱暴者(スカンダリスト)』という小説の主人公はポリワーノフである。ポリワーノフの乱れた行動を止めさせるために警察はあれこれと処置をとったが，無駄であった。相変らずアルコールと麻薬の常習者であった。投獄されて麻薬をとめられたのが余りに急であった。そして1938年1月25日に獄死した。

ポリワーノフは偉大な学者であり，妥協しない学者として特徴づけられる名誉に値する。マルの言語学を，恐怖のためばかりに賛美していた言語学者がソ連にはたくさんいたことを想い出すべきである。学者としてポリワーノ

フは勇気があり，まじめであった。不幸にして，彼の声は砂漠で叫ぶ者の声であった(3)。

以上，ポリワーノフがどんな人間であったかを見てきた。一方では偉大な学者であり，他方では大酒飲みで，まったくの堕落者であった。ジキル博士とハイド氏〔スティヴンソンの小説の主人公　訳者〕が実在したとするなら，それはポリワーノフであった。この短い回想を結ぶにあたって，私は自分に問うてみる：「ところで，お前自身のポリワーノフに対する判断はどうなのか」と。その答えとして，私は「宝石は汚物だめに落ちても宝石に変わりない」というサンスクリットの古い諺を挙げる。

訳　註

(1)　ソ連のキルギース共和国，カザフ共和国に住む中国人の言語。話し手は1970年に3万9千人。

(2)　F. E. コルシュはギリシア，ラテン，スラヴ，イラン，アラブ，トルコ，アルメニア，サンスクリット学者であり，音声学者，韻律学者であった。A. N. コーノノフ編『革命前ロシア・トルコ学者辞典』（モスクワ　1974年）にややくわしい伝記がある。

(3)　バイブル，ヨハネ伝1—23「私は砂漠で叫ぶ者の声である（ラテン語：Ego vox clamantis in deserto.)」(砂漠で叫ぶ者＝予言者)。

目　次

凡　例

『言語学概論』でポリワーノフが用いる母音記号

非円唇母音　　　　円唇母音

i　　ɯ y　　u

ɪ　　ы　　ʏ　　ȣ

ь　　ъ

e　　ə　　ѣ　　ɸ　　o

ɛ　　ʌ　　œ　　ɔ

æ　　α　　ᴀ

ɛl　　ɑ

a

文字の上の ¨ は混合母音 (mixed) を示す

文字の上の ˜ は鼻にかかる母音

文字の下の v は無声化を示す

本書で多く用いる音声字の説明

c　ツの子音

ć　チの子音

ç　ヒの子音

ð　英語 this の th の音

ʒ　ヅの子音

ʒ́　ヂの子音

j　ヤ行音（フィリピンの言語を表わすとき y を用いる）

k′　口蓋化した k。その他の子音の口蓋化も ′ で示す。

ɲ　ニャ，ニュ，ニョの子音

ŋ　鼻にかかるガ行子音（鼻にかからないガ行音子音 g と区別する）

ś　シ，シャ，シュ，ショの子音

φ　両唇無声マサツ音

略号と訳語

cf.　参照せよ

ff.　以下のページ

pl.　複数。

←―　たとえばA←―B　　　Bが変化してAになることを示す。Aのもとの形はBである。

―→　たとえばA―→B　　　Aが変化してBになることを示す。

ロシア語 слово（スローヴォ）は語と訳した。単語と訳したところがすこしある。

ロシア語 язык（イェズイク）は言語と訳した。

1.　日本語における音楽的語アクセント

エルンスト・A. マイアー

(Le Monde Oriental 誌, 1906年, pp. 77～86. スウェーデン ウプサラ)

〔村山。この論文はポリワーノフの日本語アクセント研究の出発点をなす。ポリワーノフの論文を理解する上に不可欠なので，掲載することにした。京都方言の「鶴（ツル）」のアクセントを明示している点など，きわめて注目すべき資料がふくまれている。1970年11月7日，湯川恭敏氏にお願いして東京大学でコピーをつくっていただいた。この機会に湯川氏に感謝する。〕

音の点でおなじ形の語 (pl.) の発音を，有声の音につけられる特別のトーン，語メロディー，音楽的アクセントによって区別する言語があることは知られている。たとえばスウェーデン語の anden「鴨」と anden「精神」がそれである。前者では第1音節のトーンがだんだん上昇し，第2音節で上昇をつづけるか，または同じ高さを持続するかであるが，後者では第1音節のトーンがはげしく下降し，第2音節で再び上昇するというちがいがある。シナ語はさまざまな語アクセントがとくに豊富なので知られている。カインツ (Kainz) によると，いわゆる〔北京〕官話方言は五つのちがった声調をもつ。高く平ら，低く平ら，上昇，下降，高くて中断するトーンがそれである。そこで，tʃi は低く平らなトーンのときは know，下降のトーンでは till，上昇トーンでは but である。huo は低く平らなトーンでは harmony であり，上昇調では fire であり，高くて中断するトーンでは perhaps である。

日本語もこれと似たような事情にあることは，これまでも知られていなかったわけではないが，資料はたがいに矛盾している。語アクセントの性質については，やっと近頃，エドワーズの本〔村山。『日本語の音声学的研究』ライプチヒ1903年。高松義雄氏の訳の複刻が恒星社厚生閣から出版された。1969年〕で，いくらかハッキリしたことがわかった。

ホフマンは『日本語文法』(Japanische Sprachlehre 1877年) の補遺の中で，ある英国の辞典編者の資料によると，日本語の語アクセントが，アクセントのある音節のわずかのトーン上昇にあり，2音節語では第1音節にアクセントがあることもあれば，第2音節にアクセントがあることもある，と述べている。B.H.チェンバレンは『日本口語ハンドブック』(1888年) で，シナ語にあるようなトーンは日本語には全くなく，音楽的アクセントは全くないか，または，わずかの程度存在するにすぎない，という。

しかし注の中でチェンバレンは，このことばをひっこめている。わずかの音楽的アクセントはたしかに日本語に存在するが，きわめてわずかであって，どんな辞典にもしるされていないし，地方によってアクセントが異なっており，同じ地方でも人によってアクセントがちがい，同一人でもアクセントは一定していない，と述べている。しかしチェンバレンは東京の大抵のひとは「花」と「鼻」,「箸」と「橋」,「牡蠣」と「柿」などのような一対の同音語を音楽的アクセントで区別していることをみとめている。しかし，両方のアクセントの性質についてハッキリした考えをほとんど持っていなかったことは，それらのアクセントの説明のしかたからよくわかる。

チェンバレンによると，これらの語のあいだのちがいは，かなり多くの英国人が morning(朝) と mourning(哀悼)，advocate(弁護する) と advocate (弁護人) とのあいだにおく区別とは性質上は比較できないが，程度によっては比較できるかもしれないという。しかし morning と mourning との発音のちがいは (北部英語では)，morning における母音が mourning の場合より舌がやや多く後ろにひかれるという点にある。to advocate(弁護する) と an advocate (弁護人) とでは，最後の音節の ei ないしəによって，また動詞が最後の音節にダイナミックな副アクセントをもつのにたいして，名詞にはそれがない，というちがいがある。こうしたことから日本語における音楽的アクセントが程度の差だという結論をなぜ下せるのか，その点が理解しかねる。チェンバレンと似た立場をとるのが R. ランゲ (Lange) の『日本口語教科書』Lehrbuch der japanischen Umgangssprache (1890年) である。ランゲもまた日本語にはアクセントで区別される同音の語があること，外国人にはアクセントがとらえにくいこと，日本人自身もアクセントに注意していないことを述べている。

この問題について，はじめて，いくらか詳しく取り扱ったのはE. R. エドワーズ (Edwards) のパリのドクター論文「日本語の音声学的研究」Études phonétiques de la langue japonaise である。彼によると，２音節語だけでなく，１音節語も音楽的アクセントで区別される。たとえばアクセントのちがいで çi（ヒ）は「火」か「日」かを表わし，tʃi（チ）は「地」か「血」かを，su（ス）は「巣」か「酢」かを意味する。その他。

私自身は1903年８月に，従来よりもよい補助手段をつかって，日本語のアクセントをひとりの日本人の発音をもとに研究する機会にめぐまれた。この研究の材料は藤岡勝二博士〔村山。1872〜1935。1901〜1905年ドイツに留学〕のおかげであるが，氏は日本の古都・京都で生れ育った〔村山。本願寺関係の人であるという〕。そこで勉強してから東京に移り，東京の大学で言語学を勉強した。研究をつづけるため何年か前からライプチヒに滞在している藤岡博士の言うところによると，東京で勉強中，東京の知識人のあいだでふつうに用いられる話し方を完全にマスターし，同郷人と話すときもそれを使うことにしている。しかし同時に，故郷の方言〔村山。京都方言〕を自由に話せた。

ある音声学的研究に私は日本語の材料を必要とし，それを集めるとき，藤岡博士がいろいろな語において，いろいろな音楽的アクセントを用いることに気づいた。たずねてみたところ，「この二種類のアクセントのつけ方は東京でありふれており，それを守ることが言語理解に必要である。それを守らないと，意味のちがう多くの語が聞き手にとって，ひとつになってしまうだろうから」と説明してくれた。さらにたずねたところ京都の音楽的アクセントが東京のそれと非常にちがうことがわかった。東京では二つのアクセント形が用いられるにすぎないのに，京都方言では三つのアクセント形がある。語のトーンの動きにしたがって，京都では，たとえば haʃi（ハシ）は「橋」「端」「箸」を意味し，tsuru（ツル）は「弦」「釣る」「鶴」を意味する。

東京方言と京都方言のちがった語アクセントのトーンの動きを実験で定めることができた。喉頭の上方ののどにピッタリつけたカプセルが声帯振動で生じた喉壁振動を非常に小さいマイアー氏空気カプセルの薄膜につたえた。この薄膜の振動は記録てこ (Schreibhebel) によって非常に拡大されて，回転シリンダーの煤をぬった被筒（マンテル）にしるされた。シリンダーの回転速度は電動の音叉——毎秒 100 振動——で決定された。この場合平均毎秒30㎝であった。

声の振動にたいして得られる曲線は非常に明確なので，精密な測定器械の助けと，音叉曲線との比較によって，ひとつひとつの声帯振動の持続が十分正確に定められる。ところで，声帯振動の持続によって声の高さが与えられる。

調べた語（pl.）における音の境目を精密に決定しうるために，音調曲線と同時に，開いた口を通る呼気の流れの動きを記録した。口漏斗を応用してそれを行なった。インフォーマントはこの口漏斗に話しこみ，口漏斗の首はふつうの大きさのマイアー氏空気カプセルの接合筒に対置してあった[1]。調査はウプサラ大学生理学研究所で行なった〔村山。藤岡がウプサラに旅行したことが証明される〕。

東京方言についてつぎの語を調査した。

hana 花　　hana 鼻
uri　瓜　　uri　売り
kiku 菊　　kiku 聞く

京都方言についてはつぎの語を調査した。

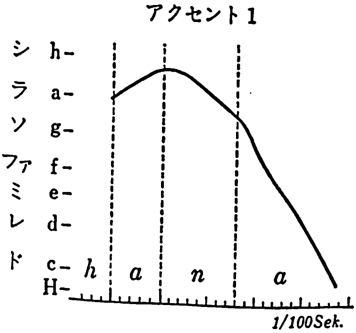
haʃi　橋　　haʃi　端　　haʃi　箸
tsuru 弦　　tsuru 釣る　　tsuru 鶴

これらの語は，単独に，冷静な調子で中程度の強さで話してもらった。どの語も二度づつ記録した。

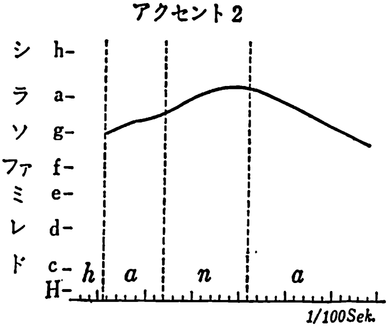
次頁に，カーブの形で東京方言の hana と京都方言の tsuru のトーンの高さの決定の結果を示す。カーブの左側に絶対的な高さを示し，横座標は時間の経過を$\frac{1}{100}$秒で示す。縦の点線は音のさかい目を示す。明らかに記録の誤差，測定誤差にもとづく元のカーブの僅少の湾曲はここでは示さないことにする。

A.　東京方言における二つの語アクセント

アクセント1——これは日本語（東京）における2音節語のうちで，はるかに多数を占める——は大体において下降アクセントといえる。トーンは第1音節の母音において高くはじまり，母音の持続中，かなり高く保たれ（ある場合には上昇し，他の場合には少し下がる），つづく音において急に下がる。全体のトーンの変動はほとんど1オクターブにわたる。



第1図　hana 花



第2図　hana 鼻

〔村山。ポリワーノフは第1図 hana「花」のあやまりをはじめて指摘。「花」の東京アクセントは ha「na。第1図のアクセントのハナは人名「花(子)」のハナである，とポリワーノフは指摘した〕。

アクセント2の特徴は，わずかのトーンの動きである。トーンは第1音節の母音で高いが，一般にアクセント1の場合よりやや低く(1度ほど)始まる。母音の経過中，トーンはおなじ高さにとどまり，やや上昇するようでもある。次の子音のあいだにトーンはさらにやや高くなり，最後の母音で$\frac{1}{2}$度ないし1度下がる。

強さアクセントが音楽的アクセントに並行しているようにみえる。アクセント1の場合，2音節語の第1音節はわりあい強いアクセントのある音節として聞こえるが，アクセント2の場合は，両方の音節がおなじ程度の強さである。ここでは第2音節が僅かほど強さにおいてまさっているようにさえみえることがしばしばある。ことに文の中では (im Satzzusammenhange)，このことがみとめられたと思う。たとえば 'hana to i̯e にたいする 'han''a to i̯e (花と言え。鼻と言え)。

アクセント2の2音節語，ことに1音節語を単独に発音するときは，語末母音の終りにおいて声帯が圧縮する傾向がみられ，そこで一種の衝撃トーン (Stosston) の印象をうけた。文のなかではこの現象は現われなかった。

アクセント状況は音持続にもある程度影響する。他の点ではおなじ音の語 (pl.) をくらべてみると，アクセント1の場合は第1音節がアクセント2の場合より長く，これに反して第2音節は，ことに文のなかにおいては，アクセント2ではアクセント1より長いように思われる。

ちがったアクセント形を示す前掲の例のほかに，藤岡博士の資料によって，さらにいくつかの例，ことにアクセント２の例をつけ加えよう。そのいくつかは前記のエドワーズの本にみられる。

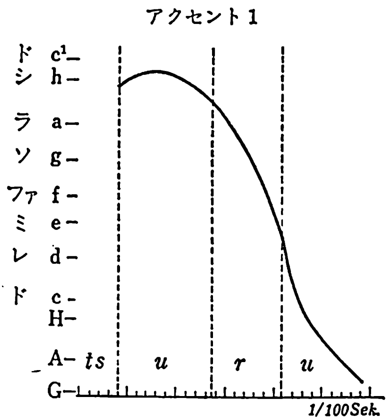
アクセント１		アクセント２	
ki	木	su	巣
çi	火	çi	日
ippen	一遍	ippen	一片
kami	神	kami	紙
kawa	皮	kawe	川
kite	着て	kite	来て

さらに，つぎの１音節語および２音節語がアクセント２である。

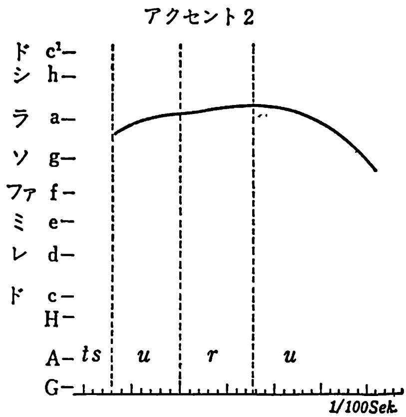
ha 葉　ba 場　ke 毛　ko 子　na 名　to 戸　isu 椅子
hiza 膝　kabu 蕪　koja 小屋　kubi 首　sato 里

エドワーズは前記の本で，みずから東京方言で観察した両方の音楽的アクセントの性質についてハッキリと述べてはいない。しかし彼が音声学的転写で用いる記号からみて，私のいうアクセント１を高く平らなトーンとみて，私のいうアクセント２を低く平らなトーンと解していたことがわかる。具体的にいって大きなちがいがあるにもかかわらず，私はエドワーズのアクセント規定——それは明らかに，耳できいた印象を大ざっぱにスケッチしたものと思う——は私の規定と矛盾しないと思う。トーンの動きの分析に熟達していないと，アクセントのない音節におけるトーンの低下を聞きもらしてしまい，そこで音連続（Lautgefüge）の最も大きな強さアクセントのある部分の高いトーンを全体〔村山。語全体〕の特徴的なトーンと思ってしまうのである。ついでながら，トーンの低下はハッキリと意識されない場合でも，語頭のトーンを実際よりも高く思わせてしまうものである。そこでエドワーズは，アクセント２がアクセント１の最高トーンよりあまり低くない高さを示すのに両方のアクセントを高いアクセントと低いアクセントとして区別しているのだと思う。

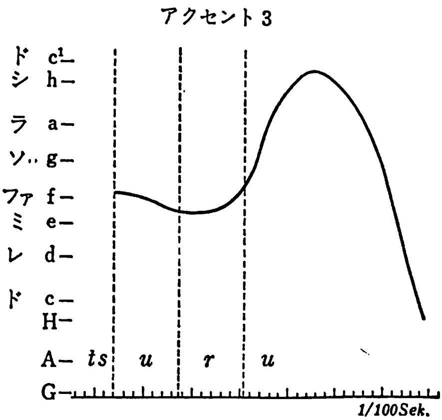
B. 京都方言における三つの語アクセント



第3図 *tsuru*（弦）



第4図 *tsuru*（釣る）



第5図 *tsuru*（鶴）

京都方言のアクセント1とアクセント2はそれぞれ東京方言のアクセント1とアクセント2に似ている。京都方言でもアクセント1は大体において下降的で，またアクセント2は高く平らである。これに対して京都の第3のアクセント形は新しい。ここではトーンは中位の高さではじまる。すなわち，

アクセント1の最高の高さよりも3度だけ下ではじまる。そして第1音節の母音の持続中は同じ高さにとどまるか，やや下がるかである(ha͡ʃi の或る場合にはここで1トーンだけ高くなった)。次の子音のあいだトーンはゆっくり上昇し，第2音節の母音の持続中，トーンは急に最高の高さに上昇し，そこから再び中位の高さ，またはもっと低く下がる。

アクセント1およびアクセント2の用い方は東京方言と京都方言で同一でないことは注目される。東京方言でアクセント1をもつ語が京都ではアクセント2をもつことがあり，またその逆〔村山。東京方言でアクセント2をもつ語が京都方言でアクセント1をもつこと〕もある。

さまざまな音楽的アクセントの発達を，言語学は近ごろまであまり注目しなかった。わりあいよく研究されているヨーロッパの言語で，類似した状況を示す言語でさえ，この発展の理由についてハッキリした見解がみられない。日本語にたいしては，問題解決の手がかりはまったく欠けている。日本語の言語学的研究はまだ始まったばかりである。日本語の歴史について，個々の音や音グループの発展について，まったく僅かしか我々は知らない。以下に述べる簡単な考察は，不明の領域において，用心深く手さぐりで，いくつかの方向を見定めようとする試みと解してもらいたい。

日本語はシナ語からきわめて強い影響をうけた。とくに文語がそうである。しかし口語もまたシナ語からの借用語をたくさんとり入れている。シナ語は周知のように，完成した語トーン体系をもっているから，日本語の語アクセントもシナ語からの影響によるという可能性を考えたくなる。この可能性を無造作にしりぞけることはできない。ところが，借用単語は借用する側の言語の音韻体系およびアクセント体系に適応するのがふつうであるということは，上のような考えにとってぐあいが悪い。私が受けた解説〔村山。藤岡の〕によると，説明を必要とするアクセント2のたくさんの日本語単語がシナ語からの借用語であることが証明できないらしい〔村山。アクセント1には問題はない，と見ている。〕。

エドワーズは，さまざまな音楽的アクセントが書き方に関連したペダンティックな発音にすぎないのではあるまいか，という問いを出している。アクセント以外の点で同じように発音される語 (pl.) は，漢字で表わすときは，ふつう同じではない。アクセントのちがいは一対の同音語においてのみ見出

されるとエドワーズがみていることは明らかである。そこでアクセントは結局は語区別の必要にもとづくことになるだろう。しかし，この推定は当たらない。たとえば，上にあげた語 isu, hiza, kabu, koja, kubi, sato は東京方言ではアクセント2であり，それと対立する同音のアクセント1の語があるわけではない。同じことは1音節語のいくつかについてもいえるようである。そこで，これらの語ではふつうのアクセントのしかたからそれたアクセントのしかたは，区別の必要によるとはいえない。

他の諸言語における音楽的アクセントについての経験からみて，さまざまなアクセント形は日本語の独自の発展の産物である蓋然性が大きい。この問題を研究する者は，とくに東京方言のアクセント2，京都方言のアクセント2および3の現われる諸条件に注目せねばなるまい。アクセント1はとくに注目すべきものを示すわけでない。アクセント1のトーンの動きは第1音節に強いアクセントのある2音節語において最初から期待されるものであり，大体において，北ドイツ語，英語，イタリア語，ロシア語，フィン語，ハンガリー語，その他の多くの言語において同様にみられる。これに対して，他のアクセント（pl.）は特別な説明を必要とする。これらのアクセントにおいては，おそらく元来，語末にあって，今では消滅してしまった音または音グループのなごりがみられるのであろうか〔村山。ポリワーノフが京都の「下降的上昇調」――マイアーの京都アクセント3――において語末の鼻音のなごりをみたのは，ここからヒントを得たと思う〕。周知のように母音におけるトーンの動きにたいしては周囲の子音，ことに後続の子音の性質が決定的な影響を与える(2)。単独に発音される語では，たとえば北ドイツ語の発音によると，アクセントのある母音は語末の場合または有声音の前で著しいトーン下降を示す。これに反して，無声音とくに無声閉鎖音の前では，このトーン下降は著しく減少するか，または全然下降しない。北ドイツ語の tsi:t と tsi:n, dik と dil (zieht, ziehn, dick, dill) のような語で，おそらく二つの異なった「語トーン」があるといえよう。

さて，トーンの動きは言語発展の過程において語末音が消えた後にも，母音において保存されることがある。その一例はシナ語（いわゆる北京官話方言）における入声（ニッシヨウ）と呼ばれるアクセント形である。カインツによれば急に中断される高いトーンである。このトーンの中断性は明らかにかつて無声の語

末子音 p, t, k が存在したことによって条件づけられている。他の方言ではそれに対応する語が今日も p, t, k を示している。将来の研究によって，アクセント2をもつ日本語単語において，以前の言語段階で語末母音に有声閉鎖音がつづいていたことが明らかにされるならば，この注目すべきアクセント形が十分に説明されたことになろう。kíku「菊」，hána「花」にたいする kíkú「聞く」，háná「鼻」のような語における第2音節の強さが強まるのは，音楽的アクセントの発展の結果としてたやすく理解される。

さて，もう一度強調しておくが，以上の観察はもちろん軽率なファンタジーにすぎないし，それ以外でありうるはずがない。日本語におけるアクセント状況を理解するためには，とくに一方では現代の諸方言におけるさまざまなアクセント形の存在をくわしく調査し，他方では，それぞれの語の音構成をできるだけ古い過去にさかのぼって追究することが必要である。

〔村山。藤岡勝二は東京，京都方言のアクセントの図をマイアーに見せてもらったのではなかろうか。そうでないとしても，この論文の別刷を彼はマイアーから受けとったとおもう。あるいは，この論文の載った雑誌を入手したのではなかろうか。藤岡は1905年に東京帝国大学文科大学（現在の文学部）助教授となり，言語学講座を担任し，1910年～1933年言語学講座担任の教授であった。〕

原　注

(1) 実験方法のくわしいことは拙論「ドイツ語の Metrik に関する研究」(Beiträge zur deutschen Metrik), W. Vietor 発行の雑誌 Die neueren Sprachen, 第6巻「有声のh」，同8巻に記述してある。

(2) E. A. マイアー「話され，歌われる個別語の母音のトーンの動きについて」。Phonetische Studien (Die neueren Sprachen 誌付録)，第10巻，p. 18。

2. 日本におけるポリワーノフ (1914～1930年)

(『音声の研究』誌，第3集， pp 147～150, 1930年より)

(A) アクセント研究の一史料

佐 久 間 鼎

井上奥本氏の「日本語調学年表」(『音声の研究』第二集92～5ページ）に，大正五年露国人ポリワーノフ来朝し，山田美妙斎の型式を讃すとある。ところで，偶然自分の手記である『実験録（1914)』と題したノートを見たら，「十月の仕事」という見出しの下に，大正三年（1914）10月の日記が数ページ書いてある。数えてみると，もう15年も前の話である。当時の消息を知るための一つの史料といえよう。のみならず，Poliwanov の見解の紹介をも兼ねることができるので，煩をいとわずにここに書いてみる。（なるべく原文のままにした）

5日　東条操君の Gaumenplatte を本永氏[1]に依嘱して作ってもらう。この日午後1時から Poliwanov 氏と共に Kehltonschreiber で実験をはじめる。Unterbrecher と mouchoir とをつけた三つの線[2]を同時にとる。大槻助手[3]に装置を大いにやってもらった。――四日，岩原のうちへいって音声学的観察をする。

（欄外）小室君について観察。

6日　9―12 *a.m.*　Poliwanov と実験。

7日　午後　　　　〃

Kehltonschreiber ばかりにした。単音節の語に aufsteigend のと abfallend のとがあるという考をもって彼は実験したのであるが，その下がる方の奴は（曲線図略す）というように Kurve が出てくる。彼は得意になっていた。しかし自分には何故こうなるかがわからない。聞くのも残念だから，自分で

考えることにする。Kehlton はよく出る。

8日　午後実験。

9日　午後実験。

10日（土）　休（宣誓式)。

12日（月）　午後実験。——Phonograph ができた。Poliwanov が蠟管へ吹き込んだ一つをもってゆく。Recorder に「ひび」がいったので，一つの音が反復される。二度ずつはいった。

13日（火）　午前，東条君の Gaumenplatte をとりに歯科へゆく。やはり午前 Poliwanov 君は青森の人と大村（大分県）の人との音を Phonograph に吹き込ました。俗歌も一本宛吹き込んだ。大村の人の話（たなばたの話）は，かなり参考になると思われた。オン（音）オン（恩）は反対になっている。go:gi: 土ヲ ai（有）oi（居）koromo（子供)，それから助辞が長い母音になる等のことが観察された。柄，絵，北，草などの単語を与えていた。青森のは，音そのものの音色について研究の余地が大分あると思う。φsi（火）と Poliwanov 氏はかいたが，その音の如き，または鈴，木 (kï)，店などの如きは，かなりかわっている。「火」と「日」とは，アクセントがかわっているというのであるが，その際唇を尖らして丸めるようである。研究ものである。それから女の名花子，庭の花コ　アクセントがちがう。「牛」[bïgo⌈ko▾⌉]……「夢」に二とおりある。Ïɯmï, Ïomë らしかった。これらはなお研究を要するところである。

Poliwanov 氏は，この日六本の蠟管をもって行った。午後3時長崎に向って出発する。再び東京へは多分かえらずに，すぐ Petrograd にかえるだろうとの事である。来年また来られるかと思うといっていた。そして必要があったら，手紙をくれといって，次の Adresse をかいた。

Petrograd. Ekaterinski, 158

E. Poliwanov.

片腕は鉄道にひかれて失ったということである。44歳と尾崎の主婦が聞いたとき語ったというが(4)，それほどの年とも見えない〔村山。23歳であった。〕。

Poliwanov 氏の研究した方言は，長崎，土佐，東京，青森であった。そのアクセントについての見解を叩いたところ，日本語のアクセントは，自分の研究したところをもってすれば，musikal. Akzent だというにあった。長

崎ではまったく dyn. Akzent を聞かない。東京には，ある人は dyn. Ak. を発する人もあるが，重要なものは musikal. Ak. である。そして dyn. Ak. のある場合でも，常に musikal. Ak. と結合してあらわれる。――また母音を延すことによって Betonung をすること土佐における如きものがある。かくして氏は日本語のアクセントの性質を musikal. Ak. をもって代表せしめ得ると考えた。しかしそれに Stufungen があるか否かについては，見解を尋ねる隙がなかった。

そこでアクセントの種類をあげること下のとおり。

●長崎　1　音節　1）／　　2）＼
　　　　2　〃　　1）┌─　　2）─┌
　　　　3　〃　　1）┌──　　2）──┌
　　　　4　〃　　1）─┌──　　2）───┌
　　　　5　〃　　1）──┌──　　2）────┌
　Intonation　　……………　　┌──

●土佐　1　音節　1）／　2）─　3）＼
　　　　　　　　4）／:　5）─:　6）＼:
　　　　2　音節　1）─┌　　ame（雨）
　　　　　　　　2）┌─　　hana（花）
　　　　　　　　3）──　　hana（鼻）
　　　　3　音節　1）───　2）┌──　3）─┌─
　　　　　　　　4）─┌┌　5）┌┌─
　　　　4　音節　1）────　2）┌───
　　　　　　　　3）─┌──　4）┌┌──
　　　　　　　　5）┌┌┌─　6）──┌┌
　　　　　　　　7）─┌┌─

●東京　1　音節　1）／　　2）＼
　　　　2　〃　　1）┌─　asa（朝）　　2）─┌　hana（花）
　　　　　　　　3）──　hana（鼻）
　　　　3　〃　　1）┌──　朝が　　2）─┌─　花が
　　　　　　　　3）───　鼻が
　　　　4　〃　　1）┌───　　2）─┌──
　　　　　　　　3）──┌─　　4）────

青森のについては，まだ聞くことが出来なかった。これは実験をはじめる前に聞いたところである。他の場合はまだ知らないが，東京のアクセントについて，なお異議を申入れるべき点がある。実験の結果が氏の考えを是正したかどうか。しかし，氏は時間を record するを不必要と考えていた。Cylindre enregistreur の速度（回転の）を一定と仮定した際，はじめて比較的の Tonhöhe が得られるわけである。しかしその結果は，仮定が妥当である際にはじめて妥当であるのだ。Cylindre を回転するには，Motor を用いた。速度が各実験の回毎に多少変わったかもしれない。唯 Kehlton はよく出た。氏は感謝と満足とを以て心理学実験室を去った。

大正３年10月14日

なおその次には，「この以前に(夫婦)(フネ）などの場合のフは bilabial-F でないことを観察した」という書出しで，その理由をあげ，次に1914年11月２日の思いつきとして「所謂 Nasale vocalique について」という見出しで，「ン」のことを３ページほど書いている。それに関する実験などもやったのが，この頃である。そして11月27日という日附で次のような記事がある。——

> Poliwanov 氏から手紙が来た。土佐の人岡崎君の方言を Phonograph に入れて送って呉れという依頼である。ロシヤ暦の11月９日に投函したとしてある。一週間の後 Petrograd⁽⁵⁾に入るその汽車旅行中にかいたものである〔村山。岡崎というのは尾崎の誤りか。本書 39ページ参照〕。
>
> ……………………
>
> Poliwanov 氏の依頼の件，蠟管２本に入れておくることにした。

私が東京語のアクセントの研究に没頭したのは，この時分から始まったことで，はじめ主として観察によってアクセントの型をしらべたが，それから実験を盛んに行なったのは大正５年（1916）10月から11月までの間であったと思う。いま偶然往時の実験録を披見して当時を思いかえしてみると多少の感慨もないではない。

原　注

(1) 医学士で当時大学の歯科にいた人。

(2) 口腔音と喉頭音と時間との曲線

(3) 当時の心理学実験場の大槻快尊学士。

(4) P．氏とはじめて会ったのは，氏が私の下宿に尋ねて来た時であった。その後も時々下宿に来たと思うが，下宿の話ずきな主婦が私の留守の時だったかに，P．氏をつかまえて片腕を落した話などをきいたものと見える。その時の話をあとで伝え聞いたのである。

(B) 三重村におけるポリワーノフ

村 山 七 郎

（1972年6月28日　朝日新聞夕刊より）

ソ連の高名の言語学者E.D.ポリワーノフ（1891〜1938年）は，処女論文「日・琉語比較音韻論」（ペテルブルグ，1914年）を発表した年，露都の露日協会の援助で日本に旅することになり，その夏（1914年）長崎県西彼杵郡三重村を訪れた。「日本方言学資料，三重村の方言」はその時の調査の産物で，『ロシア考古学協会東洋部紀要』23巻（1915年）に発表した。

舌切りスズメの話など民話6編，三重村の風俗を活写する「三重の子供」「鬼火の話」「若者組の話」「結婚の話」など7編をふくむ。恩師シチェルバが補足した国際音声学協会字母と，氏のアクセント記号（後に日本でひろく用いられるようになった）を用いて三重方言を精密に記したもので，方言記述の模範となっている。1917年にポ氏は「京都方言の音楽的アクセント」と一緒に単行本として出版した。氏の名著『東洋語大学用の言語学概論』（レニングラード，1928年）でも三重村方言をとりあげた。三重村の名はソ連，ヨーロッパの学者のあいだでかなり知られている。

ポ氏がどうして三重村をえらんだのか，私には明らかでない。ポ氏のことを覚えている村民をさがしもとめるため，また60年間にどれだけ言語に変化が生じたかを知るため，このほど同村を訪れた。長崎駅からバスで1時間。現在，人口は約5千。当時とはかなり変わったとおもう。

「ポリさん」を覚えている岩エイさん（旧姓徳永，明治19年三重村生れ）に会えたのはうれしかった。ポ氏がエイさんの実家の近くの浜辺の池田屋旅館に泊っていたこと，兄伊佐吉さん（当時，東京高商の学生，その数年後に亡くなった）が夏休みの帰省中で三重小学校の久松先生とともにポ氏の調査を助けたこと，三人がよく徳永家の土蔵で談笑したり，ポ氏が二階から海をながめたり，砂浜にねそべったりしたこと，氏の左手のひじから先がなかったことなどがわかった（左手のことは佐久間鼎先生が1914年ポ氏に東京で会ったとき，もともとピアニストになりたかったが腕をなくして言語学に転向したと語ったよし。エイさんはポ氏についてその後何も聞いたことがない，

といった。

三重村に関係のある前記７編を氏の記したとおりに私が読むと「ことばは今もそのとおりです」という。私がところどころつかえると，エイさんは何も見ないで続けるのであるが，それがポ氏の記述と一致するので私は驚いた。50歳以上の何人かにもポ氏のテクストを聞かせたが，「自分たちの話すこととまったく同じ」という意見だった。結局，ポ氏の記した方言はだいたい50歳以上の村民が今も用いている，という結論になった。ポ氏が三重村を訪れてから今日にいたるまで，日本は大きな変化をとげ，三重村にも都会化の波がおしよせ，テレビの影響はこの村でも大きい。だが語彙をのぞけば，三重村の言語の60年間の変化の速度はきわめてゆるやかであることが，ポ氏の記録をもとにわかった。

ソ連言語学者たちの受難の時期に，1938年タシケント市でウズベク語（トルコ系）研究のパイオニア的な仕事を残して悲劇的な死をとげたポリワーノフをしのびながら，私は三重村を去った。

〔追記〕(1976年１月)　ポリワーノフが1914年，日本に足を踏んだのは長崎であったらしい。当時，ウラジオストックと長崎との間に汽船が通っていて，それで長崎にきて，三重村で方言調査をしてから東京に向ったようである。

3. 東京方言における音楽的アクセント
（抄訳）

帝室科学アカデミー通報，1915

（1915年9月9日，歴史・哲学部の会議に提出）

日本語にかんする研究では国際音声学協会のアルファベットを言語学的転写に用いるのが便利であるとおもう。L.V.シチェルバが「転写の問題について」（科学アカデミー・ロシア語部報，16巻4冊）で提案した補足をも考慮する（破接音 ts（ツ）と dz（ヅ）は c と ʒ で表わす。舌背音のシュにたいして ś，それに対応する無声および有声の破擦音は ĉ（チ）と ǯ（ヂ）で表わす）。本研究では，引用する本の題名とか固有名詞のような言語学考察の対象でないものは伝統的なローマ字〔村山。ヘボン式〕で表わす。

アクセントは日本語音声学の最も解明されていない問題である。（たとえば，タガログ語ではアクセントが文語で示されるが）〔村山。日本語では〕音楽的アクセントは書きことばでは示されない。書きことばのかなりの部分は表意字だから，自己観察が妨げられている。ヨーロッパ人の試みは，日本語のアクセント体系が独特である点のほか，諸方言の矛盾にみちた資料につきあたっている。アクセント型において，また材料の類別において，日本諸方言はスラヴ諸語におとらないくらいの区別がある。東京方言の音声組織全体をとりあつかった唯一の労作——エドワーズの研究——は，アクセントと意味とのかかわりを見抜かないで，特別なケース，つまり同音異義語（ホモニム）の場合だけアクセントの意味的かかわりをとりあげている（§159。日本訳123ページ以下）。私の研究の出発点となるのはマイアー〔本書1～10ページ。村山〕である。彼は東京方言および京都方言の音楽的アクセントの事実を立証したのである。マイアーは自分より前のヨーロッパ人の研究をあげているので，ここではそれに触れないことにする。マイアーの記述によって，東京方言における2音節語の二つのアクセント型（マイアーの述べるのは「◡◡と$\overline{◡◡}$だけ。$\overline{◡◡}$の随意的なバリアント ◡「◡ については述べていない）と京都方言の三つのアクセント型についてよく理解できる。マイアーのインフォーマントは現在の東京大学

の藤岡勝二教授であるが，二つの方言の音声学的特殊性をまったく意識的に習得したという意味で，稀な現象である。

マイアーの失策の第一は１音節語と２音節語のアクセント型を一様に分類したことにあると思う。１音節語は，別個の記述を必要とする質的な諸特徴をもつのみならず，区別の型の数にもちがいがある。東京方言の２音節語では二つの型，随意的には三つの型が区別される。長い母音(または二重母音)をもつ１音節語では二つの型が区別され，短い音節をもつ１音節語でも二つの型が区別されるが，しかし随意的にのみそうである。東京の型が二つで，京都の型が三つだという――じっさいは１音節語について正しい――だけでは不十分である。

マイアーの失策の第二は東京方言の例「∪∪の示しかたが正しくないことである。マイアー論文 p. 81 の第１図〔村山。本書５ページ〕の曲線は東京方言 hanā(花)をあらわすとマイアーはいうが（花は∪「∪の型)，そうではない。マイアーの第１図の曲線は東京方言の女子名「hana「花」（おなじ字で書かれる）のことである〔または京都方言「hana「花」のことである〕。

マイアーの外に，ヨーロッパ語で書いたものでは岡倉由三郎のアクセント問題研究報告（Transactions and proceedings of the Jap. Soc., London 1906, Vol. VII, part 1, p. 25）と最後に黒野義文(ロシブミ)〔村山。ペテルブルグで日本語を教えていた〕『日本語自習書』(V. P. パナーエフと共著。ペテルブルグ1913年）これと対をなすL. ドヴィグ『日本口語自習書』(黒野義文監修。ウェストニク・ズナニヤ社，1911年）がある。アクセント型記述の点で黒野はほとんどハッキリしたものを示さず，この本は語彙の材料という点で価値があるだけである。日本語のアクセントの場所を示すヨーロッパ語で書いたその他の労作――明らかに実用目当てのものをふくめて――にはD. M. ポズドネーフのトクホン（日本語小学読本）の最初の４冊，V. Ya. コストゥイリョフの『露日口語辞典』，I. セヌマの『日本口語学習実用指南』(ロシア文)があるが，ここでは考察しないことにする。

日本語で書いた労作のうち，山田美妙〔1868～1908年。村山〕『日本大辞書』（東京メイホー堂，1892～93年）と『国定読本の読み方』（1912年４月。波岡学士がおもにまとめた。芳賀文学博士監修）だけが東京アクセントの情報をよくつたえていると思う(1)。伊沢修二，『国定小学読本正読法』，1882年，東京，楽石社

と高橋龍雄編,『国定読本発音辞典』1904年,についていえば，材料の配列があまり正確でない。アクセントの質にかんする伊沢(序文における)の発言は悲しむべき誤解の産物であって，著者の意図に反して，かえってアクセントが音楽的であることを明らかにするものである。東京帝国大学国語研究室で見せてもらった原稿のうち，最も興味をひくものは河西の『青森県言語改良法案』(東京帝国大学国語研究室図書館， 写本 №.89601) である。上にあげた研究者のほか私は神保氏——アクセントに関する卒論の著者——をあげることができる。この卒論では名詞変化における二つのアクセント型，ha˹na-ga (花が) と $\overline{\text{hanaŋa}}$ (鼻が) の利用が一貫している。学問的に調査されたとみられるのは東京アクセントだけである[2]。私の研究も東京方言をとりあつかう。その目的は一方では独自の観察にもとづいてアクセントの心理的および物理的側面を記述し，他方ではその結果を上掲の文献の資料と調和させることである。

東京方言 (より正しくは知識人の方言) のインフォーマントは東京生れのN.穂積である。 彼の発音の事実を私は何度も他の人々によって検討してみた。アクセントの物理的側面の客観的な研究は，ペトログラードで (大学の実験音声学教室でL.V.シチェルバの指導のもとに。1911年度大学報告，p. 15 参照)，また東京 (東京帝国大学心理学実験室) で行なった[3]。

私の知っている長崎方言〔村山。西彼杵郡三重村の方言。現在，長崎市に編入〕とちがって，東京方言では主として，音楽的アクセントの質ではなく，アクセントの場所が意味に関係し，語はⅠ) 最後の音節を除いた音節のひとつの声が必ず高まるか，またはⅡ) 最後の音節 (その音節が長ければ，その第二モラ) が非義務的に高まるという特徴がある。この非義務的な高まりは同時に，随意に高まり欠如と (二重に) 交替する。

Ⅰ)

第Ⅰの場合は (たとえば，京都方言や土佐方言ではいくつかの音節が高くなるが，それとちがって) ひとつの音節が高さによって他の諸音節から区別され，ふつう，強さのちがいが伴う。しかし本質的なモメントは高さであるとみとめる必要がある。なぜなら ˹asa(朝) をどんなに人為的にさまざまに発音しても，高いところは一定していて，a˹sa (麻) と区別される。アクセ

ントのある母音はけっして無声化しないし，またけっして消えない（マサツ音，破擦音の後の i，u は一般に消える傾きが強いが，それをもふくめて)。(二重母音または長母音のある）長い音節にアクセントがあれば，アクセントはつねに第1モラにある。アクセントのある音節は語末から三番目より遠くにあることはまれであるが，そうしたケースもある（ふつう名詞変化において。「aki 秋，「akikara 秋から。「aware 哀れ，「awareŋa 哀れが，「awarekara 哀れから)。東京方言では生きた3音節法則〔村山。ギリシア，ラテン語において，アクセントが最後の三つの音節のいずれかにある，という法則〕はない。

II）

第二の場合は複雑な現象である。それを理解するさいに忘れてならないことは，言語には語の最終音節の音楽的高まりにさからう傾向があることである。そのために，高さの目立った動揺なしに発音される一連の無トーン語がつくり出される。音節の数は非常に多くなってもよい。もっぱら形態論的条件によってこれらの語の中に，二つの型が区別される。

(1) 不定格（casus indefinitus)〔村山。格接尾辞のつかない形〕が無トーン語であり，他の格の形（不定格に -ŋa，-ni などのついたもの）も無トーンである名詞の型。たとえば $\overline{\text{hana}}$ 鼻，$\overline{\text{hanaŋa}}$ 鼻ガ，$\overline{\text{hanani}}$ 鼻ニなど。

(2) もろもろの格変化形——これらの形ではステムの最後の音節が語の最後の音節ではない——を通じてステムの最後の音節が音楽的アクセントをもつ名詞の型。たとえば，ha「na 花，ha「naŋa 花ガ，ha「nani 花ニ，など。

意識内で接尾辞付きの形（それは不定格よりはるかに多い）が共存しているので，ha「na ŋa 花ガ，ha「nani 花ニなどから，ha「na（花）という観念が吸いあげられる。それにもとづいて ha「na（花）と $\overline{\text{hana}}$（鼻）との対立が可能となる（たとえば，コレハ花(ハナ)デス，コレハ鼻(ハナ)デスという文において)。これは東京市民なら理解できる対立である。お互に対立させられないと，両語はおなじ発音となる。関連諸形からステムを吸いあげえない場合，たとえば $\overline{\text{iku}}$ 行ク型の動詞では，$\overline{\smile\smile}$型と◡「◡型の区別は存在しない。この現象は非常に独特なものであるから，次の二つの並行現象を挙げるのは徒事であるまい。

(1) 形態論上，同源の語（pl.）があるために，随意的な音声区別が出現する例。ロシア語の plot は「いかだ」と「果実」を意味するが〔村山。ПЛОТ「いかだ」，ПЛОД「果物」はともに plot と発音される。ПЛОД の格変化で母音が付くとき，語末の Д は d と発音される〕，この両語のちがいを示そうと望むとき（たとえば先生がコンテクストから離れてこの語を生徒に書きとらせるとき）плод「果実」の場合 plot の t を有声化して〔村山。plod と発音して〕理解を助けることがある。

(2) 音楽的アクセントの方面で，東京方言の語の最後の音節が随意的に高められるのに類似しているのは，ギリシア語のオクシトン〔村山。最後の音節に鋭アクセントのある語〕において鋭アクセントが低音アクセントと交替することである。F.ワンドリエス『ギリシア語アクセント論』，§42参照。「なお，語末で鋭アクセントの音節が和げられ，望みどおりの高さを奪われるときでも，この音節は何らかの無トーンの音節とはたしかに心理的にちがっていた。所与の条件の下で鋭アクセントの高さに上昇する能力があったので，この音節は話し手の意識では特別に重要であった。」

このような随意的区別のひんぱんな例は短い1音節語の区別である。ちょっと見たところでは，短い音節内部の高さ，および強さの変化を言語手段として利用することがない状況下で随意的区別が存在するというのはナンセンスに見える。なぜなら，絶対的な高さ，絶対的な強さによる区別を想像してみることは困難だからである。けれどもこの区別が実現される場合には，まさにその短音節語の絶対的な高さと強さにもとづく。çi（日）の変化，$\overline{\text{çiŋa}}$（日ガ），$\overline{\text{çini}}$（日ニ），$\overline{\text{çikara}}$（日カラ），$\overline{\text{çiwa}}$（日ハ）はいずれもアクセントのない位置の音節 çi を明らかにするので，アクセントのない çi- が不定格として吸収され，低いトーンの，弱い不定格として，「çiŋa（火ガ），「çini（火ニ），「çikara（火カラ），「çiwa（火ハ）などから取り出されるもっと高く，もっと強く発音される不定格 çi（火）と対立する〔「日」を私は ⌊çi，「火」を「çi としるす〕〔村山。このしるしは，すでにエドワーズに見られる。邦訳，p. 125 に「çi（火），⌊çi（陽）がある〕。

しかしこのことは長い音節から成る1音節語にはあてはまらない。その二つの可能な型（第1モラにアクセントのあるタイプ。ちょうどギリシア語アッチカ方言の τῶ のような。もうひとつは第2モラが随意的にかつ僅かに高

まる型。アッチカ方言の τῶ がそれに対応する）は一様に実現されるのではない。たとえば，

「ho: 頬（「ho:ŋa 頬ガ）と $\overline{\text{ho:}}$ 法（$\overline{\text{ho:ŋa}}$ 法ガ）
「sai 妻　と $\overline{\text{sai}}$ 菜
「oŋ 恩　と $\overline{\text{oŋ}}$ 音
「mai 繭 ｝
「mai 眉 ｝　と $\overline{\text{mai}}$ 舞

ここでは音節内部の高さの変化が意味と関連する。この変化は意識においては，２音節語の高さの動きに等しい(そこで「ho:(頬) は「hana(花。人名)に対応し，$\overline{\text{ho:}}$（法）は $\overline{\text{hana}}$（鼻），$\overline{\text{hanaŋa}}$（鼻ガ）に対応するが，ha「na（花），ha「naŋa（花が）の型に対応するものはない)。

無トーン語について述べたことと関連して次の二つの問題が起こる。

(1)　先行音節(pl.)に高まりのない語の最後の音節(したがって，最後の長い音節の最後のモラ）において高まりが現われる発音上の条件はどんなものであろうか。文の内部におけるオクシトン語の低音アクセントにかんするアッチカ方言の法則に類似していないだろうか。$\overline{\cup\cup}$ 型と ∪「u 型とを意図的に対置させない場合，どのくらい深く両者の区別がつけられるのだろうか。私は何らかの答えを与えることをさしひかえる。記録はもっぱら単独の語についてだけ行なった。「çi（火）と ˪çi（日）に類する短い１音節語について，いくぶんかの注目すべき区別をまったく見出さなかった記録が手許にあった。第３図〔村山。コピー不鮮明のため示すことができない。〕の示す区別は，これらの二つの語をつづけざまに発音して対立を強調しようとした意図でひき起こされたのである。２音節語の場合，インフォーマントは何の対立をも念頭におかなかった。ついでながら手許の曲線（本論文にはあげてない）では１音節語（第３図参照）の随意的区別に類する現象が見られる。すなわち，ha「śi(橋）における第２音節の母音の曲線は $\overline{\text{haśi}}$(端）におけるこの母音の曲線よりはるかに大きな振幅をもつ。これらの語は（第３図における１音節語とおなじく）すぐにつづけて，対立の意図をもって，発音された。

(2)　「無トーン」語において最後の音節は高まりがないのであるが，何らかの他の意味のアクセント，たとえば吸気的なアクセントをもつのではなか

ろうか。マイアー（p.81）いわく，「アクセント2では両方の音節が同じ強さのアクセントをもつ。それどころか，ここでは第2音節の方がやや強さアクセントがまさっているように見えることがしばしばある」と。さらにいわく（p.82），「……これに反し，アクセント2では第2音節はことに文中ではアクセント1のときより長く発音されるようだ」と。この音節は，その母音が決して消えることがなく，決して無声化することがかない点が他の音節とちがうことは立証できる（マサツ音，破擦音の後の i, u であってもそうである）。たとえば，hasi（端）は ha「śi（橋）とおなじように，haś となることはない。しかし「haśi（箸）は haś となるのがふつうである。

無トーン語の存在は，実際上きわめて簡単なこの体系（ことに，複雑な西日本語の体系とくらべて）を研究する者にとって，主なつまづきの石であり，日本語にはアクセントはないのだ，という俗説の原因である。

………∪型を………「∪型（何音節でもよい）から（1音節の場合は「∪を ʟ∪から）区別する山田美妙だけはまったく注目に値する。無トーン型名詞を山田美妙はゼンヘーまたはゼンペー（全平）と名づける。私もこの名称を用いる。第2の型の語を山田美妙は最後の音節にアクセントがあると考える。彼は動詞においてさえこの二つの型のちがいを見出している。たとえば，iku（行ク）は全平であり，neru（寝ル）は第2音節にアクセントがあると見る。しかしこのことは，両者の間に何の区別もしない東京市民の発音の事実と一致しない。

『国定読本の読み方』では全平と最終音節にアクセントのある名詞との区別は1音節語と2音節語についてだけ行なっている。………「∪型の3音節またはそれ以上の音節の名詞，たとえば haka「ma（袴）は（『国定読本発音辞典』の場合とおなじく）無トーン語と見なされている。しかし私が『国定読本の読み方』と深い関係をもつ田丸氏と話したとき，気付かれなかった何らかのアクセント中間型を見受けたことがないか，とたずねたのにたいし，まさに hakama（袴）の ma という音節をあげた。

河西（カワニシ）の『青森県言語改良法案』と『国定読本発音辞典』は全平語を類別しているが，しばしば，それをアクセントのある語としるしている（『国定読本発音辞典』はふつう2音節の全平語を∪「∪と混同している）。この辞典は1音節語の区別をしていない。伊沢はまったく，全平語に触れていないが，

短い１音節語の区別は知っている。

〔村山。以下３ページ省略。ペテルブルグの黒野義文のアクセント観の批判である〕

計算してあげてある曲線は声の相対的高さを表わす。それによって有声の（時には無声の）要素の長さについて判断できる。さらに曲線は，振幅によって声の強さの差異を物語っている。記録シリンダーで，喉頭カプセルを通じて記録した。回転速度（きわめてさまざまな）は一部は記録し（それによって第１図で絶対的高さを示すことができる），一部は記録しなかった。大多数の場合，私はたとえばマイアーの論文「母音のトーンの動きについて」(Phonetische Studien, X) におけるよりも荒っぽい計算をし，($\frac{1}{10}$ ミリメートル単位で）個々のピリオドの長さでなくて，いくつか（２～10）のピリオドの平均の長さをしるした。そこで私の 5.14 は５つのピリオドが大体 7.0 mm を占めたと解してもらいたい。この方法は十分であり，個々のピリオドの計算のさい私が犯した誤りを考慮するならば，この方法は納得の行くものでさえあるとおもう。

二重音 (diphthongs) からなる語

a）第１モラに音楽的アクセントがある。「oŋ（恩)。 2.21$\frac{1}{2}$, 3,21$\frac{2}{3}$, 3.21$\frac{2}{3}$, 3.21, 3.21, 3.21$\frac{2}{3}$, 4.22$\frac{1}{2}$, 4.24$\frac{1}{2}$, 3.26$\frac{2}{3}$, 3.30……

同。5.20, 5.19$\frac{3}{5}$, 5.19$\frac{2}{5}$, 5.20, 5.20$\frac{4}{5}$, 4.22$\frac{1}{2}$, 2.25, 2.27, 4.30.

同。4.17$\frac{1}{2}$, 5.17, 3.16$\frac{2}{3}$, 4.16$\frac{1}{4}$, 3.16$\frac{2}{3}$, 4.17$\frac{1}{2}$, 4.18, 3.18$\frac{1}{3}$, 4.19$\frac{1}{2}$, 2.20$\frac{1}{2}$, 3.21$\frac{1}{3}$, 4.22$\frac{1}{2}$, 4.26$\frac{1}{4}$, 3.30, 3.31$\frac{2}{3}$.

b）全平：$\overline{\text{o}}$ŋ（音)。 4.25, 4.23$\frac{3}{4}$, 4.22$\frac{1}{2}$, 4.22$\frac{3}{4}$, 3.21$\frac{2}{3}$, 3.21$\frac{2}{3}$, 4.21$\frac{1}{4}$, 5.21, 5.20$\frac{2}{5}$, 4.21$\frac{1}{4}$, 4.20$\frac{1}{2}$, 4.20$\frac{1}{4}$, 4.20, 5.19$\frac{4}{5}$, 5.19$\frac{4}{5}$, 5.19$\frac{4}{5}$, 5.20.

同。4.25, 4.25, 4.23$\frac{3}{4}$, 3.23$\frac{1}{3}$, 4.22$\frac{1}{2}$, 5.22, 4.22$\frac{1}{2}$, 5.21$\frac{3}{5}$, 5.20$\frac{2}{5}$, 2.20, 2.20, 4.18$\frac{3}{4}$, 6.19$\frac{1}{6}$, 6.19$\frac{1}{6}$, 3.20.

˥◡◡型の語

˥koto（琴)。最初の o：4. 18$\frac{3}{4}$, 5. 18, 6. 17$\frac{1}{2}$, 3. 18$\frac{1}{3}$, 3. 19, 22. 第2の o：25, 3. 28$\frac{1}{3}$, 3. 30。

˥asa（朝)。第1の a：……4. 18$\frac{3}{4}$, 5. 18, 4. 17$\frac{1}{2}$, 5. 18, 2. 18$\frac{1}{2}$. 第2の a：2. 22$\frac{1}{2}$, 4. 25, 6. 25, 2, 26$\frac{1}{2}$.

˥koto（琴)。第1の o：2. 20, 3. 18$\frac{1}{3}$, 3. 18$\frac{1}{3}$, 3. 18$\frac{1}{3}$, 5. 18, 3. 18$\frac{1}{3}$, 3. 18$\frac{1}{3}$, 6. 18$\frac{2}{3}$, 23, 2. 25。第2の o：4. 25, 3. 25, 4. 27$\frac{1}{2}$.

同。最初の o：5. 19, 6. 17$\frac{1}{2}$, 4. 17$\frac{1}{2}$, 5. 17, 5. 17, 2. 21.

第2の o：2. 25, 26, 28……

˥asa（朝)。第1の a：5. 20, 5. 19$\frac{3}{5}$, 5. 19$\frac{1}{5}$, 3. 20, 23.

第2の a：25, 2. 25$\frac{1}{2}$, 3. 26$\frac{2}{3}$, 30.

˥koto（琴)。第1の a（ママ）：4. 25, 4. 25, 4. 24$\frac{3}{4}$, 4. 24$\frac{1}{2}$。第2の a（ママ）：3. 30, 3. 35.

˥hana（花。女の名）4. 15, 5. 14, 7. 14$\frac{2}{7}$, 6. 15$\frac{5}{6}$, 4. 18$\frac{1}{2}$, 3. 20, 4. 23$\frac{3}{4}$.

˥asa（朝)(喉頭カプセルによるのでなく，伝声筒による）最初の a：8. 27, 4. 26, 6. 25, 6. 25, 5. 28, 2. 29, 2. 30。第2の a：……2. 43, 2. 46, 3. 50, 52, 53, 4. 55.

˥asa（朝）(喉頭カプセル)。第1の a：3. 17$\frac{2}{3}$, 3. 17$\frac{1}{3}$, 4. 17, 3. 16$\frac{2}{3}$, 4. 16$\frac{1}{4}$, 4. 16$\frac{1}{4}$, 3. 16, 3. 15$\frac{2}{3}$, 3. 16$\frac{1}{3}$, 3. 17$\frac{2}{3}$, 20, 20. 無声の中間音(s) 430, 第2の a：3. 23$\frac{1}{3}$, 2. 25, 2. 27$\frac{1}{2}$, 3. 31, 3. 35, 3. 40……

⌈haśi（箸）。a：$2.19\frac{1}{2}$，5.19，3.18，$4.17\frac{1}{2}$，$3.16\frac{2}{3}$，$3.16\frac{2}{3}$，$3.16\frac{2}{3}$，5.19，5.18。無声の中間音（ś）740。i：$3.32\frac{1}{2}$，3.32，$2.32\frac{1}{2}$，$2.32\frac{1}{2}$，2.34，3.35。

$\smile\ulcorner\smile$型と$\overline{\smile}\,\overline{\smile}$型（物理的には区別できない）の語

ko⌈to（事）。最初の o：$3.26\frac{2}{3}$，4.25，2.25，$4.23\frac{3}{4}$，2.25. 第2の o：5.20，5.20，5.20，5.20.

同　最初の o：2.24，$4.24\frac{1}{4}$，$3.22\frac{2}{3}$，$2.22\frac{1}{2}$，2.25，第2の o：$5.19\frac{2}{5}$. 5.20，5.20，5.20，5.20.

同　最初の o：$4.25\frac{1}{4}$，4.24，2.24……第2の o：20，3.21，3.20，$3.20\frac{1}{3}$，3.21，3.20，5.20.

ni⌈ku（肉）。ni：$2.27\frac{1}{2}$，$4.26\frac{1}{4}$，$4.25\frac{3}{4}$，$3.23\frac{1}{3}$，5.24，$3.23\frac{1}{3}$，4.25
u：$4.21\frac{1}{4}$，5.20，$6.18\frac{1}{3}$，5.18，5.18，$6.16\frac{2}{3}$，$4.17\frac{1}{2}$.

a⌈sa（麻）。第1の a：2.30，$2.32\frac{1}{2}$，第2の a：4.25，$4.24\frac{1}{4}$，4.25，3.25，$2.26\frac{1}{2}$.

ha⌈na（花）。3.30，$4.28\frac{3}{4}$，3.29，$3.28\frac{1}{3}$，$2.27\frac{1}{2}$，3.27，$3.25\frac{2}{3}$，4.25，2.25，2.24，2.23，2.22，$3.21\frac{2}{3}$，$4.21\frac{1}{4}$，$4.21\frac{1}{4}$，$3.21\frac{2}{3}$，$3.22\frac{1}{3}$.

同　$3.31\frac{2}{3}$，3.31，$3.30\frac{2}{3}$，3.30，$3.28\frac{1}{3}$，3.27，$3.26\frac{2}{3}$，3.26，3.25，4.25，$2.26\frac{1}{2}$，$3.26\frac{2}{3}$.

a⌈sa（麻）。第1の a：4.25，$4.26\frac{2}{3}$. 第2の a：$2.22\frac{1}{2}$，2.21，$4.21\frac{1}{4}$，$4.21\frac{3}{4}$，$3.21\frac{2}{3}$.

ko⌈to（事）。第1の o：4.30，4.30. 第2の o：2.25，2.26，4.25，5.24，

$4.23\frac{3}{4}$.

a「sa（麻）（伝声筒による）。第１の a：……4.35, 2.34, 7.33, 3.33, 35（ママ）. 第２の a：……3.25, 3.24, 6.25, 4.26……

a「sa（麻）（喉頭カプセル）。第１の a：$2.27\frac{1}{2}$, $3.27\frac{2}{3}$, $3.28\frac{1}{3}$, $3.27\frac{2}{3}$, 3.27, 3.30……無声の中間音（s）380。第２の a：$4.19\frac{1}{2}$, 5.20, 5.20, 3.19, 3.19, 5.18, $4.18\frac{3}{4}$, $3.18\frac{1}{3}$, $3.18\frac{1}{3}$, 5.20.

ha「śi（橋）。a：3.25, $3.22\frac{1}{3}$, $4.22\frac{1}{4}$, $3.21\frac{2}{3}$, $2.20\frac{3}{4}$, 2.25, 2.28……無声の中間音（ś）445. i：3.17, 5.18, $4.17\frac{1}{2}$, $4.17\frac{1}{2}$, $3.16\frac{2}{3}$, $3.16\frac{2}{3}$, $6.16\frac{2}{3}$, 5.17, $4.17\frac{1}{2}$, $4.17\frac{1}{2}$, $4.22\frac{1}{2}$……

ha「śi（端）。a：$5.26\frac{1}{4}$, 2.25, 3.25, 2.26, 3.25プラス小数, 3.29……無声の中間音（ś）470. i：25, 3.24, 2.25, 3.24, $4.23\frac{1}{4}$, $4.23\frac{1}{4}$, $3.21\frac{2}{3}$, $4.22\frac{1}{2}$, $4.22\frac{1}{2}$, 3.22, 24……

同。a：2.25, 3.25, $3.23\frac{1}{3}$, $2.22\frac{1}{2}$, $4.22\frac{1}{2}$, $3.21\frac{2}{3}$, $2.22\frac{1}{2}$……無声の中間音（ś）570. i：5.20, 5.20, $4.18\frac{3}{4}$, $3.18\frac{1}{3}$, $3.18\frac{1}{3}$, $6.18\frac{1}{2}$, $6.18\frac{1}{2}$, $6.18\frac{1}{2}$, $4.19\frac{1}{4}$, $4.18\frac{3}{4}$, $4.18\frac{3}{4}$, $4.19\frac{1}{4}$, $4.21\frac{1}{4}$, $3.23\frac{1}{3}$, $3.23\frac{2}{3}$, 2.24

$\overline{\text{kaki}}$（柿）。a：$4.22\frac{1}{2}$ $4.23\frac{3}{4}$, $3.23\frac{1}{3}$, $3.22\frac{2}{3}$, 5.21, $3.25\frac{2}{3}$, k（ママ）$3.21\frac{2}{3}$, $5.20\frac{2}{5}$, $6.18\frac{2}{3}$, $3.16\frac{2}{3}$, 5.18, $3.18\frac{2}{3}$.

$\overline{\text{miči}}$（道）。mi：……$4.27\frac{1}{2}$, $2.27\frac{1}{2}$, $3.26\frac{2}{3}$, $4.25\frac{3}{4}$, $4.25\frac{3}{4}$, $3.26\frac{2}{3}$, $3.28\frac{1}{3}$, 2.30. 第２の i：5.22, 5.22, 5.21, 3.21, $5.20\frac{2}{5}$, 5.21, $3.21\frac{2}{3}$.

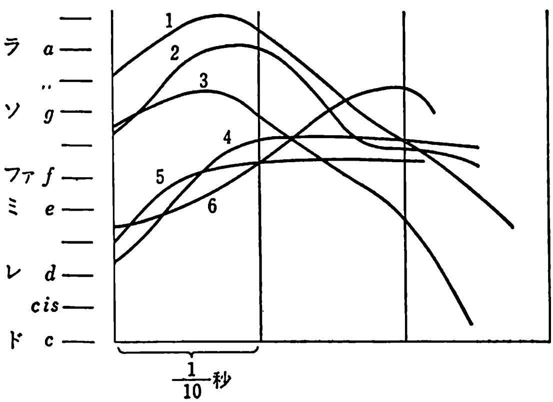
$\overline{\text{hana}}$（鼻）。$3.30\frac{2}{3}$, 3.31, $3.30\frac{1}{3}$, $3.28\frac{2}{3}$, $3.28\frac{1}{3}$, 3.27, $3.25\frac{1}{3}$, $4.23\frac{3}{4}$, 4.22, $4.21\frac{1}{2}$, $4.22\frac{1}{2}$, $2.23\frac{1}{2}$……

$\overline{\text{toko}}$（床）。第1の o：$3.26\frac{2}{3}$, $4.27\frac{1}{2}$, $3.26\frac{2}{3}$, $2.27\frac{1}{2}$, 2.32, 35. 第2の o：30, $3.26\frac{2}{3}$, $4.26\frac{1}{4}$, $4.26\frac{1}{4}$, $4.26\frac{1}{4}$, $2.27\frac{1}{2}$.

同。第1の o：$4.22\frac{1}{2}$, $4.22\frac{1}{2}$, 4.22, $2.22\frac{1}{2}$. 第2の o：$3.21\frac{2}{3}$, $3.20\frac{2}{3}$, 5.20, 5.20, 4.20。

$\overline{\text{hači}}$（蜂）。a：3.33, 32, $3.30\frac{2}{3}$, $3.28\frac{1}{3}$, $2.26\frac{1}{2}$. i：4.25, $3.23\frac{1}{3}$, $4.22\frac{1}{2}$, $4.22\frac{1}{2}$, $4.22\frac{1}{2}$, $2.23\frac{1}{2}$, 2.25.

$\overline{\text{toko}}$（床）。第1の o：2.31, $3.32\frac{1}{3}$, $3.31\frac{2}{3}$, $3.32\frac{1}{3}$, $3.26\frac{2}{3}$, $2.27\frac{1}{2}$. 第2の o：$3.26\frac{2}{3}$, 4.25, $4.21\frac{1}{4}$, 5.24, 4.24, 2.26.



第1図　長い一音節語の高さの変化

1. ⌈oŋ（恩）
2. ⌈sai（妻）
3. ⌈ho：（頬）
4. $\overline{\text{oŋ}}$ 音
5. $\overline{\text{sai}}$ 菜
6. $\overline{\text{ho:}}$ 法

〔村山。『言語学概論』p. 70 には，東京方言のアクセントについて次のように述べてある。

東京方言の「1音節2モラ」（つまりひとつの長い音節）語の原則的にちがった二つのアクセント型における声の高さの連続的変化の記録。

記録は（ペテルブルグ大学実験音声学教室のカイモグラフで）正確に知られた速度でシリンダーを回転して行なった。これによって，音調の絶対的な高さを楽譜で表わすことができる。アクセントだけがちがう次の3組の語の曲線を解読して，次の結果を得た（p. 71 の図参照。本書 29 ページ図）。

1.	˹oŋ 恩	4.	$\overline{\text{oŋ}}$ 恩
2.	˹sai 妻	5.	$\overline{\text{sai}}$ 菜
3.	˹ho：頬	6.	$\overline{\text{ho：}}$ 法〕

原　注

(1)　この論文を書いた後で，これに劣らず正確にアクセント型によって語彙材料を決定している二つの研究が出た。

①　栄田〔猛猪〕，近藤〔久吉〕編『ローマ字索引国漢辞典』。1914年5月，東京啓成社

②　今村編，『東京弁』。1914年7月，東京。

後者はアクセントを示すテクスト，小さな辞典のほか，アクセントの形態論的利用を説明する語形変化範例をふくんである。アクセント型の正確な区別の点で，それは『国定読本の読み方』の誤りを訂正している。全体として，現在では，日本で発行された研究書によって東京語の大部分のアクセントを決定できる。それにもかかわらず，完全な，計画的な音声学的辞典，ことに東京方言の形態論の必要が痛感される。

(2)　京都府の諸方言の研究者たち井上奥本氏（ローマ字世界誌，1914年3月，21参照）の活動は知ることができなかった。

(3)　東京帝大と京都帝大からうけた好意ある多大の援助にたいして文学部長上田万年，言語学教授藤岡勝二，東京外国語専門学校ロシア語教授八杉貞利，大学で研究を続けていた佐久間鼎，方言学の研究者東条操（以上，東京），京都の言語学教授新村出に厚く感謝する。さらに私の研究対象と関連して私と交際しようと望んだ伊沢氏，神保氏，田丸氏を想い出して感謝している。恩師 (pl.) I. A. ボードゥエン・ド・クルトネーと L. V. シチェルバは私のすべての言語学的イニシァチヴを指導し，ここに感謝の意を表明するのは喜びにたえない。〔村山。1975年12月，『トルコ語語源辞典』の著者 E. V. セヴォルチャン氏が私に語ったところによると，シチェルバは「私の学生には私より出来る者がいる」とよく言っていたという。それはポリワーノフのことである〕一緒にアクセント学実験研究を行なったアンナ・ペトロヴナ・アベル女史，また A. I. イワノフ，A. D. ルードネフ〔村山。有名なモンゴル語学者。ピアニスト。

『ロシア語語源辞典』の著者 M. ファスマーがベルリンで語ったところによると，1917年の革命後，ヘルシンキに移り，ピアノを教えて暮した。〕，D. M. ポズドネーフ〔村山。日本学者。その兄弟はモンゴル学者〕にたいして，この研究について意見を述べたことに感謝し，I. M. ポポフ，N. I. コンラド，S. G. エリセーフ〔村山。1889～1975年。1908～1914年，東京帝大国文学科学生。革命後1920年，フィンランドへ，次いでパリに亡命〕，および Or. V. プレトネルにたいしては日本学における友情的な援助に感謝し，また露日協会にたいしては私の研究を快く理解し，1914年に日本に私を派遣したことにたいして感謝する。

4.　西日本語の音楽的アクセント

I　京都と土佐のアクセント

〔村山。中央アジア大学紀要，タシケント，1925年第9集，pp. 183～194 に発表され，『言語学概論』レニングラード，1928年 pp. 120～135 にも発表。後者を参照しつつ，前者によって訳した。1917年の「日本方言の心理音声学的観察」。(1)「長崎県西彼杵郡三重村の方言」。(2)「京都方言の音楽的アクセント」，ペトログラード，1917年，113 p. の (2)にもかなりの京都方言，土佐方言のアクセント資料が発表されたと思うが，この単行本は入手できなかった。おそらく，その内容はタシケントで発表したものとだいたい同一ではないかと思う。従って，「西日本語の音楽的アクセント」のかなりの部分は1917年にはじめ発表されたとみることができると思う。〕

（京都と土佐の方言では）語は，語の音構成の連続中のひとつの高い声調部分(ピリオド)によって決定される。この部分(ピリオド)を量的にはかる単位はモラである〔村山。モラ mora はラテン語の韻律上の用語。モーラというのはラテン語の発音では誤っている。ただし英語では mɔ́:rə と発音するから，英語によってモーラとするのも悪いわけでない。ここではラテン語に従ってモラとする〕。すなわち，短い音節であり，長い音節の半分である（京都方言が土佐方言と特別に異なるところは，一定の位置に限って，高まりが$\frac{1}{2}$モラを占めるにすぎないケースである)。

高い部分(ピリオド)の場所と長さは前以て何らかの一般的規則で定まっているわけではない。「高いピリオド」は語頭にも語中にも語末にも来ることがある。（京都の例。⌈a⌊bura 油，ha⌈ta⌊ke 畑，naga⌈sa 長サ）。他方，二つまたはそれ以上の隣接するモラからなることがある（土佐「nama⌉⌊du 鯰，「atu⌉⌊i 厚イ。「a⌊tui 暑イとちがう。京都「mame⌉⌊na 丈夫ナ。土佐 o⌈saked'a⌉⌊: オ酒ジャー。「sake⌉ に接頭辞 o⌋- がついた述語形(1))。また語全体が高くなることがある（⌈kodomo⌉ 子供，「sake⌉ 酒，「hana⌉ 鼻。「ha⌊na 花とちがう)。

最後の場合は，語のすべての音節が等しい高さであるが，それらの語は低い音節（またはモラ）からでなくて高いものからなることが原則的に意識される。なぜなら，必ず低いトーンの接辞がつくと，これらのメロディーの平坦な音節のつらなりは高いことがわかるからである（たとえば土佐方言で「sake⌝ に o-」や，必ず低いトーンの，付加を示す接尾辞 ⌞mo または方向を示す接尾辞 -⌞e がつくと，o⌟⌜sake⌝⌞mo(オ酒モ)，o⌟⌜sake⌝⌞e(オ酒へ) または o⌜sake⌝⌞: となるからである。高い部分を持たないような語は存在しない（形式語(フォルマント)は自立語とみなしえないことはいうまでもない)。もっとも，語全体のなかで，何らかの長い音節のなかのたったひとつのモラだけが高いことはしばしばある（たとえば ho:ʒo⌜:⌞ki 方丈記，ko⌜n⌞do 今度，śi⌜m⌞bo 心棒，ho⌜:⌞bo:-kara 方方カラ)。

〔注〕 語末に高いモラのある語（京都方言）が連声(レンジロウ)(Satz-Sandhi) の影響で全部低いモラからなる語に変わることについては後に述べる。

上述のことから，2モラ語では次のようなアクセント型の存在の可能性がでてくる。

(1) 第1モラが高い型

⌜ha⌞na 花，⌜ne⌞ko 猫，⌜i⌞ke 池，⌜ku⌞ri 栗，⌜to⌞ki 時，⌜ma⌞me 豆，⌜ku⌞mo 雲。マイアー(2)はこの型をアクセント1と呼び，tsuru（弦）の曲線をあげる（マイアー論文，p. 83 の第3図。本書7ページの第3図）京都，土佐方言におけるこの型の語に規則的に対応するものは他の方言ではつぎのものである。

東京方言（およびその他の東日本方言）において。第2音節にアクセントのある型。アクセントは接尾辞の音節に移らない。東京 ha⌜na 花 (ha⌜naŋa 花が，ha⌜nawa 花ハ，ha⌜nani 花ニ)，to⌜ki 時など。

長崎〔村山。三重村〕尻高型（オクシトン型）ha⌜na 花 (hana⌜no, hana⌜:, haña(ハュアー)⌜:)，to⌜ki 時など。

(2) 両方のモラが高い型

⌜hana⌝ 鼻，⌜uśi⌝ 牛，⌜kaki⌝柿，⌜kani⌝（土佐「gane⌝ 蟹，⌜kane⌝金，⌜sara⌝ 皿，⌜take⌝ 竹，⌜kući⌝（土佐 ⌜kut'i⌝）口。

これはマイアーの言うアクセント2で，マイアー論文 p. 83〔村山。本書7ペ

ージ〕の第４図 tsuru（釣ル）がそれである。東京ではそれに対応するのは「全平（ゼンペイ）」（拙論「東京方言における音楽的アクセント」，科学アカデミー通報，1915，p. 1617 参照。）〔村山。本書 18ページ以下〕である。すなわちアクセントを接尾辞の最後の音節に移す語がそれに対応する。$\overline{\text{hana}}$ 鼻（$\overline{\text{hanaŋa}}$ 鼻ガ，$\overline{\text{hanawa}}$ 鼻ハ，$\overline{\text{hanani}}$ 鼻ニ。随意的に -ŋa，-wa，-ni が高まる）。長崎では尻低型（バリトン型）がそれに対応する。ha⌊na 鼻（hana⌊no，hana⌊:，hana⌊:（ハニヤー））など。



ha⌊na　hana⌊no　hana⌊:

その他〔村山。中央アジア大学紀要，p. 184 はこの部分に誤植あり。この部分は『概論』による〕

動詞の現在形もおなじ対応を示す。

京都と土佐「iku⌉ 行ク ‖ 東京 $\overline{\text{iku}}$ ‖ 長崎 i⌊ku

京都と土佐「kiru⌉ 着ル（ki⌈ru 切ルと混同すべからず）‖東京 $\overline{\text{kiru}}$‖

長崎 *ki⌊ru→ki⌊:（三重村方言）

(3) 第１モラが低く，第２モラが高いタイプ。

マイアーはしるさなかった〔村山。この型を指摘したのはポリワーノフである〕。

a⌈sa 麻，ka⌊sa 笠，no⌈do 喉（*⌊no⌈mito⌉ から），ka⌊me 甕，u⌈su 臼，u⌈mi 海，i⌈ma 今，ku⌈ʒu 屑

土佐ではこの型の語のメロディーは次の型（不定格）とちがわないが，トーンの高さが交替しうる接尾辞（すなわち，ステムの最後の高いモラの後でおなじく高くなりうる接尾辞，たとえば接尾辞 -ga（ガ），-no（ノ），-ɲi（ニ），共同的 -to（ト），主語を示す *pa など）がつくとき，ステムの最終音節とともに接尾辞も高くなる，というのが特徴である。たとえば a⌈sa 麻：a⌈saga⌉ 麻が，a⌈sa←a⌈sawa⌉←*a⌈sa-pa⌉ 麻ハ，a⌈saɲi⌉ 麻ニ，a⌈sa←a⌈sao⌉ 麻ヲ。

no⌈do 喉もおなじ。no⌈doga⌉ 喉が，no⌈do←no⌈dowa⌉ 喉ハ，no⌈doɲi⌉ 喉ニ，no⌈do←no⌈do-o⌉ 喉ヲ。

土佐に保存されたこのような３モラ複合体におけるメロディー ɾ ⌈ ⌈ は，共通西日本語（および共通日本語）のメロディーとして復元できる。それが京都で ⌈ ɾ ⌈（より正確には ɾ ⌈ ⌈。なぜなら京都の asa⌈ŋa，asa⌈wa，asa⌈ni は第１音節から第３音節へとしだいに上昇するから）というメロディ

ーになっているのは，更新である。

東京ではこの型の語は第1音節が高い（「kasa 笠，「usu 臼，「umi 海，「nodo 喉）。東京の a「sa 麻は例外であって西方言から借りたものらしい。

長崎では尻高型（オクシトン型）（ka「sa，u「su，u「mi など）がこれに対応する。4つの共通日本語の2モラ語型のうち三つが尻高型（オクシトン型）に合流した。すなわち，前のもの（*「pana˥ 鼻→京都，土佐「hana˥ ||長崎 ha˪na 尻低（ベリトン）メロディー）をのぞいたすべてのものが尻高型（オクシトン）に合流した。

動詞の現在形においてもおなじ対応が見られる。

京都と土佐 no「mu 飲ム|| 東京「nomu ||長崎 no「mu

京都と土佐 ki「ru 切ル|| 東京「kiru || 長崎 ki「ru→ki「:（長崎は三重村方言）

(4) 京都の第2モラにおける下降的上昇の型（土佐にない）。

第1モラは低く，第2モラで音調がはげしく上昇し，すぐに再び第2モラ末で下降する。この下降的上昇のおこるモラを私は ^ で示そう。マイアーの前記論文では京都のアクセント3がそれである〔本書，7ページ第5図〕。この曲線を示すのは tsuru（鶴）である。

asâ 朝，curû 鶴，kamê 亀，kuʒû（クズ）葛，kaŋê 影，kumô 蜘蛛，sarû 猿，

いくつかの朝鮮語の対応語にもとづいて（また，いくつかの他の語源にもとづいて）下降的上昇は，消えた語末鼻音の反映と考えることができる(3)。

asâ朝 || 朝鮮語ač'ɐm「朝」，curû（ツル）鶴||朝鮮語 turum 鶴〔村山。文語は turumi ただし方言によっては turum もあり。小倉進平，朝鮮語方言の研究，上，p. 275 参照〕。

土佐方言では下降的上昇調と単純な〔村山。上昇調〕との区別は失われてしまったが，下降的上昇調に起因する後続接尾辞の低いトーンを維持した（接尾辞がステムの最後の要素のトーンを継続したのである）。そこで a「sa 朝←asâ——a「sa˥ga 朝ガ（*asâga から），a「sa˥˪ɲi 朝ニ（*asâni から）などは a「sa麻，a「saga˥ 麻ガ，a「saɲi˥ 麻ニなどとすべての格でちがう。これらの格のトーンは交替することができる（つまり，ステムの最後のモラに依存して高かったり，低かったりする）。このちがいのもうひとつの例は，土佐方言の時格（casus temporalis）（格使用において欠除的）-r'a（リャ）である。a「sa

朝 (←asâ), i⌈ma 今 (*i⌈ma)——a⌈sa⌊r'a (朝では), しかし i⌈mar'a⌉ (今では)。東京方言，長崎方言ではもちろん「下降的上昇調」の何の跡形もなく，この型の語はすぐ前にあげた型と同じになっている。東京「asa 朝，長崎 a⌈sa 朝 (*asâ から)。東京「curu鶴，長崎 cu⌈ru 鶴 (*turû から)。

以上にあげた2モラ語の4つの型は語が2つの短い音節からなるのでなく，ひとつの長い音節からなる場合にもあてはまる。京都方言ではすべての1音節語がこれらの4つの型に入る。東京方言でも長い音節をもつ語に対応する1音節語も，すべての1モラ語の方言的延長の結果(琉球語でもおなじような現象がみられる)として二次的に母音が長くなっている音節の語も，これらの4つの型に入る。そこで京都では次のものが2モラである。ho：法 (呉音*popu, 漢音*papu←シナ語 *fap から), ho：(*pau←*paM←シナ語 *faŋ)「方」だけでなく ho：帆 (東京⌊ho), ho：穂 (東京「ho) も2モラである。帆，穂の場合，京都方言の長母音を：によって示すのでなく，右上に ˙ をつけて示すことにする (ho˙)。京都の知識人が標準語 (および正書法)の影響をうけて，これらの長い母音を短くする傾向があるからである。土佐では，このような母音の延長は，たったひとつのアクセント型にだけ見られ，それに属さないところの，東京の1モラ・ステムに対応するケースは同じく1モラであり，従って接尾辞のついた形が与えられないうちは，メロディーでは区別されない。しかし接尾辞のついた格が土佐でもこれらのステムのアクセント区別を明らにするから，共通日本語時代に1音節ステムがその母音が短かかったときでもメロディーに区別があったと考えることができる (ちょうど，2音節ステム末の「下降的上昇調」が短い音節内でも起こっているように)。しかしこの区別が歴史的に不安定であったことは明らかである (なぜなら，短母音内のメロディーは上掲の2つのケースだけ——*pî「日」のような1音節語と asâ「朝」のような2音節ステムの末尾——に限られていたから)。そこで方言では二つの発達の道が可能だった。すなわち，京都方言は音節を長くして，この音節のメロディー特性を保ったが，他方土佐方言では母音の短かさが保たれたが，そのメロディー特性は失われてしまった。

京都の1音節ステムの例

(1) 下降調型

「to$_L$:「塔」,「to$_L$: 十,「sa$_L$i「賽」,「ho$_L$ŋ「本」,「çi$_L$·「日」,「e$_L$·「餌」,「ha$_L$·「葉」,「ha·$_L$「歯」(葉と歯は京都，土佐では同音であるが，東京，長崎ではアクセントで区別される),「na$_L$·「名」,「ke$_L$·「毛」,「ne$_L$·「値」。標準語(または東京語)が短い母音をもつ例(「çi$_L$·「日」,「e$_L$·「餌」など)では，京都の知識人も音節をちぢめ,「çi$_L$·-ŋa「日ガ」,「çi$_L$·-wa「日ハ」,「e$_L$·-wa「餌ハ」の代わりに「çi$_L$ŋa,「çi$_L$wa,「e$_L$ŋa,「e$_L$wa と変化させる。

これらのステムは土佐でもこれとおなじアクセントをもつ。「hi$_L$ga 日ガ,「hi$_L$wa 日ハ,「e$_L$ga 餌ガ,「e$_L$wa 餌ハなど。単独で発音した場合(すなわち，不定格で)は hi 日，e 餌などは，土佐ではメロディー特徴を持たない。

(2) 平らな(高い)声調の型

「ho:˥ 法,「saŋ˥ 三,「oŋ˥ 雄,「çi·˥ 碑,「e·˥ 柄,「ki·˥ 気,「ho.˥ 帆,「ko·˥ 子,「go·˥ 五,「ku·˥ 九,「ka·˥ 蚊,「i·˥ 胃 (*wi),「ći·˥ 血,「to·˥ 戸。京都の知識人および土佐方言では「çi·˥ 碑,「e·˥ 柄(土佐では hi, e)などは「çiŋa˥ 日ガ(土佐「higa˥),「çiwa˥ 日ハ,「eŋa˥ 柄ガ(土佐「ega˥),「ewa˥ 柄ハなどと格変化する。

前の型にたいする東方言および南方言の対応形を究明するのは困難であるが，この型にたいしては東京のアクセントのない1モラ・ステム($_L$e 柄，$\overline{\text{eŋa}}$柄ガ，$\overline{\text{ewa}}$ 柄ハなど)が対応し，長崎の尻低語(バリトン)($_L$je 柄——je$_L$ga 柄ガ，je$_L$wa柄ハ)が対応することがハッキリ確認される。

(3) 上昇調の型

k'o「:(キョー) 経，ʒu「:(ジュー) 十，o「ŋ 恩，ha「i 肺，çi「· 火，e「· 絵 (*we)，ki「· 木，ho「· 穂，ko「· 粉，o「· 尾 (*wo)，ni「· 二，ta「· 田，te「· 手，me「· 目，ju「·(ユ) 湯。土佐ではこのアクセント型では(不定格で母音が長くなるため)単独のステムのメロディーが保たれている：hi「· 火，e「· 絵。そこで火は hi 日または hi 碑から区別され，絵は e 餌または e 柄から区別される。しかし接尾辞のついた形は京都の知識人におけるとおなじ。すなわち，hi「ga 火ガ(京都çi「ŋa)，hi「wa 火ハ，e「ga 絵ガ(京都 e「ŋa)，e「wa 絵ハ。この型の1モラ・ステムに東京方言ではアクセントのあるステムが対応する(「çi(火)，「e(絵)，「ki(木)——「çiŋa 火ガ，「eŋa 絵ガ，「kiŋa 木ガ)。そこでたとえば，つぎのものを比較せよ。

東京 「kiŋa 木ガ と $\overline{\text{kiŋa}}$ 気ガ(随意的に ki「ŋa ($_L$ki 気)。または「ćiŋa

火ガ と $\overline{\text{čiŋa}}$ 日ガ（随意的に či「ŋa）。主格˪hi 日から。

(4) 第2モラの下降的上昇調または長い音節の上昇下降調の型

（下降的上昇が第2モラだけにみられるものなのか，それとも声の三つの連続的ピリオド，低＋高＋低がほぼ量的に等しいのか，私は断定しかねる）。

京都 ho:̂ 頬，aî 藍（土佐では a「i, a「i˪ga 藍ガ。比較：a「i＜a「ju 鮎，a「iga˥ 鮎ガ）。この型はきわめて稀である。専ら，語末に下降的上昇のある2音節ステムが長い1音節に収縮して生じたものである（ho:̂ 頬 ＜*popô, aî 藍 ＜awî）から，標準語ではそれに対応する1モラ形はもちろんありえない。土佐ではこの型はないが，a「i 藍は aî(*awî)から生じた徴候が格変化（a「iga˥ でなく，a「i˪ga）に保たれている。他方，ho「: 頬は直前の型に完全に移ってしまった（ho:「ga または ho「:ga˥ 頬ガ。京都では ho:̂˪ŋa）。

以上に述べたことからわかるように，土佐における，アクセントによる語区別の手段は，1モラ語を目当てにしていない。短い単音節からなる語がきわめて稀であり，その形態論的に異常な性格を思うならば，このことは，当然である。短い単音節からなる語には，少数の1モラ名詞ステムの不定格かまたはいくつかの動詞の名詞形（為（シ），来（キ），着（キ），見（ミ），出（デ），居（イ），得（エ））があるが，動詞の名詞形は土佐では（1音節語を延ばす）京都とちがって，命令形の意味で用いられることがなく，また不定格は最小の働きしかもたない（南方言をのぞいた他の諸方言もおなじ）。従って，hi-「日」，hi-「碑」のようなステムが「hi˪ga 日が，「hi˪wa 日ハ，「higa˥ 碑ガ，「hiwa˥ 碑ハなどのような接尾辞つきの形から習得されるのは明らかである。そして，不定形 hi は現代人の頭の中では，こうした接尾辞つきの形にたいして副次的である。拙論「東京方言の音楽的アクセント」の中で指摘したように，東京方言ではアクセントのある1モラ・ステムとアクセントのない1モラ・ステムとは格変化においてのみ区別される（「çi-（火） と ˪çi-（日）。「çiŋa（火ガ），「çiwa（火ハ） と $\overline{\text{çiŋa}}$（日ガ），$\overline{\text{çiwa}}$（日ハ））が，不定格でも意図的に区別ができるのである。一方の çi は「çiŋa（火ガ），「çiwa（火ハ） からひき出せるもので，高い，そして強いアクセントのある音節の性格をもち，他方の çi（$\overline{\text{çiŋa}}$（日ガ），$\overline{\text{çiwa}}$（日ハ） からひき出され）は低い，弱いアクセントのある音節の性格をもつ(4)。しかし，土佐の「hi˪ga 日ガと「higa˥ 碑ガでは第1音節（「hi）はともに高く，従って，区別にはそれほど有利な条件でない。それにもかかわらず，区別は可能である。なぜなら，「hi˪ga 日ガの hi の終りでは，次の

音節の低いトーンを少し先取りして，いくらか，下降が見られるのに，「higa⌝ 碑ガの hi は母音のひびくあいだずっと高いトーンを保つ。土佐の諸木生れのインフォーマント尾崎氏〔村山。本書14ページ参照〕はこれらのニュアンスを単独の発音でハッキリさせ，保存することができた。しかし，この意図的区別の社会的価値はたいしたことがない。hiの両方のニュアンスは聞き手には，音声学的に同一のものと評価され，従って両方の意味を連想する。聞き手は区別の諸徴候を意識的にさがし，それまで音声区別をしなかった細部をハッキリ見定めるときにはじめて区別をとらえはじめる。しかし，この場合には，トーンの僅かの下降は一旦とらえられると，話し手も聞き手も理解する。すなわち，必ず「çi⌞ga 日ガ(「çi-ga⌝ 碑ガではない)の çi が連想される。このことは二人のインフォーマントのあいだで言いあわせてみてたやすく確認できる。

第3のステム（hi「· 火――hi「ga 火が，hi「wa 火ハ）についていえば，その原則的に差別的なイントネーション（次の音節にくらべて低いトーン）は気付かれなかったわけでないが，ステムを単独にいうときには母音を延ばす以外に表現されえなかった。なぜなら，母音延長は意味上大切なアクセント徴候を保存する必要があるばあいに土佐方言にありふれたやり方だからである。（土佐方言が意味上大切な母音のメロディーを保つために母音を延ばすことを）立証するために a「sa（*asâ）朝の対格形 a「sa⌞:（a「sa⌞o から）の長い母音をあげよう。ところで a は接尾辞 o と融合すると短い a となるのがふつうである（たとえば，a「sa 麻の対格形 a「sa←a「sa-o 麻ヲ）(5)。

もうひとつの例。sa「ra⌞:（sa「ru⌞wa から。sa「ru（sarû）猿の主格），しかるに「mida⌝←「midu-wa⌝（水ハ）および jo「ra←jo「ru-wa⌝（夜ハ）では短い母音 a がみられる。第3の例をあげよう。仮定法の接尾辞 *-e-(p)a は，もしその両方の音節が低いトーンの音節であるときは a を生み（先行子音の口蓋化をともなう），動詞ステムが接尾辞の *-e- の高まりを予想するならば a: を生む。すなわち「jo⌞b'a呼ベバ ＜*「jo⌞b-e-(p)a（「jobu⌝ 呼ブ）。しかるに jo「m'a⌞: 読メバ ＜jo「me⌞(p)a（jo「mu 読ムから）。第4の例。述語形をつくる接尾辞 *「de-⌞a は，ステム末の低い要素の後で -d'a（東京 -da，京都-⌞ja）を生んだが，ステム末の高い要素の後で「d'a⌞: を生んだ。「ha⌞nad'a＜*「pa⌞na-de-a 花ジャ，a「sa⌞d'a＜asa⌞ -de-a 朝ジャ；しかる

に，「hanad'a┐L: <*「pana-de┐L-a鼻ジャー， a「sad'a┐L:<*a「sa-de┐L-a麻ジャー。

このおなじ要因——意味区別に必要なイントネーションを保とうとする努力——はここで上昇調の1音節語すなわち ki「·（木）型のステムの母音をも長くした。ki「·>ki「:（木）など。

3モラおよびそれ以上のモラからなる語に移ろう。大切なことは，京都方言が土佐方言と反対に，3モラ語のアクセントの雑多性を非常に単純化し，はじめ又は終りの2音節上昇を一音節上昇で置き換えたことである（つまり，ſ ſ ρ の代わりに ſ ρ ρ となし，また，ρ ſ ſ の代わりに ρ ρ ſ となしたのである）。そこでこの二つの単純化のうちの最初のもの（ſ ſ ρ →ſ ſ ſ）によって京都方言では土佐で区別されている2つの3音節名詞が合流してしまった。「aLmura 油と「nama┐du 鯰とは京都方言で「aLbura，「naLmaʒu となり，また形容詞の二つのアクセント型の差が消えてしまった。すなわち，「siLroi 白イ，「aLtui 暑イと「aka┐Li 赤イ，「atu┐Li 厚イとは，京都で「śiLroi 白イ，「aLkai 赤イ，「aLcui 暑・厚イとなった（詳しいことは拙論「日本語の2音節ステム形容詞のアクセント」，科学アカデミー通報，1917年参照。本書74ページ以下）。しかし，この合流（はじめの2音節の上昇が1音節だけの上昇と合流したこと）によって，京都で ſ ſ ρ 型の語が完全に消えたわけでない。なぜならこのメロディー（ſ ſ ρ）は，語の構成諸部分のアクセント特徴によって制約されているならば，たとえば，必ず低いトーンの接尾辞(中でも方向，追加，限界，修飾，比較，述語の接尾辞のようなもの。つまり，-e|i̥，-mo，-made，-na，-jori，-ja はステムの最後の要素に依存してトーンが交替することがなく，あらゆるステムの後で低い）が平らな2音節ステムにつくときに保存された。たとえば「hana┐-i̥，「hana┐Lmo，「hana┐Lja，「mame┐Lna（丈夫な)。

また ρ ſ ſ > ρ ρ ſ という変化（たとえば土佐 o「sagi┐ 兎，京都 usa「ŋi）は終りの多モラ上昇を最少化する（1モラまで減らす）特別なケースで，例外なしに行なわれ，京都方言では語末の高いトーンの多モラ部分がまったく不可能となった。そこで不定格 *u「saŋi┐>usa「ŋi という変化とともに，高いピリオドは，接尾辞のついたもろもろの格でも1モラまで収縮した。*u

⌈sagi-ŋa⌉ 兎ガ>usaŋi⌈ŋa, *u⌈saŋi-wa⌉ 兎ハ>usaŋi⌈wa（接尾辞のトーンが低いときは *u⌈saŋi⌉⌊e 兎ヘ>usa⌈ŋi⌊:, *u⌈saŋi⌉⌊mo 兎モ>usa⌈ŋi⌊mo)。

もうひとつの例をあげよう。第1音節が低く，その他は高い音節からなる語，すなわち接頭辞 o⌋-（必ずトーンが低い）とトーンが平らで高いステムとが結合する語（たとえば土佐方言の o⌈sake⌉ オ酒, o⌈maturi⌉ オ祭リ）は京都方言で最後のモラだけ高くなった。osa⌈ke, omacu⌈ri（接尾辞のついた形は osake⌈ŋa オ酒ガ, omacuri⌈ŋa オ祭リガ, osake⌈wa オ酒ハ, omacuri⌈wa オ祭リハ。しかし，必ず低いトーンの接尾辞がつくときは，osa⌈ke⌊mo オ酒モ，omacu⌈ri⌊mo オ祭リモ)。

京都方言における上記の多モラ上昇の部分的除去（1モラ上昇だけをもつ東京方言の体系への過渡段階をあらわす(6)）は多モラ上昇の観念と1モラ上昇の観念との収斂(covergence)であった。そして新しいメロディーの物理的構成にそれが反映された。そこで，京都方言の ſ ſ ſ は土佐方言(⌈a⌊mura 油）とは違って，第1音節から第3音節に向かって第2音節の中間的高さをへて，じっさいには漸次に低下する。つまり ſ ſ ſ という形で発音され，そこで，ſ ſ ſ（土佐の「a⌊mura 油）というメロディーと ſ ſ ſ（土佐の「nama⌉⌊du 鯰）というメロディーとの妥協であり，この京都の反映（⌈a⌊bura 油, 「na⌊maʒu 鯰における ſ ſ ſ）はこの両者の混交に由来する。京都方言における，上昇に隣接するモラのこの結合的な「半上昇」（これは語の連続において声が低まるときにも高まるときにもみられる。従って，ſ ſ ſ のときは ſ ſ ſ である。たとえば，naŋa⌈sa 長サ <*na⌈ŋasa⌉ のばあい）について説明しておけば，それを転写において示す必要はないと思う。転写の記号としてはもっぱら心理音声学的〔村山。フォネーマ的〕意義をもつ記号だけを用いる。

上のことからわかるように，土佐方言は共通日本語アクセントを復元する上に，京都方言よりずっと示唆的である。なぜなら，土佐方言における変化は音節のメロディーにだけかかわるもので，高い音節と低い音節との間の境目は大体，移動しなかったからである。このことは形態論からとった一連の例によって立証できる。しかしここで，音節のメロディーにおいて土佐方言でおこったもうひとつの変化（随意的なものであるが）をあげておくべきである。すなわち，長い音節の第2モラからはじまって次の音節（または諸音

節）に及ぶところの上昇は随意的に１モラだけおくれる。つまり，上昇は次の音節からようやくはじまることがある。そこで，たとえば，k′o⌈:ga⌉ 経ガと k′o:⌈ga 経ガ，o⌈ŋga⌉ 恩ガと oŋ⌈ga 恩ガとの間には原則的差別はない（しかし，次の音節のトーンが低いときは，このようなおくれは，もちろん許されない。k′o⌈:⌊mo 経モ，o⌈m⌊mo 恩モ）。

上にのべたことは，コンテクストから切り離した語のアクセントのことである。少なくとも京都方言については，私は語のメロディーがいくらかモディファイされることのあるのを確認できた[7]。

Ⅰ　連声(Satz-sandhi) の影響によってモディファイされる次の現象がそれ。音節の最終の「唯一の高い」モラは次の語の高い語頭の前で（平らなメロディーの語の前でも）ふつうは低い。これらの語の間にわずかでも休止があると，ハッキリ高くなるが。そこで特別な種類の（随意の）平らなメロディーの語がつくられる。これは低い諸音節（随意に。最後の音節以外は低い）からなる点でふつうの平らなメロディーの語とはちがう（ふつうの「hana⌉ 鼻タイプの「平らな」語は高い音節からなる）。たとえば，⌊haśiŋa⌋⌈sarani⌉（箸が皿に）。両語の間に休止があると haśi⌈ŋa「sarani⌉。

Ⅱ　強調の影響によってモディファイされる。私はこの要因の意義を不十分にしか解明できなかった。ただ次のことを述べておこう。(1)語末音節は発話内部に休止があるときは，随意的に上昇しうる。たとえば「a⌊bura 油からつくる「a⌊buraŋa 油ガが第２の強調的上昇をつけて，あたかも「a⌊bura⌈ŋa のように発音されることがある。(2)いくつかの形態論的に複雑な複合は強調しないときは，ひとつの高まりがある（従って１語とみられる）が強調されるときは，ケース・バイ・ケースで一定の場所に第２の高まりが発達する。その合成要素が随意的に（統辞論的に，またアクセントから見て）独立語の程度に明確化する新しい合成語がこれに属する。

（東日本語および南日本語の資料と反対に）西日本語アクセントの物理的な面は実験的に記録した曲線の（顕微鏡的な）数字計算の形で私は究明しなかった。なぜなら，このアクセント体系についてはその直接の必要を感じなかったからである[8]。

高いピリオドと低いピリオドとの間のインターバルは，耳で決定できたかぎりでは$\frac{1}{2}$度音程と５度音程との間を動揺する。土佐方言では，理想的発音

では，つまり語の音声構成を明らかにする発音意図を意識的にハッキリと遂行する場合には，規則正しい5度音程が規準であるようだ。しかし，5度音程の下降の直前の音節は，それ自身，いくらか下がる（約$\frac{1}{2}$度)。そこで，たとえば，土佐方言の「nisi⌉⌊buŋ（n は口蓋的。s は口蓋化している。つまり，より正しくは ɲis'ibuŋ（地名　西分（ニシブン））は次のようなメロディーをもつ。

♯♪　♮♪　𝅗𝅥

ɲi　s'i|　buŋ

男性の声なら fa シャープ（小オクターブの)，fa, si（大オクターブの）

強さのモメントについていえば，東京方言では高まりが強まりと結びついているが，西日本語では高まりに強さが結びつくことは全く疑わしく，決して原則的ではない。たとえば，京都方言の「ha⌊na はしばしば第2音節（すなわち音楽的アクセントのない音節）でいくぶん強い呼気で発音されるのを私は知覚した。もっとも，この音節における強さの優勢が著しいとは決していえなかったし，また第2音節の強さアクセントの知覚は決して必然的ではなかった（つまり，語をくりかえすたびごとに知覚されたわけでなかったのである)。

高いピリオドの長さが最小のとき，つまり，京都の下降的上昇のときに，強さのモメントが最も明白である。たとえば asâ（朝）は第2音節に強さアクセントがあるものとハッキリみとめられる。

母音脱落は語の低い部分でも高い部分でも見られる(9)。もっとも土佐方言ではこの現象は，きわめて微弱な程度に見られるにすぎないことを述べておこう。唯一の高い音節における母音が脱落する場合，メロディーは次の音節における下降的上昇となって表われる。たとえば京都方言 śtô<「çi⌊to（人)。

〔村山。『言語学概論』の「西日本語の音楽的アクセント」はこれで終り，「お日さま」の話が続く。以下は中央アジア大学紀要，No. 9，1925，p. 192 以下による〕

紙数に制限があるので，ある程度，史的考察を行なうために十分な西日本アクセント資料をあげることができない。そこで，西日本アクセントを研究するさいに直接起こってくる諸問題を列挙するにとどめる。

(1)　西日本語の事実は，他の諸方言のアクセント現象を史的に解明するうえの出発点となるはずである。部分的な例：東京方言の全平の語末の随意的上昇（$\overline{\text{kodomo}}$, $\overline{\text{naŋasa}}$）は京都の平らなメロディー（「kodomo⌉）と語末上

昇メロディー（京都 naŋa⌈sa。連声において次の高い音節の前で随意的に「naŋasa」）との収斂によって説明される。

(2) 古典語のアクセントは西諸方言の話し手によるテクストの読み方で決定される（このような資料として私は方丈記〔村山。鴨長明著。〕の完全なテクストを京都の発音で読んでもらったものを記録した）。

(3) 西日本アクセントは共通日本語アクセントを示唆するものであって語源分析のさいに，分析を検討する手段として考慮すべきである。部分的な例。京都方言 no⌈do 喉は nomi 飲ミと to 門から説明される。というのは，no⌈mu 飲ムの第2音節の上昇と「to˙⌉の平らな高いトーンから no⌈m(i)-to⌉ >no⌈do となるから。他の方言の対応形（東京「no⌊do，長崎 no⌈do）は，ここではこの対応の規則性（京都の第2音節の上昇――東京の第1音節の上昇――長崎の尻高(オクシトン)メロディー）が，この語の京都アクセント（no⌈do）の共通日本語的意義を物語るという点でだけ注目される。

(4) 日本語におけるシナ語からの借用語のアクセントとシナ語の形との関係の問題でも，西日本語の事実はおなじような意味をもつ。

最もかんたんな例：数詞一，六，七，八の東京方言の形は i⌈ći, ro⌈ku, ś(i)⌈ći, ha⌈ći であるが，これはシナ語 *it, *luk（チベット語drug参照），*cit, *pat に由来する。シナ語にない音節になぜアクセントがあるのか説明できないが，借用した時代に西日本語の形にもとずいて「i⌊ti,「ro⌊ku,「si⌊ti, *「pa⌊ti を推定するならば，説明がつく（東京方言ではアクセントが規則的に移ったのである）。

(5) マレイ諸語との対応の問題でも西日本語のアクセントがおなじ役割をはたす。たとえば，日本語 *pi>fi>çi(火)（およびアイヌ語 api 火）「火」及び ki「木」(琉球語 ki:。もし，k の次の母音が本来 i であったなら，琉球語で *ći: のはずだが，そうではない）とマライ諸語の apuj（ポリネシア語では api>afi>ahi）「火」，kaju（ポリネシア語 kai）「木」との対比は，西日本語で火(ヒ)も木(キ)も上昇メロディーをもち（京都 çi⌈˙ 火，ki⌈˙ 木），タガログ語で第2音節が高く ạ⌈puj, ka⌈ju であるのに対応している〔村山。タガログは apój「火」，káhoj「木」。ただしフィリピンのイワタン語は kayú(カユ)〕。西日本語の音楽的アクセント体系とマライ語の音楽的アクセント体系とが類似していることは，日本語の形成にマライ・ポリネシア要素が参加しているとみる根拠である。

音楽的アクセントの機能の例解は，アクセント付きテクスト，語形変化表（動詞活用，名詞変化など）および辞典からの抜粋の形で京都方言のものは『心理音声学的観察』IIに発表した。ここでは，京都方言のわずかのテクストをあげるにとどめる。

「deŋkito(:)˥ 電気灯

今日は 誰 やと 思ったら
Ko⸢n⌊nićiwa. ⸢dare˥⌊jato⸢o⌊motara（ママ／＜omo:tara＜*omoptarepa)
キー さんや ナー まあ お上がり ちょっと おたずねに 来たんどす
⸢ki⌊:sanja⸢na⌊:⁽⁹⁾⸢ma⌊:owaŋa⸢ri(⸢ ⸢ ⸢ ⸢)⸢ćo⌊tto⸢otaʒuneni˥⸢ki⌊tandosu
わし の うちに 電気を ひこう と 思う んどすが
「wasi no」 ⸢u⌊ćini ⸢de⌊ŋkiwo ⸢ç(i)ko:˥⌊to⁽¹¹⁾ ⸢omou˥⌊ndosuŋa（強調形は ⸢omou˥⌊ndosu⸢ŋa)
電気は 日和には 良いが 雨 降りには
⸢de⌊ŋkiwa ⸢çijoriniwa˥ e⸢:⌊ŋa⁽¹²⁾ ame⸢φu⌊riniwa
いかん と 言わはりますが そうどすか （そうどっか）
⸢ikan˥⌊to ⸢iwaharimasu˥⌊ŋa ⸢so:dos(u)ka˥ (so:dohka とも。大阪 so:dakka 参照)。
何を 言う のやいな 日和で も 雨降りでも
⌊nani^wo」⸢ju:˥⌊nojaina ⸢çijoride˥⌊mo {ame⸢φu⌊ridemo / ame⸢φu⌊ri⸢de⸢mo}
電気の 光は 一緒やがな へーん それで も 世間で
{⸢de⌊ŋkino ⸢çi⌊kariwa / ⸢deŋkino˥ ⸢çi⌊kariwa⁽¹³⁾} ⸢išso˥⌊jaŋana he:⸢ŋ {⸢sorede˥⌊mo / ⸢horede˥⌊mo} ⸢se⌊kende
言わはります 雨の 降る 日 は 天気が 悪い
⸢iwaharimasu˥ amêno φuru⸢çi⌊·wa ⸢te⌊ŋkiŋa ⸢wa⌊rui

〔村山。これはデンキ（電気）とテンキ（天気）の類似を利した笑話であるが，ポリワーノフは，電気は漢音でテンキと読めるとなし，デンキというのは呉音デンケと漢音テンキの混淆に由来すると見ている。〕

I 京都方言に訳した「太陽」⁽¹⁴⁾の話

〔村山。これは『言語学概論』にのみのせてある。〕

お日 さん お日 さんが 言わ はった 言う いは あての 名 は
o⸢çi⌊:saŋ. o⸢çi⌊:saŋŋa⸢iwa˥⸢hatta{または⸢ju:˥⌊niwa} {ate⸢no⸢na⌊.wa / ⌊ateno」 ⸢na⌊·wa}⁽¹⁵⁾
日って言います あては ホラ キラキラ してまっせ
⸢çi⌊·tći:masu.⁽¹⁶⁾ {(w)ate⸢wa ⸢hora˥ / ⌊(w)atewa」⸢hora˥}⁽¹⁷⁾ {⸢ki⌊rakira ⸢šitemasse˥ / ⸢ki⌊rakirašitemasse}⁽¹⁸⁾
あては 東から 上がりますのや そして（ホシテ） あてが 上がると
⸢atewa」⁽¹⁹⁾ ⸢çi⌊ŋašikara ⸢aŋarimasu˥⌊noja ⸢hošite˥ ⌊ateŋa」⁽²⁰⁾ ⸢aŋaruto˥
夜が 明ける のどす あての 赤い キンキンした 目で 窓を
jo·⸢ŋa ⸢akeru˥⌊nodosu. ⌊ateno」 ⸢a⌊kai ⸢ki⌊ŋkiŋšita⁽²¹⁾ me·⸢de madô^wo
のぞいて 起きんならん 時刻やと 知らして上げます
⸢no⌊ʒoite⁽²²⁾ o⸢ki⌊nnaraŋ ⸢ši⌊kokujato ⸢širašitaŋemasu˥. o:kiŋ⸢ka ne⸢bo⌊ke ⸢neteru˥⌊nonara⁽²³⁾ ⌊atewa」 ⸢çika˥⌊rašimaheŋ okîšite ⸢hatara˥⌊itari
光ってる のやが
⸢ho⌊ŋ^wo jon⸢da⌊ri ⸢iŋokima˥⌊wattari⁽²⁴⁾ ⸢surujo˥⌊:ni ⸢çikatteru˥⌊nojaŋa-

な　　　　　　　　　　　　　　　　　しまっせ　天を　ズーッと
na. ┌ću└:te ┌na└: ┌e└rai ┌ta└biʷo[25] ┌śimasse┐ ┌te└ŋ̍ʷo ʒu┌:└tto ┌ta

ちょっとも　じっと　してしまへん。　そやけど　めったに
└bisuruno:su.[26] ćo┌tto└mo ʒittô ┌śi└teśimaheŋ.[27] ┌so└jakedo[28] ┌me└ttani

くたぶれることも　しんどいことも　あらしまへん。　頭には
┌kutabureruko┐┌tomo {śin┌do└ikotomo} arâsimahen. ┌a└tamani┌wa[29]

冠を　かぶってます　キラキラした　光の　冠どす。
┌ka└ mmuriʷo┌kabuttemasu┐┌ki└rakiraśita {┌çi└karino / ┌çikarino┐}[30] ┌ka└mmuridosu.

そして　この　光を　何処にも　かしこにも　送ってあげます
┌hośite┐ ┌kono┐ ┌çi└kariʷo {do┌ko└imo / doko┌i└mo}[31] ┌kaśi┐└koimo ┌okuttagemasu┐

のや。　2でも　家でも　水の　上でも　照らします　あて
└noja. ki┌·de└mo ┌i└┘edemo └miʒuno┐ ┌u┘ede┐└mo ┌teraśimasu┐. (w)ate

か　照らすと　何でも　皆　ピカピカ　(美しく)　見えます
┌ŋa ┌terasuto┐ nan┌de└mo minnâ ┌pi└kapi̬ka ┌ucuku┐└śi(:) me:ma┌su.

明うしてあげるし　暖う　してあげる　あては　何でも　暖め
{a┌ko└: ┌śitaŋeru┐└śi / ┌a└ko(:)┌śitaŋeru┐└śi} ┌atata┐ko(:)śitaŋeru. ate ┌wa nan┌de└mo ┌atata

ますさかい　成る　果物　や　穀物を　熟さしもします。
memassa┐└ke[32] ┌na└:┌kuda┐└moŋja ┌koku┐└mocuʷo[33] ┌ʒikusaśi┐└mośi-

あてが　あたしか　畑や　照らなんだら　何一つ
masu.[34] (w)ate┌ŋa {または ataśi┌ŋa} ha┌ta└kejate┌ra└nandara[35] nani┌śi

生えしません。
└tocu ha┘êśimaheŋ.

原　注

(1) 東京のオ酒ダ，京都のオ酒ヤにあたる（長崎では主文では述語形の代わりに無接尾辞格がくる)。

(2) E. A, マイアー,「日本語における音楽的アクセント」, Le Monde Oriental, 1906, p. 77〜86。本書1〜6ページ。

(3) 共通日本語の，組をなす有声子音 (b, d, g, z) 〔村山。組をなすとは，無声子音と対立して，組をなす意〕ができる前の先日本語（プレジャパニーズ）時代に語末の鼻音があったと推定すれば，合成語第2項語頭の無声子音の代わりに有声子音が出現する〔村山。連濁〕のは（母音間の位置で。ちょうど土佐の turi-za:, 東京の curi-ʒaʷo（ツリ）釣竿のような。これは turi+sawo 釣り竿に由来する。また，so+tate に由来する so-date 育テのような)，合成語第1項が鼻音で終ったケースを形態論的に一般化したためだと説明できる〔村山。合成語第1項と第2項との間に連辞Nを仮定した方が説明しやすいと思う。〕この鼻音は合成語第2項語頭の無声子音とともに有声子音の形成に加わり（たとえば *asam-kapo>asagawo 朝顔における m-k)，このモルフェーム〔村山 *asam 朝。〕が，自立した場合（すなわち合成語に入らないとき)，その下降的上昇調をひき起こしたのである。

(4) このような潜在的な語区別に類するものはロシア語でもみられる。たとえば пруд（プルート）(池) と прут（プルート）(樹枝)，また плод（プロート）(果実) と плот（プロート）(いかだ) 〔村山。これらの -д は -t と発音されるが，接尾辞がつくと d と発音される〕は斜格の d と t との観念

連合の影響で，語末子音（д と т）がちがって発音されることがある。別の例は она милá と она мелá におけるアクセントのない母音（и と е）を区別することである。もちろんこの（随意的な）区別を行なうためには特別な条件が必要である。たとえば，先生が「これは плот でなくて плод ですよ」などと口授するのがそれである。

(5) このような対格形は不定格および主格（asa←asa-wa）と一致する。土佐方言のこれらの規則正しく音声学的に発達した対格形および主格形を確認することは容易でなかった。なぜなら，それらはシンタクス的連声（Sandhi）の形でのみ存在するから（対格—a⌈sa ka⌈ru 麻ヲ刈ル。主格—⌈hana⌉ ⌈ta⌊kai 鼻ハ高イ）。ところが休止の前では，形態論的に更新された形 a⌈sao⌉, ⌈hanawa⌉ がいつでも表われる。それにもかかわらず，これらの簡単形が不定形でなく，まさに対格形，主格形として存在することは疑いえない。

(6) ことに，東京方言の全平の最後のモラの随意的上昇は，平らなメロディー（京都「kodomo⌉ 子供）と京都で支配的な語末1モラ上昇（usa⌈ŋi 兎）との収斂の結果である。

(7) 土佐方言の現象はここで触れないことにする。全体として土佐のメロディーは強調の場合，また連声（レンジョウ）の場合，京都よりコンスタントである。

(8) 私は両方言〔村山。東日本語，南日本語〕について実験記録の原資料（喉頭カプセルによる声調の曲線）を東京大学心理学実験室でたくさん集めた〔村山。本書 25～29, 58～65ページ参照〕。

(9) 母音脱落をうながす要因：母音が狭いこと（u i），無声音に隣接すること，マサツ音または破擦音の後ろにあること。東京では，さらに，アクセントがないこと（неударенность）を思いきってあげる必要がある（東京の「全平」の最後の音節でも母音脱落は不可能である。なぜなら，この音節は随意的なアクセントがあるから）。長崎方言ではおなじ要因（母音脱落を促す要因——母音の狭いこと，無声音に隣接すること，マサツ音または破擦音の後ろに立つこと）が働いているうえに，アクセントもそれに加わっていることは明らかだが，特別に記述しなければならない（「心理音声学的観察」I参照）。

〔村山。なお『言語学概論』，p. 28 以下の次の記事参照。〕

〔(9)—注〕

まさに日本語の短い i は，マサツ音の後，つづく無声子音の前，または音楽的アクセントのない語末，その他で消えるが，消えるにあたって，先行子音の口蓋化に名残りがみられる。（たとえば，ś。これは古い *s に由来する）：東京「haś(i) 箸, -deśta ← *desita, -maśta ← -*masita など（これに反して，-des ← -desu, -mas ← -masu などにおける「硬い」s 参照）。しかし，ある日本方言（硬い子音に対立する口蓋化子音がほとんどないか，または全く知らない方言），すなわち東北方言では，

*si という音節と *su という音節とは母音が消えたときおなじ結果になる。青森で「hask-o（箸（ハシ）＋接尾辞 -ko 子），「nas-ko（茄（ナス）＋-ko 子）

一連の諸言語における短いuおよびiの短縮，ついで消滅は，狭い母音（i u 及び y ɯ）の場合，単位時間当りの呼気が他の母音（たとえば a）の場合よりも大きいということで説明されるだろう。従って，同一量の空気を消費して母音aはたとえば，$\frac{2}{5}$秒発音できるとするなら．母音 u, i は$\frac{1}{5}$秒発音できるにすぎない（この数字はもとよりだいたいのものにすぎない。この問題は実験音声学教室の実験で調べて正確な数字で置き換えることができよう〕。そこで i ú という音声は短縮しやすい（そして消滅しやすい）。すなわち，言語発展の一定の期間に他の母音（たとえば a）よりより多く「摩耗する」。言いかえると，短い狭い母音は原則的に（他の母音にくらべて）「歴史的に不安定である」。

日本語の現象については上に述べた。ただつけ加えておくが，他の時代，他の方言では，i u の消滅をひき起こしやすい位置は現代東京語のように，マサツ音（及び破擦音）の後ろだけではない。南グループのいくつかの方言においてはrの後でiが消えること参照。「tori˥ 鳥 → 熊本 tor'-。次いで長崎海岸方言で tor' → toi̥, 琉球語で tui。また古代に鼻音の後で i が消えたケースを参照せよ。たとえば，*no「do(＝*nondo) ← no「m(i)-to˥ 喉。日本語のほかに（短い狭い母音の）類似した現象が，次の諸言語にもみられる。近代インド諸語（たとえばマラティ語），トルコ語〔カザフ語では四つの短い狭い母音 *i, *ɯ, *y, *u が全部あらゆる位置で非常に収縮した。ウズベク語タシケント方言では ı（←トルコ語 *i, *ɯ）が消えかかっており，収縮をうながすような位置で母音uもその傾向を示している。たとえば t(ı)l, p(ı)l「象」, b(ı)r, b(ı)z, č(ı)š ← tš ← *tiš「歯」, č(ı)š-mɔq← tuš-mɔq（*tyš-mæk「落ちる」のかわり），シナ語〔たとえば ᵗdá-s ← ᵗdásī 打死（cf. 日本語 śi 死），ᵖbi-з 鼻子など〕，ペルシア語諸方言，ブリャート語，モンゴル語，カルミュク語〔cf. *mørin → mørŋ 馬。ついでながら，すべてのカルミュク語の非第1音節の短母音が消滅への途上において，狭い母音と合流した〕，朝鮮語〔母音ɯが収縮しかけている。複数接尾辞に主格接尾辞がついた場合，-dᵚr-i ← -dɯr-i（ダブレットは -dar-i）となる〕。その他。

(10) キーさんとは清松（キヨマツ）のようなキにはじまる名前の人。京都の「na˪:（または na）は東京の ne に当たる。

(11) to は常に低いトーン。

(12) 京都 e「:, 東京「i: <jo-i（ヨイ）（良い）（長崎 jo「ka（ヨカ））。

(13) 修飾機能の属格形はトーンの（高く）平らな語となり，かくて高いトーンではじまる被修飾語と新合成語をつくる。この法則の反映は東京方言にも（その他の多くの方言にも）みられる。

(14) このテクストはいろいろな言語で音声学的記録を行なうさいの範例にとられることになっている。たとえば《Maître Phonétique》誌では，このテクストが多くの言語でしるされている（このテクストを標準に用いることは便利である。なぜなら，訳をつけなくてすむからである）。

(15, 17, 19, 20) 尻高語（ate⌈-no⌈私の」，ate-⌈ŋa, ate-⌈wa）は高い語頭のモラをもつ次の語に密接する（休止なし）ときは，ふつう，その語末の高まりを失う（⌊ateno」となる）。

(16) ⌈çi⌊tći:masu の代わりに，⌈çi⌊·⌈tći:masu⌉（← -te-imasu）と発音してもよい。最後の音節にたいして私は語末の有声のuを記録しておいた（以下の⌈kabut-temasu⌉，⌈teraśimasu⌉，⌈śimasu⌉ もおなじ）。一般に京都方言ではuは（マサツ音の後では）東京におけるよりやや安定しているようである（短い u，i の最も高い安定性を私は土佐方言で見出した）。

(18, 21, 34) ⌈śitemasse⌉ (site-(w)imasu-se から）の代わりの -śitemasse」および -ś(i)ta ← ⌈si⌊ta（⌈suru⌉ の過去）——⌈suru⌉ の諸形の文法化（固有の上昇を失う）。以下にもしばしばみられる。たとえば，⌈ʒikusaśi⌉-⌊mo-śimasu（熟さしもします）。-⌊mo ⌈śimasu⌉ の代わり。

(22) ふつうのテンポでは（noʒoite）ʒ の代わりに，（母音間では）一般的規則によって，マサツ音 z が発音される。すなわち nozoite。

(23, 35) （強調的発音に特有の）ダブレットは ⌈neteru⌉⌊no⌈na⌊ra。これとおなじような強調的ダブレットは te⌈ra⌊nan⌈da⌊ra（照らなんだら）。第2のアクセントをハッキリさせる。

(24) 京都では iŋoku（動ク）の代わりに特殊な（俗語的な）ダブレット ŋ̥ŋoku がある（比較：琉球 ŋ̥ʒuću-ŋ，東京 uŋoku）。

(25) ⌈ta⌊bi 旅，tabî 足袋。

(26) tabi-suru-ńo-dosu ともいえるだろう。

(27) じっさいには（i が脱落するため）śtêsimaheŋ（te が下降的上昇調）の形をとる。

(28) so-ja-kedo の -ja は終止形接尾辞で，東京 -da，土佐 -d'a⌋／-d'a⌈: に相当する（長崎県三重村では主文章においてはこの接尾辞にゼロが対応し，従属文では xai ← -de-aru が対応する）。（村山。ox は印刷不明の字）。

(29, 33) atamani-wa は kokumocu-ʷo とおなじく，最後の音節が強調的上昇調で発音された。⌈a⌊tamani⌈wa，⌈koku⌉⌊mocu⌈ʷo。

(30) 属格は（他の諸方言もおなじ）（次の語に密接して，随意的に平らなメロディーをもつことがある。

(31) 両方の接尾辞（方向を示す -i̥ と追加を示す -mo）は低いトーンを要求する。

従って，「正しい」ダブレットは do⌈ko⌊imo である。第2のダブレット（i を高める）はおそらく尻高（オクシトン）ステムからの単純な追加格（-⌊mo）のメロディーへの類推によって説明される。

(32) -sa⌉⌊ke, -ha⌉⌊ke は「sa⌊kai の異形。東京の -kara, 土佐の -kiɲi, または -keɲi, 長崎の -keŋ,-keŋka に当たる。低いモラの後で -sake（および他の音声異形）は随意に sa(ないし ha) の上昇を失う。

(34) (18)参照。

(35) (23)参照。

II 諸木(モロギ)村土佐方言のアクセント付テクスト記録

神田(カミデン) ⌜kamideŋ⌝* 〔村山。『言語学概論』にだけある。pp. 137～139。〕

* これはおなじ土佐でも，めったにみられない。諸木村とその隣の弘岡村とは今に未だ昔の風が残っている。春三月，田や山がだいぶ青くなった時に，時を計って稲を植えねばいけない。其の前に一番先に神様へ供えるのに稲を植える。村の内には氏神と言って，たったひとつ其の村を守る神様がある。その神様のために或るところに仲間の土地があって，これには時季によって五穀を植える。今，三月には良い日を選んで田植の日を決める。それからこれを植えるには諸木村の一部落の者が皆出る。諸木村を七部落に分ける。それで毎年，一部落づつ代わりでやる。

この時，神官が祈りをして神様へお神酒(ミキ)をしんでる。それから村の家から集めた米で飯(メシ)をたいて，これをにぎって団子と餅とをこしらえて，これも神様へしんでる。これがすむと，こしらえてあった御馳走を食うて酒を飲んで祝う。そこへ来た子供らには餅と団子をほうってやる。昼の飯(メシ)がすんだら，それから皆が出かける。この時には若衆も娘もきれいな着物を着て赤い手拭をかぶって男は腰へ瓢箪をぶらさげて女子(オナゴ)は襷(タスキ)をかけて，手には細い手桶を下げて，それには神田(カミダ)の粘(ネバ)土(ツチ)を一杯入れてある。それから勢(ゼイ)を揃えて，外の部落へ押しかけて行く。道で男を見つけたら，男がつかまえて酒を飲ませる。すんだら，女子(オナゴ)が手桶の土を顔やら足やら五体中一杯塗る。そんなにして朝から晩まで方々に居る人間を追いかける。こんなに三日続けてやる。これが春の神田(カミデン)祭りじゃ。こんこ（またはお終(シマ)いこんこ)。

⌜kor'a⌝ on⌜nas'i⌝ ⌜to⌞sademo ⌜me⌞ttaɲi ⌜mi⌞eŋ. ⌜morogimu⌝⌞rato ⌜sono⌝⌜tonarino⌝ ⌜hiro:kamu⌝ ⌞rata[1] i⌜maɲi⌝ ma⌜da mu⌜kas'i⌝⌞no ⌜hu⌞:ga ⌜nokott'o⌝⌞ru.[2] ha⌜ru sa⌜ŋ⌞gatu ta⌜ja ⌜ja⌞maga ⌜daibu⌝ a⌜o⌞: nattatokiɲi ⌜to⌞k'o ⌜ha⌞katte i⌜ɲo ⌜ueɲa⌝⌞: ⌜ikaŋ⌝.[3] ⌜sonoma⌝⌞eɲi ⌜it'ibaŋsa⌝⌞kie ⌜ka⌞misamae ⌜s'in⌝⌞deruɲi[4] i⌜ɲo ⌜ueru⌝. ⌜muranou⌝ ⌞t'iɲa ⌜ud'igami⌝⌞to[5] ⌜ju⌞:te ta⌜tta hi⌜tto⌞tu ⌜sonomu⌝⌞rao[6] ⌜mamoru⌝ ⌜ka⌞misamaga a⌜ru. ⌜sono⌝ ⌜ka⌞misamanotameɲi a⌜rutoko⌝⌞roɲi na ⌜kamano⌝ to⌜t'iga⌝[7] a⌜tte ⌜koreɲa⌝ z'i⌜kiɲi⌝ ⌜jo⌞tte go⌜koko⌝ ⌜ueru⌝. i⌜ma sa⌜ŋ⌞gatuɲa e⌜i ⌜hi⌞o ⌜e⌞ro:de[8] ⌜taueno⌝ ⌞hi⌞o ⌜kimeru⌝. ⌜soreka-

ra⌉⌈kor'o⌉ ⌊eruɲa⌉ ⌈morogimu⌉⌊rano ⌈it'ibu⌉⌊rakuno ⌈mo⌊ŋga[9] min ⌈na: de⌈ru. ⌈morogimu⌉⌊rao ⌈nanabu⌉⌊rakuɲi ⌈wa⌊keru. ⌈sonde⌉ ma ⌈ineŋ⌉ ⌈hitobu⌉⌊rakudutu ⌈ka:ride⌉ ⌈jaru⌉.

⌈konoto⌉⌊ki ⌈s'iŋkaŋga⌉ ⌈ino⌉⌊r'os'ite ⌈ka⌊misamae o⌈mi⌊k'o[10] ⌈s'in⌉⌊deru. ⌈se:kara⌉[11] ⌈muranoi⌉⌊ekara ⌈a⌊tumeta[12] ⌈ko⌊mede {⌈me⌊s'o ⌈ta⌊ite / ⌈me⌊s'otaite} ⌈kor'o⌉ ⌈ɲigi⌉⌊tte da⌋ŋ⌈goto⌉ ⌈mot'ito:⌉ ⌈kos'ira⌉ ⌊ete[13] ⌈kore⌉⌊mo ⌈ka⌊misamae ⌈s'in⌉⌊deru. ⌈korega⌉ su⌈muto⌉ ⌈kos'iraet'a⌉ ⌊:tta ⌈got'iso:⌉ ⌈kute⌉[14] ⌈sak'o⌉ no⌈:de⌉[15] {⌈i⌊wau / ⌈ju⌊wau.}. so⌈ko⌊e ⌈ki⌊ta ⌈kodomora:ɲa:⌉ ⌈mot'ito:⌉ da⌋ŋ⌈go:⌉ ⌈ho:t't'aru⌉.[16] ⌈hi⌊runo ⌈me⌊s'iga su⌈n⌊dar'a ⌈sorekara⌉ mi⌋n⌈na⌊: ga ⌈deka⌉⌊keru. ⌈konoto⌉⌊kiɲa ⌈wa ⌊kais'imo ⌈musu⌉⌊memo ⌈ki⌊re:na ⌈kimono(:)⌉ ⌈ki⌊:te[17] ⌈aka⌉⌊i ⌈te-nogojo⌉ ⌈ka⌊butte[18] ⌈oto⌉⌊ka ⌈kos'i⌉⌊e[19] ⌈h'o:ta⌉⌊ŋo[20] bu⌈rakura⌉ ⌊ite[21] ⌈ona⌉⌊ga ⌈ta⌊suk'o ka⌈kete⌉[22] te⌈:wa⌉[23] ⌈ho⌊soi te⌈ok'o⌉[24] ⌈sa⌊gete[25] ⌈sore⌉⌊:wa ⌈kamidano⌉ ne⌈batut'o⌉[26] ⌈ippai⌉ ⌈iret'a⌉⌊:ru. ⌈sorekara⌉ ze⌈jo[27] ⌈so⌊roete[28] ho⌈kanobu⌉⌊rakue ⌈os'ikaketeiku⌉.[29] ⌈mit'ide⌉ ⌈oto⌉⌊ko: ⌈mi⌊tuketar'a[30] ⌈oto⌉⌊koga to⌈koma⌉⌊ete[31] ⌈sak'o⌉ ⌈noma⌉⌊seru. su⌈n⌊dar'a ⌈ona⌉⌊goga ⌈ta⌊gono[32] ⌈tu⌊t'o ⌈kao⌉⌊jara ⌈a ⌊s'ijara ⌈gota⌉⌊id'u:[33] i⌈ppai⌉ ⌈nuru⌉. ⌈sonnaɲis'ite⌉ a⌈sa⌊kara ⌈bam⌉ ⌊made[34] ho⌈:⌊boɲioru ɲi⌋ŋ⌈g'o ⌈owa⌉⌊eru.[35] ⌈konnaɲi⌉ ⌈mikka⌉ {⌈tudu⌉⌊kete ⌈jaru⌉ / ⌈tudu⌉⌊ketejaru}. ⌈korega⌉ ha⌈ru⌊no[36] ⌈kamideŋ⌉ ⌈maturid'a⌉⌊:. ⌈koŋko⌉ (又は o⌈s'imaikoŋko⌉).[37]

原 注

(1) ⌈hi⌊ro-oko (弘岡) +⌈mu⌊ra-to-wa。

(2) 完了形 (nokotte-oru「残って居る」から)。

(3) 植えなければならない。

(4) s'inderu は sonaeru (供える) に当たる。土佐では現在形は (終止形のいくつかの他の形とおなじく) 名詞 (動作名詞) として完全な格変化をする〔たとえば, ku⌈ro ma⌈tu「来るを待つ」。kuro は kuru-o で対格形〕。

(5) 氏神様。村の守り神。諸木村では八幡。

(6) (土佐の音声学的に正しい) ダブレットは ⌈sono-mu⌉⌊ra。ra-o → ra となる。

(7) 土佐の t'i (東京方言 ći) はまったくロシア語の ти に対応する。音声学的な訓練のないロシア人の耳には，(土佐の) t'i と (日本の方言の大部分の) ći との区別をとらえることができない。

(8) ｢e⌊rabu 選ブの副動詞形。

(9) it'i-buraku-no moŋ-ga「一部落の者が」。諸木村は7部落に分かれる。これらの部落のあいだに，社会的差異と関連して，いくらかの方言的差異がある（主に語彙において)。海岸に近い貧しい漁村，西トバラと東トバラでは標準語の影響がみとめられず，従って中央の部落 (本村) で，すでに標準語とおきかえられている方言的用語を保存している。

(10) o-｢mi⌊ki (御神酒) の対格。

(11) sore-kara の収縮形。

(12) ｢atu⌉⌊meru 集メルの過去形。一般規則によると，(現在形で) 始めが高い動詞は過去形においてこの高いピリオドを少数の音節（ここでは1音節「a⌊) にちぢめるが，必ず語頭が高い。(現在形において)「平らな」動詞の過去形もこの公式通りになるだろう。たとえば ｢akeru⌉ の過去 ｢a⌊keta など。

(13) おなじ公式(12)によって，｢kos'ira⌉⌊ete——｢kos'iraeru⌉ の過去〔村山。副動詞〕——も説明される。みられるように土佐の動詞活用のアクセントは京都におけるよりずっと多くの型を示す。京都では現在形のすべてのアクセント種類が二つとなっている (「平らな」型と「尻高」型)。

(14) ku｢: 食フから。諸木方言では ku-u は東京とちがって「ガツガツ食う」というようなニュアンスをもたない。

(15) no｢mu 飲ムから。

(16) ho:tte-jaru'' から。｢ho:ru⌉ (ほうる)。

(17) ｢kiru⌉ 着ルから。

(18) ｢ka⌊buru 被ルから。

(19) 東京，京都などとちがって，土佐方言は母音の後の i と e との区別を保っている。だから方向を示す接尾辞はこの場合，他のばあいとおなじく -⌊e である（京都なら kośi: であろう)。

(20) h'o:taŋo (｢h'o:ta⌉⌊ŋ 瓢箪の対格) の語末の低いトーンはこのステム (ŋ=N は低くなる) 自身の観念と連合している。その前の語 (｢kos'i⌉⌊e) ではトーンの低下は形態論と関係がある。すなわち格接尾辞 -⌊e の観念と連合している。

(21) bu｢rakurasu⌉ から。

(22) ｢ka⌊keru から。

(23) 入格 (Illativ) の接尾辞に，やむをえず（その原則的特性に反して）(低いトーンでなく) 高いトーンがくる極めてまれなケースのひとつである。te｢:「手」の入

格は(1)低い第1のモラ te-」と第2モラ（すなわち接尾辞の）上昇をもつはずである。これはこのステムの観念自体によって要求される。(2)これに反し，入格の一般的特性のために，接尾辞は低くなければならない。この矛盾は形態論の観念が犠牲となってステムに有利に解決される。te⸢: の入格は te⸢: である。従って，第2の接尾辞 -wa（ここでは入格—主格が結合している）も「トーン調和」の一般規則によって高いトーンをもつようになって te⸢:wa⸣ となる。

(24) te-⸢oke⸣ 手桶の対格（te-／te⸢:+o⸢ke⸤）。

(25) ⸢sageru⸣ から。

(26) ⸢kamida-no⸣ ne⸢batut'i⸣ 神田ノ粘土。kami-da は kamideŋ と同義。

(27) ze⸢i（ze: でない。なぜなら土佐では二重母音 ei は長い e: から区別されるから）の対格。大勢のこと。

(28) ⸢soro⸣⸤eru から。

(29) ⸢os'ikakete⸣（⸢os'i-ka⸣⸤keru から）+⸢iku⸣。

(30) ⸢mi-tu⸣⸤keru 見付ケル——mi⸢ru と ⸢tu⸤keru から——の過去の条件法。

(31) to⸢komaeru⸣ 捕マヘルから（||cukamairu）。

(32) ⸢ta⸤go 手桶。テオケと同義。

(33) 五体。

(34) ⸢bam⸣-⸤made（晩迄）では最後の2音節の低まりは接尾辞 ⸤made（迄）の原則的に低いトーンによる。先行語 a⸢sa⸤-kara（朝から）では，これに反して，*asâ に由来するステム a⸢sa⸤- の特殊性によって制約される。

(35) niŋg'o は ni⸥ŋ⸢ge（||niŋ-ŋeŋ）「人間」の対格。owaeru の代わりに東京では okkakeru（追っかける）であろう。

(36) 低いトーンの接尾辞。なぜなら ha⸢ru⸤- 春は *parû（京都 harû|| 東京⸢haru）から来ているから。

(37) koŋko（または o-s'imai-koŋko）は（特に子供らが）お話しの終わりの形式として用いる（一種の「アーメン」)。

5. 長崎県三重村方言における 二つの音楽的アクセント

（『言語学概論』, 1928年, p. 70 以下）

長崎県〔村山。西彼杵郡〕三重村方言における二つの音楽的アクセント（尻低語と尻高語）の例証。カイモグラフで記録した音調曲線の結果。

この方言のどの語も，所与の音節数にとって可能な二つの音楽的アクセント型のいずれかに属する。一方のアクセントは一音節語から非常に多くの音節の語にいたるまで，一様なもの，同一の原則をもつものとして，他方のアクセントに対立する。このことは語形変化のさい重要な役割をはたす。語末において声が下がり，従って尻低型と呼ぶ語は派生形（名詞変化，動詞活用などの諸形）も尻低型に属する（つまり，語末の音調が低くなる)。これに反して，もし語がそれと反対の徴候をもつ型——語末で声が高まり，従って尻高型と呼ぶことにする——に属するならば，その派生諸形も尻高型である。

たとえば，

（A） 尻低語（および変化形）

〔語のバリトン的性格を語の最後のモラの前に˪という印をつけて示そう。たとえば ˪ha, ha˪na, ka˪u, hana˪:, han'a˪:〕〔村山。˪という記号はエドワーズが用いている。邦訳，p. 125 参照〕。

日	˪çi	鼻	ha˪na
日ガ,	çi˪ga, çi˪no	鼻ガ	hana˪ga
日ハ	çi˪wa	鼻ハ	hana˪:
日ニ	çi˪:	鼻ニハ	han'a˪:
日デ	çi:˪re	鼻デ	han'a:˪re
日カラ	çika˪ra	鼻カラ	hanaka˪ra
買ウ	ka˪u	着ル	ki˪:

買ッタ	ko:$_{\mathrm{L}}$ta	着タ	ki$_{\mathrm{L}}$ta
買ハナイ	kawa$_{\mathrm{L}}$ŋ	着ナイ	ki$_{\mathrm{L}}$ŋ, kira$_{\mathrm{L}}$ŋ
買ハナカッタ	kawaʒ́a$_{\mathrm{L}}$tta	着ナカッタ	kiraʒ́a$_{\mathrm{L}}$tta
買イ居ル	k'a:jo$_{\mathrm{L}}$i	着テ居ル	kijo$_{\mathrm{L}}$i
買ッテ有ル	ko:ćo$_{\mathrm{L}}$i	着テ有ル	kićo$_{\mathrm{L}}$i
買ッテオク	ko:ćo$_{\mathrm{L}}$ku	着テオク	kićo$_{\mathrm{L}}$ku
買ッテイタ	k'a:jo$_{\mathrm{L}}$tta	着テイタ	kijo$_{\mathrm{L}}$tta
買ッテ有ッタ	ko:ćo$_{\mathrm{L}}$tta	着テ有ッタ	kićo$_{\mathrm{L}}$tta
買ッテオイタ	ko:te:$_{\mathrm{L}}$ta	着テオイタ	kite:$_{\mathrm{L}}$ta

さらに買ッテオイタモノヲ　ko:te:tato$_{\mathrm{L}}$ba　着テオイタモノヲ　kite:tato$_{\mathrm{L}}$ba

（B） 尻高語（オクシトン）（および変化形）

〔語のオクシトン的性格は最終モラの前に「という印をおいて示す。「ha, ha「na, a「i, hana「:, han'a「:〕〔村山。「という記号はエドワーズが用いている。邦訳, p. 125 参照〕

火 「çi	花 ha「na
火ガ çi「ga	花ガ, ノ hana「ga, hana「no
火ハ çi「wa	花ハ hana「:
火ニ çi「:	花ニハ han'a「:（ヘニャー）
火デ çi:「re	花デ han'a:「re
火カラ çika「ra	花カラ hanaka「ra
その他	その他
飲ム no「mu	切ル ki「:
飲ンダ nu:「ra	切ッタ ki「tta
飲マナイ noma「ŋ	切ラナイ kira「ŋ
飲マナカッタ nomaʒ́a「tta	切ラナカッタ kiraʒ́a「tta
飲ンデイル nomijo「i	切ッテイル ki:jo「i
飲ンデ有ル nu:ʒ́o「i	切ッテ有ル kitćo「i
飲ンデオク nu:ʒ́o「ku	切ッテオク kitćo「ku
飲ンデイタ nomijo「tta	切ッテイタ ki:jo「tta

飲ンデ有ッタ nu:ʒo⌈tta　　切ッテ有ッタ kitčo⌈tta

飲ンデオイタ nu:re:⌈ta,　　切ッテオイタ kitte:⌈ta

飲ンデオイタノヲ nu:re:tato⌈ba　　切ッテオイタノヲ kitte:tato⌈ba

ステムの音調の型がこのように一定していることは，ステムの他の形態論的変化においても保たれ（いくつかの例外は「日本方言の心理音声学的観察 I」に示しておいた），またこのステムを第1項とする合成語にも見られる。たとえば，

tᵋa:⌈ko 太鼓——tᵋa:kotata⌈ki 太鼓たたき

ha⌊na 鼻——hanaku⌊so 鼻くそ

〔合成語第2項のアクセント型はこの合成語のアクセントに何の影響もない。もっとも，合成語を分解すると，すぐにそのタイプがあらわれる。たとえば，gumino⌈ha または gumi⌈no⌊ha 茱萸ノ葉。アクセントが第1項にだけ依存する合成語はどんなに長くてもよい。たとえば，ka⌈ra「唐」——karaŋkuninotatemonnogo⌈to 唐国ノ建物ノ如〕。

このアクセント体系の物理的な側面を解明するために（自分の耳とインフォーマントである徳永氏の自己観察のほか）東京帝国大学，心理実験室のカイモグラフの喉頭カプセルによって記録した音調曲線が役に立った。〔村山。徳永伊佐吉は，長崎県三重村出身で，当時，現在の一橋大学の前身校の学生であり，その数年後に亡くなった。東京帝大の心理実験室の実験には佐久間鼎が手伝った。本書11ページ以下参照〕。以下に示す曲線の計算では次のような簡単な解読方法を用いた。音調曲線のピリオドの長さを$\frac{1}{10}$ミリメートルで示す。しかし，それはおのおののピリオドの長さではなく，いくつかの連続したピリオドの算術平均値である。その数は，数の前の係数で示す。そこで5.14は連続した5つのピリオドが全体で $5\times14=\frac{70}{10}=7.0\,\mathrm{mm}$ と解してもらいたい。

しかし，この合計はたとえば，13+13+14+15+15，あるいはその他であるかもしれない。ピリオドの平均の長さを示す数字の後の〔　〕の中は，同じく$\frac{1}{10}$mm で，最後のピリオドの波の振幅を示す。従って，曲線の計算が5.15〔10〕，7.15〔25〕……ではじまるならば，第5のピリオドの振幅が1.0 mm，第12のピリオドの振幅が 2.5 mm（ピリオドの平均の長さは 1.5 mm）であることを示す(1)。

ピリオドの平均の長さを表わす数字は音調の相対的な高さに関する観念を

与える。つまり語における高さの動きの観念を与える（ピリオドが長いほど低く，二倍長くなると１オクターブ低くなる)。しかし残念ながら絶対的な高さをいうことはできない。というのは速度はシリンダーのいくつかの回転についてだけ記入できたにすぎず，他の回転では同一でなかったからである。

振幅を表わす数字は音調の強さの変化に関するそこばくの観念を与えうる（なぜなら，音調の高さが同一であれば，振幅がより大きいことは音声がより強いことに対応するから)。もっとも音調が下がるとき，強さが増さなくても振幅が増大しうることを忘れてならない。観察される全曲線の最大の振幅の１ピリオドがハッキリ認められるとき，max. と書く。たとえば，7.14〔45 max〕。このことは，所与の七つのピリオドのうちの最後のものの振幅が全有声切片の最高で4.5 mm であることを示す。主観的材料からも客観的材料からも，尻低語と尻高語との物理的差異が語末の高さの変化の方向のちがいにあると考えられる。つまり尻低語では語末が下がり，尻高語では語末が高まる。しかし，両型はこのような一般的特徴をもつが，音節の数，或る母音 (i, u) の消滅の傾向などに依存して，両型でさまざまの物理的置換が見られ，そこでタイプの特徴的な下降又は上昇のおこる「語末」の概念も変わる。

（A） 尻低語

（A） 1. バリトンの１モラ語（ひとつの短音節からなる）

この（たったひとつの）音節の内部で下降が起こる。きわめてしばしば，さらに強さの二頂点性がそれに加わる。つまり母音内部で声帯振動の弱まり(時にはほとんど中断)が加わる。高さの変化はたやすく耳で聞きわけられる。ことに発音者がたとえば外国人の発音を訂正しながらこの特殊性を強調しようと願って，大声で，努力して発音するときにそうである。

客観的な（実験音声学的な）資料は聴覚印象を立証する。バリトンの１モラ語の13の曲線のうち五つの計算を掲げよう（残りの八つの曲線でも下降が認められる)。

˪na 名：3. 19〔10〕，3. 18$\frac{1}{3}$〔21〕，4. 17$\frac{1}{2}$〔32〕，2. 16$\frac{1}{2}$〔39 max.〕，4. 15$\frac{1}{2}$〔35〕，4. 15$\frac{1}{4}$〔32〕，4. 15〔30〕，4. 15〔30〕，4. 15$\frac{1}{4}$〔25〕，4. 15$\frac{1}{4}$〔23〕，2. 15$\frac{1}{4}$

〔21〕, 9. 16〔24〕, 4. $16\frac{1}{4}$〔26〕, 4. $16\frac{1}{4}$〔28〕, 3. $16\frac{2}{3}$〔28〕, 4. $17\frac{1}{2}$〔31〕, 4. 18〔32〕, 4. $18\frac{3}{4}$〔30〕, 3. 20〔26〕, 2. 22〔18〕, 2. 24〔7〕……

⌞**ne** 値：5. 18〔5〕, 5. $17\frac{1}{2}$〔8〕, 4. 17〔12〕, 4. $16\frac{1}{4}$〔21〕, 4. $16\frac{1}{4}$〔23〕, 5. 16〔29〕, 3. $15\frac{1}{2}$〔30〕, 4. $15\frac{1}{4}$〔30〕, 4. 15〔32〕, 8. 15〔32〕, 4. $14\frac{3}{4}$〔31〕, 4. 15〔31〕 4. 15〔30〕, 4. $15\frac{1}{4}$〔31〕, 4. $16\frac{1}{4}$〔32〕, 3. $16\frac{2}{3}$〔30〕, 4. 18〔31〕, 2. 20〔25〕, 4. $22\frac{1}{2}$〔13〕, 3. 27〔10〕……

⌞**ha**「葉」(2)：4. $12\frac{1}{4}$〔19〕, 2. $12\frac{1}{2}$〔30 max.〕, 5. 12〔20〕, 4. $11\frac{1}{4}$〔18〕, 7. $11\frac{3}{7}$〔13〕, 3. 12〔3〕, 次いで170（17.0 mm）の連続において一連のきわめて小さい振幅のピリオドがつづき，その後で5. 12〔3〕, 7. $12\frac{6}{7}$〔5〕, 3. $13\frac{1}{3}$〔8〕, 3. $14\frac{1}{3}$〔12〕, 3. $15\frac{2}{3}$〔5〕, 4. $17\frac{1}{2}$〔4〕…

⌞**çi** 日：2. 16〔35〕, 3. $15\frac{2}{3}$〔36〕, 3. 15〔36〕, 2. $14\frac{1}{2}$〔31〕, 3. 14〔25〕, 3. 14〔26〕, 4. $13\frac{3}{4}$〔25〕, 3. $13\frac{2}{3}$〔26〕, 3. 14〔27〕, 3. $13\frac{2}{3}$〔25〕, 3. 14〔28〕, 4. $41\frac{1}{2}$〔29〕, 3. $14\frac{2}{3}$〔28〕, 4. $14\frac{3}{4}$〔28〕, 3. 15〔30〕, 4. $15\frac{1}{2}$〔30〕, 4. $16\frac{1}{4}$〔31〕, 3. $16\frac{2}{3}$〔31〕, 3. $17\frac{1}{3}$〔32〕, 4. $18\frac{3}{4}$〔31〕, 2. 20〔28〕, 2. $21\frac{1}{2}$〔20〕, 1. 23〔15〕…

⌞**je** 柄(3)：4. $17\frac{1}{2}$〔8〕, 2. $17\frac{1}{2}$〔9〕, 3. 16〔15〕, 3. 15〔24 max〕, 2. 15〔21〕, 3. $14\frac{1}{3}$〔19〕, 2. 15〔13〕, 2. 14〔8〕, 次いで500(50.0 mm)の連続においてきわめて小さい振幅の一連のピリオドがつづき，ついで2. 15〔7〕, 3. $16\frac{2}{3}$〔9〕, 2. 17〔8〕, 2. 20〔8〕, 2. 21〔7〕…

⌞**ke** 毛，⌞i 胃の曲線は上の ⌞je 柄，⌞ha 葉とおなじく，尻低（バリトン）1モラ語〔村山。原文にオクシトンとあるのはバリトンの誤記とみて訂正した〕の発音のいくつかの場合に強さの二頂点性を疑いないものと考えさせる。なぜなら，母音

音声のまんなかにおいて振幅がほとんど全く消える（ほとんど直線）のは，母音のはじめで，次の下降の前で音調が高まる結果であるとは解釈できないからである。

〔注〕 この随意的現象（1モラの尻低語の母音の強さの2頂点性）の歴史的説明は私には不明である。いずれにせよその原因は，その記録が私の計算で2頂点性を示す語とは全く関連していない。それは1モラ尻低語の型の観念全体の一般的な（しかし随意的な）特徴であることは明らかである。日本語の1モラ語の大部分が古い2音節ステムにさかのぼるとみられること，従って，この強さの2頂点性が，これらのステムのかつての2音節性の名残り――それが何らかの原因でまさに尻低1音節語にみられる――であるかもしれないことを述べておく。

(A)2.　2モラの1音節語

長い音節よりなる1音節尻低語も母音または二重母音内部の下降調をもっている。聴覚的にはこれらの語は第1要素にアクセントがある東京の長い音節（たとえば東京「ho：頬，「oŋ 恩）とは，つぎのちがいがある。東京の語では第2要素を犠牲にして必ず第1要素が強調されるが，長崎（三重村方言の資料）の尻低語では，そのようなことがない。

ju_L: 言ウ (*⌈ip-u⌉)：4. 19$\frac{1}{2}$〔13〕，4. 18$\frac{1}{2}$〔19〕，3. 17〔23 max.〕，4. 16$\frac{1}{4}$〔20〕，7. 15〔13〕，6. 14$\frac{1}{6}$〔7〕，5. 13$\frac{4}{5}$〔5〕，7. 13$\frac{4}{7}$〔3〕，6. 13$\frac{1}{2}$〔4〕，7. 13$\frac{4}{7}$〔4〕，4. 13$\frac{3}{4}$〔4〕，5. 14〔3〕，7. 14$\frac{5}{7}$〔3〕，4. 15$\frac{1}{2}$〔4〕，7. 15$\frac{3}{7}$〔9〕，7. 17$\frac{1}{7}$〔12〕，6. 18$\frac{1}{2}$〔16〕，5. 21〔14〕，4. 25〔8〕，8. 28$\frac{1}{3}$〔8〕，3. 34.

$o_L\eta$ 音（シナ語からの借用語）：7. 14$\frac{5}{7}$〔3〕，6. 15〔4〕，7. 14$\frac{2}{7}$〔5〕，5. 14〔5〕，8. 13$\frac{3}{4}$〔5〕，8. 12$\frac{1}{2}$〔5〕，8. 14$\frac{3}{8}$〔7〕，6. 15〔9〕，7. 15$\frac{4}{5}$〔20〕，3. 15$\frac{2}{3}$〔24〕，5. 16$\frac{4}{5}$〔34〕，3. 19〔42 max.〕，5. 20$\frac{1}{5}$〔38〕，4. 22$\frac{1}{2}$〔26〕，4. 21〔8〕，3. 30.

(A)3.　2音節の尻低語

2音節の尻低語はバリトン性の原則をさまざまに実現する。大多数の場合，

1音節語における音調の低下とおなじように，最後の音節の母音内部で音調が下がる。最後の音節におけるこの高さ変動は，発音者がその語の理想的な発音（タイプの特性を最もよく明らかにした発音）をせねばならないとき——たとえば，ha⌊na（鼻）と ha⌈na（花）との区別を私に教えようとするとき——異常にハッキリと聞きとれる。この聴覚印象は曲線でも立証される（最後の音節内部で声が高まることを暗示するような2音節および多音節尻低語の曲線はひとつもない)。たとえば

o⌊tta（居った）o⌊i（←woru 居ル。土佐「o⌊ru)の過去：母音 o：$4.17\frac{1}{2}$〔8〕，5.16〔12〕，5.14〔15〕，4.15〔22〕，$3.14\frac{1}{3}$〔23〕，$6.14\frac{1}{6}$〔21〕，$4.13\frac{3}{4}$〔19〕，$8.11\frac{5}{8}$〔18〕，$7.14\frac{4}{7}$〔17〕，3.19〔10〕，3.20。

さらに1350の連続の直線がつづく(t:＝tt)。母音 a：$5.13\frac{4}{5}$〔20〕，5.14〔27〕，6.15〔25〕，4.15〔25〕，5.16〔24〕，$4.16\frac{1}{4}$〔25〕，$5.16\frac{2}{5}$〔22〕，5.17〔21〕，$4.17\frac{1}{2}$〔21〕，$5.18\frac{1}{5}$〔18〕，$5.19\frac{3}{5}$〔16〕，$4.21\frac{1}{4}$〔17〕，$4.23\frac{3}{4}$〔12〕，3.26〔10〕，$3.28\frac{1}{3}$〔7〕，$3.31\frac{2}{3}$〔3〕，3.35(4)。

2音節語の第1音節にアクセントがあるのか，それとも第2音節にあるのか，という問題は，この方言では，（強さアクセントをもつ）ロシア語または（音楽的アクセントをもつ）東京語におけるようには提起できない。ロシア語や東京語では，ひとつの音節が，アクセントをもつものとして，他からハッキリ際立っている。この方言（三重村方言，およびその他の長崎方言）では2音節尻低語の第1音節は大多数の場合，最高の高さがまさにその内部にある（第2音節の母音の第1部分の内にあるのではない)(5) にもかかわらず，ふつうの意味でアクセントがあるとは言えない。なぜなら，この(第1)音節の母音は無声化しうるからである〔東京語ではアクセントのある音節の母音は無声化しない。拙論「東京方言の音楽的アクセント」，科学アカデミー通報，1915年，p. 1620。本書，21ページ〕。2音節尻低語の第1音節の母音がこのように無声化する例は ki⌊ta（北）の曲線である。この曲線では a だけがあらわれ

（[kḭt] は声帯振動がない），次の数字を示した（振幅は示さない）：

3.15，3.16$\frac{2}{3}$，4.17$\frac{1}{2}$…

しかし，一見したところ，どんなに奇妙でも，最後の母音内部の声の降下——それはおそらく大きな心理的意義をもつモメントである——はいくつかの場合，尻低語で欠けることがある。なぜなら，きわめてしばしば最後の音節の母音はこのタイプの語では〔尻高語と反対に〕無声化し，それどころか消えることさえあるからである（i および u の消滅の条件については後述参照)。たとえば ha└śi（橋）が haś の形で発音されるのが最もふつうであり，[i] はとくにハッキリ発音するときにだけ発音される（もちろん，母音のはじめから終わりにかけて低くなる)。[haś] のような発音では第1音節母音（[a]）のメロディーは重要な役割をはたさず，語末母音が無声化しない場合に観察される第2音節内部の下降に決して比肩しうるものではない。かくて，尻低型の特徴たる「語末低下」は [haś] のような発音では実現されず，単なる意図にとどまり，意図は遂行されない。それにもかかわらず，[haś] の形で発音される語が尻低型に属することは疑いえない。なぜなら，尻高語（たとえば ha┌śi（箸)[6] では，最後の音節の母音は無声化したり，消えたりすることはありえないからである。

言いかえると，2音節尻低語の最後の音節は母音内部の下降——それは有声性ゼロと交替する——という特徴をもち，2音節尻高語の最後の音節のメロディー——それは有声性ゼロと交替しえない——に対立する。

かくて，結局，（心理的には単一の）尻低型の2音節語に三つの物理的変種（三つの物理的タイプ）が可能である。

(1) 理想的な物理的タイプ：二つの音節において有声母音があり，第2音節内部で下降が起こる。

(2) 前にあげた kita（北）の記録の物理的タイプ。第1音節において有声性がゼロ，第2音節内部で降下が起こる。

(3) [haś] の物理的タイプ。第2音節において有声性がゼロ。

しかし，ハッキリ一定した規準がそこにあるわけではない。① すべての2音節尻低語は随意的に第1の（理想的な）物理的タイプの発音ができる。②いくつかの語は第2の物理的タイプの発音も第3の物理的タイプの発音も随意にできる。たとえば，ki└ku（聞ク。*┌kik-u┐）は無声の[ḭ] の ki└ta タ

イプと有声の［u］で発音でき，［u］の内部で音調が下がる（［u ］）。または反対に，［haś］タイプに［kikụ］(7)と発音することもできる。つまりuが無声，iが有声である。第2の物理的タイプの ha˪śi（橋）という発音も不可能ではない。無声の［ə̥］，有声の［i ］。しかし，［haś］の発音よりまれである。

（A）4. 尻低（バリトン）型の2音節以上の語

詳しく述べる紙面がないので，語がなどんに長かろうと，音調メロディーの下降が語の最後の三つのモラ（短い音節，または長い音節の半分をモラとみる）の経過において生じるという一般結論を述べるにとどめる。

短い音節からなる3音節語では最高の高さは第1および第2音節にある（京都人なら「mame˥˪na丈夫ナ）という京都語のタイプを想い出す）。4音節，それ以上の音節（および3音節で最後の音節が長いもの）からなる尻低（バリトン）語では，最後の二つの音節が短かければ，最高の高さは後ろから3番目の音節にくる。（その音節が長いときは，その音節の第2モラにくる）。そして語の最後の音節が長ければ，最後から2番目の音節にくる（それが長ければ，その第2モラにくる）。しかし発音者は，自分の発音を観察しても高まりの場所をとうていすぐには決めかねる。三重村の人々は高まりの場所をハッキリ定めるよりは，（尻高（オクシトン）語の場合のように語末でなく）語頭の近くの方に高まりがあることを言う方がはるかにたやすい。そして三重村の言語に存在する語の分化という見地からは，三重村の人々のこの指示だけでまったく充分である。この方言に存在するすべての区別はこれで尽きるのである（強調的なメロディー変種は特別である。補説の最後の部分参照）。

（B） 尻高（オクシトン）語

（**B**）1. 尻高（オクシトン）の1モラ語は尻低（バリトン）語と反対の方向に高さが動くのが特徴である。つまり，音節の始めから終わりに向かって高くなる。

以下に示す計算から，声が高まるほかに，母音末尾で振幅が著しく縮少して，声がさらに下がることもたしかめられる。しかしこの下降は（まさに振幅が小さいことを考慮して）聴覚的意義をもつものとみることはできない。

「**ne** 根：5. 20〔10〕，3. $18\frac{2}{3}$〔22〕，4. $17\frac{1}{2}$〔37〕，6. 15〔45 max.〕，6. $14\frac{1}{6}$〔37〕，4. $13\frac{3}{4}$〔35〕，4. $13\frac{3}{4}$〔30〕，7. $13\frac{4}{7}$〔24〕，7. $13\frac{4}{7}$〔23〕，7. $13\frac{4}{7}$〔21〕，4. $13\frac{3}{4}$〔20〕，5. 14〔20〕，6. $14\frac{1}{6}$〔20〕，5. $14\frac{3}{5}$〔20〕，8. 15〔20〕，4. $16\frac{1}{4}$〔20〕，6. $17\frac{1}{2}$〔20〕，2. $17\frac{1}{2}$〔18〕，5. 19.

「**ni** 二（呉音。京都，ni「:，東京「ni）：3. $15\frac{2}{3}$〔14〕，7. $15\frac{2}{7}$〔29〕，4. $14\frac{1}{4}$〔36 max.〕，9. 13〔35〕，9. $12\frac{2}{9}$〔30〕，9. $11\frac{2}{3}$〔25〕，8. $11\frac{7}{8}$〔23〕，8. $11\frac{7}{8}$〔23〕，9. 12〔20〕，9. $12\frac{4}{9}$〔19〕，9. $12\frac{7}{9}$〔17〕，8. $13\frac{3}{4}$〔11〕，6. $14\frac{5}{5}$〔6〕，6. $15\frac{1}{3}$.

「**ha** 歯：3. $15\frac{2}{3}$〔11〕，2. 15〔28 max.〕，5. 14〔19〕，6. $13\frac{1}{2}$〔17〕，7. $12\frac{6}{7}$〔13〕，8. $12\frac{1}{2}$〔10〕，8. $12\frac{1}{2}$〔9〕，4. $12\frac{1}{2}$〔9〕，7. $12\frac{6}{7}$〔8〕，7. $12\frac{6}{7}$〔4〕，5. 14〔3〕，6. $14\frac{1}{6}$.

「**çi** 火：2. 19〔30〕，1. 16〔37 max.〕，4. 15〔34〕，6. $14\frac{1}{6}$〔24〕，4. $13\frac{3}{4}$〔20〕，4. $13\frac{3}{4}$〔20〕，4. $13\frac{3}{4}$〔18〕，8. $13\frac{3}{4}$〔17〕，7. $14\frac{2}{7}$〔14〕，6. $14\frac{2}{3}$〔16〕，6. 15〔14〕，7. $15\frac{5}{7}$〔16〕，6. $16\frac{1}{3}$〔19〕，5. $17\frac{4}{5}$〔11〕，3. $18\frac{1}{3}$.

「**je** 絵(8)（*wě，京都 e「:，土佐e「:，東京「e）：3. $18\frac{1}{3}$〔9〕，3. $18\frac{1}{3}$〔13〕，3. $16\frac{2}{3}$〔24〕，4. 15〔34 max.〕，5. 14〔25〕，4. $13\frac{3}{4}$〔22〕，4. $13\frac{3}{4}$〔22〕，7. $13\frac{4}{7}$〔18〕，4. $13\frac{3}{4}$〔17〕，6. $13\frac{1}{3}$〔12〕，6. $13\frac{1}{3}$〔8〕，6. $13\frac{1}{3}$〔7〕，6. $13\frac{1}{3}$〔5〕，5. 14〔5〕，5. 14〔5〕，4. 15〔5〕，6. $15\frac{5}{6}$〔5〕…

（B）2.　尻高(オクシトン)の長い1音節語

ju「: 良ク（*jo-ku. jo-「ka 良カからつくる副詞）：5. 20〔17〕，4. $18\frac{1}{2}$〔25〕，

3. 17〔31〕, 2. 16〔35 max.〕, 3. $16\frac{1}{3}$〔27〕, 4. 15〔13〕, 4. $14\frac{1}{2}$〔10〕, 8. $13\frac{3}{4}$〔3〕, 4. $14\frac{1}{4}$.

oˈ**ŋ**　恩（シナ語からの借用語）: 5. $17\frac{1}{5}$〔14〕, 3. $16\frac{2}{3}$〔20〕, 4. $15\frac{3}{4}$〔27〕, 4. 15〔28 max.〕, 7. $13\frac{6}{7}$〔22〕, 6. $13\frac{1}{3}$〔22〕, 6. $13\frac{1}{3}$〔18〕, 6. $13\frac{1}{3}$〔18〕, 6. $13\frac{1}{3}$〔18〕, 6. $13\frac{1}{3}$〔17〕, 7. $13\frac{5}{7}$〔17〕, 6. $14\frac{1}{6}$〔16〕, 6. 14〔12〕, 6. $14\frac{1}{6}$〔10〕, 7. $14\frac{2}{7}$〔8〕, 6. 15〔7〕, 6. $15\frac{5}{6}$〔6〕, 6. $16\frac{2}{3}$〔4〕, 3. $16\frac{2}{3}$.

（**B**）3.　多音節の尻高語

一般的な徴候。語末の高まりは（先行諸音節にくらべて）最後の音節が相対的に高まることにも，また最終音節内部[9]で音調が高まることにも現われることがある。（この母音の終わりにおいて，振幅が低下して，わずか下がるのは問題外である。）

uˈsu　臼の数字をあげよう。

最初の　[u]: 5. 20〔4〕, 5. 18〔7〕, 3. $16\frac{2}{3}$〔12〕, 4. 15〔29〕, 2. $14\frac{1}{2}$〔34 max.〕, 6. $13\frac{5}{6}$〔30〕, 6. $14\frac{2}{3}$〔25〕, 2. 17〔11〕, 4. $18\frac{3}{4}$。

[s]――400のあいだ直線

第2の [u]: 8. 15〔2〕, 7. $14\frac{2}{7}$〔2〕, 7. $12\frac{6}{7}$〔2〕, 6. $13\frac{1}{3}$〔2〕, 9. $12\frac{7}{9}$〔2〕, 9. $13\frac{1}{9}$〔2〕, 9. $13\frac{1}{3}$〔4〕, 9. 13〔6〕, 7. $12\frac{6}{7}$〔10〕, 5. 13〔10〕, 8. $13\frac{1}{8}$〔9〕, 5. $13\frac{1}{5}$〔4〕……

尻高（オクシトン）型が尻低（バリトン）型とちがうひとつの点は，上に述べたように，語末母音が安定していることである。語末母音が消えることは2音節尻高（オクシトン）語では全くありえない。四音節またはそれ以上の音節の尻高語で語末が s(u) である語で，最後の u の代わりにゼロがあるきわめてまれなケースは接尾辞 -mas(u) である。私は徳永氏の発音で観察したもので，例外現象であり，それどころか借物であるかもしれない。この -mas(u) は接尾辞 -des(u) とおなじく，三

重村方言にはなく，標準口語（すなわち東京語）の影響によって，（丁寧な言い方のとき）三重村方言に入りこんでおり，きわめてまれである。いずれにせよ，この現象は，尻高型（オクシトン）の新しい徴候を尻低型（バリトン）から区別するために利用したものとして興味がある。[arimas] と発音される arima⌈su(10)は [orimas] と発音される orima ⌊su からメロディーで区別される。[arimas] では [ma] が高く，[orimas] では [ri] が高い。

〔注〕

強調の場合尻高語（オクシトン）の高まりが最後のモラから，最後より２番目のモラに移ることについては，ここでふれない（命令形のふつうのメロディーがそれである。たとえば k^wi:naha⌈re⌊:「食いなされえ」（ku⌈: 食ウの丁寧な命令形），o⌈ki⌊re（oki⌈:起キルの命令形)。また呼びかけ，たとえば女子名 micu⌈je（ミツエ）の呼びかけ mi⌈cu⌊je（ミツエ／)，男子名 ara⌈ta（新）の愛称形の呼びかけ an⌈ra⌊:（アンラ／)。

日本方言学資料

長崎県西彼杵（ソノギ）郡三重村の方言

（帝室ロシア考古学協会東洋部報，23巻，ペトログラード，1915年）

テクストと訳〔村山。訳というのはロシア語訳であるが日本人には不必要なのではぶいた〕

テクストは国際音声協会のアルファベットでしるした。L. V. シチェルバ（科学アカデミー・ロシア語部報，15巻第４冊に発表された「転写の問題について」）の提案した補足を含む。転写ではフォネーマを示すだけにして，結合的および随意的ニュアンスはしるさなかった。これらのニュアンスはこの方言の音声学的記述が取り扱うべきものである。つぎの点は特に述べておく。

u——唇をつき出したり円めたりしない。下唇がやや高まるだけ。随意的に有声性を失い，そして消える（i もおなじ)。ことにマサツ音と破擦音の後で。

r——ふるえのない前舌音。

c＝破擦音 t͜s。

ʒ＝破擦音 d͡z。

ś＝軟い，舌背的 ʃ。

ć＝破擦音 t͡ś。

ʒ́＝t͡ś の有声音 d͡ź。

k′, g′, n′…. ＝口蓋化した k, g, n…

k^{w}, g^{w}＝円唇化の k, g。

$k^{ɥ}$, $g^{ɥ}$＝円唇化，口蓋化の k, g。

^{ε}a＝上昇二重母音 ε͡a。「軟い」子音，たとえば k′a(:), g′a(:), n′a(:)…と結合しても存在するが， t^{ε}a(:) におけるその独立的位置においてのみしるす。

語の最後の音節の前の「と ˪という記号は，語がこの方言に存在する二つの音楽的アクセントのいずれかの型に属すことを示す。最後の音節の声が高まるか(ha「na 花) または下がる (ha˪na 鼻) ことを示す。〔同一の語に二つの印 (′ または ` を含む) が存在するときは，特別な強調的イントネーションまたは前接語の接合を念頭においている〕。1音節語の母音（または鼻音的二重音）の内部の高まりは鋭アクセントの記号（′）で示し（$k^{w}$á 桑)，下降は鈍アクセントの記号（`）で示す（k^{w}à 鍬)。

1. 舌切り雀の話
2. 花咲爺
3. こぶとり爺の話
4. 猿蟹合戦
5. 桃太郎の話
6. 浦島太郎
7. 三重の子供
8. 十四日のもぐらうちの話
9. 鬼火（オンビ）の話
10. 五月五日の節句の話
11. 宗旨の話
12. 若者組の話
13. 結婚の話

ここでは，2. の『花咲爺』だけを示す。

hanasaka⌜ʒi: (花咲爺) (p. 5〜9)

1. muka⌞śi̥ a⌜ru toko⌞re: go:⌜gi: śo:ʒi⌜kka ʒi:⌞to m̥ba⌞ga ippuki⌜no im⌜ba ko:ćo⌜tta.

2. ko⌞ba motam⌜mon ʒai⌜keŋ so⌞no im⌜ba wagakonogo⌜to r'a: ⌜ʒi: çićo⌞tta.

3. aru⌜çi: so⌞no iŋ⌜ga ura⌜no hatake:⌜re hatta⌜i waŋ⌜waŋ hojui⌜moŋ ʒai⌜keŋ ʒi:⌞ga {itatemitai⌞ba / ita⌞te mitai⌜ba} i'na:śiki⌞ri: śiri ʷo⌜ba bu⌞tte han'a:⌞re ʒi-nawara⌜ba kuŋ⌞kuŋ kaʒuminaga⌞ra nakijoi⌞moŋ ʒai⌜keŋ ʒi:⌞wa φuśi⌞gi: omo:⌜te kʷa⌞ba {mo⌜tte ki⌜te / motteki⌜te} soko⌜ba {ho⌜tte mitai⌜ba / hottemitai⌜ba} {kʷa⌞no sa⌞ki: / kʷanosa⌞ki:} kaćika⌞ći guʒagu⌞ʒa ataimon⌞no ai⌜keŋ {hoir'a:temitai⌜ba / hoir'a:⌜te mitai⌜ba} o:ban⌜no koban⌜no ttè ʒakuʒa⌞ku reteki⌜ta.

4. ʒi:⌞wa φuttamaga⌞tte soi⌞ba kakiacume⌜te jen⌜ći: mo⌜tte kai⌜tte hatake⌜no ta⌜nottè jon'⌞n'u: ko:⌞te im⌜ba {śe⌞p'p'a: / śe⌞p'pa} kawaiga⌜tte o⌜tta.

5. soçitai⌞ba tonaino⌞je: konʒo:nowai⌞ka ʒi:⌞to m̥ba⌞to otte:⌞te koi ⌞ba ki:⌞te so⌜ke: ita⌞te im⌜ba katteki⌞te soçi⌞te {ʒibunnohata⌜ke: / ʒibun⌜no hata⌜ke:} {cureteita⌞te / cure⌞te ita⌞te} ju:jo:⌞n'a: in⌞roŋ in⌞roŋ ro:⌜ʒo i⌜tćo: oigai⌜no hatake:re ⌜mo takaramom⌜ba meçike⌜te kuren⌞no ttè ju:te⌞mo {in⌜na: / i⌜na:} {monʒato⌜mo / atćato⌜mo} śem⌞moŋ ʒai⌜keŋ haik'a:⌜te kᶣa:⌞re uttatᵋa:ta⌜iba śikatana⌜śi: han'a:⌞re kuŋ⌞kuŋ ju:⌞te nakir'a:⌞ta.

6. jokku:ʒi:⌜wa {taśi⌜k'a: / taśi⌜k'a} ko⌜ke: ai⌜to ʒa⌜ro: ttè omo:⌜te soko⌜ba kᶣa:⌞re {ho⌜tte mitai⌜ba / hottemitai⌜ba} garaga⌞ra kʷanosa⌞ki: atai⌞moŋ ʒai⌜keŋ {hoir'a:temitai⌜ba / hoir'a:⌜te mitai⌜ba} kawa⌜rato⌞ka {ćawannokagetokababakka⌜i / ćawan⌜no kagetokababakka⌞i} {rete kita / re⌜te kita} {⌜moŋ / ⌜moŋ} ʒai⌜keŋ go:⌜gi: haik'a:⌜te {to⌜:⌞to / to:⌞to:} so⌞no im⌜ba kᶣa:⌞re ućikore:⌜te

śimo:⌊ta.

7. {k'a:nuśinoʒi:⌈wa / k'a:nuśi⌈no ʒ́i:⌊wa} {tonainoʒ́i:⌊ga / tonai⌊no ʒ́i:⌊ga} i⌈kko im⌈ba kajasam⌈moŋ ʒ́ai ⌈keŋ {rogaŋçićoi⌊to / ro⌊gaŋ çićoi⌊to} ʒ́ai⌈ro: tté omo:⌈te tonaino⌊je: {itatemitai⌊ba / ita⌊te mitai⌈ba} in⌈na: oram⌊moŋ ʒ́ai⌈keŋ rogaŋçi⌊taka⌊no ttè ki:tai⌊ba ko:⌊ko: ‐ çi⌊te ućikore:⌈te śimo:⌊te macunokin⌈ne: m̥me⌊ta ttè ju:⌊moŋ ʒ́ai⌊keŋ {śo:ʒ́ik⌈ka ʒ́i:⌊wa / śo:ʒ́ikkaʒ́i:⌈wa} nakuna⌊ku jen⌈ci: kai⌈tte wagako⌈no sinrago⌊to boŋsa-ma⌈ba jacu:⌈te kujo:⌊ba çi⌊te in⌈no {śi:ćottamom⌈ba / śi:ćo⌈tta mom⌈ba} sonai⌈te {sono⌊baŋ / so⌊no bàŋ} nećottai⌊ba jonakago⌈re: {nattatokoi⌈ga / na⌈tta tokoi⌊ga} ime:⌈ni in⌈no reteki⌈te ju:-jo:⌊n'a: ʒ́i:⌊jaŋ ʒ́i:⌊jaŋ {oi⌊ga / waśi⌊ga} {m̥meraićoiniki⌊no / m̥meraićo⌊i niki⌊no} macunoki⌈ba ki⌈tte u⌈śi: cukuinaha⌈re⌊: ttè ju:ta⌊keŋ açi⌈tᵋa: na⌈tte in⌈no ju:tago⌊to so⌊no macunoki⌈ba ki⌈tte u⌈śi: çi⌊te sore:⌊re moći⌊ba ći:tai⌈ba ma⌊ta o:ban⌈no koban⌈nottè ʒakuʒa⌊ku retekita⌈moŋ ʒ́ai⌈keŋ go:⌈gi: joroku:⌈re ottai⌊ba tonainoʒ́i:⌊ga ma⌊ta jatteki⌊te kaśito:⌊wa nakattaba⌈tte śiki⌊ri: k'a:tekui-⌊rottè ju:⌊moŋ ʒ́ai⌈keŋ usu⌈ba {k'a:teja⌊tta. / k'a:⌊te ja⌊tta.}

8. tonainoʒ́i:⌊wa usu⌈ba {katteita⌊te / ka⌊tte ita⌊te} m̥ba⌊to φutᵋai:⌊re moći⌊ba ći:temitai⌈ba ʒ́e⌈n'a: re⌈ʒ́i: ma⌊ta ćawannokage⌈no kawara⌈nottè gʷaragʷa-⌊ra reta⌈moŋ ʒ́ai⌈keŋ go:⌈gi: haik'a:⌈te so⌊no usu⌈ba ki:wa⌈tte ʒ́i⌊re: ku-be⌊te moja:⌊te śimo:⌊ta.

9. śo:ʒ́i⌈kka ʒ́i:⌊wa tonai⌊no jokku:ʒ́i:⌈ga ma⌊ta usu⌈ba kaisam⌈moŋ ʒ́ai⌈keŋ ro⌊gaŋ çita⌊to ʒ́ai⌈ro:ttè omo:⌈te ita⌊te mitai⌈ba cummoja:⌊te śimo:ćoi⌊moŋ ʒ́ai⌈keŋ bikku⌈i çi⌊te nakuna⌊ku jen⌈ći: kai⌈tta.

10. soçitai⌊ba a⌈ru bàŋ ma⌊ta iŋ⌈ga ime:⌈ni reteki⌈te ju:jo:⌊n'a: oʒ́i:⌊jaŋ mojasai⌊ta {usu⌈no ça:⌊ba / usunoça:⌈ba} tonainojeka⌊ra tottekinaha⌈re⌊: soçi⌊te soi⌊ba kare⌊ki: m'a:⌈te minaha⌈re⌊: sośere:⌊ba b'a:⌈r'a: hana⌈no sakukeŋ⌈ka ttè ju:ta⌊moŋ ʒ́ai⌈keŋ akui⌊çi: tona⌊i: ita⌊te ça:⌊ba moro̤:teki⌊te ma⌊ʒu

kare└ta saku└r'a: {φuikaketemitai└ba / φuikake└te mitai┌ba} ʒugome┌no re┌te hana┌no śa:┌ta.

11. soikeŋ└ka ʒ́i:└wa ko└no φuśigi└ba mi┌te ça:└ba koga└i: ire└te kare└ta kí: hana┌ba saka┌śe ju┌i ttè ju:└te ho:bo:└ba mawa└tte sari:└ta.

12. soçitai└ba toŋsama┌ga koi└ba ki:└te φuśi└gi: omo:┌te ʒ́i:ntoko└re: cuk'a:└ba ja└tte ʒ́i:└ba jo:└ra.

13. ʒ́i:└wa toŋsamantoko┌re: ita└te oniwa┌no kare└ta m̥me└to saku└r'a: mi:└na hana┌ba sakaçi┌ta.

14. toŋsa┌ma: go:┌gi: joroku:┌re ʒ́en┌no oimon└nottè jon'└n'u: kui└te kaja:┌ta.

15. tonai└no jokku:ʒ́i:┌wa ma└ta koi└ba ki:└te nokotćo┌tta ça:└ba kakiacume┌te koga└i: ire└te {tonai└no ʒ́i:nogo└to / tonainoʒ́i:nogo└to} ju:└te ʒ́o:└k'a: i└ta.

16. toŋsamaka┌ra jobirasai└te i┌tćo: omai┌mo jattemi└ro ttè iwaita└moŋ ʒ́ai┌keŋ kí: nobo└tte ça:└ba m'a:tai┌ba ha┌na: {sakaʒ́i:otte:┌te / saka┌ʒ́i: otte:└te} toŋsama ┌no meku┌ći: ça:tta┌moŋ ʒ́ai┌keŋ ker'a:└ga koi└ba mi┌te {φutcukamai└te / çitcuk^{ɐ}mai└te} haŋgoro┌śi: uttat^{e}a:┌te {to:└to / to┌:└to:} ro:┌ja: irerai└ta tćù.

1. 昔，あるところに，ごーぎー（たいへん）正直ヵ（な）爺と婆が一匹の犬ば（を）飼っていた。

2. 子ば（を）持たんものだから，其の犬ば（を）我が子のごとく，大事にしていた。

3. ある日，その犬が裏の畑で掘ったりワンワン吠えるもんだから，爺が行ってみると，犬はしきりに尻をば振って鼻で地ナワラば（を）クンクン嗅ぎながら啼き居るもんだから，爺は不思議に思って鍬ば（を）持って来てそこば（を）掘ってみると，鍬の先にカチカチグザグザ当たるものがあるので掘りあってみると，大判の小判のってザクザク出て来た。

4. 爺はふったまげて其れば（を）かき集めて家んちに持って帰って畑の田のって（畑や田を）よんにゅー（たくさん）買うて，犬ば（を）せっぴゃー（たいへん？）可愛いがって居った。

5. そしたらば，隣の家に根性の悪ヵ（悪い）爺と婆とおってーて，これば（を）聞いて，其処へ来て犬ば（を）借りて来て，そして自分の畑に連れて行って言うようにゃ：「犬殿（インドン），犬殿，どうぞ，いっちょう俺がいの畑でも宝物ば（を）見つけてくれんの」って言うても，犬は，もんざとも（あっちゃとも）せんもんだから，腹かいて（腹をたてて）鍬で打ったので，仕方なしに鼻でクンクン言うて，なきだした。

6. 悪い爺は「たしか此処にあるのじゃろう」って思うて其処ば（を）鍬で掘ってみると，ガラガラ鍬の先に当たるものだから掘り当ててみると，瓦とか茶碗のかげとかばっかり出て来たものだから，ごーぎー（たいへん）腹かいて（腹をたてて）とうとうその犬ば（を）鍬でうち殺してしもうた。

7. 飼い主の爺は隣の爺がいっこう犬ば（を）かえさんものだから，どのようにしているだろうと思うて隣の家に行ってみると，犬は居らんものだから，「どうしたの」って聞いたところ，「こうこうしてうち殺してしもうて，松の木の根に埋めた」って言うものだから正直ヵ（な）爺は泣く泣く家の内へ帰って，我が子の死んだごと，坊様ば（を）雇うて供養ば（を）して，犬の好いていた物ば（を）供えて，その晩寝ていると，夜中ごろになったところが，夢に犬の出て来て言うようには：「爺やん，爺やん，俺が埋められているそばの（ソメライチョイニキノ）松の木ば（を）切って臼をつくりなさい」って言ったので翌朝（アシタ）になって，犬の言うたごと，その松の木ば（を）切って臼にして，それで餅ば（を）つくと，また大判の小判のってザクザク出て来たものだから，ごーぎー（たいへん）喜んで居ると，隣の爺がまたやってきて，貸したくはなかったが，しきりに貸してくれって言うものだから，臼ば（を）貸してやった。

8. 隣の爺は臼ば（を）借りて来て，婆と二人で餅ば（を）ついてみると，銭は出ず，また茶碗のかげの，瓦のってガラガラ出たもんだからごーぎー（たいへん）腹かいて（腹をたてて），その臼ば（を）切り割ってかまど（じろ）にくべて燃やしてしもうた。

9. 正直ヵ（な）爺は隣の悪い爺がまた臼ば（を）かえさんものだから，どうしたのだろうと思うて，行ってみると燃やしてしもうたものだから，びっくりして泣く泣く家の内に帰った。

10. そうすると，ある晩，また犬が夢に出て来て言うようには：「お爺や

ん，燃やされた臼の灰ば（を）隣の家から取って来なさい。そして，それを枯れ木にまいてみなさい。そうすれば，ビャーリャー花の咲くだろう」って言うたものだから，あくる日に隣に行って灰ば（を）もろうて来て，まず枯れた桜にふりかけて見ると，ズゴ芽の出て花の咲いた。

11. そこで爺はこの不思議ば（を）みて，灰ば（を）小桶（コガイ）に入れて「枯れた木に花ば（を）咲かせゆい（咲かせることができる）」って方々ば（を）まわってさるいた（歩いた）。

12. そうすると，殿様がこれば（を）聞いて，不思議に思うて，爺んところへ使者（ツカイ）ば（を）やって，爺ば（を）呼んだ。

13. 爺は殿様んところへ行って，お庭の枯れた梅と桜にみんな花を咲かせた。

14. 殿様はごーぎー喜んで銭の，織物のって，よんにゅー（たくさん）くれて，帰してやった。

15. 隣の悪い爺はまたこれば（を）聞いて，残っていた灰ば（を）かきあつめて小桶に入れて隣の爺のごと言うて城下に行った。

16. 殿様から呼び出されて，「いっちょう，お前もやってみろ」って言われたもんだから，木にのぼって，灰ば（を）まいたところ，花は咲かず殿様の目口に入ったもんだから，家来がこれば（を）見て，ひっつかまえて半殺しに打って，とうとう牢屋に入れられたという。

原　注

(1) 何らかの有声音断片の最初のピリオド，および最後のピリオドの振幅が常に非常に小さくありがちであることを述べておかなければならない（これらのピリオドは無声の諸要素——声帯の静止状態——に対応する直線に近い）。だから，終わりの方のピリオドのグループ（振幅がゼロにまでおちる）で私は振幅の数字を〔　〕で示さない。しかし計算の部分で私は終わりの方のピリオド・グループを……で示す。このピリオド・グループでは振幅（音声の強さに応ずる）が次第に消え，ピリオドの長さはきわめて急速に増大する（これは音調のはげしい低下に対応する。音調は耳では聞きとれないくらい弱まっている）。

(2) 「葉̂」と「歯̂」は長崎と東京で区別される（また琉球では子音のちがいで区別される。φa: 葉，ha: 歯）が，土佐と京都では区別がない。

(3)　京都 ┌e:┐, 土佐 e(┌ega┐ 柄が), 東京 └e ($\overline{\text{eŋa}}$ 柄が)。語頭の *e は長崎で je（従って，たとえば *we 絵→ *e →長崎 ┌je は長崎 ┌je ← *i(p)e 家と合流する)。

(4)　声がおびただしく下がることは疑わしいと思われるかもしれない。しかし，実際にそれは曲線末において（下降声調をしるす曲線において）全くまれではない。振幅は激減する（これはこのおびただしい音調下降が**すでに聞こえない**ことを示している)。cf. ア・ペ・アベルの類似の観察。「ラトビア語のアクセントのある単純母音のアクセント」,「科学アカデミー・ロシア語部報告」1915，20巻第２冊，p.188。「私の記録の中のいくつかの曲線では振幅の減少につれてピリオドの長さが最小のものにたいし３倍，いな４倍にさえ増大する。そこでこれらの曲線の立証によると音調は４オクターブ（？）も下がる」。

(5)　（尻低語(バリトン)の）第１音節の最高の高さが第２音節の最初の部分の最高の高さにほぼ等しい曲線も手もとにあるが。

(6)　東京では「箸」は ┌haśi [┌haś], 京都では ha┌śi, 土佐では ha┌s′i。

(7)　ki└ku（聞ク）では母音uは無声化する ([u̥]) が，ha└śi では [i] は全く消える。なぜかといえば，狭い母音 i u がマサツ音（ここでは [ś]）の後に立つこと〔破擦音の後に立つばあいもおなじ〕はその完全な消滅を促す条件だからである（無声子音と隣接しているとか，この場合のように無声子音の後に立ちしかも尻低語(バリトン)で語末に立つことがそれを促す)。

(8)　會 e とおなじく呉音。<*γwai（北京 xui̥）

(9)　最終音節内部の声のこの高まりは尻高型の特徴を強調しようとするときによく聞きとれる。たとえば，ha┌na 花と ha└na 鼻とを対比させるような場合に。

(10)　もしこれが標準語からの最新の借用でなくて，土着語の発展の形であるとするなら，aimasu, oimasu (*ri → r′ → i̥) となっていたはずである。

6.　日本語の2音節ステム形容詞のアクセント

〔村山。ロシア科学アカデミー報（フランス語名 Bulletin de l'Académie des Sciences de Russie）1917年に発表されたもの。1917年3月8日，科学アカデミー史学・言語学部の会議に学士院会員オルデンブルグより提出したもの。ポリワーノフが2音節ステム形容詞というのは赤・イ，白・イの類をさすので，日本ではイまでも含めて，3音節形容詞というのがふつうのようである。〕

モスクワの畏友 N. A セロミャトニコフ氏に依頼し本年2月21日コピーを入手した。

日本語のもろもろの形容詞ステムのあいだのアクセントのちがいは多くの方言にとって，形容詞を二つの活用タイプに分かつきわめて重要な形態論的徴候である。形容詞は大部分の形のアクセントで区別される。最も頻繁な2音節ステム形容詞だけにかぎって，両方の型の次の例をあげよう。

東京方言(1)

I型。ステム aka-「赤」，ステム acu-「厚」

$\overline{\text{akai}}$ 赤イ	$\overline{\text{acui}}$ 厚イ
$\overline{\text{akaku}}$ 赤ク	$\overline{\text{acuku}}$ 厚ク
a⌈kakatta 赤カッタ	a⌈cukatta または ac⌈katta 厚カッタ
a⌈kakereba 赤ケレバ	a⌈cukereba または ac⌈kereba

II型。ステム śiro-「白」，ステム acu-「暑」

śi⌈roi 白イ	a⌈cui 暑イ
⌈śiroku 白ク	⌈acuku 暑ク
⌈śirokatta 白カッタ	⌈acukatta 暑カッタ
⌈śirokereba 白ケレバ	⌈acukereba 暑ケレバ

長崎（三重村）方言[2]

I型。ステム ak-「赤」	II型。ステム śiro-「白」
a⌈kka 赤イ	śiro⌈ka 白イ
a⌈ko: 赤ク	śi⌈ro: 白ク
akka⌊tta 赤カッタ	śiroka⌈tta 白カッタ
akkai⌊ba 赤ケレバ	śirokai⌈ba 白ケレバ

土 佐 方 言[3]

I型。ステム aka-「赤」	ステム atu-「厚」
⌈aka⌉⌊i 赤イ	⌈atu⌉⌊i 厚イ
⌈ako⌉⌊: 赤ク	⌈atu⌉⌊: 厚ク
⌈aka⌉⌊katta 赤カッタ	⌈atu⌉⌊katta 厚カッタ
⌈aka⌉⌊ker'a 赤ケレバ	⌈atu⌉⌊ker'a 厚ケレバ
II型。ステム śiro-「白」	ステム atu-「暑」
⌈śi⌊roi 白イ	⌈a⌊tui 暑イ
śi⌈ro⌊: 白ク	a⌈tu⌊: 暑ク
śi⌈ro⌊katta 白カッタ	a⌈tu⌊katta 暑カッタ
śi⌈ro⌊ker'a 白ケレバ	a⌈tu⌊ker'a 暑ケレバ

これらの三つの方言間のこうした対応を歴史的に説明するためには，次の点を考慮する必要がある。それは，一般に，日本語のアクセントの諸事実は大部分のばあい，出発点として土佐方言の事実をとれば説明できると思われることである。土佐方言のアクセント体系（および四国に近い本土の諸方言のアクセント体系）は東方言および京都方言の体系より疑いもなく古風で，多くの点で共通日本語のアクセント体系と同一視できる。このように考えて，私は上にあげた諸々の形の祖形を次のように考える。

I型。ステム *⌈aka⌉- 赤	ステム *⌈atu⌉- 厚
*⌈aka⌉⌊i または *⌈aka⌉⌊ka	*⌈atu⌉⌊i
*⌈aka⌉⌊ku または *⌈aka⌉⌊u	*⌈atu⌉⌊ku, *⌈atu⌉⌊u

*⌈aka⌉⌊k(u)+atta<*arita	*⌈atu⌉⌊katta
*⌈aka⌉⌊k(u)+areba (ここから東京方言 a⌈kakereba, 長崎方言akkai⌊ba) または arepa (ここから土佐方言 ⌈aka⌉⌊ker'a)	*⌈atu⌉⌊ku+areba, arepa

Ⅱ型。ステム *⌈si⌊ro-/si⌈ro- 白　ステム *⌈a⌊tu-/a⌈tu- 暑

*⌈si⌊roi または *⌈si⌊roka	*⌈a⌊tui
*si⌈ro⌊ku, *si⌈ro⌊u	*a⌈tu⌊ku
*si⌈ro⌊k(u)+atta	*a⌈tu⌊k(u)+atta
*si⌈ro⌊k(u)+areba, arepa	*a⌈tu⌊k(u)+areba, arepa

この祖形から東京および長崎のアクセントを説明することは，これらの方言におけるアクセントの歴史のノーマルな原則から見て困難はない。

Ⅱ

この二つの型の区別がない諸方言の事実を説明することが残されている。たとえば熊本県において有力な諸方言のように一定の場所にアクセントのある方言ではもちろん説明に困難はない。京都方言では事情がちがう。京都方言では，古い複雑なアクセント体系がほぼ完全に保存されているにもかかわらず，上記の型の形容詞が合流したのである。２音節ステム形容詞の一様なアクセントは京都方言では次のようになっている。

京都方言

ステム aka- 赤	ステム śiro- 白	ステム acu-⌋厚，暑
⌈a⌊kai 赤イ	⌈śi⌊roi 白イ	⌈a⌊cui 厚イ，暑イ
⌈a⌊ko:またはa⌈ko⌊: 赤ク	⌈śi⌊ro:またはśi⌈ro⌊: 白ク	⌈a⌊cu: または a⌈cu⌊: 厚ク，暑ク
a⌈ka⌊katta 赤カッタ	śi⌈ro⌊katta 白カッタ	a⌈cu ⌊katta 厚・暑カッタ
a⌈ka⌊ker'a または aka⌈ke⌊r'a 赤ケレバ	śi⌈ro⌊ker'a または śiro⌈ke⌊r'a 白ケレバ	a⌈cu⌊ker'a または acu⌈ke⌊r'a 厚・暑ケレバ

二つの型がこのように合流したのは，述語・修飾語形〔村山。赤イ，白イ〕におけるアクセントが法則的に音声学的に合流したためとみなければならない。*┌aka┐└i のアクセントは┌śi└roi のアクセントに等くなってしまったのである。これは音声学的現象とみなす必要がある。なぜなら，最初の二つの音節が高まる代わりに第1音節だけが高まることは一般に京都方言の特徴だからである。3音節名詞を土佐方言とくらべてみると，このような変化がハッキリする。

土佐	京都
┌nama┐└du 鯰	┌na└maʒu
┌naka┐└ma 仲間	┌na└kama
┌ama┐└ri 余り	┌a└mari(4)
┌ata┐└ma 頭	┌a└tama
┌omo┐└te 表	┌o└mote

このようなステムは全部，京都では，もともと第1音節だけが高い次のようなステムと合流した。

土佐	京都
┌a└bura, ┌a└mura 油	┌a└bura
┌na└mida 涙	┌na└mida

かくて，二つの音声観念（♩ ♩ ♩ というメロディー観念と ♩ ♩ ♩ というメロディー観念）の混同にもとづいて音声単純化が起こったのである。しかし京都方言で ♩ ♩ ♩ 型が完全に除かれたわけでない。この型は，形態論的な条件によって，必要な場合には ♩ ♩ ♩ との原則的なちがいを保持したのである。たとえば，平板調のステムに -└na がついてできる修飾語はそのメロディーを保った。たとえば，┌mame┐└na（丈夫な），┌ija┐└na（嫌な）。なぜなら，一方ではステムの原則的なメロディー特性（┌mame┐，┌ija┐）によって要求され（たとえば┌mame┐からの┌mamede┐やそれに類した形はステム内部の平板調の観念を支えた），他方では，必ず低く発音する接尾辞 -└na の原則的なメロディー特性によって要求されたからである。

上にみたように，二つの型の修飾・述語形のアクセントの混同という音声学的事実から出発して，それぞれの副詞形〔村山。赤ク，白クの類〕のダブレット諸形を，混同——音声学的混同ではなく，形態論的混同——の結果とし

て説明することは困難でない。すなわち第1音節が高くなる形——「a˪ko:(赤ク),「śi˪ro:(白ク),「a˪cu:(厚・暑ク)[5]——は,「śi˪ro: および「a˪cu: 暑クが属する古いⅡアクセント型をうけついだものとみなす必要がある。第2音節第1モラが高まる形——a「ko˪:, śi「ro˪:, a「cu˪:——は a「ko˪: および a「cu˪: 厚クの属する古いⅠアクセント型をうけついだものである。

過去形〔村山。赤カッタの類〕および仮定法〔村山。赤ケレバの類〕や形容詞の他の活用諸形,たとえば推量法(a「ka˪karo, si「ro˪karo, a「cu˪karo〔厚・暑〕)やジェランド(「a˪ko:te または a「ko˪:te, 「śi˪ro:te または śi「ro˪:te, 「a˪cu:te または a「cu˪:te「赤クテなどなど」)についていえば,それらは割合,まれなため,形態論的一様化の過程において,明らかに受動的な役割を果たした(形容詞のおもな,すなわち最も頻繁な形は修飾・述語形であり,次いで副詞形であった)。

原　注

(1) 東京のアクセントは「東京方言における音楽的アクセント」で述べた方法で示す。つまり,高まりのある音節の前に「 印をおく。アクセントのない語(全平語)はそれぞれの語の上に水平線をひいて示す。

(2) この方言のアクセント区別は次のように示す。語末が下がる語(尻低語〔バリトン〕)では最終音節の前に ˪ をつける。語末が高くなる語(尻高語〔オクシトン〕)では最終音節の前に「をつける。

(3) 「 ┐の中の音節は高く発音される。˪ という印はそれにつづく諸音節が低く発音されることを示す。

(4) 土佐,京都方言で平板に発音される副詞 a(m)mari「あんまり」と混同してはならない。

(5) これらのダブレットは別の種類のダブレットより多く用いられるようだ。

7. 日本語の音楽的アクセントに関する研究について

(マライ諸語との関連において)

〔村山。この論文は「第1中央アジア国立大学紀要」(タシケント, 1924年, No. 4, pp. 101〜108) に発表された。訳者の手許には原文101〜106ページの写真コピーとタイプライターで打った残りがある。『ポリワーノフ一般言語学論集』(モスクワ, 1968年) にはこの論文がおさめられている (pp. 146〜155) が, すこし誤植もある。

この論文の要約が: E. D. Polivanov. Sur le travail concernant les systèmes de l'accent musical dans la langue japonaise (et sur le rapport du japonais avec les langues malaises) (中央アジア国立大学紀要1925年, No. 8 pp. 119〜125) である。ポリワーノフはそのことを明言している。

ポリワーノフがマライ諸語というときは, マライ・ポリネシア諸語の意味をもつ。〕

この小論文は「中央アジア国立大学〔タシケント〕論文集」に発表予定の拙論「日本語のアクセント体系」の暫定予備報告といったものである。上記拙論ではちょうど10年前, 1914年に日本で行なった私の心理音声学的な観察の結果を発表する予定である。この10年間に蒐集資料の一部を次の形ですでに発表した。

「(東日本語の見本としての) 東京方言における音楽的アクセント」。科学アカデミー通報 (1915年) 〔村山。第4シリーズ, 第9巻, 1915年, No. 15, pp. 1617〜1638〕

「日本語諸方言に関する心理音声学的観察」。ペトログラード1917年。〔村山。 I 長崎県西彼杵郡三重村の方言。 II 京都方言における音楽的アクセント。113p.〕そこでは, 或る南日本語方言〔村山。三重村方言〕完の全な記述を示してある。

上記方言のテクスト (「日本方言学資料」〔村山。長崎県西彼杵郡三重村方言。

テクストと翻訳。ZVORAO，第23巻，I—II集。ペトログラード，1915年，pp. 167—201〕)

蒐集資料の史的音声学的研究もいくらか次のものに発表した。「日本語形容詞のアクセント」，科学アカデミー通報，1916年〔村山。「日本語の2音節幹形容詞のアクセント」，ロシア科学アカデミー通報，第6シリーズ，第11巻，1917年，No. 12～18, pp. 1089～1093〕および「日本語・マレイ語類似点のひとつ」，同上，1918年〔ロシア科学アカデミー通報，第6シリーズ，第12巻，No. 18, pp. 2283～2284〕。またモスクワの東洋学研究所から発行される「日本語音声学」の中でも。〔村山。なお前記のフランス語論文，p. 118によると，「熊本方言および土佐方言のわずかのテクストがV. V. ラドロフ記念民族学論集，レニングラード1917年にのっている」とある。1918年が正しい。「日本のなぞなぞの形式タイプ」がそれ。〕

しかし，全体としてみて，蒐集し，比較的・歴史的に研究した資料の小部分を発表しただけである(1)。

出版事情が変わったため，多数の記述資料のはじめの大きな出版計画をちぢめ，その代わりそれらの結論だけを出版せねばならなくなった。日本語研究（言いかえれば日本方言学）のいくつかの問題を記述的に，また歴史的に総括して取り扱ってみたい。さて，その新しさからいって，最も重要な問題は，私の発見した日本語の音楽的アクセントである。音楽的アクセントは日本語の各方言（および他方，マライ—タガログ語）において，さまざまな，時にはきわめて複雑な体系の形をとっている。

アクセントは日本語音声学の最も困難な，より正しく言うならば，ただひとつの困難な問題である。ヨーロッパの研究者にとって，とくにアクセント区別を知覚すること自体がむずかしい。このアクセント区別はわれわれ〔村山．ヨーロッパ人〕の音声観念と非常にちがっているので，はじめのころ私はほとんどもっぱらインフォーマントの自己観察（内観）から出発せねばならなかった。アクセントの呼気的な，また量的な徴候に慣れてきた研究者たちの主観的な規準は，音楽的にきわだった音節という概念には適用できないことを指摘するだけで充分である。しかし，それだけではない。一連の場合に，ひとつの音節が強調されるのでなく，語はより複雑なメロディー特性をもつ。たとえば，土佐のアクセント型 ⌈ ⌈ ⌈　　⌈ ⌈ ⌈　　⌈ ⌈ ⌈

の区別は，これらの例におけるアクセントの原則的なちがいをインフォーマントが指摘しなかったなら，観察者は確認できないであろう(2)。おなじように，長崎型の語メロディーにたいして，アクセントのある音節（または音楽的にきわだった音節）という概念は適用できない。また京都方言特有の短音節内部の下降的上昇を発見することも主観的知覚ではできなかったであろう。要するに，音声学的研究にとって心理音声学的前提が必要であること，またインフォーマントの自己観察(内観)という形で主観的方法を用いる必要があることが，すばらしくよく確認されたわけである。そこで私はインフォーマントに自己を観察することを教え，とくに問題となる語に入っているすべての他の観念からアクセント観念を分離することを教えなければならなかった。まず音構成の他の点で少しもちがわない何らかの二つの語におけるアクセントのちがいをインフォーマントに意識させなければならなかった。ちょうど，アクセントというものについて聞いたこともないロシア人に，ра́са(ラサ)〔人種〕と роса́(ラサ)〔村山。つゆ。アーカニエ方言では，アクセントの点を除けば раса(ラサ)「人種」と区別されない〕とは，どこがちがうかと質問するようなものである。たいていの場合，私はこのような疑似ホモニムから出発した。というのはこれらの疑似ホモニムをつかって，社会的に通用する区別が実在するのかどうかをたやすく検討する方法が可能だったからである。その検討方法というのは二人のインフォーマントにお互に言わせてみることである。それから先が容易でなかった。インフォーマントに所与の区別を抽出させ，その関係を他の二つの例に及ぼさせることが必要であった。たとえば，

朝　麻　海　膿　秋　足

「asa : a「sa＝「umi : u「mi＝「aki : a「si

（ここでは東京の語をあげた）の関係を得ることが必要であった。

これをしているうちにふつう，その人物を使ってその先も研究をすすめて行くことが有益かどうか，私には明らかとなるのであった。長くかかってやっと区別を明らかにすることができたことも，しばしばだった。この区別が語の偶然的な区別とからみあっていることも，しばしばだった。たとえば，私の「教師たち」（インフォーマント）の一人はその方言の２音節語を「アクセント」によって三つの型でなくて四つの型に分けた。(1)第１音節にアクセントがある。(2)第２音節にアクセントがある。(3)アクセントがない。(4)第１音節が鼻音に終わる語。(4)には前の三つの型の語が入った（この点だけは

誤りだった。もしこの型が三つに分かれるとしたなら，私にとって必要な結果は達成されたろう）。

インフォーマントのあげるすべての型が実際に区別されているのかどうか，という問題はたえず検討しなければならない。それを検討する主な手段は私自身の耳であった。インフォーマントの音声意識を利用するという根本方法と，この検討とを総合して次の規則にまとめることができるであろう。私だけに聞こえるものは（音声観念のもろもろのニュアンスが問題となるのでないかぎり〔村山。音声観念のニュアンス＝音素のバリアント〕）何も記録しないこと。また私に聞こえないものは何も記録しない，というのがその規則である。ここでは，研究者の耳というような主観的規準を選ぶのはいけないという非難を受けるおそれはない。二つの特に選び出した例から音声区別をとらえ，次いで他の例でもそれをとらえるのを学ぶことは，自然のスピーチの流れの中で所与の音声契機をこっそり主観的にながめるのとはまったくちがう。さらにさまざまな方法で客観的に検討するのがたいへん都合がよい。インフォーマントが忘れてしまった語材料またはテクストをくりかえし観察するとか，同じ方言を話す他の人たちにたずねるとか。ともかく所与の型が嘘でなく，インフォーマントの空想でないことを確信することは困難でない。その代わり，所与の諸型が，方言に存在する区別の全部であると言いきることははるかにむずかしい。アクセントだけちがう疑似ホモニムがすべて型を明らかにするのに充分でないかもしれない。しかしインフォーマントがかなりの語材料をたやすく，（かなり間をおいてくり返すとき）不変に完全に分類できるときは，可能な型は尽きているとみてよい。しかしインフォーマントが同一の語をどの型に属させるかについて迷っているとき，型が不足している証拠である。土佐方言(3)を研究したときがそうであった。このとき私はインフォーマントとともに3音節語を，⌈ ⌈ ⌈　⌈ ⌈ ⌈　⌈ ⌈ ⌈ にだけ分けた。

そして ⌈ ⌈ ⌈ と ⌈ ⌈ ⌈ が存在することを知らなかった。たとえば「kasi˥˪ja（菓子屋）を私は ⌈ ⌈ ⌈ と考えていた。私の弟子のOr. プレトネルは ⌈ ⌈ ⌈ と考えていた。インフォーマントは ⌈ ⌈ ⌈ と似ているが，それとちがうといい，「kasija˥（貸家）と対比して，このちがいを私に聞きわけさせ，再現させたのであった。

日本語アクセントの研究上の第2の困難は方言によってアクセントがちがうことであり，そのために，異なった地域の偶然的な話し手によって研究すること（標準口語，すなわち東京語の語彙と文法を用いたからといって東京のアクセントを用いているとは限らない）はきわめて混乱した，矛盾に満ちた光景を生み出すだろう。所与の体系の正確な方言的区画をしないで，「日本語アクセント」を記述することは全く問題とならないし，また各地域特有の体系を知った後にはじめて歴史的音声学的構成が可能となるのである。

日本語の行なわれる地域の多くの地点を知って，次のことが明らかとなった。

(1) 純音楽的アクセントの最も古風な複雑な体系はいわゆる「西」諸方言にみられる。詳しくしらべた「西」諸方言の代表は京都方言と土佐方言[4]である。

(2) 東（および東北）諸方言は原始日本語体系（多くの点で西日本語体系と同一とみられる）を著しく単純化したものであり，幾多の改新をともなっている（高まりの場所が移った。呼気・強さ契機を利用する）。これはすべての東日本方言の特徴である。このグループの最も重要な代表はもちろん東京方言である。

(3) 南諸方言はアクセント区別の最高度の無差別化を表わす。その極端なのが南九州（熊本）で，アクセントの場所と性質がコンスタントである。その前段階が長崎の二元体系である（語の音節がどんな数でも尻低型（バリトン）か尻高型（オクシトン）である）。

日本語およびマライ諸語の純音楽的アクセント（シナ語，チベット語，安南語が音節アクセントであるのとちがって，語アクセント）の，これまで誰も確認したことのない，きわめてさまざまな，そして上述したように観察しにくい体系はとくに一般言語学，言語学全体にとって重要である。というのは，その記述は全く独特な事実領域の発見であるから。これらの事実はすでに研究された他の諸言語の大部分にみられない事実であり，一般アクセント理論（一般言語学の一部）に新しい立論をもたらす。音楽的アクセントの記述はまさにこれらの事実を土台とするであろう。なぜなら，知られている諸言語のうち，日本語（およびマライ諸語）の事実は純音楽的アクセントのサンプルを提供するからである。純音楽的アクセントについては，今日まで，

生きた言語のうちから確実な例もなく一般言語学概論で論じられてきたのである（これまではリスアニア語，ラトヴィア語，時にはスウェーデン語，セルビア語，シナ語がひきあいに出された。アフリカ諸語の事実は正確に記述されていない。しかしアフリカのバントゥ語を除いてこれらすべての言語においてアクセントは純音楽的なものでなく，音楽的・呼気的アクセントである。たとえばシナ語においても，おそらくアクセント現象はセルビア語に劣らないくらい日本語，とくに西日本語とちがっている。西日本諸方言と，他方ではマライ語こそ，強さアクセントがまじらない純粋の音楽的アクセントのサンプルなのだ）。

つまり，上記の日本語の事実を確認したことは（質的にみて）植物学または動物学の新種の発見に比較できる。量的にみると動物の新種の発見以上である。新しい広い事実分野が記述されるのであって，これは迷路呼吸生物の綱(クラス)の発見に比較できよう。

観察された日本語・マライ語の諸事実から一般言語学につづいて史的言語学も結論をひき出す。まさに，日本語の音楽的アクセントとマライ語（およびおそらくマライ・ポリネシア語）[5]のアクセントとの類似（復元される最古の状態，「先日本語」の状態では，〔村山。マライ諸語と〕ほとんど同一）は，日本語をマライ・ポリネシア諸語と同源とみる上の重要点のひとつとなる。従って，近い将来の「日本・マライポリネシア語族比較文法」にとっての重要点のひとつとなる。もちろん，これは両方の言語領域，すなわち一方では日本語，琉球語およびアイヌ語内の日本語要素と，他方マライポリネシア（オーストロネシア）要素との間の一定の音韻対応にもとづく具体的な語源学的（語彙及び形態論上の）並行現象によって裏付けなければならない[6]。

私が（自分の集めた日本語の方言学的諸事実を史的音声学的に研究した後で）なしうる歴史的結論は，「日本語はマライ諸語のひとつである」というのではないが，それに近い。日本語はマライ・ポリネシア諸語と同系であり，言語諸事実の一部はマライ・ポリネシア諸語（オーストロネシア諸語）と共通の源泉からうけついだものであることを証明できるとおもう。しかし，大きなちがいもある。というのは日本語は起源上，雑種(ヘイブリド)であり，南方的——南島的，オーストロネシア的要素と西の，大陸的な，朝鮮語（および他の東アジアの大陸の「アルタイ的」諸言語）と共通の要素との混合物(アマルガム)であるから。

日本語の二つの史的音韻法則を対比して，これを説明しよう。これらの法則は音節形成の機能をもつ鼻音の歴史に関するもので，そのひとつは日本語・朝鮮語対応から結論され，もうひとつは日本語・マライ語対応から結論される。

① 先日本語の語末の m は先史時代に消え，その前に立つところのアクセントのある母音の特殊な「下降」調に痕跡をとどめている。この「下降」調を私は母音字の上に ^ という記号をつけて示す。

朝鮮語 turum〔村山。正しくは turumi。ただし方言には turum もある。〕||日本語 *turum>*turû> 京都 curû「鶴」

朝鮮語 ačam〔村山。正しくは ač'ɐm〕||日本語 *asam>asâ＝京都 asâ「朝」

② 共通日本語の語頭の音節形成的 m，すなわち m̥ は南日本方言で o，東日本方言で u となった。

*m̥saŋi>長崎 osagi 兎

東京 usaŋi

元復される *m̥saŋi はマライ語 musaŋ「じゃこう猫」(Paradoxurus hermaphrodytus)〔村山。タガログ語 musaŋ「野生猫」〕と比較できる。後者はルソン島では兎のありふれた等価物である。

かくて，私が日本語とマライ語で見つけた語アクセント（シナ語や安南語における音節アクセントに非ず）は，日本語がオーストロネシア言語要素をまじえた雑種的起源の言語であるという論拠のひとつである。言語の一般的な音声・形態論的特徴（いわゆる構造）の類似はこれらの言語の同系性の指針となりうるのであるから，上の論拠はそれ自体として意義をもつ(7)。また所与の諸言語の比較音声学の土台をなす音韻対応（いわゆる音韻法則）の一部としても意義をもっている。たとえば，共通日本語および西日本語における上昇調 ki「：，京都 ki「：「木」とマライ（タガログ）語における上昇調 ka「ju の対応を指摘しておきたい。日本語と琉球語の ki：はまさにka「ju>kai〔kai, gai＝ˀgai はオーストロネシア諸語にみえる〕にさかのぼる。マライ語と共通日本語において同一の場所が上昇する（東京語では上昇の場所はすでに変化した）のはほかにも例がある。

最後に，一般言語学的興味のほかに，日本語アクセントの研究はもちろん日本学者にとっては，日本語研究の重要部分として特別な意義をもっている。

言語のあますところのない充分な音声学的記述が実際に有益であることは誰しも認めると思う。ヨーロッパ人たち，日本語の教授・教師たちが日本語のアクセントについて何もいえなかったのは，まことに遺憾なことであった（日本語の音楽的アクセントが，ヨーロッパ的音声習慣をもつ人には直接観察できないためである。実験記録だけの助けでも洞察できない。特殊な，鋭い，洗練された研究方法を必要とする）。日本語参考書はアクセント問題で言うことが互に矛盾しており，また良識に反していた。英国人エドワーズという日本音声学の「専門家」でもアクセントの記述の代わりに完全な空白がみられた(8)。「日本口語音声学論文」Essai de la phonétique de la langue japonaise parlée〔村山。Étude phonétique de la langue japonaise 日本語の音声学的研究のことと思う〕において，asa「朝」と asa「麻」のような同じような音声の語（疑似ホモニム）を区別するために日本人はアクセントにうったえると述べ，このようないくつかの例における東京のアクセントの場所を示すだけである〔村山。エドワーズ，邦訳，p. 124 以下〕。ひとり，才能のある実験音声学者マイアーだけが，その小論文（≪Le Monde Oriental≫誌，1906年に発表）〔村山。E. A. Meyer : Der musikalische Wortakzent im Japanischen. Le Monde Oriental, Vol. 1. Fac. 1, Uppsala 1906年，pp. 77～86. 本書 1～10ページ〕において，日本語に音楽的アクセントがあることを立証した。マイアーは東京および京都のいくつかの単語の実験記録を研究したのであった(9)。

日本語研究家(ヤポニスト)たちは日本語のアクセントについては素人同様あまり知るところがなかった。日本語教育はこの問題をすどおりするか（「日本語にはアクセントが全くないのだ」と言ったり，すべての長い母音にアクセントをつけることをすすめたりした(10)）又はアクセント（どんな？　高さのアクセントか，強さのアクセントか？　この点が明らかにされなかった）のおき方に信じられないほどの混乱を導入した（D. M. ポズドネーフ『読本』，黒野義文(ロシブミ)の『日本語自習書』）。要するに，おそらく日本で育ったヨーロッパ人は別として，ひとりのヨーロッパ人も日本語を正しく（すなわちアクセントによって，日本語の語区別を全く正しくつたえること）話さない。ひとりとして，日本語の話を正しく聞くことができない。つまり，日本語にとって必要なアクセントによる語区別をとらえることができない。

「東京方言における音楽的アクセント」という拙論（科学アカデミー通報，

1915年）にあげてある或る日本の言語研究家の言葉を想い出そう。この人によると，日本語を話すすべてのヨーロッパ人は，おかしくてふき出したくなるような日本語を話す。アクセントがメチャメチャである。10年近く日本に住んでいてなおかつ自分が住んでいる町〔横浜〕を正しく発音できないのである。正しく jokohama（どの音節も平らな音調。または随意に最後の音節を高めて）と発音する代わりに joko⌈hana または ⌈joko⌈ha：ma と発言している。「はっきり言うなら，日本には joko⌈hama または ⌈joko⌈ha:ma はありません」とその日本人はいう(11)。

教育の実地の上からは（科学的研究は別！）（熊本，薩摩方言に次いで）困難の少ない標準的な東京語のアクセントを知ればよいだろうと言う人がいる。必ずしもそのとおりではあるまい。第一に，実用的にみても，標準方言の地域（換言すれば東日本語アクセント体系の地域。平均的に簡単になっているが，西方言のメロディーを保つ少数の移動単語を含む。東京方言体系はまさにそうしたものである）をハッキリ定める必要がある。実用上からも，標準方言の境界外でどんなアクセント事実があるのかを明らかにする必要がある。また東京方言が明らかに日本インテリゲンチャの統一的言語になりつつあるにもかかわらず，他の方言，他の大中心地の方言の実際上の重要性もうかびあがってくるかもしれない。日本の工業プロレタリアートの中心地・大阪がそれである（日本の労働者の革命が成長しつつあるところである）。大阪方言も付近の諸地方の範囲で，地方的小方言と戦いつつ，中心的な標準語（標準口語）となっている。しかもインテリゲンチャより広汎な大衆の標準語となっている(12)。そこで西日本語アクセント（言語学者にとって理論的にきわめて重要である）を知ることも実際上，明らかに無益ではない。

以上のような事態であるから，日本語アクセントを研究することは科学的に重要であるのみならず，実際上も重要である。

原 注

(1) 新文献学者協会言語学部と東洋学協会日本部において，日本語の史的文法と方言学について一連の報告を行なった（上記の言語学部における発表は詳しい議事録がある）し，またペトログラード大学で1915～1921年に日本方言学の講義を行なったことをあげておこう。

(2) Passy のアイヌ語アクセントの経験が示すように，ここでは実験記録は役立た

ないだろう（≪Revue Phonétique, 1907)。この実験では，さまざまのタイプに属するいくつかの語のメロディーが示されているが，分化 differentiation の事実そのものは指摘されていない。

(3) 私は京都方言より前に土佐方言をしらべた。そのため，まさに土佐方言で第一歩の，より大きな困難に出あった。

(4) 土佐方言は西諸方言のうちで最も東の〔村山。西のまちがいではなかろうか〕方言。四国の他の地方から山で切りはなされ，一方は太平洋に面し，この地方は非常に古い特殊性を保存した。そのため土佐方言は日本方言学の一種の「サンスクリット」である。

(5) 私自身はしたしく，マライ諸語のひとつ(タガログ語)を調べただけである。そしてタガログ語において(大体において)共通日本語のものに類似した音楽的アクセントを確認した。しかし，いくつかの文献資料(とくに，フェラン Ferrand の研究)からみて，他のマライ諸語にも，それどころかメラネシア・ポリネシア諸語にも音楽的アクセントがあると結論できる。メラネシア・ポリネシア語については，*opo>apu(afu)「大」のような語の第1音節と第2音節の母音 o がちがったものに変わったというような事実がまさに音楽的アクセントと関係しているとおもう〔村山。apu「大」という語はメラネシア諸語，ポリネシア諸語で実証されていないとおもう。ポリワーノフの誤解ではなかろうか〕。西日本語の「oL:「大」(<*「oLpo。琉球語 ufu「大」と日本文語のオホという書き表わし方を参照）は長い音節の第1モラが高く，第2モラが低く古代の共通日本語が「oLpo ♩ ♩ であったとみられる。ポリネシア語 opo もおなじようなアクセント（すなわち ♩ ♩ o po）をもっていたとみられ，まさにそのために，両方の o が分化したのかもしれない。opo>apu||afu 音調の高い第1の o はその特徴的なトーンを高め，それが a への移行となって現われ，（音節 po）の低い音調の第2の o もその特徴的なトーンを低めて，u となった（印欧語の母音交替（アプラウト）をパッシはこれとおなじような誘因で説明している)。

(6) 日本語の形態論的事実とマライ諸語のそれとの同源を仮定しなくては説明できない形態論上の並行現象のサンプルとなるのは，接頭辞 ma- とステムの不完全重複からなる強調形（日本語 ma-kkuro〔真黒〕||kuro〔黒〕，マライ系言語〔村山。タガログ語〕ma-saksakit/sakit「痛み」）である。このことについては「日本語・マライ語並行現象のひとつ」〔本書 153 ページ〕参照。

(7) （グルジア語およびその他の「ヤフェット」諸語とセム系言語とが同系であることを確立した）マルの発見〔村山。この説は定説とならなかった〕において，グルジア語とアラビア語との一般的音声・形態論的構造の類似（母音体系の類似，ことに「ルートの三子音構成」）がどんな役割を演じたかを想い出そう。他方，チベット・シナ諸語（いわゆるインドシナ諸語）は，（これらの言語の大部分において）形態素が1音

節であり，音楽的な音節アクセント（Sylbenakzent）がある。また朝鮮語が「アルタイ諸語」に属すことを証明するものとしては，接尾辞のつく語が多音節より成ること，アクセントが一定の場所にあり，二極的（第1音節と最終音節）であること（モンゴル語で語頭にアクセントがあり，トルコ語で語末にアクセントがあること参照。ただし両方の場合とも，機械的に解してはならない〔村山。アルタイ諸語のアクセントについては N. ポッペ，アルタイ諸語比較文法，pp. 143～147 参照〕），さらにまた過去の朝鮮語にたいして母音調和が復元できること，および母音調和と関連して母音体系が豊富であることをあげることができる。おなじように，日本語とオーストロネシア（南島）語とが近い関係にあるとみるうえに，次の外部的類似点をあげることができる。

① 語彙形態素の典型は2音節であり（kata, naka など），形式的形態素は一音節である。

② 日本語にいくつかの接頭辞があること（アルタイ諸語は接尾辞のみであって，この点，日本語はアルタイ諸語とちがう）。これはオーストロネシア語の遺産である。他方，その他のすべての接尾辞形態は大陸的起源のようだ。

③ 日本語の形態の最も古い層における（完全および不完全）重複の形態論的働き。

④ 母音体系が簡単で，母音調和がないこと（後にみるように，母音調和の代わりに「トーンの調和」がある）。〔村山。ポリワーノフは母音調和を，ステムの母音と接辞の母音との調和を考えていたとおもう〕。

⑤ 音楽的語アクセント。

⑥ 開音節が典型的である。

⑦ 先日本語の単純な子音体系と典型的にポリネシア語的なそれがほとんど完全に同一であること（対(ツイ)をなす有声子音がないこと。一般に「対(ツイ)をなす」音素カテゴリーがないこと）。三つの鼻音 m, n, ŋ があること。

次のようないくつかの並行的な発展：

⑧ 唇の働きの減退のプロセス。*p : p>f(φ)>h ; cf. 日本語 pi>fi>hi(çi) とポリネシア語 *apui̯>api>afi>ahi〔村山。ハワイ語〕「火」。

⑨ 対(ツイ)をなす有声半鼻音（^{m}b, ^{n}d。そこから東京方言の b, d）が派生的であること〔村山。これはポリワーノフの誤解と見られる〕。これらの有声半鼻音は共通日本語とメラネシア語において発達した。

(8) エドワーズの本のもうひとつの大きな欠陥は，日本語において口蓋化（軟）子音のカテゴリー（ロシア語のнь(ニ), рь(リ) などのような。日本語，ニ，ニャ，ニョ，リ，リュ，リョなど）を見付けなかったことである。そこでエドワーズの転写はゆがめられ，音声利用頻度の統計的計算がゆがめられた。

(9) この問題に関する文献の詳しいことは拙論「東京方言における音楽的アクセン

ト」参照〔本書，18〜30ページ〕。

(10) ロシア人は日本語の長い母音を，アクセントのある母音と聞きとってしまう。その理由は簡単である。ロシア語ではアクセントは長さと結びついている。つまりアクセントのあるロシア語の母音はアクセントのない母音よりずっと長い。日本語の音声組織ではアクセントは長さと無関係である。

(11) ここに示したのはまちがったアクセントである。ロシア人はヨコハマ（横浜）という言葉を，アーカニエ〔村山。アクセントのある音節に先行する諸音節のoをaと発音すること〕のため，またhをг(g)と発音するため，ヨコハマが Якага́ма（ヤカガーマ）（または Ёкага́ма（ロカガーマ））と発音してしまう。日本人には何のことだかわからない。アーカニエも，hをг(g)と発音することも，第3音節に不必要なアクセントをつけること（しかもそこを長くする）（$\overline{\text{jokohama}}$ の代わりに jaka「ga:ma とする）も日本人には耳ざわりである。

(12) いろいろな地方で大阪方言をふりまいている大阪の咄家（hanasika）のことも述べておきたい（私は1915年こともあろうにイルクーツクで大阪の咄家を聞いたことがある）。

〔村山。中央アジア国立大学紀要，1925年，No. 8 にのったフランス語論文 Sur le travail concernant les systèmes de l'accent musical dans la langue japonáise (et sur le rapport du japonais avec les langues malaises) には次の資料が含まれている〕。

もろもろの方言における hana「花」，「鼻」，ȧsa「朝」「麻」のようなホモニム（同音異義語）の差は次のとおり。

京都

hana 花　　hana 人名　　hana 鼻



⌈ha⌊na　　⌈ha⌊na　　⌈hana⌉

asâ 朝　　a⌈sa 麻



土佐

⌈ha⌊na 花　　⌈ha⌊na 人名　　⌈hana⌉ 鼻



a⌈sa 朝　　a⌈sa 麻



メロディーを変えうる接尾辞（高くも，低くもありうるもの）がつくとき

a⌈sa⌊ga 朝ガ　　a⌈saga⌉ 麻ガ



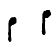
高くありえない接尾辞がつく場合

a⌈sa⌊mo 朝モ　　a⌈sa⌊mo 麻モ



東京

ha⌈na 花　　⌈hana 人名　　$\overline{\text{hana}}$ 鼻

　または 　（第２音節を随意に高める）

ha˥naŋa 花ガ　　˥hanaŋa 人名　　hanaŋa 鼻ガ



˥asa 朝　　　a˥sa 麻



東京

˥asa 朝：a˥sa 麻＝˥umi 海：˥umi 膿＝˥aki 秋：a˥si 足



日本（および琉球）のいろいろな地方の私の研究から，次の結論をくだせる。

(1) 最も古風で最も複雑な純メロディー・アクセントは西（関西）方言にみられる。すなわち京都，土佐（音声組織および形態論における古風な特徴によって，「日本方言学のサンスクリット」といえる。ただし，唇の働きの歴史の点は例外。日本のすべての方言に共通の「唇の働きの減退」は土佐で最高に達している）および兵庫の方言にみられる。

(2) 東方言（東北方言も含む）は古代の共通日本語の体系（多くの点でそれは今日の西方言の体系と一致する）に多くの更新を加え，単純化した。音楽的アクセントの場所を変えた如き（たとえば*˥pa˩na 花⟶西方言˥ha˩na⟶東方言 ha˥na；*˥a˩s′i 足⟶西方言 ˥a˩śi⟶東方言 a˥śi)，また複雑なメロディー（のような）を失い，東京方言では一つの音節だけがアクセント（高さ）をもつとか，またアクセントの性格が少し変わったこと（東方言ではメロディーのほかに，強さも加わる）など。

(3) 南諸方言（九州）は区別型が少ない（たとえば長崎方言では二つの型）かまたは古代の様々の型の痕跡が全くない。熊本方言ではアクセントの場所と性格がすべての語においてコンスタントである（きわめて小さい例外は，上にあげた ˥hana のような人名で，諸方言間のノーマルな対応規則に従わず，熊本のひとつの新しいアクセント型である）。琉球語（那覇方言）では無差別化（nivélation）のほとんど同じような状態がみられる（しかし，短い母音をもつ語ではアクセントの場所は別である。その場所はコンスタン

トである)。〔村山。平山輝男編『全国アクセント辞典』, 1960年, p. 3 の記事参照。「…全日本のアクセントを系譜的に分けると, 三大別に分類され, 東京・京都・鹿児島は, それぞれ, その代表方言である……」〔村山。ポリワーノフの記述した長崎県三重村方言アクセントは鹿児島方言とおなじ九州西南方言アクセントに属する。〕。

「歴史的にみると, 京都を中心とするアクセント (第一種) は, 最も伝統的なもので, 現代共通語のアクセント (第二種)〔村山。東京アクセント〕を生み出す前の体系を持っている。また鹿児島を中心とする九州西南部地方のアクセント (第三種) は, 共通語式の体系から生み出されたものの代表である。この歴史的つながり (第一種 ──→ 第二種 ──→ 第三種の系譜) をたどり, 地方語相互の対応関係を知ることは, 学問的にはもとより重要なことである……。」

〔村山。ポリワーノフは東京アクセント, 京都, 土佐アクセント, 長崎アクセントの詳しい研究にもとづいて, ほぼおなじ見解を, 1925年に発表していたのである〕

8. 東北方言の母音

（ロシア科学アカデミー報告，1924年）

（1924年5月7日の ОИФ に学士院会員S. F. オルデンブルグより提出）

共通日本語の母音体系は日本語の行なわれる領域の周辺，琉球と東北地方においてのみ，著しい変化をこうむった。琉球では i × e ⟶ i（*pige→φiʒi。日本語 çiŋe 髭）と u × o ⟶ u（jobu→jubu-ŋ 呼ブ）が合流し（×という記号は収斂した音の間におき，収斂を示す），また新しい e：，o：は単母音化の産物である（tade : ma ⟵ tada-ima 只今，o : ru ⟵ ao-iro 青色）。また東北方言のサンプルとして青森をとるが（秋田をとるときは，その旨をしるす），東北方言では母音の長さが均等化し（長母音が消えた），二重母音が収縮したために，つぎのような母音ができあがった。a, e（秋田 ɛ), o, i, ī, ü（ここに ī というのは，より正確には ^{z}ī である。舌を平らにもちあげてつくる舌尖的な混合母音である。音節形成的な z̥ に近い。ü というのは，舌はこれとほぼ同じようにして，唇をまるめてつくられる）。日本標準語の五母音（a, e, i, o, u）体系から，東北方言の音素はつぎのようにしてできた。

a=a；o=o；e ⟵ ɛ ⟵ ai, ae(age←akai, 秋田 φɛ 蝿)，i は e(：)× oi×wi から（mi←mme 梅，idi←oite, i^{n}do←wido）；ī ⟵ i, さらにマサツ音，破擦音（s, c, ʒ）の後で ī ⟵ u；その他の位置の u から ü（たとえば īsī←isi 石，īsī←isu 椅子，üsī←usu 臼，üsī←usi 牛）。

この音韻推移(Lautverschiebung)における最初の移動は，私の見るところ，マサツ音，破擦音の後という位置における i×u の混交による。この位置はすべての方言において，短い i, u の「消失」をうながすものとして見受けられる。この短い i, u は，標準日本語の音節 śi（シ）, su（ス）, cu（ツ）, φu（フ）において，他の促進諸要因(声の高まりが無いこと，無声子音の前の位置または語末の位置)があると完全に物理的にゼロとなる。u の完全なゼロと（音節 mu（ム）, gu（グ）などの）ノーマルな u との間で，音節 su（シ）, cu（ツ）は u の特徴的な働きの縮少の一連の段階

を示す。母音は消えないかぎりは，唇の働きを失い，そのさい舌の位置は先行子音（s, c, ʒ）の調音に左右される。これらの結合における u の舌尖的な性質はそれで説明される。tu，du をもつ土佐方言のような状態から cu，ʒu をもつ標準日本語の状態にうつった時代をふりかえって見るならば，tu ⟶ tˢu ⟶ cu, du ⟶ dᶻu ⟶ ʒu という推移そのものが u の特徴的な働きがちぢまって，舌尖的な要素（ˢ ᶻ）が促された結果であることがわかるだろう。ˢ ᶻ は t, d を発音するさいの舌尖の働きによって制約されている。かくして，tu, du ⟶ cu, ʒu という推移には母音 u が「弱まり」はじめたことが現われている。標準日本語の音節 cu, ʒu（dᶻu×zu から），および su において，u の「弱まり」は（母音の完全なゼロのもとで c, ʒ, s をもたらすわけでないとしても）すでに cī, ʒī, sī をもたらす。そしてこれに並行して，それに対応した「軟い」子音をもつ音節(ći, ʒ́i, śi, さらに çi)の i の「弱まり」も進行する。母音が完全に消えると cu（＝cī）と ći の区別，su（＝sī）と śi のちがいは，もちろん「硬い」子音と「軟い」子音との対立に集中される。そして，もしこのような結合が東北方言の区別体系——そこでは「硬い」子音と「軟い」子音との区別が古くから無縁であったか，または無縁なものになっていた——に入りこんできたと想像するならば，cu, ʒu, su（＝c(ī), ʒ(ī), s(ī)）は明らかに ć(i), ʒ́(i), ś(i) と合流するはずである。しかし，東北方言では si ⟶ śi タイプの「軟化」がすでに達成されていたと推定すべき材料はないから，si と su（ないし ci と cu など）が，単に両方の母音（i と u）が ī の段階をへてゼロに向かった結果合流した蓋然性がある。この母音〔村山。ī〕は，s, c, ʒ との結合において（この場合は su, *tu, *du, *zu および，si, *ti, *di, *zi にさかのぼる），独立のフォネーマとして，言語思考によって固定された。そこから直接に標準日本語の二つのフォネーマ i, u の代わりに，三つのフォネーマ（i, ī, u）が出てくるであろう（その分布は次のとおり。i は ki, ni などのタイプの結合において，ī は sī, cī などのタイプの結合において，u は ku, nu タイプの結合において）。換言すれば si ×su の収斂は① ki と si の分岐，② ku と su の分岐を暗示するであろう。しかし，このようなフォネーマ数増大（二つから三つへ）はおそらく面倒なことだったろう。そこで ki と si の分岐にまではたちいたらなかった（すなわち，たとえば連用形 ok-i, os-i のような形における母音が同一であるという

意識が維持された)。ところで ï という観念がつくり出されてしまったのであるから，それは古い *i のすべてのケースに押しひろめられなければならなかった。そこで，その子音がそれ自体では母音を舌尖化さないような音節でも，ï が現われた。ki の代わりに kï (より正確には k^{s}ï，結合的には ks̥，たとえば，ks̥ta←kita)，gi の代わりに gï (=g^{z}ï, gz̥)；ri の代わりに rï[1](青森では lz̥ という聴覚印象をうける)；fi(*pi からの)⟶ f^{s}ï ⟶ ^{f}s(ï)(そこで或る方言ではすでに単に sï)；bi ⟶ b^{z}ï (たとえば biru「蛭」か b^{z}ïro となる。長崎では biri)；ni, mi, ŋi ⟶ nï, mï, ŋï (鼻言の後では ^{z} は微弱に感じられる)。

かくて，古い *i のすべての場合は，*su, *tu, *du, *zu という結合における *u の場合とともに，ひとつのフォネーマ (ï) として (ku, nuなどの) 円唇化を失うことがなかった古い u の他の場合と対立するにいたった。しかし，この *u はその標準日本語的な性格を維持しなかった。というのは，舌の働きは (ki などの i の場合とおなじように) ï ⟵ u (*su などにおける) の影響をうけたからである。そこで u ⟶ ü。すなわち，u の特徴的な円唇化が，舌の働きの新たに獲得された習性 (ï) につけ加わったのである。

上に述べた i ⟶ ï という推移によって，e ⟶ i という推移のための準備ができた (e→i という推移が起こっても *ï と混同する心配はなかったから)；この推移は，これまた第3の推移，すなわち ai̯ ⟶ ɛ ⟶ e と結びついていた。このプロセスの最後の段階に到達するためには，一般音声学的見地から見てノーマルな母音体系要素 e が以前の (標準日本語の) *e によって占められていないことが必要であった (一般に言語は一定の限度までだけしかその言語の語区別手段の縮少を許容しないのだ)。

かくて東北方言母音組織における三つの主要現象 (i→ï, e→i, ai→e) はお互に制約しあい，これらの方言における音声進化のより前進的な過程の直接の結果である。このような過程は別の (南の) 周辺——琉球語にも見られ，そこでも類似の結果をもたらした (すなわち，マサツ音，破擦音の後で i, u が変化し，おなじく e→i が見られ，おなじく ai→e: が見られる)。そこで，東北方言の母音組織更新のうちにアイヌ語音声組織の直接の影響を見ようとするのは根拠がない (子音の更新，すなわち，とくに母音間の無声子音の有

声化はアイヌ語の影響で説明せねばならない)。日本語の母音組織とアイヌ語の母音組織は(子音組織とは比較にならないくらい)よく似ているのであるから，そんなこと〔村山。東北方言の母音組織の更新をアイヌ語の影響とすること〕を仮定する必要は初めからないのである。東北地方が（琉球とおなじく）ノーマルな進化道程を促進したことを立証することが残されているだけである。

これらの現象にくわえて，oi ⟶ e ⟶ i という単母音化のプロセスとそれにともなう wi×oi ⟶ e(→i) という収斂がある。このプロセスは一方では語頭の wi の w がわりあい後まで保たれていたことを示し（そうでなかったなら，wi→i→ï となっていたはず)，他方では oi ⟶ e と ai ⟶ ɛ という収縮がおそらく同時に起こったことをもとにして[2]，ai⟶ɛ が e⟶i よりも先であり，それを促した原因であったことを確認させる。

名詞ステム末の u の一部が o に移ったこと（biru「蛭」から bʼïro となる）についていえば，これは形態論的現象であり，u-wa に終わる主格と o-wa に終わる主格とが合流したことによって説明される[3]。

最後に，東北方言の全光景を明らかにするため，他の主な特殊性をあげておこう。

(1) 子音の推移（Lautverschiebung)：中間の無声閉鎖音（t, c, k）は有声化した，より正確にいえば「半有声音」（ʿd, ʿʒ, ^{k}g）となった。母音間の有声子音（b d ʒ）は「有声半鼻音」（ʿd, ^{n}d, ^{n}ʒ）となった。また *g は鼻音的 ŋ となった（かくて，土佐方言の kotoba-ga「言葉が」は東北方言で kʻoʿdo^{m}baŋa。土佐の utimati kotoba「内町言葉」は東北方言で üʿʒïmaʿʒï ^{k}goʿdo^{m}ba)；語頭の無声閉鎖音は母音間の長い無声閉鎖音（tt, kk）と合流し，少くとも東北方言の一部（たとえば秋田）で有気音（tʻ, kʻ）となった。これらの推移は①共通日本語の有声子音がある程度「半鼻音的」であったことによって，②アイヌ語下層の参加によって説明される。

(2) 長い母音ならびに長い子音が失われたこと。その中には次のものがある。ma＜mma「馬」(歴史前のシナ語からの借用語)——〔アクセントから見て京都のアクセント「m̥⌊ma，東京 m̥⌈ma に，ステムにアクセントのある東北方言 ma が正しく対応する〕；

mi ⟵ mme「梅」〔これも同じく歴史前のシナ語からの借用語。京都「m̥me⌉，東京 $\overline{\text{m̥me}}$ は接尾辞にアクセントのある東北方言 mi に対応する〕。

(3)　「唇の働きの弱まり」(delabialization) があまり強くなかったこと（唇の働きの弱まりは中央諸方言，ことに土佐においてとくにはげしく現われ，それが最も少ない程度に現われたのは周辺，すなわち①琉球，②東北方言である)。中央の p ⟶ φ ⟶ h (i の前では ç) にたいして琉球，東北方言では p ⟶ φ または f (*ï の前で ʻs)。k^w と g^w は唇の働きを失わなかった。その他。

(4)　アクセントからみて東北方言は，東京方言とともに「東の」体系に属し，①京都，土佐をふくむ「西の」体系，②南（九州）——たとえば長崎——の体系とちがう。長崎では二つのタイプ——尻高語（オクシトン）と尻低語（パリトン）——しか存在しない。しかし，細部においては東京アクセントとのちがいはもちろん，存在する。アクセントの場所からみて西型アクセントの西方言から侵入した一連の語がある。アクセントのない語における語末母音が物理的に（心理音声学的には定着していないが）長いことも東北方言の特殊性のひとつである。

(5)　r…r ⟶ r…n,　n…n ⟶ n…r (arare→arani,　naname→narami)。

(6)　口蓋化子音の欠如（完全なまたは部分的欠如)。

(7)　場所格〔村山。正しくは方向格〕の接尾辞 -sa。

(8)　後置詞的 -ko (-kʻo)。たとえば mac(ï)kʻo「松っこ」, bigo-kʻo「べごっこ」。注：東北方言の bigo<beko をエリセーフ教授〔村山。1889〜1975年〕はロシア語 бык（ベーク）「牡牛」から借りたことばと見ようとしたが，決してそうではない。このことばには長崎の be:be:, bebe-ŋ-ko, beko「子牛」が対応し，長崎の尻低（パリトン）アクセントが東北方言 bigo の無アクセントに規則的に対応している。この語は neko「猫」⟵ *nia-ko (ただしアクセントはちがう。東京「neko) のような擬声語であることはもちろんである。

(9)　語彙にいくらかのアイヌ語からの借用語がある。

原　注

(1)　米沢方言では ri→ð^{z}ï。ju と合流して，たとえば juri→ð^{z}ïð^{z}ï「百合」; r′×j という一般的混交と結びついて，たとえば r′o:rija（料理屋）→joð^{z}ïja

(2)　南方言（九州）における oi と ai の同時的単母音化を参照せよ。

(3)　長崎で，hotok′a: の影響で e[村山。hotoke の e] が i に移り hotoki となったことを参照せよ。

9. 日本語における子音の諸カテゴリー

〔村山。この論文はポリワーノフの死後20年あまり経過してから『日本語研究論集』(Японский Лингвистическкский Сборник)(ソ連科学アカデミー東洋学研究所1959年, pp. 17〜34)にはじめて発表された。刊行者の序(A. パシコフスキー, A. グルスキナ署名)はこの論文について「未完の『日本語史的音声学』の1章である」と述べるだけなので, いつごろ書かれたかは判明しないが, 1920年代であることはまちがいなかろう。20年代の後半と私はみている。〕

はじめに

この論文は私の編んだ『史的日本語音声学。主な方言体系のモデルの静態的記述』〔村山。刊行されなかった〕のひとつの章である。この研究は次の章を含む。

序論:資料の概観(方言, 標準語および文語, 言語記録, 日本語と比較文法的に対比される諸言語)。

第1部

第1章。大きな心理音声学的単位:語, 語彙形態素(最小の語)と形式語(フォルマント)。

第2章。音節。開音節の法則と日本語および個々の方言の音節の歴史におけるこの法則の部分的破壊の概括。補説:「日本語オーストロネシア語同系関係の諸徴候」

第2部

第3章。基本的音声単位——音節の要素:子音, 母音, アクセント・メロディーの特徴づけ。

第4章。子音。子音表。子音のもろもろのカテゴリー(長い子音, 対をなす有声子音, 口蓋化子音, 円唇化後舌子音)

第5章。個々の子音:p, pp, p′。補説「日本語における唇の働きの歴史」。b, b′, 方言的な bb。φ, w。t, t′。短い狭い子音の弱まりの一結果としての tu>cu(ツ) という破擦音化のプロセス。s。z×ʒ, ʒ×d, d×r という収斂。j。ロ

蓋化子音と方言（東北方言，琉球方言）におけるその消失。r と ri>i という変化。これは狭い短い子音の弱まりの結果の一つである。k, g とその変種。諸鼻音と母音に先行する N。h。

第6章。表。共通日本語の母音と個々の方言におけるその運命。二重母音の形成とその後の単母音化。新しい方言的な二重母音。二重母音の単母音化とアクセント単純化との関連。音節形成的鼻音と二重音の要素としての鼻音。

第7章。母音の方面における先日本語的現象：最古の二重母音の単母音化と *e(<*ai) の，共通日本語 i への移行。日本語の母音交替（i|o；e|a；o|a；i|u；o|a。動詞諸形における母音交替）の仮説的説明。メロディー的（音楽的）アクセント。

第8章。諸体系の静態的記述：西日本語（京都と土佐），東日本語（東京），南日本語（長崎）のアクセントおよびアクセントの場所と性格が一定した体系（熊本）。共通日本語のアクセントとオーストロネシア（タガログ）語アクセントに対するその関係。共通日本語の語末の「下降的上昇」と朝鮮語の語末鼻音。

付録。生きた方言（京都，土佐，長崎，熊本）の音楽的アクセントの区別をつけた音声転写のテクストと京都人の読んだ古典〔村山。鴨長明1155～1216年の『方丈記』〕の見本。

拙著『史的日本語音声学』のこれらの八つの章はそれぞれの分冊の材料となりうる。この論文はこの計画の第4章であるが，じっさい上，第1部と第2部（「大きな心理音声学的単位：語，語彙形態系……」と「基本的な音声単位」）とは入れかえることができるだろうから，私は基本的音声単位概観のはじめにくる第4章（「子音」の最初の章）をまず発表してもよいと思う。発表する第1分冊としてこの章を選んだのは，いくつかの偶然的な状況による（印刷の用意ができていた原稿をなくしてしまったので，はじめの三つの章を新たに書き直さなければならなくなった）。『史的日本語音声学』の完全な序論（資料の概観）を前につけることはいま不可能なので，私の史的音声学の結論の材料となったのは（ほとんどもっぱら）1914年，1915年，1916年に集めた生きた日本方言の資料であることを述べるにとどめる〔村山。1914，1915年は日本に来て資料を集めたが，1916年はどこで集めたか不明〕。これらの資料のうち，東京市の方言，青森県津軽の方言，秋田市の方言，京都市の方言，

土佐（高知県）の諸木村の方言，（長崎県）三重村の方言，熊本の方言および那覇市の琉球方言を詳しく研究した[1]。ことに日本語の音楽的アクセントの方面では，私は自分自身が得た資料にだけたよらなければならなかった。というのは，音楽的アクセントの問題はこれまでのヨーロッパの研究者によっても（拙論「東京方言における音楽的アクセント」の中で引用した東京大学国語研究室の図書館の原稿を除いて），日本の学者によっても提起されなかったからである。このようなわけで，日本語の四つの主なアクセント体系を確定し，共通日本語のアクセント体系を確定することは[2]，日本で私が記録した各種方言の方言音声学辞典にもとづいてはじめてできたのである。

私の日本語の比較方言研究の足場となっているのは，古典語とそのいくつかの変種のほか，①東方言の見本として，東京の標準語，西方言の見本として京都，土佐（諸木村）の方言，②はげしい方言的片寄りの例として，青森，秋田の東北方言，南グループでは長崎方言（長崎諸方言の間でも変化のはげしい漁村三重村の方言），熊本方言および那覇方言である。

私は日本語を雑種的起源の言語と見，オーストロネシア（南島）語要素と大陸言語要素とが結合したものと見，日本語の語彙をマライ・ポリネシア諸語とも朝鮮語とも比較する。

私のすべての著作におけると同様に，転写には国際音声文字（ただし，L. V. シチェルバが補足した形の）[3]を使うことにする。

子音の諸カテゴリー

現代標準語では，他の方言の大部分におけるとおなじように（ただし琉球語と東北方言はのぞく。またシナ語からの借用が行なわれる以前の古代の状態ものぞく），子音のもろもろのカテゴリー，すなわちお互いに対立する子音グループは，つぎのとおりである。これらの子音は各々の対においてくりかえされるところの，或るひとつの徴候の有る無しでだけ区別される（この徴候以外の点では，対の両要素は原則的に同一である）。

(1) 長い（重複）子音と短い子音：pp, tt, kk, ss などと p, t, k, s など。

(2) 対の有声および無声のカテゴリー：b, d, g, z などと p, t, k, s など。

(3) 対の「軟い」（口蓋化した又は口蓋的）子音と「硬い」（非口蓋化）

子音とのカテゴリー。たとえば，p′, b′, m′, c′, ʒ́, n′, k′, ŋ′, ś, r′, ç と p, b, m, t, d, n, k, g, ŋ, r, h。

琉球語では「軟い」子音と「硬い」子音との対立は失われ，東北方言では長い子音と短い子音との対立が失われ，部分的に無声有気音と半有声音との差で置き換えられている（たとえば，秋田で)。さらに，東北方言のかなりの部分には対をなす「軟い」子音のカテゴリーが欠けている。最古の先日本語の段階では，これら三つのカテゴリーはなかったらしい。次いで，と言っても先日本語の時代においてであるが，長い子音（重複子音）の観念がうまれ，共通日本語の時代に対をなす有声子音——はじめ「有声半鼻音」^{m}b, ^{n}d, ^{n}z——の観念がうまれる。さいごに，シナ語からおびただしい借用語が入ってきて，日本語の音声組織に対をなす口蓋化（軟い）子音（p′, b′, m′, t′, d′, n′, k′, g′〔または ŋ′〕, s′, z′, r′）の観念が入ってきた。その一部は後に方言において口蓋的（または舌背的）ć, ʒ́, ç（ç は *p から。h<*p の「軟い」もの）と変わった。

なお，多くの方言（東京，京都，土佐ではなくて，主に周辺の方言）では，さらに円唇化した後舌子音（k^{w}, g^{w}）と円唇化しないそれ（k, g）との対立もある〔長崎ではこの対立に口蓋化した子音も加わっている。k^{w}′(=$k^{ɥ}$), g^{w}′(=$g^{ɥ}$)—k′, g′〕。

長い子音

東京方言では次に示す長い（重複）子音があるだけである：pp(=p:), tt, kk, ss, tc(=c:　=tts) とそれに対応する“軟い”もの：pp′(=p′:　=p′p′), kk′(=k′:=k′k′), śś(=ś:) および tć(=ć:　=t′t′ś)。 従って無声のものだけである。なぜなら有声子音には重複がないからである（例外は南九州方言。たとえば薩摩と熊本：bb, dd, gg)。鼻音は，客観的には重複形が確認される（m̥「mà 馬，$\overline{\text{m̥me}}$梅などのような語の語頭で）が，VN および N̥(=m̥) のタイプの子音をもつ現代の体系では[4]，重複鼻音は無声子音の重複 pp, tt などとは異なった取り扱いをうける。すなわち，母音性（ヴオーカル）の要素 N（二重音末の鼻音）又は N̥（音節形成鼻音)＋鼻音に先行する短い鼻音 m, n, ŋ からなるとみられる（かくて，amma, anna, aŋŋa タイプの複合——たとえば

hoŋŋa 本ガ，honno 本ノ，hommo 本モは，hoNŋa 本ガ，hoNno 本ノ，hoNmo 本モに等しく，語頭に mm〔または ŋŋ〕のある語〔京都 ŋ̥ŋoku 動ク〕，語頭に nn のある〔琉球語 n̥naśi ウナギ鰻〕ことばは N̥ma(馬)，N̥me(梅)，N̥ŋoku（動ク)，N̥naśi（鰻）と解される)。

長い子音は短い子音と形態論的交替を示す。形容詞の強調形（接頭辞 ma のつく）と擬態語の簡単形（重複の収縮と接尾辞 -ri）はこの交替にもとづく：makkuro/kuro(真黒，黒)，maśśiro|śiro(真白，白)，（さらに mannaka|naka 真中，中)，pikkari|pikapika（光る様）〔村山。ピッカリという語形は確実でない〕。しかし，この形態論図式において pp は p と交替するのでなくて h またはその「軟い」対応音 ç と交替する（これは *p>φ>h，*pi>φi>hi>çi という変化による)：mappira|çira（„ hira “<*pira 平)。さらに，pp は b|h（時には p）と交替する（漢字語において)。たとえば ippoŋ（一本)|samboŋ（三本)|hoŋ（本)。また pp′ は b′, ç と交替する。たとえば ipp′aku(一百)|samb′aku（三百)|çaku（百)。重複子音の意味論化されたケースの大部分は2音節漢字語に見られる：kakka（閣下)，mokka（目下）など。

前にあげた makkuro（真黒)，pikka-ri という形にもとづく重複子音の起源は重複が極度に縮少したためとみられる。つまりひとつの子音だけが重複するにいたったのである。ma-kkuro<*ma-kukuro<*ma-kuro-kuro, pikka-ri<*pika-pika-ri。ここで縮少をもたらした要因は，おそらく接辞の存在である。つまり接尾辞 -ri または接頭辞 ma- の存在である。音構成の縮少はまさに多形態語において生じる。従って，接辞のない形 pika-pika において重複は変わらずそのまま残り，他方，pika-pika-ri では縮少した。おなじ条件が *ma-kuro-kuro の makkuro への縮少をもたらした。私はすでに日本語 ma-kkuro に対するオーストロネシア諸語における形態をあげた：ma-butiŋ-butiŋ〔村山。タガログ語「良い」の複数形〕，ma-nae-nae〔村山。アピ島のメラネシア系言語「柔い，弱い」〕。イロカノ語では不完全重複という中間段階が見られる：ma-saksakit(5)〔村山。ma|sakit「痛い」〕。これは*ma-sakit-sakit の代わりである。このこと（ことに，接頭辞が日本語の ma- と同一であること）から，次のことがわかる。①日本語の強調形（および擬態語的重複形 pikkari|pikapika）はオーストロネシア起源の古い形式である。②強調形の意味は，初めはまさに重複（セム語の強調形における。これとおなじ一般言

語学的要因参照。そこでも子音重複で強調形がつくられる）と連合していたのであって，接頭辞 ma- と連合していたのではない。ma- は最初は，ステムを形容詞にする働きを意味したにすぎない。

mannaka（真中）|naka，および mammaru（真円）|maru という形が示すように，先日本語の重複音の中には無声の pp, tt, kk, ss だけでなく，鼻音子音もあったのである。後者はNの観念が出現するとすぐに，anna＝aNna, amma＝aNma という複合における Nn, Nm としてみなされたのである。

ところで有声の（非鼻音的）重複音が欠けていることは，長い子音（pp, tt, kk, ss, nn, mm）が出現し，pikkari|pikapika 型の交替が出現した時代にはまだ対をなす有声子音のカテゴリーが存在しなかったことを示している（もしそれが存在していたなら，pikkari|pikapika とともに，bb, dd, gg のケース——たとえば siba-siba 屢々から *sibbari のようなものが生じえたであろう）(6)。

重複形が収縮して生じた重複子音が日本語に出現すると，それは他の位置でも可能になった。先史時代のシナ語からの借用語 mma（馬）と mme（梅）〔シナ語 ma 馬（日本語 m̥ma>mma）の祖形の語頭の複雑な子音 *mr または *ml は日本の呉音 me からわかる。me の e は i̯a にさかのぼる。従ってシナ語では*mi̯a であった。これはさらに古くは *mra または *mla であった。先史借用語の時代におけるこの古い祖形を日本人は mma としかつたえることができなかった。というのは語頭において二つの子音が立つ習慣がないからである。それに代わりえた唯一のものは重複子音mmであった〕において語頭の複雑な子音〔村山。*mr または*ml〕の代わりに mm が現われた。これらの例からみて，かつて，重複子音の現われる位置は語中に限られないで，語頭でも可能であった（現在，朝鮮語においてそうであるように）。

時のたつにつれて重複子音はますます頻繁に現われた。シナ語からの借用語においても，日本語の複合形（コンプレクス）においても（たとえば，四段活用動詞の過去形において，matta>mat(i)ta 待ッタ，kitta<kir(i)ta 切ッタ，東日本語 katta<kap(i)ta 買ッタ）。

重複子音が方言においてどのようになったかといえば，①東北方言では対応する短い子音に完全に変わり（mma 馬>ma, mme 梅>mi），②（母音消滅によって）多数の新しい重複子音がつくられた。有声の非鼻音的 bb, dd,

gg が南九州方言（薩摩，熊本）につくられた。たとえば，kobba<kor'ba 是ヲ， saddoŋ< saru-dono 猿殿，iggane>jubi-gane 指金（指環）。

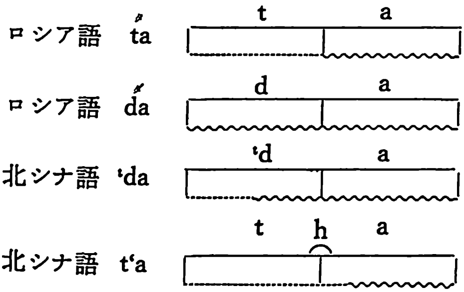
対（ツイ）の有声子音

喉の働きによる子音の対（ツイ）をなす対立〔村山。有声，無声の対立〕は日本語では東北方言をのぞいて，ロシア語，フランス語，その他の言語（ドイツ語と北シナ語はそうでない）におけるとおなじ区別徴候を利用し，従って，無声子音とそれに対応する有声子音の対立，k—g，t—d などにある。

一方，標準日本語，フランス語と，他方ロシア語との間には無声子音と有声子音との区別の境界に，耳ではハッキリ聞こえなくて実用上まったく大切でない，或るちがいがあるが，それはみつけることができる。北シナ語の「半有声音」というカテゴリーのうけとめ方で日本人，フランス人，ロシア人がちがうことでそのことがわかる。北シナ語の「半有声音」^{p}b, ^{t}d, ^{k}g など（無気音）をフランス人は無声子音とうけとめ（英国人もおなじ。そこでそれらをヨーロッパではふつう p, t, k でうつす)，ロシア人は有声子音としてうけとめ，そこでロシアのシナ学者は $\overset{\text{b}}{\text{б}}$, $\overset{\text{d}}{\text{д}}$, $\overset{\text{g}}{\text{г}}$ で表わし（$\overset{\text{p}}{\text{п}}$, $\overset{\text{t}}{\text{т}}$, $\overset{\text{k}}{\text{к}}$ はシナ語の有気音 p', t', k' を表わすために用いる)，日本人はこの点，フランス人，英国人とおなじようにうけとめる。北シナ語 ^{p}bai-lun（白竜）の ^{p}b（ヨーロッパ人の転写では p，ロシア人の転写では $\overset{\text{b}}{\text{б}}$）は後期の日本方言の借用では p（b ではない！）となっている：長崎 pa：ron または他の方言で pe：ron「白竜祭りのときの競漕」。シナ語の「半有声音」のこのようなうけとめ方は日本のシナ学者の実用的転写からもわかる。〔村山。この個所を理解する上に，『言語学概論』§27 a の次の説明が参考となる。

「声が加わるか否かによる子音の区別は必ずしもすべての言語において，ロシア語，フランス語，トルコ語，日本語（中央および南の）などにおけるように，有声子音と無声子音という二つのカテゴリーに現われるとは限らない。たとえば北シナ語（官話），とくに北京方言では，ロシア語の無声子音（p t k など）のカテゴリーの代わりに，閉鎖音（および破擦音）の種類（クラス）において無声有気音（p' t' c' č' ć' k'）のカテゴリー（§28参照）があり，またロシア語の有声子音（b d g など）のカテゴリーの代わりに無気音のカテゴリ

ーがある。これらの無気音は声の参加という見地からすれば，半有声音と呼べる。なぜかと言えばロシア語の [p] と [b]，[t] と [d]，[k] と [g] などの中間の位置を占めるからである。まさにこのカテゴリーの音，つまり無気半有声音 ᵖb ᵗd ᵗʒ ᵗǯ ᵗʒ́（または ⁿʐ）ᵏg は独立の位置において，つまり語頭において（＝語の第1音節において），閉鎖の最初から声が加わって発音されるのでなくて，閉鎖の終りにおいてはじめて声が加わるのである。そこで有声なのは子音の終わりの部分であり，閉鎖の終わりと次の母音音声のはじめとの間の過渡ピリオド（破擦音 ᵗʒ ᵗǯ ᵗʒ́ の場合はマサツ音要素 z ž ź）だけが有声である。このカテゴリーをそれと対立する無声有気音（pʻ tʻ cʻ čʻ ćʻ（または ʐʻ）kʻ）の カテゴリーから区分するためには，この過渡ピリオド——閉鎖の終わりと母音との間の——はまさに重要である〔なぜなら，半有声子音では，その部分は有声であり，有気子音ではその部分が無声（＝h）であるから〕；従って，これら二つのカテゴリーの対立は，対立点がロシア語の有声子音，無声子音の区別と一致しないにもかかわらず，ハッキリと感じられるのである。（ロシア語と北京語との区別の規準のちがいは）図式的には次のように表わせる。



（〜〜は声の存在を示す。……は声の無いことを示す）

しかし，半有声子音は独立の位置（語頭）でのみ，このような特徴をもつのであって，語の内部では（すなわち，もしこの音節が語の第2，第3音節であるならば），すなわち母音間に立つ（ことに n, ŋ に終わる二重音の後にくる）ならば，これらの半有声音はすでに全く有声音となる。cf. 白 ᵖbai，しかし明白 miŋbai；哥 ᵏgᵚə，しかし大哥 ᵗdágᵚə，哥哥 ᵏgᵚə́gᵚə など〔破擦音 ᵗʒ は語中で ʒ となり，その破裂部分を失って結合的に随意的な z とな

ることがある。たとえば ^{p}bi-ʒə ⟶ biz(ī) 鼻子〕」 以上は『言語学概論』pp. 101〜103 を訳した。〕

日本の東北方言の行なわれる地方でだけは，有声音，無声音の区別が独特な子音体系と置き換えられている。（たとえば秋田方言では）無声有気音，たとえば pʻ, tʻ, kʻ（これは長い無声子音 *pp, *tt, *kk に由来し，また語頭の単純な，すなわち短い子音に由来する），半有声無気音 ^{p}b, ^{t}d, ^{k}g（以前の母音間の無声子音に由来する。たとえば u^{t}ʒīma^{t}ʒī^{k}go^{t}do^{m}ba<*utimati-kotoba 内町言葉），有声半鼻音 ^{m}b, ^{n}d, ^{n}ʒ（標準日本語の母音間の有声音に対応する。たとえば φa^{n}da||東京 hada 膚）という三つのカテゴリーがある。

母音間有声子音の鼻音前わたりは土佐方言でも聞かれる（haba||ha^{m}ba, sode||so^{n}de, 東京 aŋawa 吾川 || 土佐 a^{ŋ}ga:)。疑いもなくこれは東北方言の鼻音化とおなじく，対をなす有声子音が，その存在の初期，すなわち共通日本語時代に，「半鼻音的」（後述参照）であった結果である。

しかし，標準語および大部分の現代方言において，有声子音のこの鼻音化はまったくなくなっている（ŋ|g の問題は別である）。

対をなす有声子音のカテゴリーの構成と機能

東京方言では対をなす有声子音は b, d, ʒ(z), g(ŋ) とその「軟い」対応音 b′, ʒ́(ź), g′(ŋ′) からなる。音素 j は生理学的には ç に対応する有声音であるが，j と ç とは交替（対をなす有声音に典型的な，d|t の類の対応交替）しない。従って j はこのカテゴリーにふくめてはならない（ç=h′ の対応音は b′ である。なぜなら，ç は *p′ にさかのぼるからである。たとえば，ço:śi 拍子|te-b′o:śi 手拍子|aśi-b′o:śi 足拍子）。

おなじように w は φ の対応音ではない。φ は *p（u の前で）にさかのぼり，従って b と交替する。（たとえば，φuro 風呂|se:jo:buro 西洋風呂）。w と φ とはちがった母音の音節でみられる（φ は φu[:] という音節においてのみ。しかし *wu は不可能である。ちょうど東京方言において wa があるのに *φa が不可能であるように）。この事情のため φ—w は対をなしえない。しかし，唇音の組織の起源を説明するときはもちろん φ と w（それと同時に，また母音 u）との相互依存を考慮しなければならない。対を

なす有声子音は *pa 歯|muśi-ba 虫歯，take 竹|a^{w}o-dake 青竹，sake 酒|ama-zake 甘酒，asâ 朝，ka^{w}o 顔|asa-ga^{w}o 朝顔という共通日本語タイプの合成語をつくるとき形態論化される対応音交替に利用される。従ってこの交替には四つの対 p|b, t|d, s|z, k|g（共通日本語の状態）が参加していたのである。

しかし，これらの交替の項は無声音，有声音では別々の変化をしたから，現代ではこれらの交替の一部は本来の統一的な（そしてすべての対において一定した）対応音区別徴候――有声性のモメント――を失い，h|b（*p|b の代わり），ç|b′（*p′|b′ の代わり）の類のいわば「死んだにごり」の形で生きつづけている。

東京方言では上にあげた四つの対の痕跡は次の交替となった。

(1) *p|*b から：

h|b たとえば ha歯|muśi-ba 虫歯。a, o, e の前で *p が φ となり，さらに h となったためである。

φ|b たとえば φuru 振ル，連用形 振リ φuri|hanaśi-buri 話シ振リ，*p が u の前で φ になったため。

ç|b たとえば çi 日|çi-bi 日日（*pi-bi から） i の前で *p が p′>*φ′>h′=ç となったため。ç の独立形（i の前でなく）でもおなじ。たとえば ço：śi 拍子|teb′o śi 手拍子（çaku 百|ropp′aku 六百|samb′aku 三百における ç|pp′|b′ の交替は起源がちがう。個々の子音にかんする章の p についての説明参照）；

(2) t|d から：

t|d は a, o, e の前では保たれている。たとえば，take 竹|a^{w}o-dake 青竹；c|ʒ(z)。この場合有声音は随意的に破擦音 ʒ(=dz) とマサツ音 z との間を変動する。たとえば cum-u 積ム，連用形 積ミ cumi|ho-ʒumi 穂積（姓）。tu>cu, du>ʒu という変化，つまり u の前における t, d の破擦音化による。そのあとで ʒ はマサツ音 z と収斂して，破擦音とマサツ音の間を動揺するにいたった（他方 c は閉鎖部分を失うことはできない）；

ć|ʒ́(ź)。ここでは ʒ́(=d͜ź) は随意的に閉鎖部分を失う。たとえば長崎方言の後置詞 -ʒ́u：<cu：「中」（たとえば go: -ʒ́u：郷中）。これは t′, d′ が（i の前で，破擦音化したためである。すなわち，*ti, *di>ći, ʒ́i。独立形では

主にシナ語からきた形態素において)。その後で ʒ́ はマサツ音 ź (ジにおける ź から) と収斂し，マサツ音と破擦音との間を変動するようになった。

(3) s|z から：

s|ʒ(z) では ʒ が破擦音とマサツ音との間を動揺する。たとえば sake 酒|ama-ʒake 甘酒。これはすべての *z が ʒ(du>dᶻu>ʒu) と収斂したためである；

ś|ʒ́(ź) 有声音は〔村山。破擦音とマサツ音との間を〕変動する。たとえば siro 白|me-ʒ́iro 目白，または śu：ʒ́u：no 種々ノ，〔村山。śuʒ́uno 種々ノとあるべきところ〕。これは i の前で s, z が「軟く」なり，s′，z′ が ś, ʒ́ (ローマ字では sh と j) に移り，ついでジとヂが収斂したためである。

(4) k|g から：

k|ŋ たとえば kawa||jama-ŋawa 山川 語頭でないすべての g の代わりに ŋ があらわれるためである。

k′|ŋ′ i の前で。ki 木||janaŋi 柳 (おなじ理由による)。

以上にあげた交替のうち，ひとつだけ，すなわち take 竹|awodake(7) の t|d だけが古い姿を保存した。これらの交替はもちろん歴史的な交替である (音声学的な交替でない) が，類推によって，新しい合成語 (シナ語からの借用語をもふくむ) における新しいステムにも及ぼされる。そして合成語全体 (amaʒake 甘酒，jamaŋawa 山川) をひとつの語 (合成語) として統一するのに役立つ (これはアクセントが統一されることと共に，ちょうどウラルアルタイ諸語で母音調和と統一的アクセントとが語の統一を達成するものとおなじ役割をはたす)。

東京方言の対の有声子音の交替は他の多くの方言でもおなじである。ただいくつかの場合にだけ，それ以上の変化が見られる。たとえば，長崎県の田舎の方言の一部では t|d の交替が t|r となっている。たとえば take 竹|aʷorake 青竹。これは d × r>r という収斂による。

「無声｜有声」の型の交替の形態論的な位置は，二つの単語から成る合成語――何らかの別の複雑な語ではない――第２項語頭と規定される。そこで，たとえば，ステムに接頭辞がついたときは，音声学的条件は一見，合成語の場合とおなじで，母音間に立つがステムの語頭子音が有声化することはない (o-tośi お年，çito-ŋorośi 人殺シ|korosu 殺ス)。なるほど接頭辞 o：(*Γo

ʟpo 大）と ko-(*⌈koʟ 子＞小）がつくとき，有声化がおこる。たとえば，o：baŋ 大判，kobaŋ 小判，＜*paŋ。しかしこれは，見かけだけの接頭辞である。歴史的にみて o:- と ko- は接頭辞でなくて，たんに語彙ステムである。o:-（大）は，ama-zake 甘酒の ama- とおなじ種類に属する形容詞ステムである。o:-（大）の古い形は，opo-si|opo-ki|opo-ku である。また ko- は名詞⌈koʟ 子＞小[8] である。o:- と ko- とはアクセントによっても接頭辞と異なる。*⌈oʟpo（＞土佐「oʟ:）と「ko- は，各々の語彙形態素のように，高いトーンのモメントを内包しているが，接頭辞はそうではない（敬語の o|- と強調形 ma-⌈kku⌉ro 真黒の ma|- 参照)。

真の接頭辞がつくときステムの語頭子音が有声化しないのとまったくおなじく，接尾辞がつくときも接尾辞の語頭子音が有声化しないはずである（共同格の to, 主格の *pa＞wa は do, ba とはならない／。なるほど，仮定法のダブレット *-pa *-ba の形で有声化するケースがある：土佐 nar'a＜nare-pa（成れば)，他方長崎は nare：ba；しかし接尾辞の体系にかんする一般的結論を下せるほど，それは典型的ではない)。

重複形においてもふつうは有声化がおこらなかったことを述べておこう。重複形の古いタイプを保存した擬態語がそれを証明している（pikapika であって pikabika ではない)。重複形による複数（*sima-zima 島島，*pi-bi 日日）だけは pikapika 型の重複からきり離れて，合成語として受けとめられ（そのステムが合成語をつくるようなふつうの名詞ステムであったため)，従って第２項の無声の語頭子音が有声化したのである。

こういうわけで「無声―有声」型の交替は２項からなる合成語の特徴であり（muśi-ba 虫歯または asa-gaʷo 朝顔)，有声化の音声学的説明のための結合的条件をどこにもとめるべきかを示している。

対の有声子音のカテゴリーの起源

合成語において無声子音が有声子音と交替すること，また対の有声子音が割合少ないこと，そして，有声子音が一定の，すなわち語中の位置と結びついていること（主として語彙形態素の第２音節。語頭において，共通日本語の対の有声子音の例をみつけることはできない[9]）から，対の有声子音が派

生的であることがわかる。

しかし，ステムが合成語第2項となるときそのステムの語頭の無声子音が母音間の位置に立つとき，有声化したために有声子音が発達した（V+tV>VdV[(10)]）と考えてはならない。もしそうなら，母音間の無声子音はみんな有声化したであろう（すべての母音間の無声子音にとって音声学的条件は同一であったから）。

対をなす有声子音の源泉は別のものであった。その源泉というのは「鼻音+無声子音」のコンビにあった。このコンビは対応する有声「半鼻音」によって置きかえられた。mp>mb=^{m}b，nt>nd=^{n}d，ŋk>ŋg=^{ŋ}g（これとおなじように近代ギリシア語において有声閉鎖音がつくられた。たとえば古代ギリシアのパンフィリー方言における tonpatèra>tombatera）。このことは（母音間の）有声子音の共通日本語的鼻音化によって示される。古風な土佐方言で鼻音化が保存され，とくに有利な条件のもとで東北方言で保有されている。また *no⌈do 喉<*no⌈m(i)-to⌉ 飲ミ門，abari 網針<*am(i)-pari 編ミ針などの語源も共通日本語の鼻音化を示している。

第1項末に鼻音（そして第2項の語頭に無声子音）のある合成語もこのような mp>b または ng>g のタイプの音結合であった。たとえば *asamkapo（朝顔）。*asam 朝は京都方言の下降的上昇調 asâ と朝鮮語 ač'ɐm 朝から復元される。.. asaŋka…>asaga と並行して asam>asâ が生じた。asa-gapo と切れるという観念が生まれた。そこで合成語における無声子音，有声子音の交替の一般的なタイプとして -g|k（asa-gapo 朝顔|kapo 顔）の交替がうまれる。この交替は第1項が鼻音に終わらないような合成語（たとえば so-date[-ru] 育テル。語源的には「自分の近くに立てる」）にも及ぼされた。すなわち，音声学的に有声化を保証しないような母音間の位置にも及ぼされた。以上が，「無声—有声」のタイプの交替の説明である〔村山。ソダテルに関する語源解釈は確実でない〕。

かくて，対をなす有声子音の起源は「鼻音+無声子音」という結合と関連しているが，対の有声子音という新しいカテゴリーが日本語に出現してからも，このような結合は i が消滅する場合（たとえば am[i]-pari>abari 網針）に発生しつづけ，また隣接する鼻音と無声子音とが単一の（半鼻音的）有声子音に転化する法則は四段活用動詞の過去形が短縮する時代にまで作用

しつづけた（amita>amda> 西日本語 *au̯da>o：da，東日本語 anda[11]編ンダ）ので，有声子音をうけとった最初の世代において，対の有声子音 b，d，g，z の形成にまさにどんな形（「鼻音＋無声子音」に由来する有声子音をふくむところの）が参加していたのか，我々はしばしば指摘しえない。おそらく，たとえば先史時代のシナ語からの借用語 *tan-bi>日本語（京都方言）tabî「足袋」〔村山。単皮と解したのであろうか〕は「鼻音＋無声子音」から単一の音素（フオネーマ）が出現するこのプロセスに参加したかもしれない【この場合，有声のbはすでにシナ語の祖形に存在していた。そこで，厳密に音声学的には次のような順序を仮定できる：シナ語 tan-bi>日本語 tampi>ta^{m}bî（または tambi）>tabî。おそらく tambi と発音されたであろうが *tampi の形を示すわけは，bという音素（フオネーマ）がまだ存在しなくて，音素pの結合的な有声化バリアントとしてのみ存在しえた時代が考えられるためである】。しかし，たとえば φuʒukue（フヅクエ）<φumi-cukue（フミツクエ）文机は *pu^{n}duk…（pum[i]tuk…に由来する）のd（それがやがて ʒ となった）をいつの時代にうけとったかはわからない（それは，pumi の i が消滅した時期に依存する）。

b, d, g, z が音声体系に出現してから，これらの音はもちろん，擬態・擬声語の材料としても用いられた【たとえば，擬声語に由来する九州の beko（ベコ）||東北方言 bigo<「be-ko」。この語の構成については擬声語 ni(j)a-ni(j)a からつくられた neko 猫（ただしアクセントはちがう）参照】。

対の有声子音のもうひとつの有力な源泉はシナ語からの借用語である。呉音ではシナ語の有声子音に応じ，また漢音ではシナ語の鼻音に応じて（馬 呉音メ，漢音バ）。

九州方言（熊本，薩摩など）だけの第3の源泉はシナ語，ヨーロッパ語からの借用語の語頭の r（本来 l）を d（さらにその発展）とおき換えたことである。熊本 daib'o：癩病，dampa ランプ。geŋge 蓮花（レンゲ）では r は次の音節に同化して g となった。

他の散発的な源泉もある。たとえば長崎県三重村方言では目的を表わす接尾辞 -g'a：（ダブレットは ja：）において j が重なるときその代わりに「軟い」g' が現われた。たとえば，ki：g'a「切りへは」（切るためには）。これは kiri-j(e)ja<…-je-(w)a<*pe-pa に由来する。（ふつうの日本語 ni-(w)a に由来する -n'a 参照）。

対をなす有声子音の共通日本語的半鼻音的性格を示すもの

有声閉鎖音 b, d, g(＝ᵐb, ⁿd, ᵑg) または m͜b, n͜d, ŋg (フィージー語，その他のメラネシア系諸語におけるこのカテゴリーの性質参照(12)) が本源的に鼻音化していたことは第1に，現代の東北諸方言および土佐方言によって示される〔村山。訳者の知る四国の宇和島出身のS教授(京都女子大学)の言葉にもそれがみられる〕。第2に，知られている形態論的事実および史的音声学的事実によって示される。第3に，借用語によって示される。さらに「鼻音＋無声子音」からの有声子音の起源にもとづいて，有声子音の鼻音化を期待すべきであろう (nodo 喉|nom-u 飲ムにおける d|m の類の古い交替，または *「midu˥ 水とたとえば「mina-moto˥ 源の「mina˥ における d|n の交替が直接にこの鼻音化を物語っている)。

上に述べたように，土佐方言では母音間の有声閉鎖音 b, d, g (土佐では東京の ŋ が g) のはじめと，従って，先行母音の終わりが鼻音化している：aᵐba, aⁿda, aᵑga (a は任意の母音を表わすものとする)；これと関連して，土佐の母音は (東北方言の母音とおなじく) 一般に鼻音的性質をおびており，俗に「土佐の音(オン)は鼻にかかる」といわれるのである。

有声子音のこの鼻音的前わたり (Vorschlag) (ᵐ,ⁿ,ᵑ) は全く意識されていず，音を区別する上のモメントではない。

東北諸方言 (たとえば，秋田，青森，岩手，山形) では事情がちがう。ここでは母音間の有声子音の鼻音的なはじまり (「有声的半鼻音」) ᵐb, ⁿd, ⁿʒ (これは *u, *i の前の語中の *d に由来する。すなわち ⁿʒï<*du, *di。又は任意の母音の前の語中の z に由来する) はこれらの音素(フォネーマ)の原則的に重要な徴候であり (これらの音素は語頭には見られない)，東北諸方言で母音間で「半有声化した」(しかし鼻音的モメントのない) 古代の無声子音から区別される上に重要である。かくて，たとえば古代の *pata (旗) は東北諸方言で φada (φa'da) または hada (ha'da) で，haⁿda (膚) (<*pada||標準日本語 hada) と鼻音的前わたりがないことで区別される。d 自身 (初めの部分，すなわち内破を除いた部分) の有声性はハタ旗(φa'da)とハダ膚(φaⁿda)

ではおなじである。したがって，鼻音化のモメントがなければ，こうした一対の語を区別することはできないだろう。鼻音的前わたりが音素区別にとって重要であるために，共通日本語に存在していた鼻音的前わたりは東北諸方言で弱まらなかった（そして消滅しなかった。東京，京都，すべての南方言では消滅した)。しかし，反対に，東北諸方言——そこでは「有声半鼻音」の鼻音的わたりが土佐の a^{m}ba, a^{n}da, a^{ŋ}ga における弱い ^{m,n,ŋ} よりもはるかに顕著である。土佐では ^{m,n,ŋ} は注意して聞かないといけない——において VNd と V^{n}d というタイプの結合が収斂したため，鼻音的わたりが強まったのかもしれない。

共通日本語の対をなす有声子音が鼻音的性格をおびていたことを示すには，（土佐の資料と関連して）東北方言について述べたことで十分であるが，この方言的光景を補うものとして次のものをあげることができる。

土佐の ^{ŋ}g（語中における）とちがって東北方言は後舌子音の系列において「有声半鼻音」^{ŋ}g でなくて鼻音的 ŋ をもっている〔土佐「na$_{\llcorner}$^{ŋ}gai 長イ|南方言 naga-⌈ka（または naŋka)||東北方言 naŋɛ。cf. 京都「na$_{\llcorner}$ŋai||東京 na⌈ŋai 長イ〕。これはつぎのように説明される。対をなす有声子音の形成の時代にたとえば jana-gi 柳（ヤナギ）(ki 木）のような場合に起った *ŋ, *g(=^{ŋ}g) の収斂はすべての方言で生じることになったが一部の方言（南方言および土佐）では g の方向に，他の方言，すなわち東方言（東京方言，東北方言）では ŋ の方向に進んだという説明がそれである。

東北諸方言で音素区別の機能が有声性のモメントから鼻音化のモメント (^{m}b, ^{n}d などにおける）に移ったのは，母音間の無声子音が有声化した（いわゆる「半有声化した」: ata>a^{t}da, aka>a^{k}ga）ためであるが，これは東北方言のアイヌ的人種サブストレータムの影響によると考えたい。

アイヌ語には喉の働きによる（無声，有声による）子音の対をなす区分は存在しない。しかし，原則的に無声の閉鎖音（p, t, k）は結合的に随意的に有声的となり,[1] 語中音としては「半有声音」の性格がふつうである（パシィ Passy の “Revue phonétique” におけるアイヌ語音声学概観の実験音声学資料参照。またアイヌ語「火」を，たとえばドブロトヴォルスキー〔の著わした『アイヌ・ロシア語辞典』，カザン，1875年。〕が аби（アピ），апи（アピ）と二様に転写していること参照)。日本語の単語をうけとめるとき，アイヌの発音では aka,

ata などを当然 $a^{k}ga$, $a^{t}da$ と変えなければならなかった。物理的に半有声の（音素的にみると，アイヌ語の話し手には有声性の点がどうでもよい）子音で発音された。日本人とアイヌが混血して，アイヌが日本語を話すとき，日本人は（アイヌの発音する）$a^{k}ga$, $a^{t}da$ という複合を聞く場合，自分たちの無声の k, t とちがった，日本語の語頭の有声子音に相当した音を見出したのである。そこで日本人，アイヌ混血の結果として生じた東北方言の音声体系に「半有声子音」のカテゴリーが出現した。一方ではシナ語からの借用語にせよ，語頭の有声子音が，また他方，日本語の母音間の無声子音（今や半有声音化した）がこの「半有声子音」のカテゴリーに入ったのである。それとは原則的にちがうものとなった語頭の無声子音（もちろんアイヌの発音で有声音化しなかった）は収縮した日本語の長い子音 kk, tt, pp（これらは長かったためにもちろん有声化しなかった）とともに他のカテゴリー，すなわち，無声子音（ふつう有気の）のカテゴリーに入った。語中の有声音――「有声半鼻音」（^{n}d など）――はどうなったかといえば，アイヌは（それを無声子音から区別しなければならなかったので）「鼻音＋閉鎖音」という複合の形でのみうけとめたのである[13]。（日本人がアイヌの口から日本語の）これらのnd などをうけとめるときには，これらの場合に単一の有声子音（半鼻音であるが）をみるのになれてきた日本人は前述の「有声半鼻音」（^{n}d など）のカテゴリーをつくった。鼻音化は先行母音末に事実上，移された。このようにして，鼻音化はすでに東北方言母音のノーマルな特徴となり，対をなさない有声音 r, j, w をもふくめてあらゆる有声音の前の位置でも母音の鼻音化が起こった［秋田では VrV, VjV, VwV というコンビは $V^{n}rV$, $V^{\eta}jV$, $V^{\eta}wV$ と発音される。もっともこの場合鼻音要素は対をなす有声子音の場合より微弱で，原則的な重要性をもたないが。これと関連して，鼻音化した終わりが母音のコンスタントな特徴となった。以前の無声子音（現在の東北方言の「半有声子音」^{t}d, ^{k}g など，または無声有気子音）の前の位置以外ではすべての位置でそうである。母音は語末でも，単独の発音でも鼻音化して発音される］。

共通日本語の有声子音が半鼻音的であったことを間接に証明する多数の史的音声学的事実から四段活用動詞過去形（およびその他の形）における b(i)t>md>ṷd, nd の t の有声化，南方言における m||b の対応，長崎の方言の名詞愛称・指小形における mb|b, nr|r などの交替だけをとりあげよう。

(1) 現代の動詞活用には次の交替がみられる：b に終わる動詞現在形では東諸方言において b|nd，西方言，南方言において b|d の交替が見られる。たとえば東京 $\overline{\text{jobu}}$ 呼ブ，京都「jobu˥，長崎 jo˪bu。過去形(および副動詞形)は-nd- または -d-。東京 jond-a 呼ンダ，京都「jo:˪d-a，長崎 jo:˪d-a と jo:˪ra。つまり m に終わるステムとおなじである。現在形 東京「jom-u 読ム，京都 jo「m-u，長崎 jo「m-u。過去形は東京「jonda 読ンダ，京都 jo:「da (jo「:˪da から。土佐はこの形)，長崎 jo:˪da または jo:˪ra。呼ブと読ムとが同じになってしまったことは b(i)t と m(i)t とが収斂して Md となった (西方言，南方言では Md が ud となり，東方言では Md が nd となり，琉球語では単に dとなった——jud-a-ŋ<*joMd-a-) ことによって説明される。しかしこの収斂とそれにつづく b(i)t>Md という変化は b が「半鼻音」mb でなかったなら不可能だったろう。共通日本語 *b が「半鼻音」的性格をおびていたとみれば，mb(i)t>Md という変化はまったく理解できる：三つの物理的子音要素—mbt—の融合のさいに，第2のもの，すなわち b は消え，m が t に隣接するにいたり (そこで m(i)t×b(i)t の収斂が達せられた)，無声子音の前のあらゆる鼻音とおなじく，この無声子音を有声化するのである：Md (物理的には Mnd) がうまれ，それは東方言では nd，西方言では ud，琉球では d となったのである。

この音声学的プロセス (b(i)t>Md) は，動詞過去形の資料のほか，-bito (*pito の p が有声化したもの)「人」を第2項とする合成語の形によっても実証される。ここでも同じような方言間の対応がみられる。すなわち，東方言 nd||西方言，南方言 *u̯d|| 琉球 d。たとえば *aki-b(i)to「商人(アキビト)」>東方言 akindo，長崎 ak'u:ro<*akiudo. cf. 長崎 kar'u:ro<kariudo<karib(i)to 猟人。琉球では先行母音が長くならないで (したがって *u のない) d。nusudu 盗人<*nusub^{m}b(i)to。bt が Md に変わること (Md から琉球語をもふくめてすべての方言対応が説明できる。というのは琉球語ではMは痕跡を残さずに常に消えるから。この点日本語 M>u とはちがう。cf. 意志・未来形(サブジャンクチブ) 琉球 śira || 日本 śiro：<sirau<siraM<siramu 知ラム) は *b=mb という条件のもとでのみ理解できる。

(2) 九州および琉球の一連の語には普通の日本諸方言の m に対応する b がみられる。ふつうは短い狭い母音 (u, i) をふくむ音節において，あるい

は母音消滅に有利とみえるおなじ位置に立つ他の母音をふくむ音節においてである。典型的な例として琉球「kabi||日本語 kami 紙（これはシナ語からの古い借用語で，シナ語の祖形は *kam であり，開音節法則によって kami となった。b でなく *m が古いのである）をとりあげよう〔村山。ポリワーノフが「紙」を表わす琉球語を「kabi と表わしていることは，琉球語のアクセントを研究していたことを示すであろう〕。このような位置（鼻音プラス・ステム末の短い狭い母音）において，この音節は南方言グループでは，二重音の鼻音的要素に転化せねばならなかった（cf. 長崎 ʒ́en<ʒeni 銭（ぜに））から，m>b という変化はこの音節ゼロ傾向への抵抗とみることができる。しかしこの変化自体は，そのころ *b が（この方言グループにおいてさえも）「半鼻音」つまり mb であったという条件のもとでのみ推定可能である。もうひとつの例をあげよう。日本の人名 saburo:三郎は シナ語 samlaŋ に由来するが，samlaŋ>samblaM（シナ語 ŋ>日本語 *M は規則的である）>samburau>saburo: と解される。ここで m>mb=b という変化がなかったなら，琉球語のように音節数は減っていたろう（すなわち，シナ語 *sam「三」の *m の代わりにひとつの音節が現われなかったろう）。この人名の琉球における対応形は音節の数が少なく sanda: なのである（古い samlaŋ>sam(u)raM から直接来ている形である）。ここでは *M は琉球語でふつうのように，母音の長さ（随意的な）以外に痕跡を残していない。もうひとつの琉球語の形 sandu: の u: はo:<au̯<aM にさかのぼり，日本語の影響で出現したのである。このことは，sanda: にくらべて sandu: が〔村山。少ししか。原文に脱漏あり〕用いられないことで証明される。saburo:（三郎）||sanda: における bur||琉球 nd の対応は abura（油，脂）||琉球 anda||土佐 amura にもみられる（cf. 琉球-nda<mura は村の名前にみられる。*mura「村」）。

南方言 b||標準日本語 m という対応のいくつかのケースは独特な説明を要求するだろう（その説明は時にはかなり複雑であろう。西日本語 kumô||長崎 ko$_L$bu||琉球 ku: ba[14] 蜘蛛||朝鮮語 kɔmu〔村山。現代語 kəmi, 中期語 kəmïi〕，オーストロネシア諸語 kobu, gofu, kabokakkienなど〔村山。これらがオーストロネシア語族のどの言語のものか示されていない〕参照；または çimo 紐||九州 çibo）。しかし，とにかく m と b との結合的収斂の例であり，このことは南グループの最初のバリアントにおいてすら対をなす有声子音 *b

が鼻音的であったことを物語る。今では南グループは有声子音の鼻音化を全く失ってしまった。

長崎方言では人名の愛称・指小形をつくるときに（母音の長さの交替とともに）長い子音と短い子音との交替のやり方が用いられる。jośiʒo（ロシゾー）：〔村山。由蔵か〕からつくる jośśi:（ロッシー）。もし子音が有声であれば，長い子音の代わりに（長い有声子音はありえないから），鼻音＋有声子音という複合があらわれる（arata（アラタ）という人名から anra: がつくられる(15)）。

この現象（ここで形態論化されている有声子音|鼻音＋有声子音という交替）は，（対をなす）有声子音が半鼻音（mb, nd など）であった時代からの伝承によって説明可能である。無声子音の交替（jośiʒo:（ロシゾー）|jośśi:（ロッシー） における s|ss または ś|śś）に類推してつくられた有声子音の長いバリアントは，当然「N＋有声子音」グループと一致した。かくして，本来，対の有声子音に対してつくられたこの型の交替（*b＝mb|*b:＝mb, *d＝nd|*d:＝nd など）は，後に（いくつかの長崎方言で *d と *r とが r に収斂したさいに）すべての有声子音にひろまった。こういうわけで arata（アラタ） は anra:（アンラー） に変わったのである。

この現象と関連して，「九州方言の N＋有声子音||標準日本語の有声子音」という多数の対応もこの精神において解釈できる。これらの対応のうち「九州 ŋg||土佐 g（||東京 ŋ）」という対応がとくに頻繁である。九州の ŋg というタイプの複合――かつて「有声半鼻音」であった――は有声音素（フォネーマ）の偶然的な長いバリアントの歴史的継続とみることができる。

口蓋化（＝「軟い」）子音のカテゴリー

日本語の子音組織は，琉球方言および東北方言の行なわれる周辺地方を除いて，大部分の子音に非口蓋化（「硬い」）子音とそれに対応する口蓋化または口蓋的（「軟い」）子音という対をなす音（したがってカテゴリー）が存在するという意味で二元的と呼べる。（もちろん口蓋的 j は例外である。これはその基本的調音からみて「硬い」音の形では考えられない。w, φ, k^w, g^w も例外である。この四つの子音に対応する口蓋化子音は九州のいくつかの方言においてだけ私は知っている。たとえば長崎県三重村方言において）。

東京および京都の（したがって標準の）子音組織では次の，対をなす「軟

い」音素がある(16)。

短い　p′, b′, m′, ś, ć, ʒ́(ź)(17), r′, n′, ç, k′, g′, ŋ′

長い　pp′(=p′:), śś, tc′, kk′ (=k′:)

〔註〕長い「軟い」鼻音 mm′, nn′, ŋŋ′ は音素としては N+m′, N+n′, N+ŋ′ と解される（たとえば niŋŋ′o: の ŋŋ′ がそれ。niŋŋ′o:=niNŋ′o:)。

中舌性のモメントによるそれらの交替は次のとおり。

p—p′, b—b′, m—m′, s—ś, r—r′, n—n′, h—ç, k—k′, g—g′, ŋ—ŋ′,

t, c > ć,　d, ʒ > ʒ́（長子音の交替もおなじ。たとえば。tt, tc > tć　itte（言ッテ）|| itća（言ッチャ）

<itte-wa における tt||tć)。

かくて，ć は t にも c にも対応する「軟い」音である。ʒ́はd および ʒ に対応する「軟い」音である（ここには土佐，長崎との根本的なちがいがある)。

ここにあげた「軟い」子音のうち，厳密な意味での口蓋化子音は p′（および p′:), b′, m′, r′, n′, k′（および k′:), g′, ŋ′ である。ś（および śś), ć (tć), ʒ́ (z) と ç は単にそれに対応する「硬い」子音を中舌接近によって複雑にしたというのでなく（つまり，p′, b′ などが「中舌化」しているのとはちがって)，口蓋的すなわち中舌的である。というのは狭めおよび閉鎖の場所はすでに舌背の中部にある（ç の場合）か，または舌背の中部に非常に近いところにある（舌背の軟い ś, ć, ʒ́, z の場合）からである(18)。そして，s の「軟い」バリアント s′ が舌背的 ś に変質するさいに，この ś が標準日本語およびひろく多くの方言において ç と結合的に（したがって部分的に。しかしいくつかの方言では自然発生的に）収斂するための有利な条件がえられる：cf. 京都方言 śtô<「ç(i)˪to<*「pi˪to 人，長崎方言 -açta<-aśta<-aśeta 動詞使役形過去（ś と ç との混同の結合的条件となるのはふつう t, c, ć の前の位置である)；さらに秋田方言における sy<*pi˪「日」参照。舌背的 ś と ç との合流に似ているのは，ドイツ語のich（イヒ）-Laut（音）〔村山。ç〕の方言的なシュという発音（ich（イヒ）=isch（イシュ））である（各々の「軟い」子音の特質に関して詳しいことは個々の子音に関する部分参照)。

標準語で「軟い」子音が現われる位置は第 1 に i(i:) の前である。i の前で「硬い」子音は不可能である【東京方言の発音では i の前では対をなす

「硬い」子音も不可能であり，中舌性の点で対をなさない子音 w, φ, j も不可能である（したがって，ku|k′i タイプの分岐は生きた音声学的交替である)〕。第2に，母音 a（および a:), o:（および o), u:（および u）の前の位置である。短い o, u の前で「軟い子音」をもつ音節は統計的にはある程度異常である。e の前では東京方言では母音はふつう「硬い」。この点は長崎方言やその他の九州方言とちがう（京都では「硬い」)(19)。（短い）i を含む音節がその母音を失えば（アクセントのない音節において，東京方言のアクセントのない語の最後の音節ではちがう），独立の位置の「軟い子音」の新しいケースにつきあたるわけである。たとえば東京方言で「haś[i] 箸。しかし ha「śi 橋，a「śi「足」ではそうでない。「硬い」子音と「軟い」子音との交替はきわめて重要な形態論的な意義をもつ。たとえば，四段活用動詞（子音ステム основа на согласный）の終止形と連用形(-i）の区別において，両形の対立は実際上，-u, -i という接尾辞にあるのでなく――というのは -u, -i は発音から消えているからである――-u, -i に先行する子音（ステム末子音）における中舌の働きのモメントにある（s(u), ś(i) など）〔村山。ポリワーノフは四段活用動詞を子音に終わるステムとみていたことがここに示されている〕。

土佐方言では「軟い」子音は次のとおりである：p′, b′, m′, t′, d′, s′, z′, r′, ɲ, k′, g′, h′（および p′:, t′:, s′:, k′:)。つまり，配列は東京方言よりはるかに徹底している。すべての「軟い子音」は口蓋化子音であり（東京の ś, c, ʒ́ ような口蓋子音ではない），対応する硬い子音の変形である。例外は n に対する「軟い」ɲ（これは口蓋子音である。つまり中舌子音であって，「中舌化した」前舌音ではない）である（さらに，h′ の代わりの ç も例外であるかもしれない。私は土佐に対しては，事実をいくらか画一化して h′ と書く。しかし，土佐方言では ç は不可能だと断定しかねる)(20)。ɲ の出現，つまり n′>ɲ という変質は，対をなす「軟い」子音（pl.）の整合性を破るものであるが，それが出現したということは，土佐には ŋ′（のみならず，東京の ŋ に対応する ŋ）がなく，したがって n′ は他の音素(フォネーマ)と合流することなく，一般音声学的により典型的な様式である -ɲ- によっておきかえられたと説明される。

土佐方言における軟い子音の位置は標準語におけるとおなじである（ただ，

短い i の「脱落」はほとんどみられない。土佐「a˪s′i 足。as′ とはならない)。

長崎（三重村）方言にはつぎのような「軟い」子音がある：p′, b′, φ′, w′, m′, ś, ć, ʒ́ (ź), ç, k′, g′, kʷ′（=kч), gʷ′（=gч）（および p′:, tć, ś:, k′:, kʷ′:)。

このうち，口蓋音は ś, ć, ʒ́, (ź)（および tć, ś:)。東京方言とちがって，「軟い」子音は e (e:) の前にもある(21)。

ć は（t にではなく）c にだけ対応する軟い子音であり，ʒ́ (|ź) は ʒ にだけ対応する（この方言には音素 d は元来ない。d は r に合流した)。t は軟い対応音をもたない。形態論上 c|c′ の交替が要求される場合（たとえば a に終るステムの与格・場所格 jama|jam′a（山 ヤミャー）：山ニハ), *t′a または *ća: の代わりに tʻa：があらわれる (hata|hatʻa:)；おなじことは r と合流する前の d についてもいえる（今は ra|r′a:)。他の子音の交替 (jama|jam′a:, saru|sari:) に類推して，「軟い」子音 k′, w′, φ′, kʷ′, gʷ′ (kiwa|kiw′a:, s′e:φu|s′e:φi:, kʷa|kʷ′a：与格・場所格）がつくられたのは更新である。ロシア語の俗語で，несёшь（ネシローシ）（お前は運ぶ）などの影響をうけて пекёшь（ペキョーシ）〔村山。正しくは печёшь（ペチョーシ） お前は焼く〕，берегёшь（ベレギョーシ）〔村山。正しくは бережёшь（ベレジョーシ） お前は守る〕において軟い k′, g′ が出現したこと参照。

琉球（那覇）方言では二元的な子音体系はすでに単元的体系（「対をなす軟い子音」のない）によって置き換えられた。おなじことは東北諸方言でもみられる。しかし，これらの方言のいくつかでは「軟い」子音のカテゴリーの慣習がまったく出現しなかったのかもしれない。

日本語に対をなす軟い子音のカテゴリーが出現した時代は，それらの子音の光景は土佐方言に似ていたかもしれない（ただ，ɲ はなく，n′ であった)；s′>ś, t′>ć, z′>ź, d′>ʒ́ という変化は自然な音声学的な発展である。

周辺の方言たとえば琉球語(那覇方言)は子音組織を単純化した。(k′>ђ)×(t′>ć)>ć, (g′>ђ)×(d′>ʒ́)>ʒ́, (s′>ś)×s>s, (m′>n′)×n>n, r′×r×d>r/d), など。他方東北方言，たとえば米沢方言では r′×j>ð|j(r′o:rija>joðija 料理屋, juri>ðiði 百合), k′×t′>ћ (k′o:santo:共産党——ћosanto 又は ćosanto 東北人の発音）など子音組織を単純化したのは子音の二元体制の崩壊の道程における（標準日本語の状態とくらべて）一歩前進した段階を表わす

（この崩壊は将来，日本語の一般的運命であろうとおもう）。

口蓋化（対をなす「軟い」）子音のカテゴリーの起源

独立の位置における口蓋化子音はシナ語からの借用の第3の時期（すなわち漢音）とともにシナ語単語において日本語に出現する〔村山。第1期は先史時代，第2期は呉音の入って来た時期とみているようである〕。（それらが形態論化をともなって純日本語彙部分に浸透したのは後期の現象であって，長崎方言のような進歩的な方言においてだけひろく透浸した）。したがって，日本語における口蓋化子音の出現の原因はシナ語から取り入れた語のシナ語音声構成の直接の影響にあるとみることができる（シナ語の Ci̯V が C'V となる。たとえば日本の漢音 k'a＜シナ語ki̯a[22], śo:＜s'au＜シナ語＜si̯aŋ など）。そして，子音の新しいカテゴリーのこの形成は，渡来してきた中国の職人や僧侶の口から日本の口語に呉音時代の多くのシナ語が入りこんだときには実現されなかった（当時はこれらのシナ語は日本語の音声組織の習慣にしたがって口語にとり入れられたのである）。子音の新しいカテゴリーが形成されたのは，（中国書籍による）シナ語の大規模な学習がなされたころ，つまり漢音が拡まった時代なのである。日本における中国文化の中心（京都）から，口蓋化した子音をもつ語が他の方言にひろまって行った。尤もいくつかの東北方言は現代にいたるまでこのカテゴリー（全体）になじまなかったようであるが（詳しいことは個々の子音の章参照）。

唇音化後舌子音

シナ語の影響によるもうひとつのものは唇音化後舌子音 k^w, g^w（および東京方言のように ŋ が母音間の g にとりかわっているところでは語中の $ŋ^w$）が古代シナ語の ku̯, kʻu̯, gu̯, xu̯, *γu̯＞xu̯[23] の代わりにつくられたことである。その後，唇音化後舌子音は部分的には日本語の単語にも入りこむ。たとえば，長崎 k^wa＜kuwa 桑（k^wa：桑ニハ），琉球方言 mi:kk^{w}a＜mekura（盲），isig^{w}a：＞iśi-go-wa：石子ハ。しかし日本語においてシナ語の影響のもとに出現した唇音的後舌子音は方言の大部分において，また標準語におい

て保存されず，単純な後舌子音，k，g，ŋ と合流した。それが安定的であった地方は主に周辺である。すなわち南方言(九州，琉球)と東北方言である[24]。このことは唇の働きを最小にする一般的なプロセス（$k^w>k$，$g^w>g$はその部分的ケースである）が，とくに日本語領域の中央部（そのうち，とくに土佐と隣接地帯）ではげしかったことと関連しているとおもう。他のすべての点で変化の大きい周辺地方が唇の働きの点では保守的なのである。このことから，次のように結論できる。唇の働きの激減の傾向は純日本語の特徴である（日本語がちがった人種基盤の上に行なわれるようになった周辺の地方では唇の働きの減退の傾向の実現は抑制された)。この結論は比較言語学的に見て重要である。というのは，唇の働きの減退の傾向はポリネシア諸語の一定の地域において観察されるからである（子音pの部分ではポリネシア語は api>afi>ahi の変化を示すこと参照)。

原　注

(1)　私が集めた材料の僅かな部分は次のものに発表した。「日本方言の心理音声学的観察」(ペトログラード，1917年)。「日本方言学資料。長崎県西彼杵郡三重村の方言。テクストとロシア語訳」（帝室ロシア考古学協会東洋部報，33巻Ⅰ—Ⅱ号，ペトログラード，1915年)。「東京方言における音楽的アクセント」(帝室科学アカデミー報，第6シリーズ，9巻，1915年)。「日本語の2音節ステム形容詞のアクセント」（ロシア科学アカデミー報，第6シリーズ，11巻，1917年)。「日本語・マライ諸語並行現象のひとつ」（同上，12巻，1918年)。

(2)　この研究に関する私の報告は「中央アジア大学紀要」1924年2月，参照。〔村山。1924年，No. 4。本書80ページ以下〕

(3)　L. V. シチェルバ「転写の問題について」（ロシア語・ロシア文学部報，ペトログラード，1916年）参照。

(4)　〔村山，ポリワーノフのこの論文の編集者の注。実際に書いたのはセロミャトニコフ氏と思われる。〕

ポリワーノフは m̥ が音節 ma, me の前のアクセントのない位置でのみ見うけられ，mo, mi, mu の前で見うけられないことに気付かなかった。m̥「mareru（生マレル）であるのに，それと同一のルートの語 umu（生ム)，umi（生ミ）では u がみられる。従って，m̥ は少なくとも標準語では，独立の音素というよりは，むしろuの位置的バリアントである。

(5)　E. D. ポリワーノフ「日本語・マライ語並行現象のひとつ」（ロシア科学アカデ

ミー報，ペトログラード，1918年）参照。

〔以下は編集者の注。おそらくセロミャトニコフ氏の書いたもの〕しかし日本語の材料ではこのような中間段階はみとめられない。その上，ポリワーノフは pikkari と pikapika とは意味がちがうことを忘れている。pikapika は多回動作に関するのに，pikkari は1回きりの動作に関することを忘れている（詳しいことは，ソ連科学アカデミー東洋学研究所紀要，第4巻，1952年，pp. 306～309 参照）。

(6)　〔以下は編集者の注〕不適当な例。「しばしば」を意味する語からは一回性の意味をもつ形はつくりえないから。だから śibbari だけでなく，śibari も実在しない。
cf. gabugabu（ガブガブ） nomu（飲ム）—— gaburito nomikomu ガブリと飲みこむ。

(7)　しかしこの交替は後でみるように厳密には共通日本語の形に対応しない。共通日本語では有声の d は鼻音的 ⁿd であった。

(8)　琉球語ではステム ko(>gwa) は指小形の接尾辞となり，東北方言では後置的小詞（-k'o）である。琉球語の形（gʷa）は *-go-wa に由来する〔村山。沖縄語辞典 p. 196 は -gwaa（接尾）〔小〕<Qkwa（子）となす〕。

(9)　語頭にそれが現われるのは先行の音節形成的鼻音が消えた結果である。たとえば de-ru 出ル（cf. 琉球 ŋ̥śi-ju-ŋ||古典日本語 idu-ru 出ヅル）。他の場合には，南諸方言の語頭の有声音はふつう他の方言の無声子音に対応する。琉球 daki|| 日本語 take 竹，九州 gane 蟹||東京 kani，九州 gamme 亀||東京 kame，九州 ʒuna 砂||東京 suna。時には九州の有声子音をもつ形が東北方言の形によって支持される。たとえば，長崎 biri<biru 蛭，東北の南部（藩）方言で bīro(<biru)，津軽方言で sīro。これは中央諸方言の語形とおなじく *pirû にさかのぼる。京都は çirû||東京「çiru。語頭の b は九州および東北方言の beko にもみられる。長崎方言では「子牛」であるが東北方言 bigo<beko は「牛」である（アクセントは長崎の尻低型に規則的に対応する）。しかし，この語は擬声語である。そのことは長崎方言の be:˪be:˩，bebeŋko というダブレット（cf. bi:bi: あひる）によって証明される。時には偶然に南方言が無声子音をもち，中央諸方言が有声音をもつことがある。たとえば，biwa 枇杷は九州方言で φiwa または çiwa（そこで〔ソ連〕極東で xiva（ヒワ）。長崎人から入ったことば）<*pipa。

方言，ことに南方言では，語頭の有声子音のうちよくみられるのは後舌子音 g である。

(10)　V は任意の母音を表わす。

(11)　この法則の作用の停止を示す資料は mp の類の結合を含むロマン系諸語からのいくつかの借用語（kompeito: 金米糖のような）である。hompu のようなシナ語の音節の合成において，この「鼻音＋無声子音」グループが後期に現われる。このような合成は日本人が後期につくったのである。

(12)　ガーベレンツ『メラネシア諸語』（アピ島のセサケ語など）参照〔村山。H. C. von der Gabelentz. Die melanesischen Sprachen. Leipzig, 1873年。訳者の手許にそ

のコピーあり。ポリワーノフは R. Codrington. The Melanesian Languages. Oxford, 1885年は利用しなかった〕。

(13) これと関連してもちろん $V^{n}d$ などと，わりあいまれな VNd (=Vnd) 型の日本語の複合との収斂もおこった。

(14) これに対応する京都の語形の第2音節の「下降的上昇」（および長崎の kobu における母音 o, u）と関連して，この語の琉球語の長い母音は先日本語の音節末の鼻音に関する章で取り扱わなければならない。

(15) 例はサンソム，長崎地方の方言的慣用（日本アジア協会報，東京）参照。

(16) すなわち対応する「硬い」——非口蓋化——子音に対立するもの。

(17) 「硬い」破擦音 ʒ(z)=d^{z}(z) とおなじように，音素 ʒ́, より正確には ʒ́(ź) または dź(ź) は結合的・随意的に破擦音 ʒ́=dź とマサツ音 (ź) との間を動揺する。

(18) ロシア語 тетя, дядя, семь, зять に現われる口蓋化中舌的（舌尖的） t′, d′, s′, z′ がポーランド語および白ロシア語で舌背的（破擦音及びマサツ音）に変化したのはこれに類する。だから，日本語の ś（ローマ字では sh）と ć（ローマ字 ch）はロシア語の сь, ть よりも，それに対応するポーランド語の音に近いことがわかる。

(19) E. Satow〔村山。1843～1929年，イギリスの外交官。日本学者。〕は se, ze の代わりに she, je と発音するのは「西方言」だとするが誤りである。それは南方言の特殊性である（拙著『音声心理学的観察』第2章のはじめ参照)。

(20) しかし，実際には h′ と ç とを区別する規準はかなり覚束ない。いずれにせよ，土佐の h′ は s′ に移行しない（しかるに京都では śtô<ᒥçiᒪto)。

(21) 詳しいことは，E. D. ポリワーノフ『音声心理学的な日本方言観察』第1章参照。

(22) 呉音では i̯（後にシナ語で消えたものも含めて）は次の a と融合して e となる。たとえば，me<mi̯a 馬（先史時代に借用したのは *mra> 日本語 mma>ᒥm̩ᒪma>東京m̩ᒥma。合成語では ko-ma 駒。漢音は ba<シナ語 ma。シナ語の4つの異なった日本語形があるわけである)〔村山。ソマ，呉音メ，漢音バ，コ・マのマ〕。

(23) γ は呉音において（u̯ の前で）ふつうは子音ゼロとなる。たとえば γu̯ai 會 呉音we>e。漢音の源ではすでに xu̯ai̯ であったので日本で k^{w}ai（東京 kai）となった。北京語の形 xui̯ は xu̯ai̯ から，a の代わりに u が母音化して生じたのである。

(24) 1914 年度音韻調査報告にこの現象（k^{w}>k, g^{w}>g）の詳しい方言地図が発表された。

10.　日本語，琉球語音声比較概観

訳者はしがき

この論文はポリワーノフの最初の学術論文であって，帝室ロシア考古学協会東洋部報（ЗВОРАО）第23巻Ⅰ〜Ⅱ号，ペテルブルグ1914年，173〜190ページに発表された。24歳のときの労作である。「N. M. ポポフ，I. A. ボードゥエン・ド・クルトネー，L. V. シチェルバ，A. D. ルードネフおよび A. I イワノフに対し，原稿を読みかつ有益な指示を与えたことに対して感謝する」と冒頭に述べている。筆者は1969年７月９日，モスクワの日本学者セロミャトニコフ氏より，コピーを送っていただいた。

I

琉球語というのは，日本の南西に横たわる琉球諸島の住民が話す諸方言の全体と解する必要があろう。これらの島はリューチュー諸島とか，リケイ諸島とも呼ばれ，日本の沖縄県（主島の名による）となっている。これらの方言が日本語と同系であることは疑いない。形態素の90％はたやすく日本語に対応形が見出され，多くの語が琉球語，日本語でおなじである。時には類似しているもののどれが〔日・琉語〕統一時代にさかのぼるのか，あるいは音声発達の並行性によるのか，またどれが1609年日本に占領されてからの日本語の混入の結果であるのか，それを決定することができない。しかし，全体として，日本人が琉球人の言うことを理解するのは，非常にむずかしい。たとえば，日本語の分析的な結合に対応して，琉球語には新しい曲折形が存在する。琉球語を〔独立の〕言語と呼ぶべきか，それとも日本語の方言（諸方言？）と呼ぶべきか，という問題については意見が分かれており，この問題を学問的に解決するには私のもっている方言資料はあまりに少ない。宮古島や沖縄・台湾間のその隣接諸島の言語を特別なグループに分けるべきかどう

か，これまた一層明らかでない。私は Chamberlain に従って，琉球語という用語を首里 śui (śuri)——沖縄の首都——の方言を示すために用いる。その他の方言に言及するときは，いちいちことわることにする。他方，日本語は東京方言をとることにする。

私の琉球語の知識の源となったのはつぎのものである。

(1) Basil Hall Chamberlain, Essay in Aid of a Grammar and Dictionary of the Luchuan Language. (Transactions of the Asiatic Society of Japan, Vol. XXIII Suppl.)〔1895年〕。

この本は首里(シュイ)の詳しい形態論，テクスト，辞典，さらに比較文法上の補説を含んでいる。琉球語に関するチェンバレンのその他の研究も，本書に尽くされている〔村山。チェンバレン，1850～1935年。1873～1911年滞日。『琉球語文典並に辞典に関する試論』1895年の中で，日・琉祖語の三母音（a, i, u）説を出す〕。

(2) ウィルト Wirth の小さな論文「新しい琉球諸方言」Neue Liu-Kiu Mundarten, Zeitschrift für afrikanische und oceanische Sprachen アフリカおよびオセアニア言語雑誌，1900年。この論文は他の琉球方言をいくらか紹介しているので，私にとって貴重である。しかし，マライ諸語の研究から琉球語の研究にアプローチし，琉球語と日本語の中にマライ語要素をさがしもとめるウィルトの見解には全く賛成できない。たとえば，日本語アマテラス Amaṭerasu（天照。女神の名）を matarasu「空の目」というマライ語の2単語で説明する〔村山。マライ語 mata は「目」であるが，rasu「空」という語はない。おそらく rasi「星座」のことか〕。しかるにアマテラスという合成語は ama「天」，terasu「照ラス」からなる〔村山。テラスは「照(テ)ル」の敬語的な形〕。

日本語に関する文献のうちでとくに役立ったのはエドワーズの『日本語の音声学的研究』，ライプチヒ，1903年（Étude phonétique de la langue japonaise par E. R. Edwards）である〔村山。高松義雄氏の邦訳あり。恒星社厚生閣，1969年〕。

方言学的資料は主として日本で出た本からとった。

① 遠藤〔隆吉〕。視話音字発音学（ベルの Visible Speech の転写を用いた音声学）

② 伊沢〔修二〕。視話応用東北発音矯正法。

これらの本から引用した指示はだいたいあまり正確でない。ある特殊性の

大きな地域を指示しているばあいより小さな地域を指示する場合の方が価値が高い。なぜなら，問題の特殊性が地域の全方言に共通であると解することは決してできないからである。また大部分，指示には例があげてない。

私の用いる転写法は根本において国際音声学協会のアルファベットであるが，L. V. シチェルバの加えた補足（ロシア語・文学部報告，第16巻，1911年，第4冊）を含む。次の特殊性について述べておきたい。

① 日本語の母音組織は単純だから，私は a, i, u, e, o という記号を用い，バリアントは示さないことにする。

② 長い母音は文字の上に線をひいて示す。

③ 方言的な歯唇の f とちがって東京方言の φ（エドワーズでは f）が両唇音であることを指摘しておく必要があると思う。

④ ɹ（巻き舌でない）で表わす方が正確であるが，その代わりに（エドワーズの場合とおなじく）r を用いる。

⑤ c=ts, ʒ=dz（シチェルバの提案による）

⑥ エドワーズが用いる ʃ（ローマ字 sh），ʒ の代わりに私は ś と ź という記号を用いる（′は必ず文字の上につける）。これによって，シ，ジ音の舌背性をしめす。それに対応する破擦音は ć=tś（ローマ字 ch）および ʒ́（ローマ字 j）で表わす。

⑦ 国際音声学協会アルファベットとちがって，中口蓋破裂音に対して ħ（無声）と ɧ（有声）とを用いる。

本論文は完全を期したものでない。日本語音声学の多くの問題について判断を下すことは私には時期尚早であろう。そこで多くの現象について，たとえば k の脱落，m と b との交替について触れなかった。他方，チェンバレンの比較文法上の研究を補足修正しようと努めたが，彼の言ったことが正しいと思われるところは論じなかった。全体として私は琉球語が日本語にくらべて保守的（古風）であるというチェンバレンの見方を正しいと思わない。首里の方言は全体の更新において，お世辞にも保守的方言といえない東京方言をはるかにしのいでいる。このことは音声ならびに形態を観察してみてわかる（この論文においては形態論の引証はもちろん十分に基礎づけていない）。

II

母音対応は次のとおりである。

日本語	a	(ā)	e	(ē)	i	(ī)	ĭ	o	ō	ū	u	ŭ
琉球語	a		i		i		ĭ	u	ū	ū	u	ĭ ŭ (φ の後)

括孤に入れたもの（日本語 ā, ē, ī）はまれな音素（フォネーマ）で全語彙で2～3度づつみられるだけである。そしてそれらを含む単語は琉球語の対応形がないので，私はそれらを考察しないことにする。

ĭ, ŭ は早口の発話のとき消滅する随意的な音声である。

〔例〕。

日 a|琉 a。日 hana「鼻」，琉 hana；日 mura「村」，琉 mura；日 ame「雨」，琉 ami；日 e|琉 i。ame「雨」，ami；日 ko-re「此」，琉 ku-ri；日 erabu「選ぶ」，琉 irabuŋ。

日 i|琉 i。日 mimi「耳」，琉 mimi；日 ikucŭ「幾つ？」」琉 ikucĭ。

日 o|琉 u。日 kokoro「心」，琉 kukuru；日 oni「鬼」，琉 uni；

日 ō|琉 ū。日 kōri「氷」，琉 kūri。

日 u|琉 u。日 mugi「麦」，琉 muʒ́i；日 uta「歌」，琉 uta など。

日 ū|琉 ū。日 jū-han，琉 jū-ban；（雑種的合成語。jū「夕」，han|ban シナ語からの借用語「飯」。両方で「夕飯」)。

随意的な ĭ，ŭ は特別に考察する必要がある。日本語ではそれは個々の音素でなくて，一定の結合的諸条件のもとでうまれたバリアントである。大体，ふつうの u, i より弱くて短く，脱落しやすい。将来はスラヴ語の現象になぞらえて「無声化母音の消滅」と呼ぶべき現象が予期される。日本語における ĭ，ŭ の出現の条件は次のとおりである。

① 音節が摩擦音（φ（フ），ç（ヒ），s（ス），ś（シ））または破擦音（c（ツ），ć（チ），ʒ（ヅ），ʒ́（ヂ））＋u または i からなる。

φŭtacŭ（フタツ）「二つ」，çĭto（ヒト）「人」，sŭki（スキ）-masŭ（マス）「好きます」，śĭkaśĭ（シカシ）「併し」，miʒŭ（ミヅ）「水」，niʒ́ĭ（ニヂ）「虹」。

② 単語が単音節でないこと。

③ u を含む音節と，摩擦音または破擦音の後ろに立つ i を含む音節とが単語で連続しないこと。連続する場合には i はふつう保たれる。たとえ

ば kući「口」。

④ 次の音節に随意的な ŭ または ĭ がないこと。

上にあげた条件の内部において，さらに，母音消失を速める他の諸条件を識別できる。このような諸条件というのは，多分 ŭ, ĭ が無声子音と隣り合っていること，また破擦音ではなく摩擦音の後に立つことである。

生理学的に，このプロセスは次のように説明される。

狭い母音の場合は，空気は広い母音の場合よりも多く出る。声門はより広く開かれている（そこで，無声子音の間で u, i がたやすくささやき音に変わる。エドワーズ，§25)。声帯にたいする圧力に依存する音声の強さは弱い。この弱さのために，i, u は音節機能にはあまり適していず，もしも音節の中に音節機能をひきうける要素——マサツ音または破擦音のマサツ音的要素——が存在するならば，u と i とは非音節的となりやすく，次いで消える（「ś, ć, ᵈź, ç の「おんとめ」détente はしばしば i と混同され，また s, c, ᵈz, φ の「おんとめ」は u と混同される」エドワーズ，§19。邦訳 p. 42)。努力的な遂行からゼロまでの随意的な ŭ, ĭ のバリエーションには，ŭ と ĭ が不明瞭な音声で合流してしまう段階がある。これと似て，琉球語の ŭ は（φ の後をのぞいて）ĭ と合流した。琉球 sĭʒĭŋ「過ぎる」，日本 sūgiru, 琉球 φucĭka「二日」，日本 φucŭka, 琉球 miʒĭ「水」（ウィルトは mids とする）(1)，日本 miʒŭ。

しかし φŭtacĭ（ウィルトは ftats(1)）「二つ」，日本 φŭtacŭ。

さらに琉球語では u, i>ゼロのプロセスが完了しているというのが特徴である。

śit>śĭt>śt という結合はメタテーゼによって既存の破擦音 ć（＝tś）に同化している。日本語 aśĭta「明日」，琉球 aća。日本語 nokośĭte「残して」，琉球 nukući。

狭い母音と広い母音との場合の空気の出る量についてはルデ（Roudet), La Parole. 1900年，201とルスロ（Rousselot), Principes de phon. experim., II, 819を参照せよ。

原 注

(1) 宮古島（ミヤコジマ）の方言。

III

日本語 o, u|琉球語 u という対応，および日 e, i|琉 i という対応についていえば，日本語における音声区別の方がより古い状態を表わしていることは疑いえないと思う。チェンバレンは反対の説をとるが，琉球語の祖先も日本語のような古い状態をそなえていたのである〔村山。チェンバレンが英国で比較言語学を学んだころ，印欧祖語三母音（a, i, u）説が有力であったので，その影響をうけてチェンバレンは日・琉祖語三母音説を出したと思う。伊波普猷によるこの説の批判は「琉球語の母音組織と口蓋化の法則」国語と国文学，7～8，1930年にみられる〕。

(1) 日本語における区別と並行した狭い母音と広い母音の区別は首里にはないが，いくつかの琉球方言（ウィルト）にみられる。チェンバレンはもっぱら首里方言だけを取扱っている。

(2) 古い狭い母音と古い広い母音との区別は首里では，先行の k, g, t, d, s の運命の相違となって現われた〔村山。ポリワーノフは伊波より16年前に口蓋化の現象を指摘した。〕

日本語	琉球語
ki	ći
ke	ki
gi	ʒ́i
ge	gi
śi	śi
se	si

kimo	肝	ćimu
sake	酒	saki
mugi	麦	muʒ́i
macŭge	睫毛	macĭgi
aśi	足	aśi
ase	汗	asi

*tu は日本語 cŭ　琉球 cĭ

*to は日本語　　to 琉球 tu

*du は日本語　　ʒū 琉球 ʒĭ

*do は日本語　　do 琉球 du

日本語 cūme「爪」, 琉球 cĭmi

日本語 tori「鳥」, 琉球 tui

日本語 miʒū「水」, 琉球 miʒĭ

日本語 doro「泥」, 琉球 duru

一方においては e, i が, 他方においては o, u が中間音（すべての条件のもとにおいてというわけでないかも知れない）において混同される方言が日本の奥羽地方にみられる。伊沢氏によるとこの混同または少なくとも混同の傾向（狭い母音がひろくなり, 広い母音が狭くなる）は青森県（陸奥), 福島県（磐代), および, 新潟（越後), 群馬県（上野), 茨城県（常陸）にみられる。つまり, 本州の北部地方である。諸現象を詳しく知らないでアイヌ語の影響を推定することは非常に危険である（Piłsudski, Materials for the study of Ainu language and folklore, p. 1～2 には次のように書いてある。「アクセントのない音節では, 一方では母音 o と u とが, 他方では e と i とがほとんど区別できなくなる。たとえば, o と e は狭くなる傾向があり, u と i はより広く発音される」)。

Ⅳ

表に示した母音対応のほかに, 琉球語にはさらに長い母音 ā, ī, ē, ō がある。ē, ō は二重母音から発達した。第5節参照。ā, ī は（ū と同じく）しばしば融合から生じた。琉球語 kā, 日本語 kawa「皮」(*kapa, アイヌ語 kap「皮」)。琉球語 ćīru 「黄色」, 日本語 ki-iro。

しかし, いくつかの場合（チェンバレンがあげている語彙資料では50語あまり), 琉球語の ā, ī, ū は日本語の短い母音に対応している。

こうしたすべての場合にチェンバレンは祖語形が長母音を持ち, 日本語で短くなったとみる。ところが, いくつかのケースは切り離してみる必要がある。これらのうち27は単音節語である。たとえば日本語 çi「火」, 琉球語 φī；日本語 na「名」, 琉球語 nā；日本語 te「手」, 琉球語 tī。他方, 琉球

語（首里）には短母音をもつ単音節語がない（例外は日本語 jo「世」に対する ju〔村山。jū が正しい。ただし合成語で ju となることがある〕である。しかし，日本語ではヨは waga-jo（我が世）のような表現に固定して合成語の項への過渡段階をなし，琉球語でもこの単語はこのような使い方の痕跡をとどめている）。これらの（27の）単音節語が合成語に入るとき，すなわち多音節語の一部となるとき，それらは日本語の場合とおなじく，短母音をもつ。たとえば，琉球 nī「荷」，日本語 ni〔村山。日本語荷は被覆形において nö- であることからみて，*nöi̯ にさかのぼる〕; 琉球 ni-muci「荷物」，日本語 ni-mocu; nī「二」，日本語 ni; niśū，日本語 niśū「二十」（これらの数詞はシナ語からの借用語）。しかし，合成語においても母音が長い場合がある。たとえば kāgī「顔」（チェンバレンは日本語kao「顔」と比較しているのは誤り）——これは接合型（Dvandva）の合成語である。すなわち ka「皮」+gī「毛」（音声学的には規則的に *ke からきている。日本語 ke。この場合，独立形の場合とおなじく，母音は長い）〔村山。沖縄語辞典では kaagi「容貌」〕。同一の要素が或る合成語では長い母音をもち，他の合成語では短い母音をもつ場合がある。tī「手」，日本語 te; tīsagʷi「手探り」，日本語 te-saguri など。ti-śuku「手燭」，日本語 te-śoku。

これらの事実から，最初，短い母音をもっていたすべての単音節語が琉球語において，その母音が長くなったと推定せざるをえない。長い母音のある合成語は，この法則が作用するようになった後でつくられたか又は更新されたのである。tī-sagʷi（手探り）がこのような更新形であった。この語では両項が別々に理解されつづけた。sagʷi（探り）は多分 sagēsuŋ「捜す」と同族であると意識されており，tī（手）が最初の意味を失なう何の理由もなかった。ti-śuku（手燭）では更新がありえなかった。第2項 śuku（燭）はシナ語からの借用語であり，独立形では理解できない。なぜなら，この合成語以外には使われなかったから。燭台と手とのあいだには恒常的な結びつきはないので，第1項にたいする理解も保たれるわけにいかなかった。この合成語は分かちうるものと意識されないようになってしまった。

日本語の短母音｜琉球語の長母音のその他のケースのうち6語が2音節からなる数詞である。

琉球語	日本語
8　jācĭ	jacŭ
6　mūcĭ	mucŭ
4　jūcĭ	jocŭ
3　mīcĭ	micŭ
2　tācŭ, 詩歌では φutaci	φŭtacŭ
1　tīcĭ	çĭtocŭ

ここにあげたもの以外に，cĭ（*tu，日本語 cŭ）のない形もあって，合成語で用いる。8　ja, 6　mu, 4　ju, 3　mi, 2　ta（チェンバレン，§92)。独立形において母音音声が長くなった単音節形から2音節形ができたと説明するのは，語尾 ci（*tu）がたやすくとり出せるのだから，説得力があるが，他の諸原因も考えられる。リズミカルに数える場合，3音節数詞（5 icicĭ と 7 nanacĭ）と4音節数詞（9 kukunucĭ）の母音は各数詞の発音に同じ時間をあてがおうとする傾きを考慮すれば，2音節数詞の母音より短かくなったであろう。このような場合には〔村山。母音の長さの〕このちがいは，後で，ふつうの長短区別とひとしくなったのである。

これらの数詞における長い母音は，第2音節母音（ĭ）がゼロになろうとするのにたいする代償だというように音声学的に説明するのは注意をひくが，これらの場合以外には裏付けがない。

このような対応の残りの例（20余り）に対して私は説明がつかない。

V

歴史の連続の見地からすれば日本語の二重母音（より正確に言えば，東京方言の祖先の歴史的延長における二重母音）は次のグループに分けることができる。

(1)　きわめて古い時期に単母音化した二重母音は日本語の正書法では立証されない。それは二つの形態要素が接合するところで復元されるにすぎない。次のようなものがある。

i-a からの e。ki-aku からできた keku（語尾)。アストン，『書きことば文法』Grammar of the written language[2], p. 154 参照。〔村山。甲類のエ〕

a-i からの e。naga-iki（長息）からできた nageki「嘆き」（？）。アストン，p. 28。〔村山。乙類のエ〕

(2) 東京方言では単母音となっているが，正書法で立証されている二重母音。その単母音は長い。第3グループの場合と同じように，おもに子音消滅によってできた二重母音がこれに属する。

—aku>au>ō（副詞語尾）。medetaku>medetō「目出度う」。また aŋ>au>ō（未来形語尾）。jomaŋ>jomō「読もう」（第9節参照）。

(3) 東京方言で（時には随意的に）保存されている二重母音（エドワーズ，§10, 11 参照）。〔村山。エドワーズのあげるのは waruĭ（悪い），furuĭ（古い），ʃteĭmas（しています），kireĭ（綺麗）〕

琉球語の祖語においてこれらのすべての種類の二重母音は東京方言の二重母音に並行していたとするなら，そのうちのひとつも首里で保存されなかった。上昇二重母音 i̭e を二重母音とみるならば，それだけが例外である（エドワーズは東京の ṷe について次のように述べている。「この連音において u は弱子音 w とほとんど同じ音になる」〔村山。エドワーズ，§13〕。日本語 ṷe（上），琉球語 ṷī（チェンバレンは wwī と表記）。日本語 ṷeru「植える」，琉球語 ṷījuŋ。第2グループ，第3グループに対応する単母音は長い。これは ē, ō の発生の唯一の道である。mē「前」，日本語 mae̯, mai̯；tadēma「唯今」，日本語 tadaima。nōsuŋ「直す」，日本語 naosu（*naposu）。

ōru「青色」，日本語 aoiro。ao（*awo）「青」+iro「色」。

r が消えて生まれた二重母音をのぞき琉球語で独特に形成された二重母音も単母音化した。

*miti pa（道は。日本語 mići wa）>mićia>mićē

*pito pa（人は。日本語 çitowa）>ćua>ćō（チェンバレン，第Ⅲ章）

r の消失は後期の現象のようである。

mui，日本語 mori「森」，śui（首里）はシナ語の借用語であり，日本語では śuri。

語頭の ē の二重母音的性格についてはチェンバレンによる単語の表記から推定される。

yyē「藍」（日本語 ai），yyē-satsi「挨拶」（日本語 aisacu），yyēzi「合図」（日本語 aizu）。

yy で表記した語頭音は「たとえば英語の y よりずっと柔かく，微かで，ハッキリしていないので，全くオミットしてしまいたくなる」(25〜26)。語頭の ē は必ずこの要素 [yy] をともなっている。

VI

比較方法によって，また日本語の文字の考察から明らかになる祖語の子音体系は次のようなものである。

閉鎖音	唇　音	p, b, p̄（長い p）
	前舌音	t, d, t̄（長い t）
	後舌音	k, g, k̄（長い k）
マサツ音		w, s, z, z̄（長い z），j, r
鼻音		n, m, ŋ（音節的），m（音節的）

もちろん，この体系が成立するには，それまでの発展があったはずである。いくつかの子音は他の子音の結合的変化にすぎないかもしれない（たとえば有声子音は無声音の結合的変化であるかもしれなし，またその逆であるかもしれない）。また人口分散時代に，上の表の子音のいくつかは，それがもつとされる意義（いくつかの子音についてはより大きな蓋然性で推定されるし，別の子音に対してはより小さな蓋然性で推定される）をもつに至っていなかったかも知れない。しかし，この図式は個々の言語現象を説明するに当たっての出発点であるから，作業仮説として，これらの全子音が祖語にあったとみなすのが便宜的である。

*p。最も保守的な方言は宮古島であり，そこでは p が保存されている。pana「鼻」，日本語 hana；pa「歯」，日本語 ha；pass「橋」，日本語 haśi；opu「大きい」，日本語 ō (*opo)。これはウィルトによった。さらに（沖縄北部の山岳地帯である）ヤマバラでは pi「火」，日本語 çi；pikari「光」，日本語 çikari。

その他の地方では自然発生的な *p>φ という変化がふつうである（他方，b は w に移らずに，保存された。それは，w が古くから存在し，言語は二つのフォネーマの合流に抵抗したためだろう）。φ は日本各地——奥羽，越後，九州，山陰道——の多くの方言で語頭であらゆる母音の前で維持された。例外

的には歯唇音 f に移った（奥羽のいくつかの方言)。東京方言では，語頭の φ は u の前でだけ保存され，他の母音の前では唇の活動は消え，息だけが残った。気道の狭まりは母音に依存する。そこで φi は çi となり，これは śi と混同しやすい。他方，φa, φe, φo は ha, he, ho となった。

母音間では多くの（すべての？）方言で φ>w。富山県（越中）では w が歯唇的 v となった（ive「家」。東京では ie<*ipe)。大部分の方言は東京に似ている。母音間の w は a の前以外ではすべての場合に消滅した。随意的には東京方言で a の前でも消滅する。sorewa「それは」(*sore pa）と並んで sorea および sor'a（ソリャ）というダブレットが存在する（エドワーズ，§88)。

首里における *p の反映は分析しにくい。

p は m（<*mi 御）の後でだけ保たれた。

mpana「あなたの鼻」，日本語mi　御＋hana 鼻。

語中で母音間では，あるときはゼロ，あるときは w である。

āśuŋ「合わせる」，日本語 awaseru（*apaseru）; arāśuŋ「顕わす」，日本語 arawasu (*arapasu)。(琉球 ā<*apa) ; nōśuŋ「直す」，日本語 naosu (*naposu)。(琉球 ō<*apo)。

しかし，awa「粟」，日本語 awa（*apa）; niwī（香)，日本語 nioi (*nipopi)。

語頭 p>φ。これは ē の前で保存された。

φēku「速く」，日本語 hajaku。

i の前で，また a の前では φ も h（ç かも知れない）もみうけられる。

φā「葉」，日本語 ha。

hā「歯」，日本語 ha ; hana「鼻」「花」，日本語 hana。

φiru「昼」，日本語 çiru。

hibići（çibići ?)「響」，日本語 çibiki。

このような多様性の理由は諸方言の混合にあるのかも知れない。すなわち琉球諸方言の混合または，日本人の移住による琉球方言と日本語方言との混合。

u および ō の前での語頭 *p の反映はとくに注目にあたいする。チェンバレン曰く，「琉球語では u または ō が続くと，同じ話し手が同一の語をあるときは f（φ）で発音するかと思うとあるときは h で発音する。そして

話し手はそのちがいに気付かない。」「しかるに a と i の前では f (φ) と h とのハッキリしたちがいがある」(p. 26)。琉球語の唯一の円唇母音 (ū, ō) の前で φ と h とが区別されないことは，琉球人の意識にとっては，音節に唇の働きが存在することだけが重要なのであって，唇の働きが二つの要素に割当てられるか〔村山。φ も唇に関係し，ū, ō も唇に関係する〕，それとも一つの要素に割当てられるかは，多分どうでもよいことなのである，ということによって説明できるだろう。私はこの現象をあえて単項円唇化 (одночленная лабиализация)〔村山。φū の場合は両項，つまり φ も ū も唇に関係するが，φ が h となればもはや唇に関係せず，唇に関係するのは ū だけ，つまり，単項だけが唇に関する〕と呼ぶことにする。この名称は唇の働きをひとつの要素に集中することが義務的でなく，随意的であるにすぎないことを表わす（異化作用の社会的結果ではない。個人個人による異化作用の実現があるだけだ）。唇の働きという点で，これと同じことがいえるような他の現象が琉球語にみられないだろうか。φu, φō という結合以外にもこうしたプロセスが現在みられるかどうかについて，チェンバレンは述べていない。たとえば音節 mu が nu と置き換えられるような例をあげていない。しかし，いくつかの現象からみて，過去にこのような事実が存在したと思われる。

日本語の語根形態が m に終る四段活用動詞に対応する動詞において，琉球語は，語末音 n と語末音 m とが交替する。n は直説法現在形および連用形にみられ，m は否定形現在にみられる。

	直接法現在，肯定	連用形	現在，否定
日本語	jomu 読む	jomi	jomaŋ
琉　球	junuŋ	juni	jumaŋ
日本語	kamu 噛む	kami	kamaŋ
琉　球	kanuŋ 食べる	kani	kamaŋ
日本語	cumu 積む	cumi	cumaŋ
琉　球	cinuŋ	cini	cimaŋ
日本語	ogamu 拝む	ogami	ogamaŋ
琉　球	wuganuŋ	wugani	wugamgŋ

古い動詞語幹 mi（日本語 mi-ru）「見る」から，u という語尾をもつ四段活用動詞に類推して mu という形がつくられた（日本語の方面でもみう

けられる。文語の kokoro-mu, kokoro-muru「試む」)，この mu は単音節語として，首里では mū となり，（日本語 suru-n-des の -n-<-no- に対応する）ŋ を付けて，mūŋ が生まれ，それが単項円唇化の確立によって nūŋ となった（しかし，逆にはじめ m>n があり，次いで母音が長くなったともみられる)。muŋ（母音の長さは？）という形は〔奄美〕大島方言で立証されている（ウィルト)。

上にあげたすべての場合に，私は単項円唇化に基づいて nu<mu という音声学的発展があり，次いで類推によって最初の4つの動詞の連用形に n が移されたのだと思う。mu>nu が上記の場合にだけみられ，あらゆる mu においてみられたわけでない，という事実は，次のように説明される。

あらゆる異化作用による変化というものは，参加しているフォネーマ(pl.)のひとつが他のものより不安定であるとき，すなわち，異化作用の方向を選択する原因が存在するときにのみ生ずる。グラモン（Grammont）は子音異化作用に対して，この選択の原因を示し，音声学的原因と形態論的原因とに分けている（「印欧諸語および ロマン系諸語内の 子音の 異化作用」La dissimilation consonantique dans les langues indo-européennes et dans les langues romanes)。形態論的原因というのは，形態論的意味においてより重要なフォネーマが安定的だということである。さて，上の *mu という結合において，u の形態論的価値は m の価値より大きかった。すべての動詞にとってこの唯一の直説法現在語尾 u(ŋ) との結びつきが u の保存にとって有利であり，m の保存にとって有利なのは m に終る語根モルフェームとの結びつきのみである。しかし，この m はある形では消えた。すなわち（*ta に終る）完了形および（*te に終る）副動詞において消えた。これらの3音節形（例：*kamita 噛ミタ，*kamiti 噛ミテ）はその他の形が2音節であるため，また s に終る動詞—sĭt>ć—に類推して，現代の kada, kadi を生んだ。

これに対応する時代において，この mu という結合の場合のほかに nu という形でも，また逆の形——m＋何らかの非円唇母音，たとえば i——でも単項円唇化が散発的に実現されたと思う。しかし，もろもろのダブレットのひとつも，維持されなかった。というのは，両方の形が平等（同一頻度）のために，二項円唇化の古い状態がたえず更新されたからである。

この説明は，次のような反駁のあることを念頭においている。n は単に唇

の働きのなくなったmではない。従ってこの結合〔村山。mu〕において不必要な働きを放棄したことだけでnが出現した〔村山。mu>nu〕と説明できるものではない，と。もちろん，このプロセス〔村山。mu>nu〕はたんなる減算〔村山。mを発音するための唇の働きがなくなること〕に帰着するのではない。プロセスはあらゆる異化プロセスとおなじように，新しいフォネーマをつくるでなくて，言語に前からあったフォネーマで置き換えるのである。

VII

前舌破裂音の結合的変化，すなわち ti>ći, tu>cu。動詞「持ツ」の口語形 moć-i-mas, moc-u, mot-aŋ。di>ǯi, du>ʒu : φuǯi 藤 ; (saka)-ʒuki 酒杯，アイヌ語では tuki。日本語・琉球語の話し手たちの大部分にとってこの変化はノーマルである。古い ti, tu, di du は今でも九州と四国（土佐）に保存されているようだ。有声の破擦音（ǯ, ʒ）の場合，東京方言では破裂的要素は無声の破擦音（ć, c）の場合よりもはるかに弱い。従って，有声破擦音は ᵈź, ᵈz としるすことができる。これは tj からきているロシア語の ч[ć]〔の破裂的要素が明白であるのに〕，dj からきているロシア語のж〔で破裂要素がなくなっているの〕と同じ理由による。また他の諸言語の多くの場合でも破裂音から破擦音およびマサツ音への変化において有声音が無声音より先に進んでいるのと同じ理由による。有声音の場合は肺から出る空気はより少ない。そして圧力が少なければ少ないほど，閉鎖の場所における抵抗はそれだけ少なく，閉鎖音を犠牲にしてマサツ音要素がそれだけ強くなる。

これらの有声破擦音と古い有声マサツ音 *z の反映とが合流し，i の前以外のあらゆる場所で ʒ(ᵈz) となり，i の前では ǯ(ᵈź) となったことは特別に考察してみなければならない。無声マサツ音はマサツ音としてとどまったのに有声マサツ音からどのようにして破擦音が発達したかという問題が起きあがる（s は i の前以外のあらゆる位置で保たれた。i の前では ś となった）。有声性が閉鎖的要素の出現を妨げたはずだと思われるかも知れない。z と ź とが u と i の前で *d から発達した破擦音 ᵈz および ᵈź に同化したと考えるべきことはいうまでもない。しかし，何故その逆ではなかったのか。何故

これらの破擦音がマサツ音に同化しなかったのか。その方が自然の発達ではなかったか。私は形態論的な性質の原因を考える。日本語（および琉球語）にはいわゆる「にごり」の法則〔村山。連濁〕があり，合成語の第２項となる場合語頭の無声子音は有声音となる。これは現在，生理学的な法則でない。なぜなら，他の場合には，任意の母音間に無声子音が立ちうるからである。この形態論上の要因〔村山。連濁〕は合成語をつくるさいに，印欧諸語におけるアクセント，およびいくつかの「ウラル・アルタイ系」言語における母音調和と同じ役割をはたすのである。この現象は無声子音と有声子音の頻繁な交替をひきおこす。これらの子音は「にごり」現象のタイプに従って，有声性——日本語の適切な表現によれば濁り（なぜなら，口腔内の噪音に声がまじるから）——によってのみお互に区別される。その他のすべての働きは原則上，同じである。

他方， z と，弱い閉鎖音要素をもつ ^{d}z とが存在する状況のもとで，両者が混同されることはきわめてありうる。ź と ^{d}ź とについてもおなじ。この混同はどちらの方向に向くか。天秤の一方の皿には破裂音要素の形態論的役割があり， この要素は c と ʒ が交替し， ć と ʒ́ が交替することにとって重要である。他方の皿の重りはもっと軽い。何故なら，ś と z，ś と ź との交替を維持するためには，弱い破裂音要素を加えても——この交替において形態化されたマサツ音要素が存在している以上——破滅的な影響がないからである。この事情こそ，音声学的変化を促す条件（発音のぞんざいさ）のもとで，^{d}zu，^{d}źi（<*du，*di）と並んで zu，źi が実現されはじめた瞬間にプロセスの方向を決定したのである。これらの結合のマサツ音は新しい世代によって，古いマサツ音（あらゆる母音の前の）と同一視され，そして古いマサツ音に対しても新しいマサツ音に対しても，今まで新しいマサツ音とだけ交替した破擦音が正しいと意識されたのである。しかし破擦音が選択されたからといって，それだけが用いられたわけでない。摩擦音の音声学的発展が排除されたわけでなく，散在的に実現されている。かくて，言語はたえず音声学的傾向と形態論的傾向との闘争の状態におかれている。

東京方言はこの点において，多くの他の方言の状態を示唆している。z と ʒ，また ź と ʒ́ の古い区別は九州と四国だけに保たれているようである。琉球音の状態についてはチェンバレンによって正確に理解することはできな

い（§28 参照）。

VIII

先行子音に対する i の影響は東京方言では次のような変化で示される。

h>ç（VI 節参照）; b>b′; p（*p>φ の変化をうけていない擬声語や借用語の）>p′。

t>ć; d>ʒ́（VII 節参照）

k>k′; g>g′

m>m′; n>n′; r>r′（詳しくは Edwards, §61）

s>ś; z>ʒ́（VII 節参照）

（wi, ji>i については IX 節参照）

これらのすべての変化は現在も作用しつづける音声法則による。たとえば s は i の前では発音できず，すべての借用語において ś となっている。換言すれば，ha|çi, sa|śi などの交替は分岐的である。しかし，それと並んで，フォネーマ ç, b′, p′, ć, ʒ́, k′, g′, m′, n′, r′, ś は他の母音の前でも独立に存在する。「軟い」フォネーマがこのように用いられるケースの主な源泉はシナ語からの借用語であるから，このような区別が生まれる上に有力な役割をはたしたのはシナ語の心理音声学〔村山。フォネーマ区別〕であるとみられる。シナ語の心理音声学にとっては非口蓋化子音と口蓋化子音（または方言によってそれらの派生音）との区別が非常に大切である。

東京方言の上記の音変化は他の多くの方言に共通している。k′, g′ の発展という意味でもっと進んでいるのは奥羽のいくつかの方言と首里方言である。奥羽の方言では k′>ħ。首里方言では k′>ć, g′>ʒ́。この分岐は i と e との合流の前にすでに生じていた。

saći「先」，日本語 saki; saki「酒」，日本語 sake。

muʒ́i「麦」，日本語 mugi; macigi「睫」，日本語 macuge。

不規則性は次のように説明される。

(1) 破擦音が時折，*i の前ではなくて，先行音に依存して発達する。このような先行音は日本語の ŭ にではなく，日本語の ĭ に対応する ĭ である。

çiʒ́i「髭」，日本語 çige; fiʒ́ai「左」，日本語 çidari; nći「見て」，日

本語 mite。mite>mći>nći

ću「人」〔村山。正しくは ćću〕，日本語 çito に対しては二つの説明が可能である。*pi(to) からマサツ音+i となり，i は消えるとき t>ć をつくり，次いでマサツ音も消えた〔村山。この説明は *pito>φito>φćo>ćću ということである〕。もうひとつの説明。*pito>çĭto>çtu　çt は śt に近く，メタテーゼによって〔村山。śt>tś〕ć となった（III 節，sĭt>śt>ć 参照。チェンバレン §24)。

n̥ʒ́ijuŋ「出る」，日本語 (i)deru において（古い）n の後で，破擦音が同じようにしてつくられた。また，nʒ́ućuŋ「動く」，日本語 ugoku の場合もおなじである〔村山。ugoku でなく，igoku イゴクの形を出すべきであった〕。

*k, *g に終る動詞の直説法現在は u(*u) の前で破擦音となる。ćūŋ「来る」，日本語 kuru。これは形態論的に説明される。ku>ću, gu>ʒ́u に関するチェンバレンの推定はこれらの場合以外には立証されない。

(2) 日本語 ki「木」にたいしては，期待される ćī でなく，kī が対応する。説明は仮説の域を出ない。単音節の母音が長くなったのは ki>ći の変化が生じた前かもしれない。ki>ći が起った時代に ī が i と質的に異なっていたので，破擦音化が妨げられた。他方 ćīru「黄色」，日本語 ki-iro では，ki>ći の後で〔i-i が〕合流して長母音となった〔琉球語 kī「木」のこの説明は後に放棄された〕。

IX

s　置玉（オイタマ）（羽前〔村山。山形県〕）では s>θ〔θ は英語の無声の th〕(少なくとも o と a の前で)。

r　（本来は ɹ——巻き舌でない)。

(1) 東京では r は（i の前で）ゼロおよび j と交替する。gozarimas|gozaimas 御座リマス|御座イマス。条件は複雑である。この交替は語根モルフェームにはみられず，また交替は概して，しばしばみられるわけでない。琉球語では——また薩摩方言でも——東京の語中の r の代わりに j または（i の前で）ゼロとなるのがかなり普通である。mui「森」，日本語 mori。śui（首里)，日本語 śuri。シナ語からの借用語（北京語 ʃou̯-li)。tujuŋ「取る」，日

本語 tor-u。kakijuŋ「懸ける」，日本語 kake-ru。 変化の生理学的側面とおなじく，条件が不明である。ダブレットもある。 agari|agai「東」， 日本語 agari「上がり」。米沢(ロネザワ)方言（羽前の南部）では，r′ から j が生じることはダラス（Dallas)（日本アジア協会報，Ⅲ巻， 2部。米沢方言）および伊沢が指摘した。

(2) r が d に近くなるのは，とくに越後，佐渡， 薩摩でめだつ。琉球では r′ についてそれが見られる。r′ūću（日本語 r′ūk′ū 琉球）は時折， 英語式転写で Doo-Choo となる。

w 東京方言では，語頭でも母音間でも w は a の前でだけ保存され（母音間の *p から発達した w もおなじ)，随意的に o の前で保存された。「ある場合に w は o の前でわたり音として聞かれる。kore o または kore wo 此ヲ」(エドワーズ，§88。)

琉球語では語頭の w はすべての母音の前でみられる。母音間の w は ā「泡」（日本語 awa)， ōru「青色」（日本語 a(w)o-iro）で消えたが，juwasaŋ「弱い」（日本語 jowai）では保たれた。

kʷ, gʷ 主としてシナ語からの借用語にみられる。はじめは日本語・琉球語にとって，よそのものであった。東京方言およびそれに近い諸方言では唇の働きを失った（かくて k, g と合流した）が，その他の方言では保存された。琉球語では *ko（日本語 ko 子）から出た kʷā〔村山。正しくは kkwa〕において唇の働きが場所をかえているのが特徴的である〔村山。この説明はいかがなものだろうか。訳者は kora 子等>kura>krua>krṷa>kkwa とみる〕。もっとも，おなじ起源の指小形接頭辞〔村山。小(コ)・子(コ)〕は琉球語でku-，日本語 ko-である〔村山。たとえば小判 kubaŋ〕。

j (1) j は，東京方言，その他の方言では i, e の前で消えたが， 琉球語では保たれた。

(2) 語頭の ju>i。 これはすくなくとも，いくつかの場合は，俗語的とみられている。

juku|iku 行ク；jubi|ibi 指。薩摩では ibi が普通。首里では ićuŋ，ibi〔村山。ユビにではなく，オヨビにさかのぼる〕。宮古島ではウィルト Wirth によると ybi（y＝フランス語の u)，大島では ibi。

(3) 山形縣（羽前）では j>ǯ。ju 湯>ǯu。

さて，鼻音に移ろう。この論文ではŋについて詳しく論じることはできない。東京その他の方言（ただし九州諸方言を除く）でŋは母音間のgから発達した。エドワーズ，§55〜57参照。

鼻音の音節的機能。それは本質的にみて，随意的である。しかし，日本の詩歌，およびチェンバレンのあげる琉球の詩歌では，子音に先行する鼻音および語末の鼻音は常にひとつの音節とみなされる。これは琉球の作詩にとって特に注目すべきである。ここでは母音の長さが考慮されず（重要なのは音節の数だけ），従って鼻音によって先行音節を長くするということは問題とならない。ふつうの日本語の発音に従って，私は語頭の鼻音と語末の鼻音だけの音節的性格を特筆する。mma「馬」，saŋ「三」。しかし geŋŋo「言語」，ambai「按配」。ŋについての記述は，エドワーズ，§§53, 54にみられる。

音節形成的鼻音（nas. son.）の起源については，言語（pl.）のひとつが古い状態を保つような場合にのみ，確実に論じることができる。琉球語において，閉鎖音の前の mu, mi という結合から発達した音節形成的鼻音がそれである。すなわち，nni（<mni）「胸」，日本語 mune「胸」；nna（<mna）「皆」，日本語 mina「皆」，mpana「御鼻（みはな）」，日本語 mi「御」＋hana「鼻」。この現象は，変化の生理学的原因において，マサツ音，破擦音の後の位置におけるいわゆる「無声の u, i の脱落」と同様である。しかし，問題を歴史的にみるとき，それと区別すべきである。これらの例の *mu, mi という結合において，母音脱落はすでに完了した事実であり，mpana の場合は，*p>φ の変化の前に生じたとみられる。

類似の現象は日本語できわめてありそうなことであるが，その推定は日本語からの語源にたよらなければならない。なぜなら，カナ書きのものにもとづいて結論することは，きわめて不確実だからである（アストン，書きことば文法[2]，27参照。そこから1例だけとろう。尊敬の助詞 on「御」は二つの同じような助詞 o と mi からなる）。

音節形成的鼻音（nas. son.）は琉球語では日本語よりはるかにしばしばみられる。これは，琉球語の地盤における上記の発展によるものであり，また日本語で音節形成的鼻音に生じたいくつかの変化の結果である。この点における琉球語の保守主義を認める者であるが，チェンバレンがあげる次の例は琉球語の保主主義を示すとは思われない。

(1) 直説法現在の語尾（確実な現在及び未来の終止形)。琉球語 -uŋ, 日本語 -u (tujuŋ「取る」, 日本 toru)。日本語 toru はいわゆる短縮形 tuju（チェンバレンは tuju' とする）と比較した方がより正しいと思う。語末はともにおなじ (-u)。tujuŋ の語末の ŋ は nu (*no) の収縮かもしれない。とすれば, tujuŋ は日本語の toru no desu（取るのです）からの torun (des) と比較される。

(2) waŋ「私」は日本語の wa「私」と比較すべきではない。日本語の wa には琉球語の wā「私」が対応する。ただし, これはまれにしか用いられない。wannē, wanuŋ または wanniŋ, wannī（チェンバレン §52）という waŋ の格変化はより古い *wanni を前提する。なぜなら, ŋ に終わる名詞からのノーマルな語形のタイプに属するのは wanuŋ というダブレットだけだからである。

ところで, 音節形成的鼻音の発展において日本語の方が進んでいることを例証するのは次のことである。

(1) 語頭の音節形成的鼻音。日本語では更新が完了している。

琉球 n|日本 u : nǯućuŋ「動く」, 日本 ugoku「動く」〔村山。この琉球語に対するのは igoku「動く」である。〕

琉球 n|日本 i またはゼロ。nǯijuŋ「出る」, 日本 (i)deru 出る。日本語における随意的な更新。

琉球 m|日本 m 又は u。琉球 mma「馬」, 日本 m̥ma または uma。このちがいがでてくる発音上の条件は不明である。

(2) 語末の音節形成的鼻音はふつう日本語で保存された。しかし, ひとつの場合に, 意味の分化をも伴う分化がみられる。

-aŋ に終る古い動詞否定形（たとえば śiraŋ「知らん」）はこの最初の意味とならんで肯定の未来の意味をもつようになった。つまり, 今のところ知らない。したがって知ることは未来のことになる。この意味上の発達——部分的意味をもっと一般的な意味とおきかえたこと——は疑いえない。なぜなら, 古典的日本語では両方の意味をおなじように書き表わしているから（アストン, 日本語書きことば文法², p. 35)。意味の区別（最初の現在否定形の意味を x_1 とし, 派生的な未来の意味を x_2 で示そう）と並行して, 明らかに, 音声上の区別(y_1 と y_2) もあった。その結果がつぎのようにあらわれた。

x_1—y_1—aŋ　保存された。

x_2—y_2—aŋ>au（正書法で立証される形）>ō

かくて，現代語において，-aŋ は現在否定形であり，ō は未来形である。śiraŋ「知らん」，śirō「知るだろう」。

この祖形の第3のバリエーションは aŋ>a という変化で，口語の śira に現われている〔村山。śira は，たとえば行クカシラのシラであろう〕。

〔村山。ポリワーノフは知ラン siraŋ<siranu, 知ロウ <siramu であることを知らなかったのであろうか。〕

11. 日本のなぞなぞの形式タイプ

〔村山。熊本方言を主として〕

『人類学・民族学博物館論文集』第5巻第1集（アカデミー会員V. V. ラドロフ生誕80年記念，1918年）に発表。『ポリワーノフ一般言語学論集』モスクワ1968年 pp. 306～309 に再録。

〔村山。なぞなぞの形式タイプというとき〕私はなぞなぞの構造を定着させている作り方公式の存在を念頭においている。おもに九州諸方言からとった材料が手許にある。熊本生れの人から記録したなぞなぞを論じることにしよう。残念なことに，個々のなぞなぞとその型の行なわれる地方について述べる資料は手許にほとんどない。熊本の二つの型のうち，第1の型より第2の型の方が日本でひろまっているらしい。第1の型のなぞなぞのうちいくつか（たとえば第2のもの）は，この方言グループの小さな領域に分布するにすぎないことは，ことば遊びの土台をなす方言形式（φu:geta（フーゲタ）類）に制約されている。

熊本のなぞなぞの形式タイプは ①kaŋgaemono 考え物，②nazo なぞからなる。両者は構造において，また技術語において，つぎのようにちがっている。

(1) 考え物タイプ。必ず正反対のことをふくむ二つの文からなる質問（そこで第1の文は，しばしばバッテンに終る）。第2の文の終りにナニ（強調的に na::ni とひきのばされる）という技術語をふくむ。答えには技術語がない。

(2) なぞタイプ。質問と答えが形式的にひとつの全体に結ばれる。三つの文をふくむ。

① 質問：「……は何と比較できるか？」フレーズの技術的末尾は to kakete nan-to toku（……とかけて何と解く）。

② 答：「……と比較できる」。技術的な末尾は -to toku（……と解く）。

③ 比較の説明は sono kokorowa (その心は……)。例をあげよう[1]。

考え物タイプ

[No. 1]

問：kudo-wa kudo-batteŋ, takaŋ-kudo na::ni「炉(クド)は炉(クド)でも，焚かない炉(クド)は何？」

答：bonokudo ぼのくど（うなじ）(kudo と bonokudo のことば遊び)

[No. 2]

問：geta-wa geta-batteŋ, hakaŋ-geta na::ni「下駄は下駄でも履かないゲタは何？」

答：φu:geta「頬」（前の例とおなじように，geta と φu:geta のことば遊び。フーゲタは方言上近い〔村山。熊本に近い〕長崎の人にもわからない。標準日本語では ho:beta, hoppeta。長崎では φu:tampura）

[No. 3]

問：jama-kara oide oide, hata-kara ija ija na::ni（山からおいでおいで，畑からいやいや何？）

答：sasa-no-ha-ni imo-no-ha 笹の葉に 芋の葉（笹の葉は風にふかれてすれあうとお出でお出でというようになり，芋の葉はいやいやというようになる）。

[No. 4]

問：it-tok'a: iradena, irantok'a irumono na::ni「入る時は要(い)らないで，入らない時は要(い)るもの何？」

答：φurokeŋφuta 風呂桶の蓋（風呂桶の蓋は風呂に入る時は必要がなく，風呂に入らない時は必要である。), ittok'a<iru-toki-wa は「入(イ)ル」と「要(イ)ル」を意味するところに，ことば遊びがある。

なぞタイプ

[No. 5]

kʷazoku-no re:ʒo-to kakete nan-to toku？ çakuʲeŋsacu-to toku, (sono)

kokoro-wa bimbo:nin-ni-wa oćinu「華族の令女とかけて何と解く？　百円札と解く。（その）心は貧乏人には落ちない」

このなぞには方言的言いまわしがない。oćinu は文語的な形。

[No. 6]

jabure-śo:ʒi-to kakete nan-to toku? uguisu-to toku, (sono) kokoro-wa haru-ʷo macu〔破れ障子とかけて何と解く。うぐいすと解く。（その）心はハル（春，貼ル）を待つ〕

[No. 7]

jo:no-nai çito-to kakete nan-to toku? ćo:ćin-to toku, (sono) kokoro-wa burabura（用のない人とかけて何と解く。提灯と解く。その心はブラブラ）

[No. 8]

oiśi josiʷo-to kakete nan-to toku? kośu : to toku, (sono) kokoro-wa ako:karo:〔大石良雄とかけて何と解く。胡椒と解く。その心は赤穂家老（赤くからい）。〕 kośu: は kośo: の方言形。

[No. 9]

mekura-no śibai-mi-to kakete nan-to toku? kusunoki masaśige-no mondokoro-to toku, (sono) kokoro-wa miʒu-ni kiku〔盲の芝居とかけて何と解く。楠正成の紋所と解く。その心は水に菊（見ずに聞く）。〕このなぞは日本でとても有名である。長崎では次のようになっている。mekura-no śibaja-kembucu-to kakete nan-to toku? kusunoki φuśi-no mondokoro-to toku, sono kokoro-wa miʒu-ni（または miʒi）kiku（盲の芝居見物とかけて何と解く。楠父子の紋所と解く。その心は水に菊＝見ずに聞く）。

[No. 10]

jogoda sugi-no-ki-to kakete nan-to toku? ju:bimmoći-to toku, (sono) kokoro-wa haśiran'a:naraŋ〔横ダ（曲った）杉の木とかけて何と解く。郵便持ちと解く。その心は柱にや（走らにや）ならん〕

なぞなぞには方言的な形がある。長崎のバリアント：magatta ki-to kakete nan-to toku? ju:biŋ-san-to toku, sono kokoro-wa haśiran'a:naraŋ〔曲った木とかけて何と解く。郵便さんと解く。その心は柱にや（走らにや）ならん〕

長崎の三重村で記録した第2の型のいくつかのなぞをあげよう。

[No. 11]

miʒu-guruma-to kakete nan-to toku ? o-mawarisan-to toku, sono kokora:（または kokoro-wa)nurete mawaru（水車とかけて何と解く。お巡りさんと解く。その心は濡れてまわる)。つまり水車は雨の中を巡行するお巡りさんと比較されている。お巡りさんというのは動詞 mawar-u「回ル」からきている。

[No. 12]

nagasaki to:kaiśen-to kakete nan-to toku ? koromo-no temai-to toku, sono kokora:cuke: ba agai〔長崎東海船とかけて何と解く。子供の手まりと解く。その心は，突けば（着けば）あがる（上陸する)〕。

これらの例からわかるように，考え物のタイプにおいては，求められるものはある特徴を満たしうる物である。連想の糸は問題にふくまれている。なぞのタイプでは結びつけられる二つのものは，すでに与えられている(なぜなら，第1の文の質問形式にもかかわらず，問題は第2の文で終わるから)。求められるものは連想的関連——比較のモチーフ——そのものである。したがって，なぞのタイプは「……と……との間にはどんな類似があるか」とか「……と……との間にはどんなちがいがあるか」というロシアのなぞなぞと比較できる。連想の糸を見つけるプロセスが課題（ザダーチャ）となりうるためには（つまり，このプロセスをこのタイプのなぞの原理に高めるためには)，もちろん特殊な機転が必要である。それがなければ，また類似による連想がすぐわかってしまうようでは，それは単なる比較であって，なぞではない。しかし，連想の結びつきが（明白ではあっても）奇抜であるかぎり，それは個々の作品のモチーフとなるのに適している。土佐の方言の次の歌はこのような比較の例となる。(2)

⌈tosa-no⌉ ⌈ko:t'i-no⌉ ⌈harimaja-ba⌉ ⌊si-de bo⌈:saŋ⌉ ⌈kanza⌉ ⌊śo⌈kau-o⌉ ⌈mi⌊ta, bo⌈: saŋ⌉ ⌈kanza⌉⌊śo ⌈kaiso⌉ ⌊:-no ⌈ko⌊to-jo, me⌈ku⌉⌊ra-ga ⌈me⌊gane-o ⌈kau-o⌉⌈mi⌊ta。(土佐の高知のハリマヤ橋で，坊さん簪（カンザシ）買うを見た。坊さん簪買いそうなことよ。盲が眼鏡（メガネ）を買うを見た)。(坊さんが簪を買うのがおかしいのは，坊さんは髪を剃ってあるからである。)

原　注

(1)　転写には国際音声学協会のアルファベットを用いる。熊本方言のアクセントの場所はしるす必要がない。なぜなら，熊本方言ではアクセントは一定しているからである。

(2)　転写で，私は高く発音される諸音節を「　˥ でかこむ。˪ という記号はそれに続く諸音節が低く発音されることを示す。

12. 日本語・マライ諸語類似点のひとつ

(1918年)

〔村山。この論文は「ロシア科学アカデミー通報」第6シリーズ，第12巻，1918年18号 pp. 2283〜2284に発表された。ポリワーノフの「一般言語学論集」（モスクワ，1968年）に再録されている。しかし後者には少し誤植もある。訳者はレニングラードの知人（ソ連人）に依頼して「ロシア科学アカデミー通報」から筆写してもらったので，それによって，これらの誤植を修正した。（D. アームストロング氏の英訳本 E. D. Polivanov, Selected Works, The Hague, 1974 では修正していない）。〕

この小論で日本語の少数の接頭辞のひとつ，すなわち，形詞詞強調形をつくる ma- を考察する。これがつくとステムの頭子音が長くなる。たとえば，*kuro「黒」から ma-k:uro「真黒」，*siro「白」から ma-śśiro<*ma-s:iro「真白」，*pira(>çira)「平」から ma-p:ira, naka「中」から ma-n:aka「真「中」，maru「円」から ma-m:aru「真円」。

子音が長いことは接頭辞の最後の要素がステムの最初の要素に同化したことによって説明してはならない（こういう説明は mak:uro<*maC-kuro, mas:iro<maC-siro と推定する）。歴史時代における長い子音の形成（たとえば，過去形 kit:-a<*kir(i)-t-a「切った」，東京の kat:a<*kap(i)-t-a「買った」）になぞらえ，またはシナ語からの借用語 hasseŋ「八銭」，ʃisseŋ「十銭」がシナ語 *p'at-「八」，*žip-「十」+seŋ「銭」に由来するのになぞらえて，上のように結論できるかもしれない。

私の考えでは，この接頭辞は最古の形では母音に終っていて(1)，ステムの頭子音の延長とは無関係に存在できた（koto「事」からの makoto「真理」参照）。長い子音と短い子音とが交替するのは，次のような擬音，擬態語に見られる変形と同類とおもう。つまり，重複形（たとえば，光るものについてのピカピカ pika-pika(2)）と，接尾辞 -ri およびステム第2子音延長をもつ形(pik:a-ri)。pik:a-ri/pika-pika と ma-k:uro/kuro とを長い子音の最も古い二

つの例としてくらべてみると，両者共通の源泉は重複にあるとおもう。その重複は接辞（接尾辞 -ri または接頭辞 -ma）がつくさいに最小限に短縮したのである（ステムの完全な重複のかわりに，pik:a と k:uro では子音の量だけが倍加される）。[3]

「接頭辞 ma＋重複」という形式の強調形の推定祖形はマライ・ポリネシア語の方面に類似したものがみられる。Harold W. Williams の『イロカノ語文法概説』(Grammatische Skizze der Ilocano-Sprache) p. 11 参照〔村山。イロカノ語はフィリピンの言語のひとつ〕。「形容詞的感嘆詞では重複はルートの表わす性質を強調する働きをもつ。タガログ語〔村山。フィリッピンの最も有力な言語〕では最上級が同じようにつくられる。たとえば mabuting から mabutingbuting「非常によい」。「ma は形容詞接頭辞としてフィリッピン諸語においてしばしば現われる。たとえばタガログ語，パンパンガ語，さらにサンギル語や台湾語において。そのようにしてつくる形容詞の複数形はイロカノ語では語根の重複によってつくる」(49ページ)。

Williams のあげる，sakit というステムからつくる ma-saksakit「病気の」はタガログ語における ma-butiŋ butiŋ または，たとえばメラネシア語における nanukunuku「柔かい」，manaenae「萎えた」(ガベレンツ，メラネシア諸語。II，アピ島のセサケ語，9ページ参照）と日本語の ma-k:uro との中間段階とみることができる。[4]

日本語とマライ・ポリネシア語の語彙における諸対応[5]には一定の法則性がみとめられるので，接頭辞 ma- がマライ語でアクセントがないこと（私は自分でタガログ語について調べてそのことを確信した）と ma-⌈k:u⌊ro（このメロディー ꜛ ꜛ ꜛ は西日本諸方言たとえば京都方言[6]によって裏付けられ，共通日本語の状態を表わすものとみることができる）の低いトーンとを比較することは徒事ではないと思う。

原　注

(1) ステム aka からの不規則な mak:a「真赤」においては *ma-ak:a の収縮を見ることができる。a(w)o「青」からの，もうひとつの不規則形 ma-s:a(w)o「真青」は masa「正」の連想によって説明されよう。後者はおそらく ma-sa に分解されたのである。接頭辞 ma- が本来その後に子音がついていなかったということに対して疑い

をいだかせるかもしれないもうひとつの形について述べておきたい。それは規則的な強調形 map:adakɑ「真裸」に対するダブレット maru-hadaka である。これはこの強調形（ma-p:adaka。p は長いために保存された）を後期に意味付けしてできた形と思う。第1に，音声変化をうけた語幹 hadaka（h<*p。短い *p の発展の一般法則に従う）から見て，また第2に，接頭辞として語幹 maru-「円」を用いている点から見て，そう思われる。そこで，map:adaka を古い mar(u)padaka の音声的反映とみるのは根拠がない。

(2) 同じ語幹は çikar-u<*pika-ru「光る」，çikari<*pika-ri「光」にもみられる。

(3) ラテン語の *re-peperi, *re-pepuli, *re-tetuli（Plautus において tuli「運んだ」の代わりに tetuli）から生じた repperi「見つけた」（しかるに reperio「見つける」），reppuli「追い払った」（しかるに repello「追いはらう」），rettuli（「もち帰った」）において長い子音が出現することを参照せよ。他方，私は pik:a- における子音の倍量をセム系言語の強調形における子音倍増と比較する。文字表現の方面においてこれと類似したものをもとめるならば，ロシア語で товарищи〔同志たち〕と書く代わりに TT. と書くこと，またгоспода〔諸君〕の代わりに ГГ. と書くこと，языки〔諸言語〕の代わりに Я33. と書くことのように，複数を表わすために，文字を重複するやり方をあげることができる。

(4) Williams によると，不完全な重複の使用はイロカノ語ではひろく用いられる（2ページ）。「タガログ語とくらべた場合のイロカノ語の特徴は……収縮した重複をしばしば用いることである」。

(5) 日本語とマライ・ポリネシア語の音声体系の比較とならんで，共通語彙を公表したいと考えている。

(6) 京都における音楽的アクセントの特徴付けは拙著「日本諸方言の心理音声学的観察」第2章に示してある。

13.　日本語語源辞典についての暫定報告

（1925年ころ書いたもの）

〔村山。この論文は「東洋学諸問題」1960年第3号（174～184ページ）に発表されたもので，論文の発表者V. V. イワノフは次のように書いている。

「この論文は内容の諸点からみて1925年ころ書かれ，著者自身，印刷にまわす準備ができていた。ただ著者の不注意のため，引用する『ウズベク語簡略文法』のページを示すのを忘れ，またひとつの文章が未完結のままである（ほぼ次のように補えばよい。「それらのうちの非常に多くは，〔他の諸グループに属する単語であることもあり，他の諸言語に対応形のある単語のグループに属するものもある〕）。原文では論文題名とならんで，もうひとつの案の題名が書かれている。それは「日本語語源辞典からの抜粋（暫定報告）」という。しかし，この案の最初の方は著者が消している。論文は3冊のノートに書かれ，いくつかのページの裏には，公表のためでない著者の書きこみ記事がある。この論文はA. A. ホロドウィチ〔村山。日本語学者，朝鮮語学者。一般言語理論家。令嬢は日本文学研究家〕から受け取り，V. V. イワノフが印刷の準備をした。」

この5年間，私は日本語の言語学的研究から離れていた。そしてかつて〔村山。日本で〕集めた資料の出版を中止せねばならなかった（「ソ連科学アカデミー報告集」や「中央アジア国立大学紀要」の小さな発表は別である）。その代わり，私はトルケスタンの諸言語を研究し，その結果は一連の学術研究や教科書であり（ウズベク語，タジク語，トルクメン語），また最近の（まだ印刷にまわされていない）語源研究である。すなわち「ウズベク語の方言・語源辞典」がそれである。この仕事によって，日本語についても，かつて（1914，1915，1916年に）集めた資料にもとづいて，この種の辞典を編もうという考えがうかんだ。再び生きた日本語を観察する有利な状況におかれたからである〔村山。モスクワその他で日本人と接する機会があったらしい〕。1000余語からなる「日本語語源・方言辞典」ができあがった。西日本語では①京都方言，②土佐，とくに諸木（モロギ）方言，東日本語では③東京方言，南日本語では④長崎の漁村のひとつ，西彼杵（ソノギ）郡三重（ミエ）村の方言の音声を記述する。必要に応

じて，もちろん他の諸方言の形もあげる（琉球は那覇方言。東北方言では津軽・南部藩の青森方言，など）。

この著作は公表されるものと期待して，「辞典」のいくつかの項目を見本としてあげて，この著作を説明しておきたい[1]。次の単語をえらぶ。

(1) mma「馬」

(2) nodo「喉」

(3) turû ⟶ curu（ツル）「鶴」

(4) inu「犬」

(5) 方言的な beko「子牛」または「牛」

(6) ki「木」

(7) 強調の接頭辞 ma-

〔第1例〕**mma**「馬」

東京 m̥⌈ma（m̥⌈maŋa 馬ガ，m̥⌈mani 馬ニなど）。京都，土佐⌈m̥⌊ma（京都⌈m̥⌊maŋa，土佐⌈m̥⌊maga など）；長崎 m̥⌈ma（尻高型；主格・属格 m̥ma⌈no，具格m̥m'a：⌈re 馬デなど）。東北方言，たとえば青森ではアクセントのあるmaであって，一モラ語幹における東京の⌈　に対応する（たとえば，東京の⌈çi 火，⌈ki 木，⌈ho 穂，⌈ko 粉など）[2]。

伝統的に仮名でウマ(u+ma)と書くのは，どの方言の発音にも対応しない。どこでも m̥ma であって，uma でない（東北方言では ma)。これは，語頭の散発的な m̥ を表現できないためである（だからウマまたはムマと書くのである。ンマと書く方が正しいであろう)。 ひとつの m の形をもつ東北方言（m̥ma または mma の代わりに ma）は，東北方言があらゆる長い音（母音も子音も）を短くするためである。東京の m̥̅m̅e̅「梅」，西日本語「m̥me⌉，長崎の m⌊me の代わりに東北方言の mi を参照せよ。

〔語源解釈〕

西日本語の「m̥⌊ma は共通日本語の *m:â（すなわち下降声調のmma）にさかのぼり，先史時代[3]にシナ語から借用したものである。シナ語(北京語) ma^3〔村山。^{3} はいわゆる三声〕と同じ共通シナ語ステムに由来する(この ma^3 は日本語において歴史時代の文語的借用語の形として，①呉音 me，②漢音 ba となっている)。語頭の長い m（共通日本語 *m:における。北京語は ma^3）

は共通シナ語の祖形における複雑な語頭音，多分，共通シナ語の *mra によって説明される。日本人の音観念においては子音群がないから，上記の語頭音〔村山。*mr〕の唯一の可能な同量の代用音は mm（すなわち m:，長い子音）であった。この *m:a は長い鼻音全体，とくに語頭における長い鼻音が失われたため後に心理音声学的進化をとげた（今日の実際の発音 m̥ma は m:a に非常に近い）(日本語の一定の時代に語頭ではあらゆる長い子音が全く不可能となったからである)。かくて，˝m: の観念は≪N̥＋m≫という複合物によってとり代わられた（唇音の前のN̥＝m̥)。m:a は二音節的な m̥ma と受取られはじめた。(*m:â における）下降調は m̥ の上昇として表現された（西日本語「m̥˪ma)。東京方言では規則的に逆の上昇場所がそれに対応する (m̥ma)。また長崎方言では尻高型(オクシトン)がそれに対応する。[4]

音複合 *mra はその後，シナ語において次のような変化をとげた。

(1) r（音節の第2の要素として）は非音節的 i̯ となった。すなわち mra ⟶ mi̯a。そこで日本の呉音 me（ia→e というアストンの法則による）となる。

(2) i̯ が失われる。すなわち *mra ⟶ *mi̯a ⟶ ma（北京方言 ma^{3})。そこで日本の漢音 ba（漢音の時代には語頭の鼻音が有声の非鼻音になった。m→b, n→d, r̃→z など。厦門(アモイ)方言および朝鮮語における語頭鼻音の現代の非鼻音化を参照せよ)。

私が復元した祖形 *mra（「チベット・ビルマ」語の方面ではビルマ語の mraŋ によって確かめられる）は「馬」を表わすモンゴル語，朝鮮語と比較できる。モンゴル語の mörin̥[5] ⟶ カルミュク・モンゴル語の mörn̥ ⟶ 朝鮮語 mal（朝鮮語の a は本源的でなく，別の母音にさかのぼる。その母音はおそらく，朝鮮語における母音調和凋落の時代に，*a* と合流した。語末の朝鮮語の *l* は古代の r の代用音である。mal||mar-i「馬ガ」参照)。かくて，この単語の，大陸における大移動を推定できる。それは大陸からシナ語の形で日本にも入ったのである。

これと並行的な音声発達（共通シナ語の複雑な語頭音に代わる共通日本語の m:＝mm）は同じカテゴリーの（先史時代の）もうひとつの借用語にもみられる。共通日本語 *⌈m:e⌉ ⟶ 西日本語「m̥me⌉，長崎 m̥˪me（尻低調(バリトン)。西日本語の平らなトーンと東京方言の「全平」に対応する)，東京方言 m̥̅m̅e̅ ⟶

東北方言 mi「梅」(シナ語北京方言 mei^{1} 参照。「m̥$_{L}$ma (馬) と「m̥me˥ (梅) とのアクセントの差はもちろん，これら両語のシナ語の出発形の「トーン」のちがいによって説明される)。私は古代シナ語祖形を *mu̯ai̯ (すなわち *mwai̯) と考える。日本語における長い mm はここでは音複合 mw の代わりであった。「馬」の場合 mm が *mr にとって代わったのと同じ理由による。「梅」という単語について詳しいことはもちろん「辞典」にのせる。

合成語 koma 駒 (「ko˥ 子＋-ma/m̥maからなる) には語幹の短い形〔村山。m̥maでなく ma。〕がみられる。ko「子」の項参照。ko-ma において m が短いのは，合成語においてモルフェームが最大限に短縮するという一般原則で説明されよう。

m̥ma に関する上記の語源解釈からみて日本が中国人[6] を通じて馬[7]を知り，しかも中国の大きな文化的，文学的影響のあった時代より前の時代（すなわち，呉音，漢音の時代より前）に知った，と結論できよう。

日本語 m:a ⟶ m̥ma の出発点となった単語 (*mra) はきわめて古い歴史をもつ。(1)ビルマ語 mraŋ (P. シュミットが「北京官話文法試論」の「序説」であげているいくつかの「チベット・シナ」語の諸形も参照せよ）との対応からみて，「共通チベット・シナ語」時代にあったとみることができる（もちろん，祖語形は２音節であったと推定される)。

(2) モンゴル語 mörin〔村山。文語は morin〕, 朝鮮語 mal〔村山。中期語 mël〕との対応からみて (両単語とも同系のものである。モンゴル語単語が２音節であるのに朝鮮語単語が１音節であるのは，モンゴル語，朝鮮語共通単語に普通にみられる現象である。モンゴル語 nidun〔目〕⟶ nudn̥〔村山。nidün → nüdn̥ の方が正しい〕と朝鮮語 nun「目」参照)，大陸におけるこのことばの先史時代の移動（おそらく１回ではない）を認めなければならない。大陸の外へのこの移動の歴史の続きは，シナ語 *mra の３度にわたる日本侵入のうちにみられることは，上述のとおりである。すなわち，(1)先史時代の借用の形において。シナ語の *mra ⟶ 日本語 *m : â ⟶「m̥$_{L}$ma (東京 m̥「ma)，(2)呉音の形において（シナ語 mi̯a ⟶ 日本語 me)，(3) 漢音の読み方の形において（シナ語 ma ⟶ 日本語 ba)。

〔第2例〕**nodo**「喉」

東京「nodo（「nodoŋa,「nodoni など）; 東北方言「noⁿdo; 京都と土佐 no「do（京都 nodo「ŋa, 土佐 no「doga˥, no「doni˥ など。土佐の対格は no「do, 主格は no「da; 低い音調の接尾辞をとる格では ʃ ʃ ʃ というメロディー。たとえば, no「do˪mo, no「do˪e; 長崎 no「do（nodo「no, node「:, node:「re← *nodo-e-de, 主格 noda「:)。このほか，いくつかの方言では，nondo（=no-Ndo）というダブレット形もある。琉球（那覇および首里方言）は nu : di〔村山。首里 nu:di:〕

〔語源解釈〕

共通日本語（および西日本語）の形 no「do, より正確には no「ⁿdo（母音間の有声音は「半鼻音的」(8)であったと推定される）は古代の合成語*no「mi-to˥ ʃ ʃ ʃ にさかのぼる。第1項は no「mu「飲む」の連用形（no「mi）である（動詞ノムは現代の西日本のアクセント no「mu と他の方言におけるその規則的な対応――東京「nomu, 長崎 no「mu――からわかるように，「尻高」型の動詞に属していた。この型は共通日本語では現在形の第2音節に高まりがあった）。第2項は to「門」で，高い平らなトーン,「to˥ である。このことは土佐，京都の形からわかる（土佐 to,「toga˥,「toni˥,「tode˥ など。しかし，もちろん「to˪mo,「to˪e。京都は「to:˥(9),「toŋa˥,「toni˥ など)。また，それらに規則的に対応する東京の ˪to, 長崎の ˪to からわかる。そこで，第2，第3音節の高い共通日本語のメロディーが再構成される。*no「mito˥。（このような位置において）母音 i が脱落し，音複合 mt（=m[i]t）は有声音（半鼻音）形成の時代に共通日本語の *d=ⁿd を生んだのである。すなわち，*no「m[i]to˥ ⟶ *no「do=*no「ⁿdo。第1音節は依然として低く，高いピリオドは1音節に縮まってしまった。

その後（土佐と東北方言をのぞいて）d の鼻音化が失われた（noⁿdo→nodo)。nondo（=noNdo）というダブレットについてみれば，諸方言の混合（ⁿd の方言と d←ⁿd の方言との混合。d 方言はすでに ⁿd を Nd としてとらえなければならなかった）によって説明するか，または合成語 *nomi-to が収縮したのを割合新しいとみて説明する。対をなす有声子音（*b=ᵐb, *d=ⁿd, *g=ᵑg, *z）ができあがった後で，この収縮が生じ，そのため m[i]to が do（=ⁿdo）でなく Ndo=ndo となったとみるのである。

琉球語の形（nu : di）は同じ *nomi-to の発達形であり，次のように説明できる。

(1) o ⟶ u　かくて nomito ⟶ *num[i]tu

(2) 消えた i は次の子音を軟くした(10)（t ⟶ d′）: *numd′u

(3) 鼻音（m）の消滅と結びついて，先行の u は長くなった（代償延長）。つまり2つの音節（*nomi-）の代わりにひとつの長い音節（nu:）が現われた。

(4) 琉球語で口蓋化子音（*p′*, *b′*, *m′*, *t′*, *d′*, *n′*, *s′* など）のカテゴリーが消滅した時期に語末の *d′u は di となった。（すなわち d′ は非口蓋化し，口蓋化は次の母音の前舌的性格となって現われた。u⟶i。*n′o:-biki「女引き(ニョビ)」(11)（結婚）から出た合成語 ni:biči における *n′o⟶琉球語 *n′u:⟶ni: を参照せよ）。

かくて，琉球語の形は上述の語源解釈（*nomi＋to から nodo）を完全に裏付ける。

*m[i]-t ⟶ d に対する音声学的並行現象は，たとえば「⌈φude⌉（東京 φude筆）⟵ *⌈pumi⌉＋tĕ 文手(フミテ)（すなわち *⌈pum[i]-⌊te⌈·(12) のような古い合成語にさかのぼる諸単語のうちに見出せる。また abari（網針）⟵ ami-pari における *m[i]-p ⟶ b や sumi-suri(13) ⟶ suzuri（墨研(スミスリ)＝硯）における *m[i]-s ⟶ z をも参照せよ。）

第2項に「to⌉（門）をもつ合成語に対する形態論上の並行現象として，たとえば「minato⌉（東京 minato）「港」⟵「mina（水）「to⌉(14)（門）をあげることができる。

〔第3例〕**curu** 鶴

東京「curu，西日本 *turû  というメロディー。京都 curû（curû(ツル) ŋa(ガ), curûni(ツルニ), curûmo(ツルモ) など）。土佐 tu⌈ru（しかし，どんな接尾辞(15)がついて格形がつくられるときも，それは低い音調である。tu⌈ru⌊ga, tu⌈ru⌊ni, tu⌈ru ⌊de など。これは本来 *turû であったことを示す。音節 ru は下降的上昇調。(16)

長崎（三重村）cu⌈ru（curu⌈no, curi⌈:, curi :⌈re など。すなわち尻高調(オクシトン)。これは西日本方言の *turû に規則的に対応する。

〔語源解釈〕

音節 rû が下降的上昇を示すこと（京都，兵庫で立証され，土佐の格変化によって裏付けられる）は共通日本語で消滅した鼻音を暗示している。このことは朝鮮語における対応語 turum-（鶴）〔村山。中期語 turumi。三音節とも高く平らな音調。方言に turum もある〕によって確かめられる。これによってこの語は大陸起源のものとみることができ，（朝鮮語と共通な）先日本語祖形として*turum-（＝*tu⌈rum-）を推定できる。同じような対応は日本語の*asâ（「朝」京都 asâ，土佐 a⌈sa⌊ga[17]，東京「asa，長崎 a⌈sa）と朝鮮語 ac'am, ač'am[18]〔村山。正しくはač'ɐm〕「朝」の間にもみられる。

語末の鼻音が下降的上昇（^）と置き換えられる法則については，他の例でも裏付けられる。saburo:〔三郎〕の項を見よ。そこでは固有名詞の特別なカテゴリーについて論じられる。

「鶴」の日本・朝鮮語の名称 *turum- は他の（つまり朝鮮語以外の）「アルタイ」諸言語にも対応語がある。グルンツェル[19]に資料がある。ここではトルコ語の turna，ヤクート語の turuja を挙げておこう。鶴の「アルタイ」・日本語名称は共通であると思うが，これは本来，擬音語であるとおもう。印欧語系の言語では，鶴の名称は子音 $g^{w}+r$[20] からなるが，「アルタイ」・日本語の名称は子音 $t+r$ からなっている。

〔第4例〕**inu**「犬」

東京 i⌈un，京都⌈i⌊nu（⌈i⌊nu-ŋa），土佐「i⌊nu（⌈i⌊nuga，対格「i⌊no，主格「i⌊na)，長崎 i⌈ŋ（＝i⌈N̥)[21]，与格・場所格 ini⌈:（←*inu-e)。nu, ni という音節が収縮して N となることは長崎方言（また一般に南日本語）でありふれている。ʒeŋ←― *zeni「銭」[22]。長い単語では mo，no という音節も同じように変化する。三重村方言〔村山。長崎県西彼杵郡〕では，主格・属格 koroŋ⌊ga，対格 korom⌊ba←― *「kodomo-ga⌉（子供が)，*⌈kodomo-ba⌉（子供ば)，ka⌈rakuni-no-tatemono-no-goto（唐国の建物の如）―→ karaŋ-kuninotatemonnogo⌈to。

東日本語（および東北）方言形の総括は「辞典」にゆずる（たとえば青森では *²inü であって終りの母音は短い ü であり「全平語」におけるように，半長ではない)。語源解釈に対して，これらの形は何ら新しいものを提供す

るものでない。すべての形は共通日本語の *「i$_{L}$nu から説明される。

〔語源解釈〕

音声面で（私の知っている言語のうち）たった一つの近い形はツングース語の形である[23]。ネギダル語の形(各種方言の形)はenakin, enaxi, nina, ing, ngenaxin, nginaxin であり，ツングース語〔エヴェンキ語〕では ninakin, オロチョン語では inakin, ゴールディ語では inda, 満州語では indax̄ûn[24]「犬」である。

V. アルセニエフ[25]はさらにオロチョン語の *inaki*, ウデ（へ）語の *ineį* をもあげている。

S. レオントウィチの「ロシア・オロチェ小辞典」では *inaki* とある。

〔第5例〕**beko**「子牛，牛」

私の知る方言形は次のとおり。(1)東北方言，たとえば青森 bigo（または bi^{k}go)。i ←— 共通日本語 e[26]であり，母音間の「半濁音」g ←— 共通日本語 k である。かくて bigo ←— beko。メロディーは「全平」[27]（普通には東京の「全平」の形に対応する。青森の「全平」の特殊性[28]はただ語末母音が少し長くなるだけである。すなわち，bigo·)。そこで青森の bigo は「beko˥ にさかのぼることは明らかである。ko の接尾した形は bigo-ko (bi^{k}go-k'o)。(2)九州方言ではたとえば長崎で be$_{L}$ko「尻低(バリトン)調。これは規則的に共通日本語の平らなメロディーを反映し，東京の「全平」に対応する)。

〔語源解釈〕

長崎（田舎の方言）で be : be$_{L}$: と bebeŋ$_{L}$ko ←— *bebe-no-ko （同じく「子牛」）の形でタブレットが存在することは，この単語が擬音語であることを物語っている。「be: be:˥（長崎は be:be$_{L}$:) の収縮した形である。長崎の bi:bi$_{L}$:「あひる」を参照せよ。第2項 -ko は「ko˥（子）（必ず高いトーン）である。かくて，be-ko （←be[:]-be[:]+ko） という形は他の動物名 *ne「ko（猫）と並行するものである。後者は nia-nia（なきごえ）+「ko˥ からきている。〔nia が ne- になるのはまさに合成語ではまったく自然である。独立の形態（niania）においては j が発達して nija-nija となるため収縮が起こらない。〕beko と neko のアクセントについての詳細は「辞典」のneko の項に示される。

〔第 6 例〕**ki**「木」

合成語第 1 項で ko-〔村山。正しくは kö- であるが，当時は知られていなかった〕と交替し，第 2 項で -ŋi（-gi）〔村山。正しくは -gï〕と交替する。東京「ki（「kiŋa，「kini）[29]，京都 ki「:（ki「ŋa，ki「ni，しかし「ki└mo，「ki└:←「ki└e），土佐 ki「:（ki「ga，ki「ni，しかし「ki└mo，「ki└e），長崎「ki（与格・場所格 ki「:←*ki-e），琉球 ki:〔村山。琉球語の「木」にアクセントのしるしをつけていないのが注目される。首里方言で平板型〕

京都，琉球，土佐において音節が長くなっている（〔不定形〕語幹においてのみ）。合成語では ko- となり（たとえば「ko-no-ha˥ 木の葉）共通日本語において高いトーンを帯びていた（このことは現代の西日本方言の形からわかる）。

合成語第 2 項では -gi（土佐，長崎）または -ŋi（東京，京都）。たとえば janagi, janaŋi（柳）（← jana＋ki〔村山。時代別国語大辞典上代編は楊ノ木とみる〕）。語頭子音が合成語第 2 項で有声化（濁音化）しているのは合成語の統一性を示すのに役立っているが，これは私のみるところでは，合成語第 1 項が古い鼻音に終る場合，この鼻音と無声子音との結合から有声子音が音声学的につくられる特殊なケースを形態論的に一般化したことであろう。（たとえば *asam（朝）-kapo（顔）⟶ asa-gaʷo（東京，京都 asa-ŋaʷo 朝顔）における *m-k（このような有声音[30]，この場合 *g* の発生は，語末鼻音の消滅と同時であったろう。すなわち *asam-kapo→*asa-gapo は asam→asâ と同時であったろう。第 3 例 turum-→turû 参照）。このような場合に類推して，このタイプの交替（すなわち *k/-g*, *t/-d*, *p/-b*, *s/-z*）が本来母音終りの第 1 項をもつ他の合成語にも及ぼされたのである。

〔語源解釈〕

琉球語の ki：という形（もし祖語の語幹形が *ki であって，*k̥ に i が続いていたとするなら，当然 či：となったはずだが，či：となっていない）は日本語 ki の母音 i が本源的なものでなく，二重母音（そしてもっと古い時代には 2 音節複合物）にさかのぼること，またしたがって，共通日本語・琉球語祖形は *kVi という形であったに相違ないことをハッキリと示している（V というのは不明の質の母音を示す。ただし i ではない）。

マライ・ポリネシア諸語に目を向けると，同じく「木」を意味する出発形

kaju（たとえば，マライ系のタガログ語で ka⌈ju）とその派生形，すなわち kai, gai(31), kau（メラネシア諸語(32)。kau という形はフィージ語にみられる）がみられる。〔村山。kaju はマライ語。タガログは káhoy〕

これらの形は日本語の音声進化においても通過したものと思われる。*kaju ⟶ *kai ⟶ *ke, さらにここから ⟶ ki となった。（一連の資料にもとづいて先日本語 *e* が日本語の *i* に移ったことが推定される。日本語の語幹に *e* という音声が比較的まれであることもこの推定の根拠のひとつである。*e* が見られるところでは〔たとえばamê／ama-〕，それは派生的である。すなわち割合新しいのである。先日本語の **e* は *i* によって置き換えられたため，歴史時代までは保存されなかったのである）。

この推定（祖形 *kaju）は交替形 ko- にも光を投じる。合成語では音構成の収縮が単独形とは異なったテンポで進行するが，合成語において *kaju は第２音節の子音 j(33) を失い，*kau（フィージ語における現代語の形参照）となり，そこから日本語のko-となったのであろう。〔村山。ポリワーノフはko-でなく，kö<*kau<*kahu であることを知らなかった。合成語のコが乙類のコであることをポリワーノフが知っていたなら，この説明は別のものとなっていただろう。〕

（すべての日本方言におけるメロディーの規則的な対応にもとづいて）復元される語幹（京都 ki⌈:，土佐 ki⌈: の上昇メロディーはその方向（上昇調）においてタガログ語の ka⌈ju（ ）(34)のメロディーと一致する。

〔第７例〕接頭辞 **ma-**（続く語幹頭子音の重複をともなう強調形をつくる）

たとえば，ma-k:uro ⟶ makkuro（kuro-「黒」から）ma-s：iro ⟶ maśśiro（*siro-「白」から），*ma-n:aka ⟶ mannaka（naka「中」から）〔不規則形：aka-「赤」からつくる makka-，長崎 makk'aka，aʷo「青」からつくる massaʷo〕。

西日本方言の ma⌈kku⌊ro から，私はma-という接頭辞は共通日本語では低いトーンをもっていたと思う。すなわち ⌊ma-。（現代語において ひろく用いられるもうひとつの，尊敬を表わす古くからの接頭辞 *⌊o も疑いなく低いトーンをもっている。土佐 o-⌈sara⌉，o-⌈hana⌉（皿，鼻）など。一般に共通日本語の諸々の接頭辞は原則的に低いトーン(35)であったと考えるべき理由がある。

〔語源解釈〕

日本語の ma- はマライ・ポリネシア語の接頭辞 ma- とおなじだと思う（たとえばメラネシア語〔村山。アピ島のセサケ語〕ma-nae-nae「萎えた」, ma-nuku-nuku「柔い」, タガログ語 ma-butiŋ-butiŋ「非常によい」。イロカノ語の ma-saksakit[36]〔村山。「病める」〕は sakit「病気」という語幹の不完全な重複である。日本語の ma-nnaka では語幹 naka の最少限の重複がみられる)。[37]

接頭辞 ma- は本来，形容詞の意味をもち，強調の意味は重複によって表現された。

マライ語では共通日本語におけるように，ma- は低いトーンをもっている。

〔註1〕

私があげる日本語のステム (pl.) のマライ・ポリネシア的語源解釈では，日本語子音とマライ・ポリネシア子音がふつう同一である。たとえば上にあげた ˪ma- ではマライ・ポリネシア語の m∥日本語 m（たとえば日本語 moro-moro「諸諸」∥ポリネシア語 moro-moro「非常に多い」，日本語 mě（目） mana〔村山。「眼」manako の mana をポリワーノフは考える〕∥マライ語 mata「目」，共通日本語 *musaŋi → usaŋi, osaŋi osagi 兎／マライ語 musaŋ「じゃこう猫」などによって裏付けられる)。古風なポリネシア語の，また復元される共通日本語の子音組織の原始性とそれらのほとんど完全な同一性[38] を考慮するならば，子音対応において同一なものが多いのは不思議ではないだろう。

〔註2〕

私は日本語 ma-kkuro をマレイ・ポリネシア語の強調形と関係させる (ma-nuku-nuku ; *ma-sakit-sakit → ma-saksakit ; *ma-kuro-kuro → *ma-kukuro → *ma-kkuro のように漸進推移を示す)。私はそれをとくにモンゴル語とトルコ語にみられる「アルタイ的」強調形と関係させない。たとえば，モンゴル語 cagan「白」からの ca-b-cagan「まっ白」，arigun「清らかな」からの a-b-arigun「まったく清らかな」，トルコ語の qara「黒」からの qa-p-qara「まっ黒」，qïzïl「赤」から qï-p-qïzïl の「まっ赤」などは，次のような原則的なちがいがある。すなわちマライ・ポリネシア諸語や日本語では，ma- は重複の前の接頭辞であるが，「アルタイ的な」フォルマント（モンゴル語 *-b-*，トルコ語 *-p-*）は（接中辞として）重複の内部に（不完全な第1重複部分の後に）に入る[39]。そこで私は日本語の ma-kkuro を「アルタイ的」強調形と関係させないのである。

〔村山。言語学概論，p. 23 には次のように述べてある。「強調形（比較を予想しないこともある。つまり，最上級の意味をもたないこともある）―― ウズベク語で

qı-p-qızıl 真赤（クプクズル）

qɔ-p-kɔræ 真黒（カプカラ）

または日本語 ma-kkuro 真黒

ma-śśiro 真白*

*マライ諸語にみられる類似現象参照。イロカノ語〔フィリピンの。〕ma-saksakit ステム sakit「病い」から。タガログ語 ma-butiŋbutiŋ〔butiŋ「良い」〕(メラネシア語 ma-nae-nae「萎えた」)。　拙論「日本・マライ諸語並行現象のひとつ」参照。〕〕

〔村山。泉井久之助氏の『マライ＝ポリネシア諸語』(1975年, p. 215)には「…かつてロシアのポリヴァーノフ氏が，マライ＝ポリネシア語に一般的な接頭辞 **ma-* は日本語の「マ・シロ」（ま白）などの「マ＝」に当たるとしたことがあった。しかし MP. **ma-* はこれに続く語の頭音にその鼻音現象を要求することが多い接頭辞である。しかも日本語の接頭辞「マ＝」に関しては，この現象があったことがない。仮りに二つが起源的に相互に関係のある要素としても，日本語におけるそれは有機性を失い化石化していたことになる」と述べるのは誤解ではないだろうか。フィリピン諸語には，ポリワーノフのあげるような，鼻音現象をひき起こさない ma- と，それをひき起こす ma- があるからである。鼻音現象をひき起こさない ma- の例はたとえば，タガログ語についてはJ. V.パガニバンの Diksyunaryo-Tesauro Pilipino-Ingles (1973年), p. 673 に多く示され，鼻音現象をひき起こす例は同書, p. 687 以下に示されている。『マライ＝ポリネシア諸語』のこの個所によってポリワーノフの見解は否定されない。〕

日本語単語について私が集めた語源は起源からみて次のように配分される。

歴史時代に入ってからのすべてのシナ語借用語（文語，南日本方言における中国官話からの後期の借用語(40)）やヨーロッパ語系のもの(41)を考慮しなければ，残る資料は次のようになる。

(1) 約1％は先史時代のシナ語系借用語（m̥ma馬，m̥me←「m：e˥梅，kami 紙など。

(2) 約1％はアイヌ系借用語（たとえば，kobu 昆布）（これは東北方言の方言形を数えてのことである。ついでながら，東北方言に入っているアイヌ系借用語は私が偶然知っている例の数よりずっと多いにちがいない。私はこの問題は専門に研究したことがない)。

(3) 約2％はシナ語を通じてのサンスクリット系借用語である（仏教用語。

たとえば日本語の haći 鉢——シナ語 *pat ←— サンスクリット pātra- ; kesa 袈裟など)。たったひとつの場合にはマライ語を通じて入っている（南日本語 φai, φɛ:, φe:, ça˪:「南」——サンスクリット vāyu-「風」)。

(4) かなり多数のオーストロネシア（マライ・ポリネシア）系の語源[42]。

(5) かなり多数の「アルタイ的」(および朝鮮的）語源(朝鮮語からの借用語もある。たとえば,「kasa˥ 笠。朝鮮語 kat[43] ←— *kas- 参照。または「tera˥ 寺 ←— 朝鮮語 ←— シナ語　刹)。この部分では朝鮮語または他の「アルタイ」[44] 諸語（ツングース，モンゴル，トルコ系言語[45]）およびいくつかのフィン系言語，サモエード諸語の類似した語幹を取り扱う。たとえば，asa(asâ) 朝，curu (*turû) 鶴，śiro-i「白い」（および śiru-「知る」)，inu「犬」などがそれである。

語幹のその他の部分は次のものを含んでいる。

(1) 日本語内部で説明できる語幹

(イ)古い合成語（たとえば nodo 喉，abari 網針，sodateru 育テル ←— so＋tate-)

(ロ)「歴史的」交替による（たとえば，語幹 *puta 2, mu 6, ja 8 は*pito 1, mi 3, jo 4 から説明される。2倍の数詞は *i* を *u* と置き換える。また o を a と置き換える。[46]

(ハ)擬声語，たとえば beko「子牛，牛」，neko「猫」(←nia＋ko)，karasu（琉球 garasi, garaśi)「烏」，kuruma「車」（もっとも，形からみて擬声的な単語を必ずしも擬声語だと決めてしまう必要はない。それらのうちの非常に多くは〔他の諸グループに属する単語であることもあり，他の諸言語に対応形のある単語のグループに属するものもある。イワノフ〕

(2) 今のところその起源が私には不明な語幹。不明にもかかわらず，それらを「語源辞典」において述べることは許されると思う。私はそれらの共通日本語祖形を復元し，今後の語源研究の参考に供する。

(3) いくつかの少数のケース。他の諸言語においてあまりに多くの対応語が見付かるので（kumo「蜘蛛」。朝鮮語では kʌmu[47]〔村山。正しくは kəmïi〕，メラネシア諸語では kobu, gofu など)，また日本語諸方言間のアクセント対応がまちまちなので（たとえば，京都 kumô。長崎は期待される尻高型(オクシトン)でなく，尻低型(バリトン) ko˪bu）どの語源をとってよいか決定しにくい語幹（西日本方言

と南日本方言との間の最初の母音 *u*/*o* の対応と琉球語の形 ku：ba〔村山。正しくは ku:ba:〕からみて，祖語形の両方の音節に鼻音が存在したと推定される。すなわち *kompVN とすれば，古い合成語であるかも知れない。その第1項だけが朝鮮語のkʌmu と比較すべきかもしれない。

「春」と「晴れ」（言語学概論，p. 25）

語義をつくりあげるさまざまな意味観念のあいだの相互関係をもっぱら取り扱う諸問題は，言語学の特別な部分をなすものとみられる。たとえば乾燥の観念と喉のかわきとの関連を考察することがそれである。この考察によって，ドイツ語 Dürre「乾燥」と Durst〔村山。英語＝thirst〕「喉のかわき」との同源（語源）が説明できる。また「ハッキリしている」という観念と「春」という観念との関連の考察もそうである。これによって，日本語「haru（春）と「haru/hare-ru（晴)*との同源が説明される。言語学のこの部分は，意味論（semasiology）と呼ばれる。

（*） または朝鮮語 n'ʌram (*njerʌm)「夏」〔村山。中期語 njərīm〕，ヤクート語 sa:s「春」，トルクメン語 ja:ð「夏」，ウズベク語 jɔz「夏」，チュワシ語 s̆ur「春」と満州語 nijarxûn 「新鮮な」，モンゴル語 nirai「新生の」との関連。

原 注

(1) 「辞典」を出版するときは略号を用いるが以下の見本では略号を用いない。

(2) E. D. ポリワーノフ，東京方言における音楽的アクセント。「科学アカデミー通報，第6シリーズ，第11巻，No. 15, 1915年，1617～1638ページ。〔本書 18～31ページ〕

(3) シナ語からの先史時代の借用語というのは，シナの文語的影響の時代（すなわち呉音，漢音時代）に先行する時代の借用語のことである。次の語を参照せよ。

*m:e →「m̥me˥ 梅
zeni 銭
kami 紙
tabī 足袋

その他。

(4) E.D. ポリワーノフ，日本諸方言に関する心理音声学的観察。1。ペトログラード，1917年。

(5) ロシア語の мерин（去勢馬）はこれに由来するのであろう。ロシア語で「去勢

馬」という特殊な意味をもつのは，モンゴル人が去勢馬でだけ騎行したからであろう。〔村山。モンゴル文語 morin「馬」。〕

(6) このことばが朝鮮を通じて入った可能性はもちろん全く存在しない。

(7) じっさい馬は今日でも日本にとって外部的なものである。ついでながら，13世紀の最初の元寇のとき日本人がどんなにモンゴル人騎兵に驚嘆したかを想い出そう。1923年に日本の馬匹総数は2,591,591頭で，このうち地方種は282,832頭である。馬耕用の馬は1,109,949頭であった（牛耕も行なわれる。古い時代には馬は日本の農業にまったく用いられなかった)。民族学上の資料も，最古の日本で馬が知られていなかったことを証明する。桃太郎はトーテム的な意味をもっていたと思われる動物を連れていたが，馬はまったく知らなかった。河南省の甲骨からわかるように，中国では馬は野生状態で，第２の王朝（秦）時代にすでに飼われていた。

(8) とくに，土佐におけるその現代の発音がそれを示している（土佐ではすべての VdV＝V^{n}dV である。つまり nodo＝no^{n}do である。弱い，心理的に定着していない鼻音的わたりをともなう)。また東北方言でもそうである（ここでは母音間の *d* に対して半鼻音的 n͜d＝^{n}d が対応する)。

(9) 拙論「心理音声学的観察」において，私は京都のこのような諸形に二重点：をつける（to:）代わりに，一つの点をつけることにした(to˙)。東京方言と正書法の影響によって（京都の知識人の言語において）母音を随意的に短くする傾向のあることを表現するためである。しかし，じっさいは，１モラの語幹は京都方言では２モラまで延ばされ，「to:˥（to˙）は長さの点で，本来の２モラの to:「十」とまったく等しい。

(10) 前進的軟化は琉球語では普通である。*pige からきた琉球語 fiʒ́i（figi ではなく)（東京 çiŋe), n̥de からきた n̥ʒ́i-（東京 de-「出る」)〔村山。文語 ide-〕を参照せよ。

(11) 日本の呉音 n′o（女)（琉球では *n′o: → *n′u: → ni：１音節語幹におけるすべての短母音は琉球語で長くなるという一般法則によって，母音は長い)。

(12) ここでは複雑なメロディー  pumite が単純なメロディー  と入れかわった。それは合成語が単成語となったためである（語の統一上，高い音調のピリオドが pumi と te との両方にあることができない。したがって語全体がひとつの高い音調のピリオドとなった)。

(13) くわしいことは「辞典」の次の単語の項に掲げる。(1) φude 筆，(2) abari 網針，(3) suʒuri（← suzuri）硯。かくて φude「筆」はシナ語からの借用語でなく，日本で生まれたことばと思う。

(14) 古代語「mina˥（水）（さらに「minamoto˥（源）にも現われる）は「辞典」では miʒu（東京 miʒu，京都「miʒu˥，土佐「midu˥）の項で説明する。「mina˥ はもちろんそれと同源である。また namida（涙）の項でも取り扱う〔村山。ふつうミナは水・ナと解されている〕。

(15) トーンの交替を見せずにどんな語幹の後でも常に低い接尾辞《-Lmo, -e（方向格), -na（修飾格）その他いくつか》がつく時ばかりではない。

(16) この（短い音節内部の）下降的上昇は土佐では失われたが，京都その他のいくつかの「西日本方言」（たとえば兵庫）で保たれた。

(17) a⸢sa—a⸢saga「麻」とはちがう。

(18) 日本語 asa「朝」と東部フィン語（ズイリャン語）の形（ロニーがそれにふれている）との比較については asa という単語の項〔辞典の〕を見よ。合成語における asa については asaŋa^{w}o「朝顔」(*asam-kapo → *asagapo。mk が g となった）の項を参照せよ。

(19) J. Grunzel. Entwurf einer vergleichenden Grammatik der altaischen Sprachen nebst einem vergleichenden Wörterbuch（アルタイ諸語比較文法。比較辞典付)，ライプチヒ，1895年。

(20) ラテン語 grūs, ドイツ語 Kranich, ロシア語 журавль（ジュラヴリ）「鶴」などは，この印欧祖語形にさかのぼる（ラテン語 g, ドイ語 k, ロシア語 ж ← *g から，まさに祖語形 *g^{w} が推定される)。

(21) 私は二重音の第二要素の働きをする鼻音の観念を N で表わす。それ（m であるか n であるか ŋ である）がつくられる場所はこの観念において，あらかじめ考慮されないで，次の子音のつくられる場所によって決定される。唇音の前では N=m, 前舌子音の前では n, 後舌子音の前では（語末におけると同じく）ŋ である。

(22) 「辞典」の ʒeni「銭」の項参照。これはもちろん先史時代の借用語であり，シナ語の *ž̑i̯an または *ʒi̯an にさかのぼる（銭は日本の読み方では seŋ, 北京音では č'i̯ɛn)。

(23) P. Schmidt, The language of the Negidals. 《Latvijas Augstskolas Raksti, Acta Universitatis Latviensis》, 1923年, V, p. 16.〔村山。ソ連科学アカデミー言語学研究所編『ツングース・満州諸語比較辞典』レニングラード，1975年，p. 661 ff. にくわしい資料が出ている。〕

(24) P. シュミット教授はこの単語に関して，「日本語 *inu* 参照」としるしている。

(25) V. アルセニエフ「東シベリアの民族学的諸問題」В. Арсеньев. Этнологические проблемы на востоке Сибири. 《Вестник Азии》.「アジア通報」第2～3冊，No. 38～39, ハルビン，1916年，68ページ。

(26) この移行についての説明は拙論「東北方言の母音」（ロシア科学アカデミー報告集，シリーズB, 1924年7～9月号，105～108ページ）参照。

(27) 「全平」の説明は拙論「東京方言における音楽的アクセント」参照。

(28) ここでは長い音声の観念が存在しないことを考慮すべきである。アクセントの関係による母音の「半長」(「全平」において）は原則的に意識されていない。

(29) 拙論「東京方言における音楽的アクセント」参照。そこにこの単語の実験音声学の記録を示してある。

(30) もろもろの資料によって判断すると，共通日本語時代に有声子音（*b, *d, *g, *z）は半鼻音的（ᵐb, ⁿd, ᵑg, その他。ᵑg は *ŋ と合流した）であった。このことはそれらがまさに「鼻音＋無声子音」という複合に由来することによって説明される。

(31) gaiと表記してあるが ᵑgai と読むべきだろう（しかし，このことは，われわれの問題にとって重要でない）。

(32) もちろん kaju → kai という発展は一般音声学的立場からはごく自然である。日本語 kaju → kai（南日本方言 o-kai 御粥）はこれと全く類似した移行である。ただし o-kai と ki「木」とはまったく無関係である。この例はただ純音声学的類似としてあげただけである。

(33) 一般音声学的類似物として，ロシア語《прочитываю》pročityvaju（私は読む）のような単語における aju という音複合の新しい音声単純化をあげることができる。ここでは ju は Y となる（L. V. シチェルバ，質的および量的な点からみたロシア語母音，ペテルブルグ，1912年，参照）。

(34) 共通日本語の形とタガログ語の形との間の上昇メロディーのこのような同一性はいくつかのその他の語源でもみられる。たとえば，*pǐ()「火」(→京都 çi⌈:, 東京「çi）――タガログ語 a⌈puj や *m̥⌈saŋi⌉（兎）（→土佐 o⌈sagi⌉, 京都usa⌈ŋi）――タガログ語 mu⌈saŋ〔村山。じゃこう猫〕がある。

〔村山。タガログ語は ka⌈ju でなく káhoi̯ である。ただしフィリピンには káju（イバナグ，イタウィス，ボントク，アパヤウ語），kajú（イワタン語）もある。ポリワーノフが調べたのは，イワタン語であったのだろうか。〕

(35) このことはもちろん，共通日本語 *⌈ko-⌉（小，子），*⌈o⌊po → 東京 o:, 長崎u:, 琉球 uφu（大）のような「擬似」接頭辞にはあてはまらない（オーストロネシア諸語における *opo「大」参照。）。ko-，*opo との結合は共通日本語では接頭辞のついた形ではなくて，普通の合成語であった。このことは，とくに「連濁」がおこることによって示されている。

(36) 拙論「日本語・マレイ語類似点のひとつ」（ロシア科学アカデミー通報，第6シリーズ，12巻，18号，1918年 2283〜2284ページ）参照。

(37) 詳しいことは同上参照。

(38) ちがいは，日本語がひとつの音素（r）をもつのに対し，二つの音素（r, l）をもつ点にあるだけである。

(39) だから といって，両タイプ，すなわち(1)マライ・ポリネシア・タイプ（日本語のタイプをふくむ）（ma-nuku-nuku または ma-kkuro 型）と「アルタイ」タイプ（qa-p-qara 型）との間の同源関係の問題がなくなるわけではない。モンゴル語の-b-,

トルコ語の -p- は *m にさかのぼるかもしれないのだ。この問題については，次のことを考慮すべきである。(1)トルコ語，とくにウズベク語の重複形複数 kočæ-mæ-kočæ「街々を通って，街から街へ」。(2)いわゆる「二重語」，すなわち重複語第2項頭子音が m で置き換えられる重複的複数形。ウズベク語の čɔj-mɔj「茶」など。拙著『ウズベク語小文法』第1部，タシケント――モスクワ，1926年，参照。ただ，この問題（ma-nuku-nuku 型と qa-p-qara 型との系統関係の問題）は，日本語 ma-kkuro が ma-nuku-nuku 型に所属することに関する，比較的新しい時代の問題とは異なって，それよりずっと古い時代の問題として取り扱われる。

(40) たとえば長崎の p'a:ro⌈ŋ, kʷ'a:do⌈ŋ, pe:ro⌈ŋ「漕艇競争」←シナ語の白龍がそれである。

(41) これらのうち最も古いのはポルトガル語系（たとえば，paN パン）およびスペイン系のもので主として九州に行なわれる。ラテン語 Deus（デウス）「神」でさえ入り，九州で ʒeu˪s(u), reu˪s(u) となっている。

(42) 私は，ある程度証明されたものとならんで，仮説的なものをも取り扱うつもりである（たとえば「虻」abu――京都 abû，兵庫 abû／awû，共通日本語 *ampuN――に対して私はコンラディが集めているオーストロネシア語の bung「虫，蜂」などを可能な対応形とみる。A. Conrady. Neue austrisch-indochinesische Parallelen.《Asia Major》. Hirth Anniversary volume, 1923. S. 44 参照）。

(43) 内破音の -t をもつ。ふつう朝鮮語の語末の子音はすべて内破音である。

(44) 私はツングース，モンゴル，トルコ諸言語とならんで朝鮮語をも「アルタイ系」言語とみる。

(45) トルコ系諸言語のうちヤクート語が最も示唆的である。

(46) このことはすでにガベレンツが指摘した。G. v. Gabelentz. Eine Besonderheit der japanischen Zahlnamen（日本語数詞の一特殊性）。

(47) 日本語，朝鮮語間で子音 *k, m* が対応することは，とくに朝鮮語 kom∥日本語 kuma 熊，朝鮮語 kamɛ〔村山。正しくは kama「釜」。〕∥日本語 ka⌈ma「釜」などによって証明されている。

14. 朝鮮語と「アルタイ」諸語との親縁関係の問題について

〔村山。この論文は「ソ連科学アカデミー報告集」シリーズ B, 1927年, No. 7, に発表された。朝鮮語をアルタイ諸語と関係させたラムステットの論文, Remarks on the development of the Korean language, MSFOu 58, 1928年（その邦訳は民族, 3巻 1928年に発表された）の前年に発表された。朝鮮字ヽの音価を[ʌ]と断定していることなど, 鋭い観察を含んでいる。ポリワーノフ『一般言語学論集』モスクワ 1968年より訳す〕。

「アルタイ諸語」(すなわちトルコ語, モンゴル語, 満州・ツングース語)の比較文法は, 信憑性の少ないボラー, グルンツェル, ウィンクラーなどの「ウラル・アルタイ」仮説にとって代わって, 現在ラムステット, B. Ya. ウラヂーミルツォフ, ことに N. N. ポッペの著作が出たあとは, 準備的な「手さぐり」の段階を脱却して全く科学的な比較言語学分科(「ウラル」諸語, つまりウグロ・フィン・サモエード諸語の比較文法や, たとえばセム諸語比較文法のような)となった。しかも「アルタイストたち」の比較研究の方法は比較文法となりはじめたその他のすべての研究――コンラディの基礎づけた「チベット・シナ」諸語[1]比較言語学とか, 私の日本・オーストロネシア諸語比較とか, またヤフェット理論(もちろん, その事実的裏づけのある部分)のような――に対して望ましいモデルとしてあげることができる。

しかし, 比較研究の方法論に対する修正としてではなく, 単に補足として, 私はあえてひとつの現象分野をあげたい。それらの現象の比較は――音韻法則による語彙比較とは独立しながら, また未だ音韻法則を確立する前に――系統論上の或る結論を下すのに役立ち, または少なくとも今後の(もうすでに語源的な)探求の方向を示しうる。すなわち, まさにどんな諸言語が結局のところ同系であるかを予言しうるのである。それは, 比較される諸言語の音声構造および形態論構造における**一般的な類似**[2]のことである。

なるほど, つぎのような反対論があるかもしれない。一般的性格の類似は各言語の独自の発展の中で消えることも, 反対に出現することもある, と

(そしてこの反対論を裏づけるために，たとえば現代英語をひきあいに出すかもしれない。現代英語は，ある程度音声の点でも，また形態論の点でも「印欧語的構造」から全く離れ，むしろ現代シナ語または甚だしく変化した近代ペルシ語アと比較できる)。このことは否定できない。しかし，このような反対論に対しては，史的文法の方法がある(比較文法ではなくて，狭い意味の史的文法の方法である。一つだけの言語またはその諸方言の出発材料の範囲内における史的文法の方法である)。それによって，わりあい後期に発生した現象を切り離すことができる。そこで，後期に発生した現象を取り去った後に残るものだけを比較研究に用いることができる。そして，比較言語学的研究においてわれわれが確信するところでは，「言語構造」の原則的な諸特徴はきわめてしばしば古風なものであって，系統論的な点で示唆的である。(3)

したがって，朝鮮語と「アルタイ諸語」との関係を取り扱うにあたって私はあえて「言語構造」の一般特徴からはじめる。この点で次の類似をあげたい。

I

「アルタイ諸語」も朝鮮語も，形態論はもっぱら接尾辞的性格をもつ(日本語はちがう。日本語では接尾辞が優勢であるが，それにもかかわらず，それと別個に接頭辞グループがある。それは，同じように古代残存物である重複構造とともに，オーストロネシア語的遺産にさかのぼる。接頭辞 ma- がオーストロネシア語 ma- と実質的に一致することを参照せよ)。「日本・マライ諸語並行現象のひとつ」(1918年)参照。〔村山。本書153〜155ページ〕

II

アクセントの一定した場所と呼気的性質〔村山。中期朝鮮語に低く平らな平声調，上昇調，高く平らな去声調のあったことをポリワーノフは知らなかったと思う〕。この特徴は，日本語およびオーストロネシア諸語(日本語もマライ語も音楽的アクセントをもち，トーン上昇の場所は一定している(4))を「アルタイ諸語」および朝鮮語から分ける。共通アルタイ祖語のアクセントの場所は語頭音節であったとみられる(主として，第1音節にアクセントのあるモンゴル

語にもとづき，またトルコ諸語で第１音節の母音が安定していることにもとづく)。この結論はまったく正しいが，事実を言いつくしていないと思う。まさにトルコ語の語末アクセントにもとづいて，さらに，モンゴル諸語（カルミュク語）において，第１音節のアクセントから独立して最後の音節における随意的——副次的アクセントを私は観察し，また質問のさいにアクセントを最後の音節に移すことを観察した。それにもとづいて私は，祖語のアクセントは「二極的」であったかもしれないと推定した[5]。すなわち，あれこれの付帯的条件に依存して，所与の語の第１音節または最後の音節に現われたかもしれないと推定した。トルコ諸語において強調のさいアクセントが第１音節に移動するケースからもこのような推定がなされる。ウズベク語で æxmǽt「アフメド」（人名）は呼びかけ文では語頭音節がアクセントをもつ。ǽxmǽt「アフメドよ！」, ɔj ǽxmǽt「おい，アフメドよ！」[6]。

朝鮮語に目を転じると，まさに「二極的アクセント」がみられる。シンタクス（連声的（レンジロウ））条件に依存して第１音節と最終音節との間を動揺する。文末で遊離した朝鮮単語は語頭にアクセントがあるが，語の後に発話がつづくときは，その語は語末アクセントをもつ。言いかえると，語頭アクセントと語末アクセントとの交替は朝鮮語ではシンタクス的機能をはたす。

Ⅲ

語彙形態素の典型的な量的構成がだいたい類似している。しかも朝鮮語はこの点でより進歩的な側——トルコ諸語の側——に立っている。従って単純ステムはより短く，ふつうひとつの閉鎖音節 CVC である。これはモンゴル語の２音節語に対応する。たとえば，トルコ語 *ta:š「石」//チュワシ語čol, čul// モンゴル語 čilaγun（オロチョン語 ǯolo)// 朝鮮語 tol(tor-); モンゴル語 mørin（→カルミュク語 mørn̥// 朝鮮語 mal（mar-）←—mʌr「馬」; モンゴル語 muren「川」//朝鮮語 mul（mur-）「水」; モンゴル語 nidun（→現代語 nudn̥)// 朝鮮語 nun「目」など。しかし代名詞ステムでは，すでにいたるところで１音節語がみられる。共通アルタイ語 *i「彼」(N. ポッペ「トルコ・チュワシ比較研究」, Islamica, 1925年参照）//朝鮮語 i「彼，これ」。

これらの例からわかるように，（トルコ語およびチュワシ語のように）朝鮮語はルート形態素の音声構成の短縮において，モンゴル語（および満州・

ツングース語）に続く段階を表わす。モンゴル諸口語の現代の発展はこの段階をめざしている。たとえば，modon（木）⟶modn̥⟶mod(n)など。換言すれば，朝鮮語は言わばモンゴル語の未来の姿を示している（すなわち，変化においてモンゴル語に一歩先んじている）。

Ⅳ

（母音調和がいつ生れたかという問題とは無関係に）「アルタイ語族」のすべてのグループの特徴をなしている母音調和(7)は，なるほど現代朝鮮語には欠けている。しかし，その名残とみられるものは今日まで保たれて来た過去形における a/ʌ の交替である。čab-atta（ステム čap-「捕える」から）(8) と mʌg-ʌtta（ステム mʌk-「食べる」から）。*e ⟶ ʌ に移ったことを推定すれば，*e/a の交替の典型的に母音調和的な形が得られる。

Ⅴ

音声（母音，子音）体系の構成における共通特徴の類似。現在，朝鮮語では 9 または10（y を数えれば）の母音音素が区別される。

i(y)　　ɯ u
e(ø)　ʌ　o
æ　　a

このうち æ, e, ø, y は比較的新しい起源のものである（そのことは表記からわかる。æ は ㅐ つまり a+i で表わされ，e は ㅔ つまり ʌ+i で，ø は ㅚ つまり o+i で表わされ，発音において二重母音 o͜i または o͜e と随意に交替する。ㅟ つまり u+i はふつう wi と読まれるが，舌前子音の後で，この wi は単音化して y となることがある）。

二重母音 ai, ʌi(*ei), oi（および部分的に wi）の単音化の前にあった古い母音体系（諺文（オンモン）発明の時代にあたる）は 7 つの音素の姿で復元される。

i　　ɯ u
*e　　*ʌ　o
a

＊印をつけた母音 *e, *ʌ は現代語の e, ʌ（ないし，方言によっては*ɔ）の対応音ではない。反対に，いくつかの語源解釈にもとづいて，*e を現代

語のʌ(ɔ̈)（諺文(オンモン)のㅓ）の源泉だと考えたい。古代の *ʌ は諺文の記号、に対応し，その後，a（ㅏ）と合流したと思う。そのため現在は音声 a（古代の *ʌ および *a に由来する）は，①文字、（*ʌ の場合）で書かれ（たとえば mal/mar ⟵ *mʌr「馬」)，②文字ㅏで書かれる（*a の場合)。たとえば，mal/mar ⟵ *mar「言葉」。しかし，より古い時代に対してはこの7母音体系にさらに二つの変化を加えなければならない。そうすれば，その体系は母音調和的母音体系の典型的構成に近づくだろう。

子音の分野でも「アルタイ的」音声の類似物がみられる（ただし，l と r の代わりに音素 l/r がひとつである[9] とか，音節末の子音の内破音的性格[10] とか，語頭でさえみられる重子音のような特殊なものは論じないとする)。

「比較研究の手さぐり」の方法の説明としては，以上述べたことで十分である。そこで研究の第2の部分を説明する段である。語源材料にもとづいて比較音韻対応を確立する段である。

私は例として，朝鮮語の音素 l/r[11]（諺文のㄹ）を含む対応をえらぼう。

(1)　トルコ語 š// チュワシ z 語，モンゴル語，満州語 l

(2)　トルコ語 z// チュワシ z 語，モンゴル語，満州語 r

はポッペ，ウラヂーミルツォフの研究が発表された後では証明されたものとみることができる[12]。したがって朝鮮語にも及ぼしうると思う。朝鮮語の対応音は，トルコ語に味方するのでなくて残りの「アルタイ」語族言語，チュワシ z 語，モンゴル語，満州・ツングース語に味方する。しかし，朝鮮語では l と r とは原則上区別されず（古い *l と *r との収斂を仮定する必要がある)，r と l の位置はひとつの音素 l/r- が占める〔この音素は二つの結合的バリアントの形で実現される。l は音節末，すなわち語末および子音（h をのぞく）の前で，r は音節のはじめで，つづく母音の前で現われる。たとえば「馬」を表わす不定格 mal，主格 mar-i〕から，上にあげた二つの対応――(1)トルコ語 š// チュワシ z 語など l，(2)トルコ語 z// チュワシュ語など r――の朝鮮語の対応音は明らかにこの「結合的・二面的」音素 l/r に合流せねばならなかった。ところで，上の二つの対応の外にさらにトルコ語とその他の言語との間に同じような対応のケース――トルコ語 l// チュワシ z，モンゴル，満州語 l; トルコ語 r// チュワシ z，モンゴル，満州語 r――もあるから，朝鮮語の音素 l/r- が入る対応は理論的には全部で4つになるだろう。

(1) トルコ語 š// チュワシュ，モンゴル，満州語 l// 朝鮮語 l/r-: トルコ語 *ta:š (ヤクート語 ta:s, トルクメン da:š//北ウズベク ta:š。母音の短いのはカザフ tas// イラン語の影響をうけたウズベク tɔš など) // チュワシ čul// モンゴル čilaɣun// オロチョン ǯolo// 朝鮮語 tol (主格 tor-i)「石」

トルコ語 *i:š[13] (トルクメン，北ウズベク i:š// イラン語の影響をうけたウズベク語 iš など)「仕事」//朝鮮語 il (主格 ir-i)「仕事」。チュワシ語 əš「仕事」のため，適例でない。

(2) トルコ語 z// チュワシ，モンゴル，満州語 r// 朝鮮語 l/r-: トルコ *ja:z (ヤクート sa:s 春，トルクメン ja:ð 夏，カラチャイ ja:z，北ウズベク，カラ・ブラク ja:z; (タシケント方言 jɔz，カザク žaz)// チュワシ šur// モンゴル nirai「新生の」// 満州 nijarxûn「新鮮な」// 朝鮮語 n'ʌram(←*njerʌm)「夏」。

次に，両方の対応 (トルコ š// 朝鮮ㄹとトルコ z// 朝鮮ㄹ) と関連して，さらに「冬」と「秋」を表わす朝鮮語をあげよう。それはトルコ語 kyz「秋」，qɯš「冬」に対応していると思う。しかし，これらの朝鮮語単語の母音は，「冬」を意味する朝鮮語がトルコ語の kyz-「秋」に対応し，反対に朝鮮語の「秋」を意味する語がトルコ語の qɯš「冬」に対応している。断定することは避けて[14]，両方の対応をあげておこう。

トルコ語 kyz「秋」//チュワシ kər「秋」; cf. 朝鮮 k'ʌul (←kjeul)「冬」

トルコ qɯš「冬」//チュワシ xəl「冬」; cf. 朝鮮 kaɯl「秋」

(3) モンゴル，満州およびトルコ l// 朝鮮 l/r-:

モンゴル，満州 tala，トルコ tala「野」// 朝鮮 tɯl「野」。

さらに満州語 xolo「谷」// 朝鮮 kol「谷」

(4) トルコ r// モンゴルその他 r// 朝鮮 l/r-:

トルコ 複数接尾辞 -lar/-ler など (ヤクート，キルギース，その他はさらに -tar/-dar など) // モンゴル -nar// 朝鮮語 -tal/-dal (-tar-/-dar-)。

モンゴル naran「太陽」// 朝鮮 nal-(nar-)「日」[15]

モンゴル nere「名」//朝鮮 niram「名」〔村山。正しくは irhĩm「名」。〕

モンゴル muren「川」//朝鮮 mul(mur-)「水」(ツングース語の対応形参

照。〔村山。ツングース語 mū̃「水」]〕 朝鮮語 mul はしばしば「川」という概念の等価物である。

モンゴル語 morin（→カルミュク語 mϕrn̥）「馬」//朝鮮 mal(mar-)「馬」(16)。古形は *mʌl/r で，おそらく *mϕr にさかのぼる。朝鮮語 muraŋ「去勢力」をも参照。〔村山。muraŋ は何かの誤解か〕。

モンゴル語 xuruγun「ゆび」// 朝鮮 karak

満州語 mere 蕎麦 // 朝鮮 mil 小麦

トルコ語 turna，ヤクート turuja 鶴 // 朝鮮 turum

〔村山。正しくは turumi。方言形に turum もあり〕//日本 *turû→京都 curû，土佐 tu⌈ru，tu⌈ru⌊ga 鶴ガ，東京「curu。下向的上昇［û］は先日本語の語末の鼻音にさかのぼる。（日本 asâ// 朝鮮 *ɑcʿɐm「朝」参照）。

この次の論文で，朝鮮語の閉鎖音及び鼻音の最も単純な対応を取り扱おうと思う（たとえばトルコ t//朝鮮語 t。トルコ *ta:m「壁」// 朝鮮 tam「塀」など）。とくに，日本語の起源に関する一般的問題と関連して朝鮮・日本関係，またはアルタイ・日本関係を論じなければならない。日本語は（私の語源研究材料が示すように）複雑な混合物である。しかし，大陸の諸言語，すなわち「アルタイ」諸言語とても事態は簡単ではない。ひとつの「共通アルタイ祖語」からそれらの言語のすべての現存の事実を導き出す望みは，おそらくないだろう。はるかに複雑な相互関係があったと推量されるのである。他方，アルタイ問題を取り扱うとき，エニセイ・オスチャク語の問題も避けて通るわけにいかない。この言語には，アルタイ諸要素，具体的に言えばトルコ語要素が後期に入って来た層として確認される（シーフネルが接尾辞 -dak「…のような」(17) のような明白な事実をトルコ語要素に数えなかったのはおかしい。トルコ語 -daq/-dek 参照）。しかしそれと同時に，バスク語との一連の驚くべき類似というまったく予期しなかった観察に注意を向けることを怠ってはならない。

原　注

(1) 私は「インドシナ諸語」の代わりに「チベット・シナ」諸語という用語をえらぶ。

(2) 例として N. Ya. マルの与えたきわめて実りのある指示――グルジア語とセム

諸語におけるルート形態系が「三子音から成ること」についての指示——をあげよう。『古代グルジア語文法の基本表。付録。グルジア語とセム諸語との親縁関係に関する暫定報告』（1908年）。『暫定報告』は東洋諸民族研究所の論集『ヤフェット理論の発展の諸段階をたどる』（1926年，pp. 8〜30）に再録された。p. 10 に曰く，「ルート語においてグルジア語をセム諸語と接近させるのは，子音だけが根源的であるという基本的命題，ならびにグルジア語のルートが３子音からなり，２子音からなるものがまれだという特徴的な現象である。ただ，N. Ya. マルの比較研究論文のうちで最もよい（おそらく，我々が認めうるのはこれだけであろう）この論文（『暫定報告』）ですら，それ自体，何も証明していないのだ。それは比較される両方のグループ（グルジア語とセム諸語）の語彙を読者が独自に検討するための出発点を与えているにすぎない。読者の検討によって，結局，仮説の著者〔村山。マル〕の見解と同一の結論が下される根拠となるルート「３子音構造」の指摘を評価できるだろう。

(3) たとえば日本語の「開音節」の原理がそれである。日本語の時代によって，方言によって，この法則は継続的に（年代的な）諸制限をうけているにもかかわらず，疑いもなく日本語の全歴史にわたって支配している〔先日本語の場合，語末鼻音という形の，開音節の規準からの例外はこの音節の下降的上昇となって跡をとどめ，シナ語からの借用語の時代における「二回目」の語末鼻音 *N, *M（←*nu, *mu およびシナ語の n, ŋ に由来する）があるが，このうち *M は再び消えている（日本語では M→Ṵ, 琉球語では M→ゼロ）。また現在東京方言では音節末に s, ś があり，南九州方言などには音節末に ç または r′ がある〕。このことはオーストロネシア諸語（いちばん西に行なわれるのはマダガスカル島のマルガシ語である）に橋を渡すことを可能にする。オーストロネシア諸語では，これまた一連の年代的および方言的例外（日本の方言におけるよりもっと目だつ例外がある）にもかかわらず，開音節という音節規準が支配している。親縁関係の可能性を示すもうひとつの一般的なものは，語彙モルフェームの２音節という量的な音声規準である（代名詞ステムを除く。厳密に言って代名詞ステムは語彙的意味ではなく形式的意味をもつから）（たとえば日本語「pana˥ 鼻，*turum→ 西日本語curû→東日本語「curu 鶴）。この規準はマライ・タガログ語に完全にあてはまる。しかし，日本語にはいくらかの（僅かの）一音節語もある。これらの１音節語の大部分は日本語だけの範囲内の史的音声学によると，２音節語に由来すると結論される。たとえば，東京方言「ho:, 京都 ho:̂←*popô←*popom 頬；de-（出）←*ŋ̊′de（文語 ide, 琉球語 ŋ̊ʒi[ju·ŋ] 出ル。d→ʒ と軟化したのは先行の *ŋ̊′ による）；東京「ki, 京都 ki˹:←*kVi（cf. 琉球 ki:。もし祖形が１音節語，すなわち *ki：であったなら či：のはずであるが，そうではない。オーストロネシア諸語の材料をひきよせれば，この語の次のような歴史が明らかとなる。*ka˹ju→*ka˹i→*ke→*ki→京都 ki˹:）。従って，２音節の規準からの例外の問題は先日本語の状態をみれば

解明される。

(4) 共通日本語の状態は大体において西日本語（関西方言）に保たれている。

(5) 以下に述べる朝鮮語の事実を研究する前にすでにこう推定していた。

(6) 強調のさいのアクセント移動はフランス語にもみられる。kɔʃɔ̃́「豚」，œsú dφsú「一銭二銭」の代わりに，kɔ́ʃɔ̃「豚め！」，œ́su d'φsu（街の商人の呼び声）（パッシーのあげる例）。（語末音から第1音節への）アクセント移動がトルコ語だけでなく，フランス語にもあるとすれば，トルコ語の現象は史的・音声学的意義をもつものでない（単に一般人類的条件によるものだ）と反対するかもしれない。しかし，まさにフランス語の現象は史的・音声学的理由によるのである。古代のラテン語（最後の3つの音節のいずれかにアクセントがあるという3音節法則ができる以前の）では，語頭音節にアクセントがあったのである。このことはトルコ語アクセント（および第1音節への移動）に関する私の解釈——祖語のアクセントの「二極性」による解釈——に有利にフランス語の並行現象を解釈する可能性を与えるのである。またさらに述べておきたいのは，強調によるアクセント移動は語頭シラブルと結びついているとは限らないことである（もっとも，名詞を呼びかけに使うとき，共通日本語で音楽的アクセントを第1音節に移したとみられる。そこで，すべての方言でいくつかの人名の語頭にアクセントがある。cf. 東京「hana,「take（女子名）。しかるに，ha「na 花，$\overline{\text{take}}$ 竹など）。長崎（三重村）方言ではアクセントは語末音節から（尻高(オクシトン)タイプの語では）第1音節に移されるのではなくして，最後から2番目に移される（そこで，この強調的メロディーは，原則的に強調の傾きのある形としての命令形のふつうの特性となっている）。

(7) このグループのすべての言語がそうだというわけでない。イラン語の影響をうけたウズベク語では母音調和が衰退した。他方，フィン系諸語のうち，たとえばエストニア語でも母音調和が失われた。

(8) cf. トルコ語 tap-「獲得する」(？)〔村山。この比較は適当でない。ラムステット（『朝鮮語語源研究』，p. 23）が満州語 ǯafa-「捕える」，ナーナイ語 ǯapa「同」と比較しているのは正しい〕。

(9) もちろんこの特徴は，日本語における r' l の不区別と関連して考察する必要がある（日本語のずっと後に生じた「軟い」r'を考慮しなければ，ロシア語の Л (l), P (r) に対応するのは日本語ではひとつの音素 r である。これは前舌の，震え音でない，瞬間的な音素である（朝鮮語の，母音の前の r に非常に似ている）。

(10) 明らかに新しい起源の特徴である。アイヌ語，タカログ語における内破音参照。

(11) 音節末では l と発音され，母音（および h）の前では r と発音される。長い（重子音）の場合は *l*:(*ll*) と発音される。

(12) これらの対応の各々は共通アルタイ祖語においてどのようなものにさかのぼる

のかは，実際，ここで触れるわけにいかない。この点でポッペの行なった推定（*ř と *L）がまったく正しいことがわかるだろうと思う。しかし今のところは「作業仮説」としてうけとられる。

⒀ 動詞からつくる -iš/-ɯš/-uš/-yš に終る動作名詞（第1活用，第2活用は -š）はまさにこのステム（iš 仕事）を文法化したのかもしれない。たとえばウズベク語 kel-iš「到来」ur-uš または ur-iš「戦い」，oqu-š または oqi-š 「読み」など。

⒁ 「冬」→「秋」（またその反対に「秋」→「冬」）という意味変化は原則的にまったく可能だと思われるが，共通トルコ語 *ja:z の意味がヤクート語（sa:s（「春」）とたとえばトルクメン語（ja:ð 夏）でちがうこと参照。このような意味変化（「春」→「夏」の類の）は（二つの地域でちがっている）気候的条件と結びついているかもしれない。また「冬」と「秋」という用語のいずれか一方が1年の寒い半分（1/4 でなく）を表わす名詞に由来するかもしれない。

⒂ この語を P. シュミット（『北京官話文法試論』，p. 51）はシナ語からの借用語とするが，そのようにみてはならない。

⒃ シナ語やその他の「チベット・シナ」語と「馬」を表わすこのモンゴル・朝鮮語との関連について（シナ祖語形 *mra を通して日本語 *mma→東京方言 m̩「ma，東北方言 ma）『A. E. シュミット教授記念論集』（タシケント）に発表した「極東の筆記具の用語」〔村山。1923年〕という拙論で述べた。シナ語馬および朝鮮語 mal に対するチベット・シナ諸語の例（「ソクパ語 mari，ビルマ語 mrang，ギャルング語 boroh，アボルミル語 buri」）をあげる P. P. シュミットの言葉は面白い。「ゴビ砂漠はアジアにおける馬の原産地とみられている。そこで馬ははじめて飼いならされたのである（O. Schmeil（シュマイル）博士の動物学教科書，1889年参照）。従って，シナ人は馬をその名称とともにトルコ・モンゴル・ツングース種族から借用したのかもしれない。もしそうならば，南方の諸民族はシナ人から馬を知り，その名称も借用したことになる。馬の名称は当時，1音節語ではなかったはずである」（『北京官話文法試論』，p. 8)。いずれにせよ，馬のこの名称は民族から民族に移動した用語であって，非常に古い時代にひろまったため，ひとつの言語族の範囲内で祖語にあったとみとめることができるのである（多少の保留条件をつけて）。他方，これはまさに移動用語であるから，その余波が他のもろもろの諸族に見出されるとしても驚くにあたらない〔もうひとつの移動用語――先史時代の文化用語―「蜜」が印欧語族，ウラル語族，シナ語（さらにそれを借りた日本語，朝鮮語），それどころかチェチェン語にすらみられるのと似ている〕。こういったからといって，シナ語馬をいじりまわすヤフェット言語理論の操作を認めることにはならない。

⒄ A. Schiefner. Castrén's Versuch einer Jenissei-Ostjakischen und Kottischen Sprachlehre, 1858年，§ 67（カストレンのエニセイ・オスチャク語およびコット語

文法試論)。

15. 形　態　論

（言語学概論 p. 13以下抄訳）

形態論は語の意義が語の構造に依存しているという見地から語の構造を考察する。ひとつひとつの語の構造がまったく特殊であって，一定数の他の語の構造と一致しないというような言語は想像してみることもできない。反対に，多くの語において同一の共通構造式がみられるから，形態論は語の構造の型（タイプ）を研究する，ということになる。共通構造をもつ語系列をとってみよう。

ウズベク語（タシケント方言）

子 ら 私の に
bɔlæ-lær-ım-gæ　私の子らに
生徒 ら 私の に
šɔgırd-lær-ım-gæ　私の生徒らに
兄 ら 私の に
ɔkæ-lær-ım-gæ　私の兄らに
ことば ら 私の に
soz-lær-ım-gæ　私のことば（pl.）に
考え ら 私の に
oj-lær-ım-gæ　私の考え（pl.）に
考え ら 私の に
oj-lær-ım-gæ　私の家々に〔村山。oj「家」についてはセヴォルチャン，トルコ語語源辞典，p. 513参照〕。

シナ語（北京方言）

wɔ$_{a}$ˇ-mən-laˇ　我們倆（私たち二人）

ʻʒam′-mən-laˇ　咱們倆又は偺們倆（私たち汝と二人）

tʻa¯-mən-laˇ　他們倆（彼ら二人）

ni′-mən-laˇ　你們倆（君ら二人）その他[1]

日本語

(1)　東京方言

ik-i-ta-k-att-a-no-^{w}o（または密着した形態素をひとつにして）〔iki-, -tak-, atta〕行きたかったのを

nom-i-ta-k-att-a-no-^{w}o＝nomi-tak-atta-no-^{w}o

飲みたかったのを

jom-i-ta-k-att-a-no-ʷo＝jomi-tak-atta-no-ʷo

読みたかったのを

job-i-ta-k-att-a-no-ʷo＝jobi-tak-atta-no-ʷo

呼びたかったのを

(2) 京都方言

⌈ik-a⌉-⌊nand-a 行かなんだ（行かなかった）(⌈ik-u⌉ 行く）

⌈śin-a⌉-⌊nand-a 死ななんだ（⌈śin-u⌉ 死ぬ）

no⌈m-a-⌊nand-a 飲まなんだ（東京 ⌈nomu)

ka⌈k-a-⌊nand-a 書かなんだ（東京 ⌈kaku)

jo⌈m-a ⌊nand-a 読まなんだ（東京 ⌈jomu)

⌈kawa⌉-⌊nand-a 買わなんだ ⌈ka-u⌉ [←*⌈kap-u⌉]

⌈job-a⌉-⌊nand-a 呼ばなんだ ⌈job-u⌉

⌈araw-a⌉-⌊nand-a 洗わなんだ ⌈ara-u⌉ [*⌈arap-u⌉]

⌈jorokob-a⌉-⌊nand-a 喜ばなんだ ⌈jorokob-u⌉

maći-kutabu⌈re-⌊nand-a 待ちくたぶれなんだ

maći-kutabure-⌈r-u 待ちくたぶれる

⌈ko-⌊nand-a 来なんだ ku-⌈r-u[2]（東京 ⌈kuru)

(3) 長崎県三重村方言（「日本方言の心理音声学的観察」I参照）

ju:t-a-to-⌊ba[3] 言ったのを。ju⌊:（言う）の過去（ju-:⌊ta（言った）-to[4]（名詞形をつくる接尾辞）-ba（対格）[5]

k'a:t-a-to-⌈ba 書いたのを。[kai⌈t-a(←*ka⌈ki⌊-t-a) ka⌈ku 書クの過去]

o:r-a-to-⌊ba 編んだのを。[o:⌊r-a (←*au̯da←*aMda←*aMta←*⌈a⌊m-i-t-a) a⌊m-u(*⌈am-u⌉) 編ムの過去]

nu:r-a-to-⌈ba 飲んだのを。[nu:⌈r-a←*nu:d-a ←— *nou̯d-a[6] ←— *noMda ←— *noMta ←— *no⌈m-i-⌊t-a 「飲んだ」 no⌈mu 飲ムから]

kitt-a-to-⌈ba 切ったのを [ki⌈tt-a←ki-⌈r-i-⌊t-a ki⌈:←*ki⌈r-u 切ルの過去]

jo:-r-a-to-⌈ba 読んだのを [jo:⌈r-a ←— jo:⌈d-a[7] ←— jou̯da ←— *jo-Mta ←— *jo⌈m-i-⌊ta jo⌈mu 読ムの過去]

jo:r-a-to-└ba　呼んだのを［jo:└r-a ⟵ jo:└d-a(8) ⟵ *jou̯da ⟵ *jo-Mta ⟵ *┌jo└mb(i)ta ⟵ *jomb-i-t-a　jo└bu 呼ブの過去］

ペルシア語（タジク方言）

〔村山。省略〕

（古典）アラビア語

〔村山。省略〕

上にあげた例の各々においてグループをなす語をくらべてみるとわかるように，すべての語は一連の共通形態素（ウズベク語，日本語，シナ語，ペルシア語の例，およびアラビア語第1例において）をもっているか，または，そのほか，ルート形態素の音構成が似たように変形している（アラビア語第2，第3例において）。これらの共通特徴（各々のグループのすべての語でくりかえされる）を形態論的構造と呼び，これらの語の各々をお互に区別するものを個別的な語彙材料と呼ぼう。各々の語グループに共通な形態論的構造に属する要素は実際に，各語の**しばしばくり返される**，すなわち**類型的な**構成部分の役割をはたすのであろうか。反対に，**個別的語彙材料**（このグループの各語をお互に区別する形態素）は実際に，上に述べた形態論的構造（ウズベク語，日本語，シナ語，ペルシア語の例における接尾辞。アラアビ語の第1例における接頭辞，第3例における接頭辞……）よりもはるかにまれであり，わずかしかくり返されないのであろうか。

そのとおり，ということである。形態論的構造の同一要素は，たとえば1万語のうち200または300回，500回，ことによると1,000回も，すなわち，2～10％もみつかるだろう。……この比率は20～30％に達するかもしれない。

これに反して，上掲の例における語彙材料たる要素をとってみると，たとえば日本人の発音する1万語において am- という形態素〔村山。ポリワーノフは4段活用を子音ステムとみていたことがわかる〕（現在形は am-u）「編ム」を含む語に出合うかもしれないし，または出合わないかもしれない。一定のものを表わす形態素，たとえば橋（ハシ），羊（ヒツジ），注射器（チューシャキ），櫂（カイ），帯（オビ），おじいさん，引用符（インローフ）という形態素についても同じことがいえる。要するに，自然界や日常生活においてしばしば現われる現象，ことに動作（たとえば日，朝，風，行く，与える，来る，用意する，など）を問題にしないならば，(9) 所与の語彙材料（すな

わち，「橋」「羊」「注射器」などを表わす形態素）は，所与の１万語のうち１～２回または数回現われるか，一回も現われないかもしれない。個々人の言語外的な諸条件の影響（たとえば，そのために羊飼いは「羊」についてしばしば話すチャンスをもつだろう）の可能性をきりはなせば，語彙材料の単位（たとえば「橋」を意味する形態素）の平均的なケースの働きは，その言語のすべての話し手たちが〔たとえば一昼夜に〕発音する語全体の１％にも決して達しないだろう。

そこで，語の要素は，**さまざまな 語の 集合の中で働く**（すなわち参加する）**頻度数**に応じて２つのクラスに分かれる。あれこれの要素がこれらのクラスのいずれかに属する条件はもちろん，その意味にある。すなわち，結局は言語外のデータに帰する。

言語行為（レーチ）の潜在的内容である観念の中には偶然的な，個別的な働きをもつ観念がある（ほとんど無数の物，動作，質の観念がそれである）；また我々の思考において上掲の観念に随伴するという特性をもつ観念がある。たとえば，算術的観念（数の観念）がそれで，あれ，これのものについての我々の思考に当然随伴する。それはもはや抽象的な観念（pl.）である。それらの観念のうち，最高の抽象は物の単数にたいする複数の観念である。そこで，物に関するさまざまの思考はふつう物がひとつであるか，多数あるかの思考を伴う(10)（すなわち，数に関する一般観念が物に関する観念につけ加えられる)。言語の節約によって（きわめて多くの言語で）数が形態論的に表示されるにいたる。たとえば複数の観念は個々の語によって（「多くの」＋物の名）表現されるのでなくて，**語の部分**によって，つまり複数を示す形態素によって表現され，その形態素は（複数の意味をもつ）多くの語においてくり返される。

それとおなじく所与の具体的な動作について我々の観念は当然，①この動作の行なわれた時間についての思考，②この動作を行なった一定の人物またはものについての思考をともなう(11)。その結果，動詞の時制や人称による活用がつくられる（人称による活用はすべての言語にみられるわけでない。たとえば日本語，朝鮮語や，またいくつかの東コーカサス諸語――ダゲスタン諸語には人称による活用はない)。

同じようにして，対象が持つとされる質や特質の観念にたいしては，この質の程度（他の対象におけるこの質と比較して，またはこの比較を離れて）が

当然潜在的に付加される。それにもとづいて質の程度が形態的に表現される。たとえば，ロシア語，サンスクリット，ペルシア語における比較級として，また最上級または強調形として表現される。ウズベク語では強調形は他の対象との比較を前提しない。ɔrzɔn-rɔq または ærzɔn-rɔq「非常に（もっと）安い」。強調形（比較を予想しない。つまり最上級の意味はない）はウズベク語では qi-p-qızıl 真っ赤，qɔ-p-qɔræ 真っ黒，日本語では ma-kkuro- 真っ黒，ma-śśiro- 真っ白(12)。

そこで，我々の言語思考の心理学的土台から（そして終局的には，我々の観念をほとんど無限の数の個別的，具体的観念と，それに類型的に付加される少数の抽象的意味——数とか，動作の時とか，動作または他の対象に対する対象の関係(13)とかのような——に分けることから），第1に同一の語の中に上記の2つの観念カテゴリーを結合する傾向がうまれ，第2に，語の意義が語彙的要素と形態論的（または形式的）要素に原則的に区分されることになる。

（語の複合的な意味に入っている）部分的な意味（pl.）のこの区分に応じて，語彙的意味を表わす形態素を語彙的または実質的（material）形態素と呼び，形態論的（または形式的）意義〔すなわち接尾辞，接頭辞〕を表わす形態素を形式的形態素（またはフォルマント）と呼ぼう。ここに述べたような形態素区分にもとづいて，形態論と語彙論は相互にどのように語の考察を分担するのであろうか。これに対して，簡単に「形態論は形式的な形態素を取り扱い，語彙論は語彙的（実質的）形態素を取り扱う」と答えるならば，正確でないだろう(14)。

したがって，完全な答はつぎのようでなければならない。すなわち，形態論は形式的形態素を考察するし，また語の語彙的形態素が形態論的構造（前述）に参加する，すなわち語彙的意義に類型的に付加される形式的意義の表現に参加するという見地から，語彙的形態素をも考察する。語彙論は語における語彙的（実質的）意味の表現を考察し，したがって，先ず語彙的形態素を取り扱い，形式的形態素を考察するのは，所与の語彙形態素との結びつきが語彙形態素の語彙的意味に反映されるかぎりにおいてのみである(15)。

原　注

(1)　すなわち人称代名詞の雙数形の形〔二つの接尾辞をもつ。①複数の接尾辞(們)と，　②雙数の接尾辞 -la〕。意味においてつ二の語の結合に等しい。

wɔₐˇ-mən liaŋˇ-gə　我們＋两個

tʻa¯-mən liaŋˇ-gə　他們＋两個

その他

(2)　ku-/ki-/ko-（比較：su-/si/se「su-ru˥ 為ル）と三様にステムが交替する第2活用動詞。

(3)　東京の itt-a-no-ʷo 云ッタノヲ，土佐では「ju˪:t-a-ga-o（ユータガヲ）。

(4)　長崎の -to は東京の -no（土佐の -ga）に対応する。ついでながら，東京の，名詞をつくる -no に対するこの方言的な対応（長崎 -to，土佐 -ga）からだけでも，この -no が属格の -no と原則的にちがったものであることがわかる。

(5)　長崎 -ba は標準日本語 -ʷo（土佐 -o）に対応する。

(6)　土佐 no「:˪d-a 参照。

(7)　土佐 jo「:˪d-a 参照。

(8)　土佐「jo˪:d-a 参照。

(9)　もちろん代名詞は入らない。代名詞はまったく特別な考察を必要とする。なぜなら特殊に抽象的な意味（すなわち，まさに形態論構造の要素のもつ抽象的な意味）をもつから。

(10)　しかし，単数のカテゴリーと複数のカテゴリーとの間にさらに雙数のカテゴリーがあって，ある言語で形態的に表現される。もっと稀であるが3数もある。アラビア語，共通印欧語，印欧系のサンスクリット，ギリシア，スラヴ語，他方，現代シナ語（人称代名詞において）の雙数参照。ポリネシア諸語，メラネシア諸語には雙数，3数がある。

(11)　また（あれこれの言語において）形態的に表現される（すなわち個々の語によってではなく，語の部分によって表現される）その他の観念をも伴う。①態（たとえばトルコ系ウズベグ語で，受動態接尾辞 -il/l（または in/n），再帰態接尾辞 -ın/-n，相互態 -iš/-š，使役態 -dır/-tır。ber-il-gæn「与えられたる，彼は与えられた」，juw-in-æ-mæn「私は身を洗う」，sok-ıš-tı-lær「彼らは罵りあった」，ol-dır-dı「彼は死なせた＝殺した)，②動作の事実の否定（トルコ語および日本語の否定形：ウズベク語タシケント方言 ıč-mæ-dı-m「私は飲まなかった」，kor-mæ-gæn「見なかったところの」，bɔr-mæ「行くな！」，東京方言 ka「k-a-na-i 書カナイ，kak-a-na-k-att-a 書カナカッタ。③動詞のアスペクト（たとえば，南日本語：進行アスペクス。kiri-joru→ki:jo「i 切リヨル，完了アスペクト kitćoru（キッチョル）→kitćo「i（キッチョイ），残留アスペクト kitćo「ku（キッチョク）「切っておく」。kiru 切ル →ki: から。④動作の直接目的と間接目的——主として多総合言語において。

たとえば，アブハジア語，バスク語，北アメリカ諸語，さらにグルジア語，ハンガリー語，モルドワ語，それどころかフランス語においてさえ――たとえば je te l'ai dit [žœtœledi]（私はお前にそれを言った）。このような「目的活用」の典型的なサンプルとしてモルドワ語のエルジャン方言の過去形の活用の一部をあげよう。неитень「私はお前を見た」（主語は1人称，目的は2人称。以下，数字で人称を示す）

неия　私は彼を見た（1—3）	неиньзеть　彼は君を見た（3—2）
неидизь　私は君らを見た（1—5）	неизе　彼は彼を見た（3—3）
неинь　彼は彼らを見た（1—6）	неимизь　彼は我々を見た（3—4）
неимек　君は私を見た（2—1）	неидизь　彼は君らを見た（3—5）
неик　君は彼を見た（2—3）	неиньзе　彼は彼らを見た（3—6）
неимизь　君は我々を見た（2—4）	неидизь　我々は君を見た（4—2）
неить　私は彼らを見た（2—6）	неинек　我々は彼を見た（4—3）
неимем　彼は私を見た（3—1）	……………
	неизь　彼らは彼をまたは彼らを見た（6—3＝6—6）

⑿　マライ諸語の類似形参照。イロカノ語 ma-saksakit（ステム sakit から），タガログ語 ma-butiŋ-butiŋ（およびメラネシア語 ma-nae-nae）。拙論「日本語・マライ諸語並行現象のひとつ」〔本書 153～155ページ〕参照。

⒀　格のカテゴリー（または名詞変化）において形態的に表現される。

⒁　たとえばドイツ語 Brüder [bry:dər]（兄弟たち）においては形式的な形態素はまったくない。ところが Brüder は Bruder [bru:dər]（兄弟）とちがうのであって，このちがいはもちろん語彙論の取扱い範囲に属するのでなくて，形態論の取扱い範囲に属する。

⒂　その明瞭な例はウズベク語の ræxmæt-lık である。ræxmæt「恩恵」という形態素は単独では「有難う。感謝します」の意味で用いられるが -lık が付くとまったく特別な意味をもつようになる。ræxmæt-lık は -lık という接尾辞のふつうの形式的意味からすれば，「感謝的」を意味するはずであるが，そうではなくて，「故人（死んだ人）」の意味である。

16. 接尾辞と自立語との区別について

（言語学概論，p. 6 以下）

トルコ語や日本語のいくつかの文法書は格接尾辞やその他の接尾辞（たとえばウズベク・トルコ語 -nı または gæ, -dæ, -dæn(1)，または日本語 -ŋa(ガ), -wa(ワ), -no(ノ), -ni(ニ), -de(デ), -kara(カラ), -to(ト), ʲe/-i̥(エ/イ)〔土佐 -˪e〕, -mo(モ)〔土佐 -˹mo〕(2) など）を個個の語とみているが，そのような文法書の用語とはちがって，言語学的な立場からみると，それは個々の形態素（モルフェーム）である。言いかえると（それ自身の意味をもつ）語部分である。語の「ステム」とそれらの接尾辞（たとえばウズベク・トルコ語 -nı, -gæ, -dæ, -dæn；日本語 -ŋa(ガ), -wa(ワ), -no(ノ), -ni(ニ), -de(デ), -kara(カラ), -to(ト), -e(エ)/-i, -mo(モ) など）とが結びついたものだけが語（すなわちシンタクス単位）であろう（つぎのような形態素結合〔二つの語の結合ではない〕は単一の語であろう：bɔlæ-ni(3)「子供の，子供を」，bɔlæ-gæ「子供に」，bolæ-dæ「子供において」，bɔlæ-dæn「子供から」；日本語 hana-ŋa 鼻ガ，hana-wa 鼻ハ，hana-no 鼻ノ，hana-ni 鼻ニ，hana-de 鼻デ，hana-kara 鼻カラ，hanato 鼻ト，hanai̥ 鼻へ〔土佐˹hana˺˪e 鼻へ〕，hanamo 鼻モ〔土佐˹hana˺˪mo˺〕〔村山。ポリワーノフの語の考えに近いのは橋本進吉の文節の考えである。〕

このような接尾辞が個々の語でなくて，語部分にすぎないことは，いろいろな見地から証明できる。第1に，これらの接尾辞が決してステムから孤立してあらわれることはできない。つまり自分だけで個々の発話を構成しえないという事情である（これとちがって，語またはシンタクス単位は隔離されうる潜在能力をもっている。つまり，コミュニケーションの状況によっては，なんらかの他の語がなくとも，発話（フラーザ）の唯一の成分となりうる。たとえば，質問，問いかえし，答えにおいて個々の語が隔離される。≪Ты(君) был(あつた) в Москве(モスクワに)?≫（君はモスクワに行ってきたの？），≪Был(あつた)≫（行って来た）——≪Был(あつた)?≫（行ってきたの？）——≪Да(そうです)≫——≪Когда(いつ)?≫——≪Вчера(きのう)≫.
言いかえると，この規準の意味からすると，語は発話（フラーザ）または文の潜在的最小単位と定義できる）。しかし，上にあげたトルコ語の接尾辞も日本語の接尾

辞も（他の膠着語のこの種の形態素も）このように隔離することはできない。そこで個々の語とみなすことはできない（ちょうどフランス語の接頭辞 je [zœ], tu [ty], il [i(l)], le [lœ] などは，個々の語として書き表わされるにもかかわらず，語ではないようなものである。なぜならフランス語では，後続の語と結合しないでは，それらは不可能だから)。その上，個々の言語については接尾辞が非自立であることを音声学的にも証明できる。音声学的証明というのは接尾辞が所与の言語において自立語の特徴に固有な諸徴候をもたないということにもとづいている。その諸徴候のひとつが，たとえば，アクセント徴候である。トルコ諸言語では自立語はたったひとつのアクセント音節[(4)]をもっている。また日本語では，たったひとつの高い音調の部分（ピリオド）（音楽的アクセント）[(5)]がある。この（ステムからだけ成る）語，たとえばウズベク語の $\overline{\text{bɔlæ}}$（子供）または日本語の a┌śi〔足。土佐「a└s′i],「haśi〔箸，土佐 ha┌s′i], $\overline{\text{hana}}$〔鼻，土佐「hana┐]に，上にあげた接尾辞がつくばあいでも，トルコ語ではアクセントのある音節は（二つでなくて）ひとつであり，日本語では音調の高まり〔音楽的アクセント〕は二度あるのでなく，一度あるだけである。たとえば

ウズベク語，タシケント方言

bɔlǽ 子供――bɔlæní 子供の，子供を，bɔlægǽ 子供に，bɔlædǽ 子供において，bɔlædǽn 子供から

日本語，東京方言

a┌śi 足　a┌śiŋa 足ガ　a┌śiwa 足ハ a┌śini 足ニ など。
┌haśi 箸　┌haśiŋa 箸ガ　┌haśiwa 箸ハ　┌haśini 箸ニ など。
$\overline{\text{hana}}$ 鼻　〔―― は最後の音節が高まりうることを示す〕
$\overline{\text{hanaŋa}}$ 鼻ガ〔ŋa が随意的に高められる〕
$\overline{\text{hanawa}}$ 鼻ハ〔wa が随意的に高められる〕
$\overline{\text{hanani}}$ 鼻ニ〔ni が随意的に高められる〕
その他

土佐方言

┌a└s′i 足――┌a└s′iga 足ガ，┌a└s′a 足ハ，┌a└s′iɲi 足ニ，┌a└s′o 足ヲ，┌a└s′ie 足ヘ

ha┌s′i 箸――ha┌s′iga┐, ha┌s′a, ha┌s′iɲi┐, ha┌s′o, ha┌s′i└e

⌈hana⌉ 鼻——⌈hanaga⌉, ⌈hana⌉ 鼻ハ, ⌈hanaɲi⌉, ⌈hana⌉ 鼻ヲ（対格は無接尾格または主格と一致する), ⌈hana⌉⌊e,[6]⌈hana⌉mo 鼻モ，その他。

この「アクセント的」徴候のほかに，個々の語の他の音声学的徴候をあげることができる。それは上記の接尾辞にはないものであって，個々の語の特殊な徴候である。たとえば，（いわゆる「母音調和」別名「シンハーモニズム」の影響で）接尾辞母音が交替するのがそれである。そのためにトルコ諸語では，ステムに左右されないような一定の形の接尾辞を人為的にでもあげることはできない。[7] たとえば，複数接尾辞として -lar〔または反対に -ler（カザク，キルギース語）または lær（北ウズベク，タタール語など〕をあげることはできない。というのはあるステムの後ろでは -lar であり，他のステムの後ろでは -ler/-lær（たとえばキルギース語ではさらに -lor または -lør[8]）であろうから。したがって，その自主的な音構成の語 lar(または ler など)は存在しないのである。最後に，接尾辞が非自立的であること(個々の語とみなしえないこと）を音声学的に証明するものがある。たとえば，一連の接尾辞が語の語頭音として許されない音ではじまることがあることである。日本語〔東京方言，京都方言，東北方言など〕でノミナティヴ[9]接尾辞の音構成は -ŋa[10] である。つまり ŋ ではじまる。この音は語頭に立ちえず，語中の位置であらわれる。〔na⌈ŋai 長イ，a⌈ŋo 顎，aŋeru 上ゲル，a⌈saŋaʷo 朝顔，a⌈ʷoŋu 煽グ，cunaŋu 繋グ……：hanaŋa 鼻が，ha⌈naŋa 花が，⌈asaŋa 朝ガのような形もおなじような「単位」，すなわち単一語である〕。接尾辞頭音が（語頭音(アンラウト)でなく）語中音(インラウト)にあてはまる法則に従って発達したということもおなじような意義をもつ〔村山。接尾辞が自立語でないことを示す，という意味。〕。たとえば，古代日本語 -*pa（主格接尾辞）[11] はつぎのような段階を経過した。-*pa ⟶ -*φa ⟶ -wa[12]（おなじ発展はステム内部でも行なわれた。*kapa→*kaφa→kawa 川 河 江)。他方，語頭の *paは ⟶ *φa ⟶ ha となった（たとえば西日本語 *⌈pa⌊ti[13]（鉢）→*⌈φa⌊t′i→⌈ha⌊t′i→⌈ha⌊ci。東京 ha⌈ci)。

原 注

(1) イラン語の影響をうけたウズベク方言（たとえばタシケント方言）の発音を示す。これら四つの口語格接尾辞（対格・属格，与格，場所格，奪格）は文語では五つ

の格となっている(というのは，対格と属格とが文語では区別されるから)。

(2) 現代(東京)語の格接尾辞。

(3) タシケント方言。サマルカンド方言では bɪlɛɪnɪ, bɪlɛɪgɛɪ など。

(4) 大多数の語ではトルコ語のアクセントは最後の音節にある(だからこそ，まだ発話を理解しないうちから，発話を語に分けることができる)。

(5) ドイツ語でいえば musikalischer Akzent (音楽的なアクセント), より正しくは musikalischer Wortakzent (音楽的語アクセント)。東京語(東日本語)では高い音調の部分はたったひとつの音節(短い音節，すなわち長い音節の半分)だけである。したがって，東京語の音楽的アクセントを写すために，私は語の上に「という記号を用いる(音調が高まる音節の前に「をおく)〔村山。この記号はエドワーズが用いたもの〕か語の上に——をおく。——をおくのはいわゆる無アクセント語(いわゆる全平)のばあいであって，最後の音節が随意に(非義務的に)高くなる(たとえば，$\overline{\text{hana}}$, $\overline{\text{hanaŋa}}$ (鼻ガなど)。西日本方言(たとえば，京都，とくに土佐)では声の高い部分は連続するいくつかの音節にわたる(たとえば京都「mame⌉⌊-na 丈夫ナ，土佐「nama⌉⌊du 鯰，「hana-⌉⌊mo 鼻モ，「hana⌉⌊-e 鼻へなど)。〔村山。「　⌉という記号はポリワーノフが用いはじめたと思う。〕それどころか，語全体に及ぶ(たとえば京都「hana⌉ 鼻,「hana-ŋa⌉ 鼻が…，土佐方言「hana⌉「hanaga⌉「hanade⌉)。いずれにせよ，このような高い音調の部分(短い1音節，すなわち長い音節の半分から成るか〔京都では時には短い音節の半分から成る。asa 朝，curû 鶴，sarû 猿〕またはいくつかの連続した音節から成るか)は，それぞれの語でひとつだけあり，語の統一性の外部的，「アクセント的」徴候である。

(6) 西日本語では，いくつかの接尾辞は必ず低い音調である。-⌊mo, -⌊e, -⌊made」(迄), -⌊nɑ (修飾的), -⌊to (直接話法を閉じるト〔村山。「明日来ル」ト言ッタのト〕。共同格 -to〔村山。太郎ト行クのト〕とは別)。たとえば，土佐方言で「or'a⌉「sak'o⌉ no「mu-⌊to「ju⌊: ta 俺ハ酒ヲ飲ムト言ウタ。

(7) イラン語の影響をうけたウズベク方言(たとえば，タシケント，サマルカンド，ブラハ，コーカンド，アンディジャンなどの)は例外。

(8) この接尾辞の頭子音はキルギース語で次のような変種を示す。-lar/-tar/-dar, -ler/-ter/-der, -lør/-tør/-dør など。

(9) より正確には名詞の文法的主語の格。しかしこの主語は論理的(心理的)主語ではなく，反対に論理的(心理的)述語または論理的(心理的)述語の1部である。拙論「日本方言の心理音声学的観察 I」名詞の変化参照。

(10) ŋ という記号(国際音声アルファベットの)は後舌鼻音，すなわち「鼻にかかるガ行の子音」を表わす。(ガギグゲゴに対してガギグゲゴとあらわされることがある〔村山。最近はガ゚ギ゚グ゚ゲ゚ゴ゚とあらわされる〕)。すなわちドイツ語 singen 歌ウ〔siŋŋ〕,

lange 長ク〔laŋə〕の《ng》のタイプの音，ウズベク語ブハラ方言の〔koŋıl〕または〔koŋul〕の ŋ (ng) のタイプの音を表わす。東京方言及び西方言の多くにおいては語中，すなわち母音間の ŋ は南方言（及び土佐方言）の g に対応する。たとえば．東京 na⌜ŋai 長イ，hanaŋa 鼻ガ，京都 ⌜na⌞ŋai, ⌜hanaŋa⌝, 長崎 naga⌜ka（または naŋ⌜ka), 主格・属格接尾辞 -ga；土佐 ⌜na⌞gai, ⌜hanaga⌝〔同様に，（ŋ でなく）g は琉球語でも用いられる〕。

⑾ 論理的（心理的）主語の格。

⑿ そこから方言ではさらに -a/a：(たとえば土佐 mida←midu-wa 水ハ，sa⌜ra⌞；←sa⌜ru⌞-wa〔*sarû-wa〕猿ハ。さらに a⌜sa⌞：←a⌜sa⌞-wa〔*asâ-wa〕朝ハ。時には接尾辞ゼロとさえなる（たとえば，土佐 a⌜sa←a⌜sa-wa⌝ 麻ハ〔すなわち，主格は無接尾辞格と合流し，また対格と合流した。a⌜sa←a⌜sa-o⌝ 麻ヲ〕)。おなじような w の消滅は（おなじ土佐方言で）ステム内でもみられる〔二音節以上の複合体において。⌜aga⌝⌞：吾川，⌜aga⌝⌞:go:ri 吾川郡「吾川，吾川郡」；⌜aga⌝⌞:←⌜a-ga⌝⌞wa。-gawa/kawa は「川」〕。

⒀ 京都 ⌜ha⌞ći（土佐 ⌜ha⌞t′i), 東京 ha⌜ći「鉢」はサンスクリット pātra-「僧の鉢」がシナ語の形 *pat を通じて日本語で *⌜pa⌞ti となった（日本人の言語思考において〔子音に終る〕閉鎖音の観念がないので，語末の i が生じたのである。もとの日本語の形では，音楽的アクセントは第1音節にあったはずである。*⌜pa⌞ti)。

さらに ⌜ha⌞ći（東京 ha⌜ći 鉢）の同音異義語が数詞（京都）⌜ha⌞ći（土佐⌜ha⌞t′i), 東京 ha⌜ći「八」である。これもシナ語からの呉音借用語である（古代シナ語の形は *pat。そこで北京語 ᵖba 八)。〔鉢，八を蜂と混同してはならない。蜂はアクセントがちがう。京都 ⌜haći⌝, 東京 haći〕。

鉢と八の語源から，ことにシナ語の源（*pat）からハチの語頭の h 音の歴史がハッキリわかる。*p ⟶ *φ（f 音の特殊な変種)⟶h。注。ついでながら日本語 haci「鉢」はサンスクリット pātra- にさかのぼると見ると，結局ハチはロシア語 пить〔p′i-t′〕(飲ム), пойло〔poj-l-o〕(家畜の飲料), пиво〔p′iv-o (пи-в-о から)〕(ビール) と同源ということになることをのべておきたい。なぜなら，サンスクリット pā-tra- は印欧祖語*pō-tro-「飲むための道具」に由来し，ロシア語 с-паивать（飲ませる), поить「飲ませる」, пойло「家畜の飲料」, пить（飲む）と同一の祖語ルート *pō(i)/*poi/*pī（飲む）をもつからである。

日本語 haći（八）⟵ *⌜pa⌞ti ⟵ シナ語 *pat の史前の語源についていえば，シナ語の数詞とおなじく，これは他の「チベット・シナ」諸語に並行形がある。たとえば，7世紀のチベット文語の *brgjad「八」がそれである（シナ語 *pat では第1，第4（母音 a), 第5の要素以外はすべて消えてしまった)。

17.　史的言語学と比較言語学

（言語学概論，p. 31以下）

実際には史的言語学を比較言語学（ドイツ語 Vergleichende Sprachwissenschaft, フランス語 linguistique comparée)，つまり，より正確には同系諸語の歴史の研究から切りはなすのは，とてもむずかしい。言語の歴史家はいずれかひとつの言語または方言を，古代の状態からより新しい時代までの発展において考察するだけでなく，同系諸言語のそれぞれの現象をも考察するのであるから，比較言語学または比較・歴史言語学に従事するわけである。つまり比較言語学の根底には同系諸語という概念が横たわっている。私たちは，表面にあらわれた類似諸特徴が，所与の諸言語の共通起源を仮定しなくては説明できないような諸言語を同系語と呼ぶのである。たとえば日本語と琉球語とのあいだにはすこぶる多くの一致点がある。特に，日本語でも琉球語でも，同じ意味と結びついた多くの語または語部分が両言語において同一，または類似した語構成をもつ点がそうである。たとえば，tama 玉，sara 皿，hana 鼻は日・琉両語でおなじひびきをもち（アクセントからみてさえ，ほぼおなじ)，ki 木という語は琉球語では母音が長いだけ (ki:) である（京都，土佐の語形も ki:（=ki「: であって一致する。そこで，琉球語とのちがいは，京都と土佐のアクセントにあるだけである〕）〔村山。首里方言で kii「木」は平板型アクセントである。ポリワーノフはこの事実をここで間接に確認している。〕；日本語 tori 鳥と琉球語 tui とはちがったひびきであるが，似ている（共通点は語頭の t と語末の i)。また日本語の過去形 jonda（西日本語 jo:da）呼ンダは（現在形 jobu とくらべて）d-||b- 及び -a||-u の交替を示している。これは琉球語の過去形 jud-a-ŋ（現在形は jub-u-ŋ）でくりかえされている。また a におわるステムの論理的主語の格 (subjectivus) はおなじく a: という語尾である。これは南日本語（九州諸方言，たとえば長崎県の方言）においてそうであり，たとえば琉球語の主格形 ti:ra: (ti:ra 太陽)，ka:ra: (ka:ra 川)， anda: (anda 油，脂）である。長崎 jama「: (ja「ma 林)(1)， hana└:

(ha⌊na鼻), abura: (abura 油, 脂)[2], 及び他方, これに対する中央日本語は jama-wa, hana-wa, abura-wa (*⌈ja⌊ma-pa, *⌈pana-pa⌉ など)。

意味が同じ（または近い）語及び語形における同じような類似性がたとえば, 狭い意味の「トルコ諸語」（たとえばオスマン語, ウズベク語, トルクメン語, カザフ語, キルギース語など）とヤクート語またはチュワシ語との間にみられる。たとえば, ウズベク語（タシケント方言）tɔʁ「山」は同じ意味のカザフ語 taw, キルギース語 to:, トルクメン語 daʁ, チュワシ語 tu, そしてヤクート語 tɯʌ「林」が対応する。ウズベク語の ot「火」（イカンおよびカラ・ブラクの北ウズベク語は o:d-）には同じ意味のカザフ語 ot, キルギース語 ot, オスマン語 ot, トルクメン語 o:d, 北クムク語ut, 南クムク語 ot, タタール語 ut, チュワン語 vut, ヤクート uot 語が対応する。ウズベク語の bol-「有る」（bol 有れ！）にはトルクメン語 bol-, カザフ語 bol-, キルギース語 bol-, タタール語 bul, 北クムク語 bul（南 bol), チュワシ語 pul, ヤクート語 buol が対応する。おなじようにして, 形式的な形態素でも多くの類似性がみられる。一例をとろう。ウズベク語（タシケント方言）の三人称所有接辞[3] -ı には, 他のトルコ諸語では -i/-ɯ または -i/-ɯ/-u/-y が対応し（たとえばオスマン語 et-i「彼の肉」, トルクメン語 et-i「彼の肉」, a:d-ɯ「彼の名」, gɯ:ð-ɯ「彼の娘」, ba:lɯʁ-ɯ「彼の魚」, カザフおよびキルギース語 oq-u「彼の矢」, キルギース語 qɯz-ɯ「彼の娘」など), チュワシ語では -i または -ə が対応する（pull-i「彼の魚」, xər-ə「彼の娘」)。

他の言語グループでも, 類似した一連の語や形態を見出すことができる。たとえば

(1) モンゴル語（狭い意味の), ブリャート語, カルミュク語
(2) ペルシア語（とその諸方言。たとえばタジク語, タト語など), クルド語, オセチン語, アフガン語, ヤグノブ語, シュグナン語（およびその他の小さなパミール諸語)
(3) ドイツ語, スウェーデン語, デンマーク語, オランダ語[4]
(4) フランス語, イタリア語, スペイン語, ポルトガル語, ルーマニア語, その他の「ロマン系」諸語[5]
(5) ロシア語, ポーランド語, セルビア語, ブルガリア語, チェク語, そ

の他のスラヴ諸語[6]

これらの，もろもろの一致（日本語と琉球語とのあいだの一致，トルコ諸語間の一致，ポーランド語とロシア語との一致など）を偶然の一致だ，と言って説明することはもちろんできない。このような類似の唯一の原因は，これらの言語が，たがいに類似しているこれらの語および形態をひとつの共通の源から受けとったということだけである。これらの類似が体系的性格をおびていて，語彙，形態論の全体にわたって一貫してくり返されるならば，これらの言語（日本語と琉球語，ロシア語とポーランド語など）が，もっと古い時代に存在したひとつの言語が変形したものであると推定せねばならない。この言語が世代から世代へとつたえられることにより（つまり学習によって，より正しく言えば，子供が年長者の言語を自習することによって）この言語は現代まで生きのびてきたのであるが，変化した形で，正しくは，さまざまに変化した形で生きのびてきたのである（変化した形の例としては，日本語と琉球語の[7]，ウズベク語――トルクメン語――タタール語――ヤクート語などの[8]，フランス語とスペイン語の[9]，ロシア語とポーランド語の，その他の完全類似でない語や形をあげることができる)。これらの言語間の類似は，そのためなのである。しかし，それと同時に，疑問も生まれる。ちがう点はどうして説明されるのか。出発形が変形したのはどうしたわけか。しかも，各個別言語における特殊な，独特な形はどこから生まれたのか。

子供たちは大人の言語をまねるとき正確にまねたはずではなかろうか。しかし，もし彼らが各世代において無条件に正確にまねたなら，現代ロシア語と現代ポーランド語〔または，日本語と琉球語，またはタタール語とトルクメン語など〕はおたがいにちがっているはずはない。またその祖語，つまり古代の言語とちがっているはずはない。この問題については，つぎのことをハッキリ認識する必要がある。

(1) 子供の言語と大人の言語とがちがうという事実

子供たちは大人の言語を学ぶとき，大人の言語にいくつかの変更を加える。[10] これらの変更はあまり大きなものでない。二つの連続世代（父と子）の言語の大きなちがいが目につくというようなことはない。しかし，何世代にもわたるうちには，これらの変化が蓄積され，新しい言語は古代の言語と

非常にちがったものとなる。

(2) 世代から世代に伝達される言語の変化がさまざまである可能性

たとえばある言語が大人から子供に伝えられるとき，ある家庭の子は別の家庭の子にみられないある変化を加えることがある。第３の家庭の子供のばあい，変化がちがったものであるかもしれない。こういうわけで，同一世代のさまざまな人物において，前の世代の言語になかったさまざまなちがいがあらわれる。これとおなじように，新しい時代のさまざまな言語においては，古い時代にこれらの言語の源となった言語において欠けていた差別が現われる。たとえばロシア語の сон〔son〕（眠り）は母音が〔o〕であり，ポーランド語は sen〔sen〕であり，母音は〔e〕である。ポーランド語とセルビア語のもととなった古代語では，この語の母音は特別なもの（ъ。сънъ）であった。それは（この位置で）ポーランド語とロシア語で異った変化を示した（ポーランド語では e となり，ロシア語では o となった）。

東京（および）京都 unaŋi，長崎（および土佐）onagi，琉球 n̥naǯi「うなぎ」の共通出発形は *mnaŋi（または *m̥nagi）(11) とみられる。ちなみに，古代日本語　munagi（wo na gi もあり。山田美妙の日本大辞書を見よ）もそれを示唆している。つまり，古代の音節形成的鼻音 *m̥ は日本方言の１部（「標準日本語」的な中央および東部諸方言。〔東日本語のうち〕東京語，および〔西日本語のうち〕京都語がそれに入る）で u に同化した〔つまり *m̥→u。言いかえると，*m̥×u→u という収斂が起こった〕。南方言および西方言の１部（九州および四国，土佐）はで *m̥→0〔つまり *m̥×0→0 という収斂〕が生じた。また南グループの最南端，琉球語では，この位置で *m̥→n̥ となった。つまり音節形成的鼻音が保たれた。ただ，次の子音 n に同化して，調音場所をかえた（m̥nagi→n̥naǯi）。

ウズベク語 jɔz「夏」，カザフ語 žɑz，トルクメン語 ja:ð，ヤクート語 sa:s（「春」），チュワシ語 s̍ur（「春」）からは，(1)狭い意味の「トルコ」諸語（つまりヤクート語を含むがチュワシ語をのぞく）の出発形として *ja:z が復元される。ここから，独特な音声変化によって，個々のトルコ語のすべての形が生じた。ウズベク語（タシケント方言）では *a:→a→ɔ と変

化し，カザフ語では j→ǯ→ž, a: →a と変化し，トルクメン語では z→ð と変わり，ヤクート語では *j→s, z→s と変った。(2)チュワシ語においては *ja:r が復元される（そこから *j→チュワシ š, *a: →チュワシ u, または他の方言では o)。さらに，これら二つの出発形（*ja:z と *ja:r）はもっと古い段階にさかのぼる。それは *n′a:r^{z} または *n′a:$\overset{z}{r}$(12) である。*r^{z} または *$\overset{z}{r}$ という記号は，特別な子音（特別な種類の r）を表わす。

おなじようにして，ウズベク語の子音ステムにつく三人称所有接尾辞〔村山。トルコ諸語，たとえばトルコ共和国トルコ語における ev「家」，ev|i「彼の家」の i〕-ı および他のトルコ諸語のそれに対応するすべての母音交替形〔-i/-ɯ または -i/-ɯ/-u/-y〕，チュワシ語の -i/-ə はトルコ・チュワシ共通祖語にこのような接尾辞（すなわち *-i という形の）が存在したことを仮定しなくては説明できない(13)〔Asia Major. Islamica. Vol. 1, fasc. 4 の N. ポッペの「トルコ・チュワシ比較研究」，p. 422～423 参照〕。

(3)　たえず相互にコミュニケーションをもつ一定の人間集団が話す言語が一様である必要があるので，この集団のメンバーたちのあいだの個人差の範囲が限定される。そこで，個々人のパロール〔村山。ロシア語 речь〕の個人的特殊性は意識的または無意識的に除去されるのがふつうである。だから，もし何らかのまとまった社会単位（家族，氏族，種族）内で世代から世代に言語がつたえられるにつれ言語変化が可能でも，それはその社会単位のその世代のメンバーたちの多数によって承認されるような変化である(14)。だから，密接なコミュニケーションで結ばれる社会集団は，だいたい一様な言語をもっており，このようなコミュニケーションが緊密であればあるほど，言語もそれだけ一層一様である（個人差はそれだけ少なくなる)。そこで，家族の言語は種族の言語より一様である。特別な諸部族に分かれていない種族の言語は，部族に分かれている種族の言語より一様である。都会の言語は，個々の村に分散している住民の言語（とくに，交通不便な状態の）より一様である(15)。ひとつの文化中心で結ばれた国の言語は，首都の経済的，文化的重要性が他の住民地点より優越していない国の言語より一様である。

カスピ海から中国にいたる領域を遊牧する遊牧民の言語であるカザフ語(16)において，諸方言（さまざまな地方グループの方言におけるいくらか

大きな差異）がないのに，他方，土着生活をおくるウズベク人のそれぞれの村（キシラク）〔村山。もとは冬営地のこと〕の方言は，きわめてさまざまである。ウズベク人は土着性がつよく，実際の共通民族政治統一がない。〔もちろんロシアによる占領の前の時代のことをいっているのである。たとえば，イーカンとかカラ・ブラクのようなところで生まれたウズベク人は100キロ離れたタシケントに行ったことがないのがふつうである。政治的な点で，自分をブハラ国家またはコーカンド国家の市民とみなさないで，i: qan-lɯq（イーカン住民），mænkæt-lik（マンケト住民），qarabulaq-lɯq（カラブラク住民），tɔškæn-lik（タシケント住民）などと自称している。つまり自分の村（キシラク）または町の名で自称している。〕

そこで（経済的必要によって制約される）集団の現実生活が集団成員間のたえざる交互のコミュニケーションの必要を前提とするかぎりにおいてのみ集団における共通語は存在するのである。

これに反して，ある民族の歴史においてこの民族の個々のグループの間のコミュニケーションがとだえる時代があると，分離した各グループの言語の変化の方向がまちまちであって，そのためにこれらのグループの言語のあいだには一連の差異が増大し，さまざまなグループにぞくする人々の間のコミュニケーションが全く不可能になるほどである（たとえば，ポーランド語とロシア語，あるいは〔村山。トルコ系の〕アゼルバイジャン語とトルクメン語との間の差は未だコミュニケーションを不可能にするほどではない）。いいかえると，何らかの社会のメンバーたちの相互理解の必要――それが言語の個人差を平均化する――はこの社会が分裂すると消え，それと同時に一様な言語が破壊されてしまう。

§11

前節では言語という語を広い意味で用いた。それは家族の言語，部族の言語，種族の言語などを示すために用いた。これから先も言語をこのような意味において用いることが望ましい。私は，言語（レーチ）の観念（音，語，語部分，文の観念）と外界の観念，すなわち言語外的観念（つまり，言語で表現される概念）との間の連合（associations）のあらゆる総体または連合の体系を言語と呼ぼう。このような体系が多数者または少数者の頭にあるのか，たった一人の人の頭

にあるのかは問うところでない。そこで，個人的言語，たとえばペトロフの言語またはイワノフの言語について論ずることもできる。よし，ペトロフの言語とイワノフの言語のちがいが，たとえば，(r)音を口蓋垂で発音するとか，「彼女の」というロシア語を её (jejo) でなく ея (jeja) という（たとえば「彼女の家」を（jejo dom）の代わりに ея дом (jeja dom)[17]）ようなことだけだとしても。この見地からするとある村の方言（ゴヴォール）や下部方言（ポドゴヴォル）や地域方言（ナレーチエ）（たとえば土佐方言（ナレーチエ）。共通特徴をもつ高知市の方言をはじめとする土佐の町，村の諸方言（ゴヴォル）の総体）をも言語と呼ぶことができる。言語という語をこのような広い一般的な意味で用いるのは便利である。なぜなら同系諸方言の圏内で所与の方言が占める位置の問題を，不必要な場合には，精密に規定しなくてもよいからである。しかし，指摘しておかなければならないが，狭い意味では，言語という語は，お互いに親縁関係にあって，話し手の相互理解を妨げるほど[18]のちがいのない多くの個人的方言を総括するために用いてよい。これらすべての方言は大方言（ナレーチエ）にわかれ，大方言（ナレーチエ）は下部大方言（ポドナレーチエ）にわかれ，それは中方言（ディアレクト）に分かれ，中方言（ディアレクト）は小方言（ゴヴォル）に分かれ，小方言（ゴヴォル）は下部小方言（ポドゴヴォル）に分かれ，それは個人的方言（ゴヴォル）からなるであろう〔村山。ポリワーノフは方言を大きさに従ってナレーチエ――ポドナレーチエ――ディアレクト――ゴヴォル――ポドゴヴォルに分ける〕。厳密にいうならば個人的方言のみが質的にみてまったくハッキリしたものである。言いかえるとそれのみが正確に記述できる言語である。個人的方言から一定の集団の言語に移るとき，私たちはある抽象化を行なうわけである。所与の集団の全成員に共通であるもの，すなわち社会的意義をもつものを指摘することはもちろん大切であるが，直接にそれをなすわけにゆかない。なぜなら，直面するのは，共通の特徴のほかに個人的特殊性[19]をも持つ特定個人の言語だけだから。とはいえ単一の書きことばで結合された一定社会の成員たちが用いるところの，だいたい一様な言語の存在によって，この社会の成員の言語思考に存在する共通特徴の大きな総体が与えられる。

このような言語は**書きことば**という名称で，もろもろの同系諸方言の総体としての言語の概念に対置される。たとえばロシア語の書きことば（歴史的基盤はモスクワ方言）がそれであり，日本では共通日本書きことば[20]がそれである。これは第1に，すべての日本方言の総体としての日本語という概念に対置され，第2に，共通日本標準国語(その土台は東京方言)――明治大

正時代に日本の知識階級の単一の口語となった——に対置される。しかし，書きことばが，それを用いる社会内部の何らかの口語に常に近いだろうと考える必要はない。書きことばには，生きた口語とまったく無関係な要素（たとえば，古風なまたは外国風の）がふくまれることがある。

§12

言語という用語の使用について述べたが，さて比較的・歴史的言語学の概念を考察してみよう。この言語学，つまり，いくつかの同系諸言語の比較的・歴史的研究はこれらの言語がひとつの共通言語に由来することを仮定してきずかれ，したがってこの古い共通語の発展の歴史をそのさまざまな分枝において研究することからなる。その言語で書いた記録が残っているために，考察される同系諸言語の出発点となる古代の言語を私たちが知りうることがある（ラテン語がそれであって，イタリア語，フランス語，スペイン語，ポルトガル語，ルーマニア語〔もとは lingua Romana ローマ語という意味〕などのいわゆるロマン系諸語はそれに由来する）が，考察される同系諸語の源である古代語で書いた記録がなくてその言語に関する直接の資料（外国人が記録したいくつかの単語とか固有名詞とかでも）がないようなこともある。ロシア語，ポーランド語，チェク語，セルビア語，ブルガリア語などのスラヴ諸語(21)の源となった言語が後の場合である。

（これらの民族が歴史の舞台に姿を表わすよりずっと前の）遠い先史時代に**共通ゲルマン**祖語（資料は死滅してしまった**ゴート語**，ドイツ語，オランダ語，スウェーデン語，デンマーク語，および英語の基本部分の資料がある），**共通バルト**祖語（死滅してしまった**プロシア語**，リスアニア語，ラトビア語），**共通ケルト**祖語（たとえば，とっくに死滅したガリア語〔現在のフランスで行なわれていた〕，アイルランド語，ブレトン語〔フランス北部〕），**共通イタリア**祖語（**ロマン**系諸語の源であるラテン語，すなわち古代ローマの言語〔lingua Ronana〕，とイタリアの一連の同系古代語との出発点となった言語），および**その他の祖語**——いわゆる印欧語族のその他の枝々（ギリシア語，アルバニア語，アルメニア語，イラン語，インド語）の祖語が存在した。これらの言語はそれぞれの語派（グループ）の祖語を媒介して，もっと古い**共通印欧祖語**の子孫であるというわけである。そこで，最も古い共通印欧語のみな

らず，その子孫（印欧種族が拡散したとき独特に進化した）——各語派の祖語（共通スラヴ語，共通バルト語，共通イラン語など）は，ずっと遠い先史時代に属し，何の記録によっても立証されていない[22]。

しかし，このような事態であるにもかかわらず比較的・歴史的言語学はひとつの共通祖語——考察される諸言語の源——が存在していた時代のもろもろの事実を出発点とする。これらの事実にかんする知識は直接に得られるのではない。つまりその子孫であり，変形であるところの諸言語の観察からえられるのである。所与のグループのこの共通の古い言語は，このグループの祖語と呼ばれる（たとえば共通スラヴ祖語または原始スラヴ語。共通セム祖語，共通チベット・シナ祖語）。それから派生した同系諸語はふつう，共通の名称で統一される。この名称はこれらの言語の各々にもつけられる（たとえば，アラビア語，古代ユダヤ語，シリア語[23]などは，すべてセム系の言語であり，チベット，シナ，ビルマ，シャム語はチベット・シナ諸語[24]である。その他）。それらの全体は語族（セミヤ），言語群（セメイストヴオ）または語派（グループ）と呼ばれる（たとえば，トルコ語族（セミヤ），アルタイ系言語群（セメイストヴオ））[25]。

記録で実証できない祖語のもっていた事実を確立するやり方は子孫の諸言語における事実の比較による祖語の復元（reconstruction）と呼ばれる。比較による復元とは，比較文法の方法，または比較方法のことである。所与の言語族のそれぞれの言語において観察される諸事実の関連（対応）を説明しうるような現象——それが祖語に存在したと仮定して——をさがし出すことである。たとえば，ロシア語 сон〔son〕（眠り），ポーランド語 sen〔sen〕，セルビア語 сан〔san〕を考察して，「眠り」を表わす語が共通スラヴ祖語でs音にはじまり，何らかの母音〔比較文法的考察によって，この母音の質（古代スラヴ語 ъ ←— 共通印欧語*u)〕がつづき，さらに〔n〕音がつづくことが結論される[26]。

所与の語族のそれぞれの言語の事実を説明するには仮説が必要であるが，このような仮説の総体から，祖語に存在していた，一定の意味をもつ語の音構成についての観念が得られる。これらの語を形態素に分けることについて結論を下すことも可能である〔「眠り」を表わす祖語形 *sup-n-os ←— *sup-no-s[27]の分け方参照〕。同じようにして，この祖語から派生する同系諸語のシンタクスの比較にもとづいて，祖語のシンタクス現象についても結論する

ことができる。

§13

「比較的」(または「歴史的・比較的」)という用語はもちろん，言語学の諸部門にも適用できる。たとえばある言語族の**比較的**[28]（または史的・比較的）音声学はこの語族の個々の言語における音声史を考察し，出発点として祖語の音声の状況を利用する。同じようにして，**比較形態論**は，復元される祖語に由来する**同系諸語の形態論の歴史**を研究し，また比較シンタクスはもろもろのシンタクスの歴史を研究する。

比較的・歴史的語彙論(レクシカ)は当然，語源研究(エチモロギヤ)のことである。つまりある同系諸語の語彙をつくりあげる語（pl.）の歴史の総体のことである。換言すれば，ある言語族の**語源辞典**のことである。語源辞典はふつう，ある語族全体または個々の言語にぞくする語彙材料の比較的・歴史的説明（すなわち語源研究）をとりあつかう研究書につけられる書名である。そこで『印欧諸語（ドイツではインドゲルマン諸語というのがふつうである）語源辞典』，『ラテン語語源辞典[29]』，『ギリシア語語源辞典[30]』，その他『サンスクリット語源辞典』，『スラヴ語源辞典』などがありうる〔村山。ポリワーノフのペテルブルグ大学の学友 M. ファスマーは『ロシア語語源辞典』Russisches etymologisches Wörterbuch, Heidelberg 1953〜58年を完成した。O. N. トルバチョフによるロシア語訳あり〕。

〔補　　説〕

語源辞典（すなわち比較的・歴史的語彙学）という概念を説明するためにさまざまの言語の個々の**語源解釈**（すなわち，個々の語の歴史にかんする学説）の数例をあげよう。

(1)　ロシア語 медве́дь(メドヴェーヂ)〔m′edv′et′/m′edv′ed′-〕(熊)

現代では мед(ミョト)〔m′ot/m′od-〕（蜜）と вед-(ать)(ヴェート)〔v′ed-（a-t′)〕（知る）とから連想して意味づけをするが，正しくない。(1)ロシア語 медвя́ный〔m′edv′-an-ɯj〕（蜜の味のある）と(2)サンスクリット（古代インド語）mad^{h}-vād（熊の形容語，文字通りでは「蜜・食べ」）とを比較して，ロシア語の медведь（熊）がサンスクリットとおなじ共通祖語形を表わすこと，つまり印欧祖語 *med^{h}u̯-ēd にさかのぼると結論される。第１項 *med^{h}u̯ は印欧祖

語中性名詞 *médʰu「蜜」(サンスクリット madʰu, 古代ギリシア語 metʰu ⟶ metʰy, スラヴ語では中性から男性に移って медъ, ロシア語は m′od ⟶ m′ot) の結合的 (連声的) バリアントであり, 等2項 *ēd は「食べる」意味の動詞ルートである〔そこからサンスクリットの ād-「食べる」, ロシア語 jeд-a「食べもの」が生れた〕。〔村山。サンスクリット madh-vad は熊に関係がない。或る鳥を修飾することばで,「甘いものを食べるところの (もの) の意〕

サンスクリット madʰvād の意味からみて, 印欧祖語 *medʰu̯-ēd「蜜・食べ」ははじめ単に熊の形容語であったが, 後にスラヴ諸語で「熊」を意味した基本語 (*r̥kso-s>サンスクリット r̥ksa-h, ギリシア語 arktos) の代わりに用いられはじめた。明らかにタブーの影響による。東北シベリアのはずれのロシア移民たちの方言で, 熊は дедушка(デェードウシカ) (おじいさん) と呼ばれているのはこれとおなじ置き換えである〔ボゴラス教授の講義から〕。

(2) ラテン語 venēnum (フランス語 venin〔vœnɛ̃〕)「毒」(有毒飲料)。

形容詞 *u̯en-es-no-m に由来する。es-no- という接尾辞をもつ (ロシア語 неб-ec-но(e) 空(ソラ)ノ 参照)。ルート形態素 *u̯en。ラテン語 Ven-us (愛の女神ビーナス) ⟵ *u̯en-os (属格は Veneris ⟵ *u̯en-es-es) およびサンスクリット vanati ⟵ *u̯én-e-ti「彼は愛する」のルートとおなじ。したがって, *uen-es-no-m は「愛の」(汁) を意味した。「愛の汁」⟶ 毒汁という意味変化はおそらく愛を得るために用いられる愛の汁が媚薬であっただけでなく, 愛の競争者を除去する目的 (すなわち毒薬) もあったためかもしれない。

(3) ロシア語 дятел〔d′atel〕⟵ *dęt-ьлъ (「きつつき」)

古いルート形態素 *dęt- は *dent-「歯」(ラテン語 dens ⟵ *dent-s, 属格 dent-is ⟵ *dent-es 参照) にさかのぼる。つまり本来はだいたい「歯 (くちばし) つつき」を意味したのである〔村山。ファスマーは『ロシア語語源辞典』でこの説をとっていない〕。

(4) 東京方言「nodo, 京都, 土佐 no⌈do, 長崎 no⌈do「喉」

出発形 (京都, 土佐とおなじアクセント) no⌈do ⟵ no⌈m(i)-to⌉ (飲ミ戸) (京都, 土佐 no⌈mu 飲ム 参照)。合成語における鼻音の後の i の消滅, そして「鼻音+t」⟶ *nd ⟶ d はノーマルな現象である (cf.: φuзukuʲe ⟵ *pudukue (文札) ⟵ pumi-tukue。おなじように, *mp ⟶ b abari (網針) ⟵ *ami-pari など)。

(5) 東京方言 minato, 京都「minato˥ など。

「港」←—「mina-to˥ (「mina-˥は「midu˥ 水と交替する形。「mina-moto˥ 源＝水元, mina-kami 水上など)。

(mina-to の上に「水」「門」のルビ)

§ 14

しかし，語源辞典にとりあげられているすべての語源解釈（すなわち語の歴史に関する説）が必ず一定の意味変化（たとえば蜜食べ медо-ед ⟶熊の名称とか「愛の」⟶「毒薬」とか）をふくむはずだと思ってはならない。語源辞典はある語について比較的・歴史的分析で得られたことだけを登録することは明らかである。そしてこの分析が（「意味」の進化でなく）音声，形態の進化だけを確立する以上，一連の言語における所与の語の音声の構成および形態の構成の歴史だけが語源解釈に入るであろう(31)。

第２に述べておきたいことは，語源解釈(すなわち比較的・歴史的語彙学）も，ひろく一般に比較言語学のあらゆる分科も，ある二つの言語において，ひとつの共通祖語からの起源に由来する類似（全体としての類似，または少なくとも，音声，形態，語彙の基本的な部分の類似）を利用できるだけでなく，異系統にぞくする諸言語間の個々の語（また，それよりはるかにまれであるが，個々の形態論現象(32)）の借用で説明される類似をも利用できることである。こういう場合には二つ〔いな，ひとつ〕または10，または100，または1000また（幾千かもしれない)(33)の借用形態素にもとづいて，非同系語の資料の特別な「小さな」(34) 比較文法（とくに比較音声学，その他）がつくり出される。それは(借用のプロセスのおかげで）同源である現象(35)をとりあげる。原則的な見地からすれば，借用要素のこのような特別な(「小さな」) 比較文法とノーマルな比較文法とのちがいは，量的なものにすぎない。ある場合には，次のような疑わしい問題につきあたることさえある。つまり，ある言語をどのグループ（語族）に属させるか。Aグループの言語と異質的な要素をB言語グループからの「借用語」だといって，この言語をAグループの言語とみなすべきか。それとも反対に，Aからの一連の借用語をもつBグループの言語とみなすべきか。それに迷うときがある。

これらの注釈を加えた後で，語源解釈（ことに，これらの注釈を応用できるような語源解釈）の例をつづけよう。

(6) 朝鮮語 mal（主格 mar-i）「馬」

（a） 朝鮮語（およびその正書法）そのものからひき出せる語源資料

1. 音節末の l（mal）と音節はじめの r（mar-i「馬が」など）[36] はひとつの〔((両面の))〕音観念（単一のフォネーマ）——((l/r-))——の結合的バリアントであるため，「馬」を意味する形がかつて，両方の位置において同様のひびきをもっていた，つまり，同一の語末子音をもっていたと仮定する必要がある。そこで mal ⟵ mar（((l/r-))←*r）の可能性が考えられる。

2. 朝鮮語の正書法ᄆᆞᆯは말 mal「ことば」の a とちがう母音を古くはふくんでいたことを示す。後に、は *a（ㅏ）と合流した。〔ここには述べないが，この母音は a に合流する前には［ʌ］，つまり唇を円めない［o］の性格をもっていたと思われるふしがある〕〔村山。、はわが国で ɐ と転写されるのがふつうである〕。

（b） 他の諸言語との比較から得られる語源材料

1. モンゴル語 *mørin〔村山。モンゴル字では morin と書かれているので，むしろ *morin とすべきである〕，カルミュク語 mørn̥「馬」[37] はモンゴル語 *mørin と朝鮮語 *mʌr の共通起源を物語っている〔複雑なため，入門書でくわしく説明することは割愛せざるをえないが，朝鮮語 *ʌ←*ø という発展，つまり mal←*mʌr←*mør という発展が推定される〕。朝鮮語における第二音節の消滅（モンゴル口語では消滅に近い。たとえば，カルミュク語の mørn̥），また子音対応 m||m，r||((l/r)) は他の共通モンゴル・朝鮮語単語でも確認される。たとえば，モンゴル語 muren「川」|| 朝鮮語 mul「水」（mur-i「水が」）[38] またはモンゴル語 nidun ⟶ nudn̥「目」[39] || 朝鮮語 nun「目」など。

〔モンゴル語，朝鮮語と〕（「アルタイ」諸語の範囲外の）ビルマ語 mraŋ「馬」およびシナ語「馬」北京 maˇ（そこから，より正しくいえば古代シナ語の祖形から，日本語 m̥ma が派生する）[40] との比較によって，この語の非常に古い先史時代の移動が推定される。この語はおそらく，馬がしだいに拡まった事実そのものと関連して，ある語族から他の語族に移動したのである。

(7) 日本語 *asâ（京都，大阪 asâ，土佐 a⌈sa/a⌈sa⌈-〔a⌊sa⌊ga 朝が，a⌈sa⌊:

←a「sa⌊o 朝ヲ〕, 東京「asa, 長崎 a「sa)「朝」。朝鮮語 ač'am ⟵ ac'am「朝」を参照せよ〔村山。中期朝鮮語は ač'ɐm「朝」〕。さらに「朝鮮語の母音 +m‖(西日本語の) ^ 音調の母音」[41] という他の諸例は朝鮮語の形 (*ac'am) が日本語の出発点であることを示している〔下降音調 (^) は鼻子音の代償である。ちょうどホメーロスのギリシア語の δῶ [「do⌊:] (村山。家) が *dom にさかのぼるのと似ている。共通日本・朝鮮語の形についていうと, 問題は語頭の子音〔朝鮮語 *c'‖日本語 s〕だけである〔村山。日本語のサ行子音が ts͜ にさかのぼることは有坂秀世以来いわれる有力な説であるから, ポリワーノフが「問題」とすることは不必要とおもう。〕。いずれにせよ, *c' をもつ朝鮮語の形(そこから南朝鮮語 č') は日本語の s よりももっと古い段階を表わしている〔cf.:シナ語からの借用語では, シナ語の c, c', č, č' が日本語で s となっている〕[42]。レオン・ド・ロニ Léon de Rosny (IV Congr. Orient.) は日本語 asa「朝」がズイリャン語 asī「朝」と一致すると指摘したことをつけ加えておきたい。しかし, この結びつけはまったく不明である (日本語と音の類似を示すその他の三個のズイリャン語単語もおなじく日本語との関係が不明である)。〔村山。ズイリャン語はフィン・ウゴル系の言語。コミ語に近い。〕

(8) トルクメン語 (ヨムド方言) na:w「船」(総称)。明らかに印欧語からの借用語である〔cf. 古代ギリシア語 ναῦς, ラテン語 nāv-is, スラヴ語 навь「船形ひつぎ」〕。さらにアルメニア語 nav (イラン語からの借用語かもしれないと見られている) 参照。したがって, この語がトルクメン語に入ったのはイラン語からか, またはアルメニア語から (この方が確からしい) かであろう。

トルクメン人・ヨムド人が用いるすべての「船」の名称 (総称は na:w であり, 亜種は nφ:tkφ, barǯ) は借用語であり, ヨムド人がカスピ海沿岸に来てからとりいれた割合新しい時代の借用語である。おそらく, はじめに総称 (na:w) を借用し, その後で「小舟」「荷船」を表わすことばをロシア語から借用したのであろう〔村山。ロシア語 лодка「小舟」, баржа「荷物」〕。

(9) グルジア語 pʔitʔna「薄荷(ハツカ)」。古代ギリシア語 mintʰa, ラテン語 mentha (スラヴ語 męta はそれに由来する) は共通印欧祖語形の反映ではなく (このことはギリシア語 i‖ラテン語 e という不規則の対応からわかる), ギリシア語, ラテン語ともある未知の言語からの借用である。グルジア語の

単語を上記のものと比較すると，グルジア語単語も（ラテン語，ギリシア語と）共通の起源であることが推定される。グルジア語は *minta にさかのぼり，そこから *pinta となり（鼻音 *m…n の異化により p…n となる），さらに（nt がメタテーゼより tn となって）pʔitʔna となった。タジク語 pıdınæ または pudınæ, タタール語 butnik, mutnik, ヴォト語 butnek, モルドワ・モクシャ語 putnik も nt でなく tn をもつステムに属する。

⑽ 最後に広く知られている「母」の印欧語の語源をあげよう。

ペルシア語 mɔdær サンスクリット mātā (mātar-) 古代ギリシア語 mā́tēr ⟶ アッチカ方言 mḗtēr ラテン語 māter アルメニア語 mai̯r 英語 mother [mʌðə] ドイツ語 Mutter [mutər] スラヴ語 mati (mater-) その他	共通印欧語 *mā́-tēr /*mā-ter ここから共通アーリア語すなわちインド・イラン語派の源 ⟶ mātā, 斜格形 mātār-。 これからペルシア語 mɔ:dær。 *ā ⟶ ɔ *ā ⟶ æ 母音間の t ⟶ d の変化があった。

アルメニア語では母音間の *t はまったく消えた（cf. アルメニア語 hai̯r ←*pə-tḗr「父」, *ē→i)。印欧祖形 *mā-tēr 自体は *pə-tḗr [=*pы-tēr]（ここからサンスクリット pitā, ペルシア語 pædær, ギリシア語 patēr, ラテン語 pater, ドイツ語 Vater, 英語 father〔fa:ðe〕父）とおなじように，接尾辞 -tēr とルート *mā- に分かれる（*pə-tḗr ではアクセントのない位置における古い *pā から *pə- が派生したこと参照)。この *mā- は「幼児語」であるらしく，「幼児語」（たとえば，シナ語 mama「お母ちゃん」，グルジア語 mama「父」，日本語 mama「ごはん」などの）の重複タイプに見出されるものである。(cf. 日本語 *papa ⟶ haha「母」，南日本語 kaka「母」，日本語 *titi「父」など)。共通印欧語 *mā́-tēr, *pə-tḗr が ma, pa というルートからつくられるのにやや類似しているのは現代シナ語の mú-č'in「母親」，fú-č'in「父親」である。(ルートは mu 母，fu 父で，チベット・シナ共通語 *ma, *p'a にさかのぼる（cf. 古代チベット語 ma, p'a。チベット a‖シナ語 u の対応はノーマルである。たとえば ŋa‖(ŋ)u「我」，(l)ŋa‖(ŋ)u「五」など)。

(11) 語の音の類似にもとづいて比較できるもうひとつの興味ある例は，少なくとも四つの語族にぞくするものである（もし，シナ語から日本語，朝鮮語，安南語への借用語を考慮するならば，七つの語族に属することになる)。それはシナ語蜜 mi` ←— *mit または *miat（語末の *t はシナ語の方言形からだけでなく，日本語，朝鮮語，安南語における借用語からもわかる）は他の言語グループにおいて，次のような並行形をもつ。

① 印欧語 *médʰu（ギリシア語 μέθυ, サンスクリット madhu, スラヴ medъ など。さらに l||*dʰ による形，つまりラテン語 mel, アイルランド mīl 参照)。

② フィン・ウゴル語。*meti。ここからフィン語 mesi, エストニア語 ((mesi))=mezi, モルドワ語 m′ed′, ハンガリー語 mīz など。

③ チェチェン・イングーシ語 *mαʒ-u（主格)，そこから，チェチェン語 mu͜oz。養蜂業が種族から種族へとひろまるにつれて，文化的概念を表わす用語が古く移動したものと思われる。〔「蜜」を表わす印欧諸語の単語は Mém. Soc. Lingu. に発表された Gauthiot の論文がとりあげている〕。

§ 15

さらに一般言語学（フランス語 linguistique générale）という言語学の種類について述べておかなければならない。個々の言語または個々の言語グループの研究とは反対に，一般言語学はさまざまの（できればすべての）言語および言語グループの（記述の立場および史的・比較の立場からの）観察によって確立される命題や結論——どんな言語（所与の一般化のさいに問題となる諸条件をその言語がそなえているかぎり）にも適用できる——を取り扱う。したがって，一般言語学は言語過程の全人類的特質を考察する。たとえば，一般音声学（phonétique générale）は発音器官の構造と機能[48]，聴覚プロセス，言語音およびその観念の可能な性格，個々の言語の音構成に関する一般法則（ある人の頭にある音観念間の相互関係の法則)，また世代から世代に言語が伝えられるときの言語の音声面の変化に関する一般法則を取り扱う。一般音声学的命題の最後の部分〔音声変化の一般法則〕はまた音声史学（phonetic historiology）という名称の特別な（一般音声学内の）分野として分離される。

あらゆる個別言語の科学的研究のさいに必要な知識が一般言語学に入る。そこで一般言語学は言語学入門として大学の民族学科や東洋学研究大学やその他，とくに言語を研究する大学で教えられる。

原　注

(1)　京都「ja⌊ma，東京 ja⌈ma「山」は九州諸方言で「林」の意味をもつ〔類似の意味関係はロシア語 гора（ガラ）「山」とセルビア語 гора（ゴラ）「林」でもみられ，トルコ語 taʁ（ウズベク語 tɔʁ，カザフ語 taw「山」とヤクート語 tɯA「林」〔tɯA←*tɯ：←*tɯu←*tau←*taʁ〕にもみられる。

(2)　琉球語 anda は東京語 abura，土佐「a⌊mura，京都「a⌊bura などに正確に対応する。また琉球語の人名 sanda:は日本語の saburo:に対応する（*samburaM ← 古代シナ語 sam-laŋ 三郎）。また琉球語の地名の第2項 -nda ←— mura 村は日本語の mura 村に対応する。

(3)　ものが三人称に所属することを示す。たとえば ɔt-i「彼の馬」，oj-ı「彼の家」。

(4)　ドイツ語 schlagen（シュラーゲン）〔šla:ɣ-ən〕（打つ），スウェーデン語 slå [slo]，英語 slay（ほうる）やドイツ語 Mann〔man〕（人，男）英語 man〔mæn〕などだけでも参照せよ。

(5)　フランス語 je sais〔žœ-se〕（私は知る），スペイン語 yo se〔jo-se〕やフランス語 viens〔vjɛ̃〕，イタリア語 vieni やフランス語 pain〔pɛ̃〕とポルトガル語 pao〔pãũ〕（日本語パン paŋ はそれを借用した）を参照せよ。

(6)　たとえば конь〔kon'〕はロシア，ポーランド語がおなじ。ロシア語 дуб とポーランド語〔dɔ̃b〕，ロシア語 день とポーランド語〔ʒen'〕，сон とポーランド語〔sen〕は同一でないが似ている。был〔bɯ-l〕の一部 l は過去を示す〔過去接尾辞〕がポーランド語でもおなじ意味でくりかえされる（byl [bɯ-l]）。

(7)　たとえば東京方言 tori-wa（鳥ハ），長崎方言 tor'a⌊：（トリャー）(to⌊iから)，琉球語 ture:（tui から）〔出発形 *⌈tori-pa⌉〕。

(8)　たとえばオスマン語，ウズベク語 jol，トルクメン語 jo:l，タタール語 jul（カシモフ方言 ǯul），キルギース語 ǯol，カザフ語 žol，ヤクート語 suol，チュワシ語 śul〔出発形は *jo:l 道〕。ウズベク語タシケント方言 jɔz「夏」，トルクメン語 ja:ð，キルギース語 ǯaz，カザフ語 žaz，ヤクート語 sa:s「春」，チュワシ語 śur「春」〔祖形は *ja:r^2（*r^2 は特別な祖語子音を表わす。それはチュワシ語で r に，その他のトルコ諸語で z に変わり，さらに後に，トルクメン語の ð，ヤクート語の s にかわった。この *r^2 は北シナ語 ɽ 児耳二爾のタイプの子音であったかもしれない。〕

(9)　たとえばフランス語 homme〔ɔm〕（人）とスペイン語の ombre〔出発形は *(h)om〔i〕ne(m)＝ラテン語 hominem「人を」〕。

(10) たとえば，私たちの眼前で共通のロシア標準語において次のような音声変化が起こった。これまでの世代の人々は бога（神の），господи（主よ），благо（幸福）という語の《г》をマサツ音［γ］として用いて来て（今も用いている）が，最も新しい世代の人々は「閉鎖音」《г》［g］を用い［boga］，［gospad'i］，［blɑgá］と発音する。その［g］は город［gorat］，нога［naga］などの［g］とおなじ。つまり，新しい世代はその音観念から［γ］というフォネーマをまったく除き（したがって，γ×g→g という収斂によって共通ロシア語の音声体系を単純化した）。〔村山。1974～75年，モスクワ，レニングラードに滞在中，上記の語で［γ］はロシア人の発音で聞かれなかった〕。文語的な大ロシア方言で上記の語にマサツ音［γ］が存在したのは，古い南ロシア語の影響による。古代ルーシにおける僧侶の大部分は南ロシア人（とくにキエフ人）であり，マサツ音の（ウクライナの）《г》すなわち［ʎ］をすべての語において発音していた。大ロシア人たちは бога（神）のような特別な宗教用語においてそれをまねて，余計な子音フォネーマを獲得した（もっとも大ロシア語の бога などの［γ］はウクライナ語の［ʎ］に正確に対応するものではない）。

(11) *m̥naŋi は東京方言および多くの中央（《西》）方言の出発形である。*m̥nagi は主として南グループの出発形である。私が出発形として復元する *m̥na$\frac{\text{ŋ}}{\text{g}}$iはより古い段階，すなわち *munaŋi にさかのぼる〔他の例における東京 u||長崎（および土佐）o という対応を参照せよ。東京 $\overline{\text{usaŋi}}$ 兎（京都usa⌈ŋi)||長崎osa⌊gi(土佐o⌈sagi⌉)。これは，仮説的にはマライ語 mu⌈saŋ「じゃこう猫」Paradoxurus hermaphrodytus と比較できるかもしれない。南島系の人々が musaŋ という名称を日本列島において，それに類似した動物に移したのだと思う。

〔村山。ポリワーノフの解釈は次のとおり。

*muna$\frac{\text{ŋ}}{\text{g}}$i＞*m̥na$\frac{\text{ŋ}}{\text{g}}$i＞onaig/unaŋi（京都，東京）
＞onagi（土佐，長崎）
＞ŋ̥naʒi（琉球）

琉球首里方言は ʔnnaʒi（沖縄語辞典の表記は ʔNnazi。この辞典では音節形成的 n-ポリワーノフの ŋ̥- を N で表わし，破擦音 dʒ を z で表わしている）であるから，ポリワーノフの解釈は再考をせまられる。なぜなら，首里方言の ʔ は語頭母音に先行するから。「鰻」を表わす首里方言はかつて母音にはじまっていたことが示唆されている。

かつて，首里方言でも語頭に *u- という母音が存在したことが推定される。

日本語 unagi（unaŋi）では u- の後にひとつの n が，首里方言では2つの n が存在している。そこで，共通祖形として *ʔunnagi が復元される。

それでは，これは万葉（3853，3854）にある武奈伎（ムナキかムナギかわからない。

おそらくムナキが，後にムナギとなったのであろう）munagi (munaki) とどういう関係に立つのであろうか。

{ A．万葉 munagi
{ B．日本・沖縄共通祖形 *ʔunnagi

AとBのうち，いずれが古形かと言えば，Aであろう。ポリワーノフもAが最古形とみている。Aがどうして Bに発達したであろうか。*m- の消滅によってか？ そうは考えられない。なぜなら *m- の消滅からは unagi が生じるのであって *unnagi は生じえないから。私の解釈は，A (munagi) のメタテーゼ（音位転換)，つまり，mu の m と u との入れかわりによって *ʔumnagi が，ついで，*ʔunnagi が生じたとみる。

そこで「鰻」を表わすことばの発達はつぎのように表わすことができる。

*muna|ki>*ʔumna|ki>*ʔunnagi >ʔnnaʒi（＝ʔNnazi）（首里方言）
*muna|ki>*ʔumna|ki>*ʔunnagi >una g/ŋ i（日本諸方言）

ポリワーノフは「鰻」を表わすことばについて他の言語との比較はしなかった（もし47歳にもならずに亡くならないで，もっと長生きしていたなら，それを言ったにちがいない）が，私はそれを試みよう。「鰻」を表わす日本語のルートは上記のように *muna であり，これは南島祖語 *tuNa「鰻」と同源とみられる。

デンプウォルフの復元形は *[t]u[n]a「鰻」であるが，この復元の土台はつぎのとおり。

インドネシア語派

　トバ・バタク goia|tuna 大虫

　ホーワ（マダガスカル島）tuna 大鰻

メラネシア語派

　フィージ nduna 鰻

フィージ語の形は鼻音結合形である。つまり語頭子音 t- の前に鼻音が立ち，それが t と結合したものに由来する (*ntuna>nduna)。

ポリネシア語派

　トンガ
　フトゥナ } tuna 鰻
　サモア

デンプウォルフは台湾諸語を考慮に入れなかったが，これまた重要な比較資料を提供する。

　ルカイ tuláʔ うなぎ

　パゼヘ tuláʔ 大うなぎ（ホーワ tuna とおなじ意味）

　サイシアト tolaʔ うなぎ

パイワン túla? うなぎ
プユマ tulá? 〃
アミ tola? 〃
シラヤ toula 〃
ヤミ tuna? 〃

これらは *tuNɑ? にさかのぼる。スクーリク・アタヤルの tlaqii は *tuNa|qii にさかのぼり，チウリ・アタヤルの tala?e は tula?a<*tuNa?e からの発達である。そこで台湾諸形も「うなぎ」を表わす南島祖形 *tuNa の復元を可能にする。

そこで {
*tuNa
*ntuNa（>nduna フィージ語）
*muna（日本語祖形）
}

をならべると，

*tuNa>*ntuNa>*nuNa>muna
I II III IV

という発達が推定される。I>II はフィージ語にもみられる（鼻音結合形）。

II>III はおそらく，*nt->*nn->*n- という同化作用。

III>IV は異化作用による。

こうみると，ムナ・キ（ギ）のルートであるムナが，南島祖語 *tuNa「鰻」と同源である，という推定が可能である。

もういちど，この考えを図式化してみよう。

南島祖語 *tuNa>前鼻音化形 *ntuNa>*nuNa>muna

ポリワーノフのウナギの考察は，その語源を究める上に有力な貢献を行なったと思う。〕

⑿ トルコ祖形 *ja : z（ヤーズ），チュワシ祖形 *ja : r（ヤール）からは言語資料（狭い意味のトルコ諸語プラス・チュワシ語の）にもとづいて，*ja : $\genfrac{}{}{0pt}{}{z}{r}$ だけが復元される。（トルコ語に対して）遠い系統関係にある諸言語——とくに朝鮮語〔n'ʌram 夏〕（村山。中期朝鮮語 n'ərĩm「夏」），満州語〔nijarxun「新鮮な」〕，およびモンゴル語 nirai〔「新生の」〕——の資料にもとづいて，語頭の j の代わりに *n' をもつ *n'a: $\genfrac{}{}{0pt}{}{z}{r}$ が復元される。この例については p. 34 の注（$*r^z$ の可能な性質に関する）参照。〔p. 34 の注は次のもの。「たとえばオスマン語，ウズベク語 jol，トルクメン語 jo:l，タタール語 jul（カシモフ方言 ǯul），キルギース語 ǯol，カザフ語 žol，ヤクート語 suol，チュワシ語 śul〔出発形は *jo:l〕「道」。ウズベク語タシケント方言 jɔz「夏」，トルクメン語 ja : ð，キルギース語 ǯaz，カザフ語 žaz，ヤクート語 sa:s「春」，チュワシ語 śur「春」〔祖形は *ja : r^z（$*r^z$ は特別な祖語子音を表わす。それはチュワシ語で r に，その他のトルコ諸語では z にかわり，さらに後にトルクメン語の ð，ヤクート語の s にかわっ

た。

この *r^{z} は北シナ語 ɽ 児耳二爾タイプの子音であったかもしれない。〕

〔村山。N. ポッペ，アルタイ諸語比較文法，p. 38 に曰く，「モンゴル語 nirai< *ńarai（ニャライ）「新生の，新鮮な」，ブリヤート・モンゴル語 n′arai「新生の，新鮮な，若い（植物）」＝満州語 n′ārxûn（ニャールフーン）（niyarxûn と書かれる）「新鮮な」＝チュワシ語 śur<*jār< *n′ār（ニャール）「夏」（ハンガリー語 nyár「夏」<先トルコ語 *ńār（ニャール）），古代トルコ語 jaz<*jār^{2} <*ńār^{2}「春」）。

⒀ さらにこの -i（本来は母音調和による交替形を示さない。ポッペ，同上参照）は古い「共通アルタイ的」（p. 44 注参照）代名詞「彼」であった。モンゴル語 inu ——*i- の属格形〔村山。i の斜格ステム in- に属格接尾辞 -u のついた形〕，満州語 i「彼」（属格は ini，与格 inde，対格 imbe←*inbe など），朝鮮語 i「この人，これ」（主題格 i-nan，すなわち *i-nʌn，対格 iral など）〔村山。中期語 i-nɐn, i-rɐl〕

〔村山。1975年初夏，A. フォン・ガバイン女史は京都に滞在中，古代トルコ語 *i「彼」の奪格形 in|tin（斜格ステム in+）を発見した。bu「これ」の斜格ステム mun +の奪格形 mun|tïn と対をなして現われる。この発見の直後，ガバイン先生は私にそれを話された。〕

p. 44 の注はつぎのとおり。

「先史時代の共通トルコ祖語からトルコ諸語が形成された歴史もこれとおなじである。共通トルコ祖語はチュワシ語の祖先および他方，共通モンゴル祖語，共通満州・ツングース祖語，朝鮮語の古い源とともに，より古い共通の源，すなわちいわゆる共通アルタイ祖語にさかのぼる。同じように，すべてのシナ語方言の共通の祖先——共通シナ祖語——も先史時代に属し，ましてもっと古い共通チベット・シナ祖語——シナ語，チベット語，ビルマ語，シャム語の共通祖先——も先史時代に属する。セム系諸語，その他一連の言語集団についても同じことが言える（ロマン系諸語のばあいは，これとちがって，祖語が文献で実証される。これは例外である）。

⒁ 意識的な，批判的な討議や判決によって承認されるものでないことはもちろんである。正確に言えば，一定の世代の子供らの多数が行なう（すなわち，大人の言語を見習うとき，おのおのの子供が独自に行なう）ところの変更，または受けとった変更（すなわち，独立に変更を行った同年齢者から受けとった変更）のことである。

⒂ おなじ都市の中でも「地区」方言（または「下部方言」）のちがいがみとめられる。これまた，それぞれの地区の人口の封鎖性の程度にかかっている。たとえば東京ではほとんど各区の方言にある特殊性が認められる。ある日本人（高橋龍雄の『国定読本発音辞典』，1904年の序）の観察を参照せよ。「注意してみると，純江戸語〔すなわち東京語〕においてさえ，一定の差異がある。第1に，下町方言，すなわち京橋，日本橋，浅草の商人の方言もあり，神田の住民（いわゆる神田っ子）の方言もあり，本

郷および，下谷の一部の方言もある。さらに貧民居住地の俗語を表わす四谷方言がある。さらに船乗りや漁民の粗野な方言である本所・深川方言がある。」……「下町方言，すなわち商人階級のアクセントは所によっては卑俗である。たとえば「deŋwa（電話），「basa（馬車）の代りに，下町では deŋ「wa, ba「śa と発言する。〔çi「baći, çi「baśi の代わりに。ポリワーノフ〕「çibaći（火鉢），「çibaśi（火箸）という発音はまことに耳ざわりである。このようなイントネーションは卑俗に感じられる」。地区によるこの方言——同時に階級的方言，職業的方言——のこのような差異の土台は，けっきょく経済的要因に由来することはいうまでもない。なぜなら，各人の参加する言語コミュニケーションのサークルはまさに経済的必要で決定されるから。一方で東京の膨大なひろがり，他方で，近ごろまでの個々の区の極度の閉鎖性を考慮するならば（女が生れた区以外で生活したことがないというような例は珍しくない），東京のこれらの区の下部方言もなるほどとうなずかれる。

日本の他の都会でも同じことがみられる。たとえば，秋田がそうで，そこでは üʒī-maʒī-godomba 内町言葉（標準語　ウチマチコトバ）——古くは武士が住んでいた内町の言語——という地区方言が際立っている。（この地区の）階級的方言の名残である。

(16) カザフ人の土着化は最近始まったばかりである。カザフ語には実際，諸方言はなく，小方言や下部方言があるだけといえよう（たとえば，ザイサン郡のカザフ人やウスチカメンノゴルスク郡のカザフ人は，アラビア字 ج で表わされる音をふつうの ž の代わりに ʒ と発音する〔中央オルダのカザフ人もおなじらしい〕。

(17) このような所有格形は，たとえばペテルブルグのインテリの言語に見られる。（革命前）の正書法が口語の形態論に影響したためとみられる。

(18) ここで正確な規準（ある言語または方言の話し手が他の言語または方言を理解する程度を判定する規準）を定めることはもちろんできない。ある場合には相互理解が可能であり（たとえばオスマン人とタタール人との間で。それどころか，時にはオスマン人とヤクート人との間でも），他の場合には理解が不可能であろう。これは話題や話しあう個人の思考能力にも依存するであろう。だから（相互理解が不可能ならばちがった言語であり，それが可能ならばちがった方言であるという）規準を一般にうけ入れても，トルコ諸語〔この場合，特殊な特徴をもつヤクート語，ましてやチュワシ語は問題外とする〕がお互いに諸言語なのか諸方言なのかを決定するのはむずかしい。スラヴ諸語またはスラヴ諸方言についても同じことがいえる〔前の世代のスラヴ学者やトルコ学者が「スラヴ諸方言（ナレーチエ）」「トルコ諸方言（ナレーチエ）」という用語を用いていたことを参照せよ〕。

(19) 個人的方言の特殊性の大部分は言語学的観察に慣れていない人には気付かれないでしまう。自分自身の個人的なパロール的特殊性はとくに気付かれない。次の点をあげるだけで十分である。[[r] [r′] の点で一般的に「のどひこによるもの」と「のど

ひこによらないもの」とに分けることに満足して，素人は「のどひこによる r」のちがった諸タイプがあることを思わない。つまり，(1)《r》=[R], r′=[ɹ′] の話し方タイプと (2)《r》=[R],《r′》=[R′] の話し方タイプについては思いもよらない〕。

(20) 琉球語の話し手（沖縄県の住民である琉球人）を除いて，全日本の読み書きのできる人口を統一している。琉球人は琉球書きことばをもつ。

(21) 古代教会スラヴ語は，他のスラヴ諸語の源ではまったくない。それはスラヴ諸語のひとつにすぎない。つまり古代ブルガリア語である。それはバイブルがそれに訳されたおかげで他のスラヴ諸語よりも古い状態で私たちに知られているだけである(11世紀の記録がある。10世紀の原典は伝わっていない)。したがってそれは最も古いスラヴ文語である。

(22) トルコ諸語の歴史もおなじような状況である。つまり先史時代の**共通トルコ祖語**に由来する。この祖語はまたチュワシ語の祖先や共通モンゴル祖語，共通満州ツングース祖語および朝鮮語の古い源泉とともに**共通アルタイ祖語**にさかのぼる。おなじように，すべてのシナ語諸方言の共通の祖先——共通シナ祖語——も先史時代に属するし，まして，もっと古い**共通チベット・シナ祖語**——シナ語，チベット語，ビルマ語，シアム語その共通祖先——も先史時代に属する。セム系の諸語，その他，一連の言語集団についてもおなじことがいえる（ロマン系諸語の場合は，これとちがって，祖語が文献で実証される。これは例外である)。

(23) 「アッシリア人」，別名アイソル人の言語はその現代方言である。

(24) 西欧の言語学者は「チベット・シナ諸語」の代わりに「インド・シナ諸語」という用語をつかう。

(25) これに入るのはトルコ諸語（ヤクート語を含む)，チュワシ語，モンゴル諸語，満州・ツングース諸語，および，私のみるところ朝鮮語である。

(26) しかし祖語形復元のさいのあらゆる結論は多くの事実を考察したあとで，しかも一般的言語発展法則（言語学的歴史学）を考慮してなさるべきである。私たちの目にふれる諸言語の十分な証拠が偶然に欠けているために，祖語に存在した多くの事実を逸してしまうことがよくある。たとえば，ロシア語 [son]，ポーランド語 [sen]，セルビア語 [san] の考察から出発して，「眠り」を意味した語が祖語で [n] 音に終っていたと推定できる。しかるに，その音の後にさらにある母音がつづき，それはこれらの3言語で消えてしまったのである（しかし，古代教会スラヴ語ではそれは ъ で表わされていた〔革命前のロシア語の正書法では伝統的に ъ は残っていた〕。それはスラヴの文語がつくられた時代には，まさに母音音声を表わしていた)。

(27) *sup-n-os という区分形態素【ギリシア語の hypn-os（属格は hypn-u）およびスラヴ語 сън-ъ（属格は сън-а）という区分に対応する】はより古い共通印欧祖語の段階 *sup-no-s にさかのぼる。これは一連の他の最古の名詞形における主格単数男

性接尾辞 -s――たとえば *nāṷ-s「船」―→古代ギリシア語 nau-s――が存在することにもとずく。

(28) 注意しておくが時には「比較的」という用語は上に述べたような専門的な意味でなく用いられる。単に，いくつかの事実を比較する意味に用いられる。たとえば，比較音声学ということばが，史的言語学の方面でなく，記述言語学の方面にかんして用いられているのが見受けられる。P.Passy の本の『小比較音声学』(Petite Phonétique Comparée) という題はそれである。いくつかの言語（主としてフランス語，ドイツ語，英語）の記述的音声学を単に同時的に説明したものである。これらの言語の音声が現代の状態で考察されており，またこれらの言語は親縁関係のあるなしとは無関係に考察されている。

(29) A. Walde, Etymologisches Wörterbuch der lateinischen Sprache（ラテン語語源辞典）がそれ〔村山。その後，A. Ernout, A. Meillet, Dictionnaire Étymologique de la Langue Latine,[4] Paris 1959年が出た〕。

(30) Boisacq, Dictionnaire de la langue grecque, 1923 年。

(31) ここで忘れてならないことは文字どおりの「最初の意味」，つまり，原始語に属する諸事実は決して，ひとつの単語についても，知られないことである。復元されるすべての「祖語」現象は，何千年にもわたる進化の段階のうちのひとつであり，しかも言語発生の時期に近い段階のものでなくて（絶対的古さはどんなであろうと）現代にはるかに近い段階のものなのである。

(32) たとえば，ペルシア語から借用したカザフ語のいくつかの名詞形成接尾辞がそれである。

(33) いくつかの場合には，土着語の形態論構造が（ある外国語の影響によって）ほとんどまったく影響されていないのに，おびただしい借用語があることが実際にある。（口語のありふれた語彙となっているものはさておき）文語の潜在的要素として日本語辞典に見出される幾千という漢字の日本語化した読み方を日本語（文語にせよ）の要素としてみることができるならば，それはシナ語の一方言の語彙にほかならない。より正確にいえば，「シナ語の外国語的〔非シナ語的〕文語方言」のひとつ，または数個（呉音，漢音，唐音を別々に数えて）ということになる（これとならんで，朝鮮語および安南語にも，シナ語借用語のおなじような集合がある）。これらの「シナ語の外国語的〔非シナ語的〕方言」はシナ語諸方言とおなじく比較的・歴史的音声学の貴重な材料となりうるし（実際に，なっている）。

(34) 日本の漢字の音のような，おびただしい借用材料があるときには，その比較的・歴史的（とくに比較音声学的）考察は「小さい」比較文法分野どころの話ではない。なぜなら，事実上これら「非同系の」言語（この場合，日本語とシナ語）はまさにこの共通の語彙を考慮すれば（しばらく，形態論材料の共通性という同系諸語のふつう

の規準を問わないとして)，きわめて同系的ということになる。そこで日本語における漢字の音の比較的歴史的考察はシナ諸方言の比較音声学（換言すればシナ語の史的音声学）において，れっきとした重要な位置をしめる。もっとも（シナ方言の音声学とはちがった）独自の法則をもつが。なぜなら，シナ語の単語が日本の土壌に移された瞬間から，その音声学的発展は（シナ語でなく）日本語の音声発展の一般的傾向に左右されるからである。

〔注〕この特殊性（すなわち，シナ語からの借用語の音声変化と純日本語材料の音声変化とが同一であること。なぜなら，これらの借用語は日本語の土壌に入ったのであるから）を無視していることが，カールグレンの画期的な≪Etudes sur la phonologie chinoise≫（シナ語音韻研究）における日本漢字音の取り扱いにおける主な欠陥である。〔≪Etudes≫の2巻だけ（第3巻で訂正ずみ）のもうひとつの欠陥は漢音と呉音を無差別に取り扱っていることである。漢音，呉音は実際にはシナ語の源からみても，日本語に入った時期からみても，まったくちがった「方言」である。〕

(35) この意味では，たとえばアルバニア語は，語彙のある部分においてロマン系の言語である。というのはアルバニア語に定着した一連のラテン語借用語は真のロマン系言語（たとえば，サルディニア語，スペイン語，イタリア諸方言，フランス語など）にみられると同じ音韻対応法則を示すから。現代英語は（ノルマン人による占領とともに入った借用語のおかげで）フランス方言のひとつであり，ロシア語（またはセルビア語）はトルコ方言のひとつである（ロシア語およびセルビア語の多数のトルコ系単語参照。まだ比較研究が行なわれていない〔ついでながら，N. K. ドミトリエフの研究がある〕)。〔村山。最近は状況が変わった。N. ポッペ（息子）の研究，その他もある〕。チュワシ語はフィン系言語のひとつである〔村山。上のような意味において〕。その他。

(36) ：は音節のさかい目を示すために用いる。

(37) ロシア語 мерин（メリン）「去勢馬」はこれから。(「馬」という意味が「去勢馬」と狭まったのは，モンゴル語ですでに生じていたのだろう。ブリャート・モンゴル語で〔mori(n)。村山〕が「去勢馬」であること参照。「馬」は adahun [h←s]。これはトルコ語の at「馬」に対応する〔村山。ブリャート語では mori(n) は「馬」「去勢馬」であり，adaha(n)は「家畜，馬群」である。ポリワーノフのこの語源解釈は現在支持する者がない。セヴォルチャン，トルコ語語源辞典，197参照。そこにトルコ語 at「馬」に関する私の解釈が引用されている〕。すでにモンゴル語において意味の狭まりがなかったとするならば，このロシア語の借用語は，用語の借用のさい，意味がたいていの場合，狭まるという法則を立証する〔用語の表現する概念の範囲は狭まり，概念の内容，つまり概念の諸徴候の数は拡がる〕)。

(38) 朝鮮語では「川」をも意味する〔村山。これは正しくない〕。おなじようにトルコ語 su「水」（ウズベク語 suw）が河川名に用いられる。

(39) モンゴル口語におけるこの推移の原因はいわゆる「ウムラウト」である。つまり母音の逆進同化（i…u→u…u）である。母音調和的「前進同化」と逆の方向のプロセスである。どちらも同一の心理的理由による（拙論「ウムラウトの起りの原因」。A. E. シュミット記念論集，タシケント）。

(40) 長い（または二重の）m:。古代日本語では *m:a（そこで京都「m̥ₗma，東京 m̥「ma，東北方言 ma，長崎 m̥「ma）は古代シナ語の音結合 *mr（*mra の。ビルマ語 mraŋ「馬」参照）で説明される。この音結合 *mr は他のどんな方法によっても日本人の音声観念につたえることができなかったのである〔次の日本語のおなじ *m: 参照。*「m:e˥ 梅。京都「m̥me˥，東京 $\overline{\text{m̥me}}$，東北方言 mi，長崎 m̥ₗme。ここでもシナ語の祖形（梅）も二つの非音節形成音 *mw ではじまった（カールグレン ≪Etudes≫, I, No. 2992 梅 参照)〕。シナ語 *mra（または *mla）のその後の発展は，おそらくつぎのとおりであった。mra→mi̯a（この段階は日本の呉音 me に反映している〔呉音 e はふつうシナ語 *i̯a に由来する。ke 家←シナ語 *ki̯a 参照〕)。mi̯a→ma（そこで漢音 ba〔ふつう b←シナ語 m。bai 梅（北京 mei̯）参照〕。シナ語 ma，ビルマ語 mraŋ「馬」にたいするその他の「チベット・シナ語」の並行現象はコンラディ Conrady ≪Eine indochinesische Causativ-Denominativ-Bildung≫参照。しかしこの資料はコンラディの引用する諸言語のくわしい研究にもとづいて批判的検討を要する。P. シュミット『北京官話文法試論』p. 7 も参照せよ；ソクパ語 mari，ビルマ語 mrang，ギャルング語 boroh，アボル・ミリ語 buri。

(41) たとえば，日本語 *turû 鶴（京都，大阪 c̆urû（ツル），土佐 tu「ru〔tu「ruₗga 鶴ガ，tu「roₗ: ←― tu「ruₗo 鶴ヲ〕，東京「curu，長崎 cu「ru)||朝鮮語 turum 鶴〔村山。文語では turumi。ただし方言で turum もある〕。他のアルタイ諸語にも対応語がみられる。たとえばヤクート語 turuja 鶴，トルコ語 turna（イラン語化したウズベク語 turnæ)。

(42) たとえば，東京（呉音）śi「ći ←― *「siₗti ←― シナ語 *c'it（北京 ts'i）

(43) 概して，発音器官の解剖学的構造はすべての民族で同一であると認られる。少なくとも言語学的研究はこの点で人種間に何らかの原則的な人類学的差異を見出していない。いくつかの事実からみて，このような人類学的差異があるものと解しうるかもしれないが，それでも，この点で言語学者がハッキリしたことを断定する理由はない。そこで，たとえば他の言語にはなくてセム語族，コーカサス語族，ハム語族にだけみられる特別な喉子音（x̣ と転写されるアラビア字であらわされる）がセム系諸民族で特別に類似しているのは目につく。これらの音は他の人種に属する民族が，そうした音を含む単語を借り入れるとき急速に消えてしまう。しかし他方，これらの音の習得は可能であり，また生後2カ月のドイツ人幼児をアラビア語（またはシナ語，セルビア語など）の環境に移すと，10年たったとき言語の点で完全なアラブ人，中国人，

セルビア人などになっているのがわかるだろう。どんな人種でも（他の言語の慣習を予め持たなければ）どんな音声体系でも習得しうる潜在能力があることを認めながらも，結局は，所与の言語の音声変化の過程において特殊な人種的特殊性が反映するだろうと思う。たとえばタールビツァ Thalbitzer はグリーンランドのエスキモー語に子音組織の方面で特別な現象（深い後舌子音，ことに，のどびこを使う子音）を観察し，これらの現象を人類学的特殊性と結びつけようとしている（タールビツァ，A phonetical study of the Eskimo language. Copenhagen 1904年 p. 69～70)。発音器官の人為的デフォルメのケース，たとえば唇に円い木片をはさむときの発音の影響（いくつかのバントゥ語における唇音の発音にたいする影響）は，これとは別に考察しなければならない。ここで具体的な音声変化の一例をあげよう。この例は，ある種族において特殊な人類学的徴候が存在すると仮定するある程度の可能性を明らかにする【もし，この種の例がさまざまな言語族の歴史において（エスキモー語の変化においても。この変化はタールビツァの考えを立証すると仮定しよう）見出されるならば，この原則的な一般的な問題は仮説から経験的に立証されたものになるだろう】。それは日本語の歴史時代の例である。さまざまな日本方言における唇の働き（調音）の歴史の例がそれである。唇の働きが弱まり（自発的な $*p \rightarrow \varphi$ の発展），完全に消える（たとえば結合的な $\varphi \rightarrow h$, w→ゼロ，自発的な $k^w \rightarrow k$, $g^w \rightarrow g$）プロセスは，日本方言の中央地帯ではなはだしく，土佐方言で最高度に達する。これに反して，二つの周辺——東北方言グループと南方言グループ——では大部分これらのプロセスの初期の段階（たとえば $*pa \rightarrow \varphi a$）がみられるだけである。（他方，中央では $*pa \rightarrow \varphi a \rightarrow ha$。琉球方言のあるものでは今日でも閉鎖音pが残っている。他の唇音の運命も上の二つの周辺で同じような保守主義を示している。すなわち k^w g^w が保存され，琉球，ことに東北方言では，すでに中央諸方言で消えたwが一連の位置で保たれている）。もしその他の（ほとんど）すべての音声および形態の特徴において中央地帯が最も保守的であり（上の二つの周辺のいずれかに近ければ近いほど，更新がいっそう大きい），そして中央諸方言のうち最も保守的なのがまさに土佐方言であることを想うならば，唇の働きが弱まり，消滅する傾向は，日本の人種構成の「純日本」層の特徴である，とみなすことができよう。反対に，異種族との混血（東北ではアイヌとの混血，南方では熊襲との混血）によって（音声，形態のその他の現象において）変化が生じている周辺では唇の働きの弱まりの傾向が微弱なことは，これまた異種族の影響によるとみることができる。そこで上記の唇の働きの弱化の傾向（"delabialization tendency"）は，共通日本語体系のその他の音声（および形態）特徴の点におけるこれらの方言の相対的保守主義とおなじく（これらの方言の話し手における）純日本的人種要素の徴候とみることができる。言語学者のいえることは，せいぜいこれだけである。その先は人類学者が発言する（人類学者はもちろん，単に「生理学的な静態」，すなわち人体諸器

官の構造だけでなく，「生理学的な動態」，すなわち，これらの器官の働き——このばあい，顔の筋肉の働き——をも考慮しなければならない)。そこでもし顔の筋肉の動きにおけるある特殊性が実際に「純日本人種」の属性であることがわかれば，音声変化が人類学的人種特殊性に依存することが，この場合には証明されたことになるだろう〔村山。このような考え方はド・クルトネーの影響とみられる〕。しかしこの問題を解決するには，単に日本の事実だけに限られてはならないのであって，唇の働きの弱化のプロセス全体を示すところの（地球上の任意の領域の）他の歴史的・音声学的ケースをも同じように調べてみる必要がある。（唇の働きの弱化のプロセス全体といのは，*p → φ → h〔→ゼロ〕の類の一連の現象のことである。それは，たとえばポリネシア諸語において，また「アルタイ」諸語の古い歴史において〔たとえばウズベク語 hokız, høkyz「牡牛」における h がそれで，これは共通アルタイ語 *p にさかのぼる。他のトルコ諸語では，この h に対応するのはもはやゼロである〕，印欧系言語ではアルメニア語，アイルランド語において，その他においてみられる。

〔村山。「牡牛」を表わすウズベク語と関連して N. ポッペ『アルタイ諸語比較文法』，p. 12 のつぎの資料が参考となる。

モンゴル語 üker, 中期モンゴル語 hüker「牡牛」，モングォル語 fuguor「牡牛」＝古代トルコ語，オスマン語，チャガタイ語 öküz「牡牛」，ウズベク語 hükiz「牡牛」。ポリワーノフは共通アルタイ語形として *pökür̂ を推定していたであろう。このことばについて，これまで出された説を総括しいるのは E. V. セヴォルチャン『トルコ語語源辞典』第1巻，p. 521～p. 523 である。

なお，1924年に発表した「日本語における音楽的アクセントの研究について」（本書，89ページ）において，日本語をオーストロネシア（南島）諸語と比較する上の類似点（9点をあげるうちの第8点）として唇の働きの弱化のプロセスをあげている（*p : p>f(φ)>h ; cf. 日本語 pi>fi>hi (çi)（火）とポリネシア語 *apui（火）>api>afi>ahi)。ahi はハワイ語（ポリネシア語派）形。

唇音退化については cf. 橋本進吉，「波行子音の変遷について」（1928年），同，「国語音韻変化の一傾向」(1942年)（ともに橋本進吉，『国語音韻の研究』，岩波書店，1951年におさむ)〕。

訳者あとがき

日本語を研究した外国人の中で最も卓越しているのは，古くはイェーズス会の宣教師 J. ロドリゲス(1561–1634)，近くはエヴゲーニイ・ドミトリエウィチ・ポリワーノフ(1891年2月28日–1938年1月25日)であります。ロドリゲスについては研究・紹介もかなり行なわれていますが，ほぼ現代のポリワーノフの仕事については一般にほとんど知られていません。このことはしかし，ポリワーノフが日本の言語学・国語学界にきわめて大きな影響を与えていない，ということを意味しません。例えば，モーラという用語は今日ではたいての日本語研究者が用いますが，日本語にたいしてそれを最初に用いたのはポリワーノフだったのです。東京方言，京都・土佐方言，九州西南方言(長崎県三重村)，熊本方言のアクセント体系を研究し，それら相互の関係について，今日，平山輝男氏や金田一春彦氏が到達しているのとほぼおなじ結論を今から半世紀前に発表したのは彼です。1924年，東北方言の母音組織の成立を内的復元によって究明し，アイヌ語の影響を否定したのも彼です。

読者は，ポリワーノフを無視しては，なにびとも日本語のアクセント研究の歴史，方言学研究の歴史を書きえないことを理解するでありましょう。

また日本語・琉球語の精密な比較研究はポリワーノフの1914年の論文からはじまるといえるでしょう。B. H. チェンバレンの琉球語3母音説は伊波普猷の「琉球語の母音組織と口蓋化の法則」(国語と国文学，7—8，1930年)より16年前にポリワーノフによって打破されました。また琉球語において狭い母音iが後続の閉鎖音を破擦音化することもポリワーノフは1914年に指摘したのです。

本訳書は，日本で行われているもろもろの学説のプライオリティーの問題に光を投げかけるでありましょう。

『ポリワーノフ一般言語学論集』(Е. Д. ПОЛИВАНОВ. СТАТЬИ ПО ОБЩЕЙ ЯЗЫКОЗНАНИЮ. (モスクワ，1968年)の「ポリワーノフの生涯と活動」によるとポリワーノフは1908年，リガのアレクサンドロフスキー高校を卒業して，ペテルブルグ大学文学部に入学し，1年後には大学の東洋語学校日本語科に籍をおきました。これは，軍人，外交官，その他東洋語の実用的な知識を必要とする人のための課程です。1912年に大学を卒業して，比較

言語学研究室に残り，２年間修士論文の仕上げにつとめました。1914年５月，露日協会の援助で，日本に向けてペテルブルグを出発したのです。そのころはウラジオストクと長崎との間に定期航路があったと思います。ポリワーノフは長崎県三重村で夏をすごし，三重村の方言を調査しました。その年の10月はじめ東京帝大の心理学研究室に行って，佐久間鼎の協力をえて，日本語のアクセントを研究しました。生前，佐久間先生から東京のお宅で聞いたのですが，ポリワーノフは「自分は山田美妙は卒業して〔十分研究しての意〕日本に来た」と語ったそうですから，東京アクセントは日本に来る前から研究していたことがわかります。研究の出発点は，スウェーデンのウプサラ大学の実験音声学教授マイアーがウプサラに来た藤岡勝二をインフォーマントにして調べた東京・京都アクセントに関する研究であったのです。

『ポリワーノフ一般言語学論集』(p. 9 ff.) によると，ポリワーノフは1915年の夏にも日本に来ました。佐久間鼎先生も1915年に発表した論文の中で，その年の夏彼が再度来日したことを述べています（「日本語のアクセントは何物？」心理研究，47号 p. 5)。

「今年の夏，例の研究家は再び来って，各地に於いて日本語を蒐集すること数箇月，その結果を整理して論文にするためにロシアに去った。」

さて，ポリワーノフの日本語関係の研究のリストは次に示すとおりですが，(1)だけは来日以前に書いたものです（これは前記の本の「ポリワーノフ著作リスト」の中からえらんだものです。○印のものは本書におさめております。）

○(1)　日本語・琉球語比較音声学　1914年

○(2)　日本方言学資料。長崎県西彼杵（ソノギ）郡三重村の方言。民話テクストとロシア語訳　1915年

○(3)　東京方言における音楽的アクセント　1915年

(4)　日本語の「擬態語」について　1916年，1919年に再発表。

(5)　日本方言にかんする心理音声学的観察（単行本，113 p.）
1. 長崎県西彼杵郡三重村の方言
2. 京都方言における音楽的アクセント
} 1917年

○(6)　二音節形容詞のアクセント　1917年

(7)　日本語研究細事　1. 言語思考における語彙混交の一例　2. ロシア

語キリモン，日本語キモノ　1917年

(8) 日本語のロシア式転写について　1917年

(9) 日本と，合併のない世界　1917年

○(10) 日本語・マライ諸語類似点のひとつ　1918年

○(11) 日本語のなぞなぞの形式タイプ　1918年

○(12) 東北方言の母音　1918年

○(13) 日本における音楽的アクセントの研究（マライ諸語と関連して）について　1924年

○(14) 西日本語の音楽的アクセント。京都と土佐のアクセント　1925年

○(15) 西日本語のアクセント体系（京都方言と土佐方言）（フランス語）1925年（部分的に本書に訳出）

○(16) 東洋語大学用の言語学概論（単行本，部分的に訳す）　1928年

(17) 日本アクセント学資料　1. 土佐方言　1928年

(18) 日本語口語文法（O. V. プレトネルと共著，単行本）　1930年

○(19) 日本語の子音の諸カテゴリー　1920年代の遺稿　1959年発表

○(20) 日本語語源辞典にかんする暫定報告　1925年ころの遺稿　1960年発表

(21) 日本語（大ソヴィエト百科辞典）　1930年

（ポリワーノフの全著作目録は前記の本，pp. 31-45 に載っています。また後にあげるこの本の英訳本，pp. 32-53 にも載っています。）

以上のうち，(1)は吉町（ロシマチ）義雄氏の訳が「方言」4—10に発表されました。(2)のテクストは吉町義雄氏によって「音声の研究」VI（1937年）に発表されました。

(16)の pp. 120—139 の「西日本語の音楽的アクセント体系。京都と土佐のアクセント」を若くして世を去ったスラヴ語研究家・守屋長（戦争中，ポーランドで勉強していました）が訳して「京都および土佐におけるアクセント現象」と題して発表しました（「方言」2—8，1932年）。

ポリワーノフは日本語研究においてだけすぐれていたのではありません。一流のトルコ学者だったのです。ウズベク語方言学は彼の手で開拓されたのです。1924年（次いで1927年），原始トルコ語の長母音の存在を証明し，それは定説となりました。その証明の方法はアルタイ諸語研究者の共有財産と

なっています。朝鮮語がアルタイ系の言語であることの証明を最初に試みたのも G. J. ラムステット(1873-1950)でなくてポリワーノフです。ついでながら，ラムステットも日本語を研究し，たとえば金田一京助に影響を与えましたが，日本語の研究の深さにおいてポリワーノフには及ばなかったと思います（このテーマは D. シノール教授記念論集に寄せた拙稿 Ramstedt und Polivanov als Altaist-Japanologen「アルタイ学者・日本学者としてのラムステットとポリワーノフ」1976年で取り扱かいました。なお，ヘルシンキの P. Aalto 氏の G. J. Ramstedt and Altaic Linguitics. Central Asiatic Journal, vol. 19—3, 1975 も好論文です)。ポリワーノフの卓越したアルタイ学的見解は『言語学概論』の随所に見られます。

ポリワーノフはシナ学に対しても深い理解を示し，またソ連における最初のマライ・ポリネシア語の研究者は彼です。ただ，日本語のマライ・ポリネシア的要素を究明するために努力し，注目すべき諸見解を述べた点は偉大ですが，その結論に多少性急さが見られたと思います。

一般言語学者としてもポリワーノフは凡庸ではなかったのです。1968年にモスクワで出た論文集が『一般言語学論集』と題されたのも，そのことを物語っています。その英訳が Janua Linguarum の叢書 (Series Maior, 72) の中に取り入れられたのは，ソ連以外でも彼の業績が高く評価されていることを示します。

ソ連における最初の対照文法の著者もポリワーノフです。『ウズベク語と対照したロシア語文法』(タシケント，1933年，p. 182) がそれです（ウズベク語はトルコ系の言語です)。

ポリワーノフの言語学の先生はド・クルトネーであり，音声学の先生は L. V. シチェルバだったのです。学友のひとりが後にベルリン大学教授となり『ロシア語語源辞典』を著わしたマクス・ファスマーです（私はファスマー先生からポリワーノフについて逸話をききました)。日本語の先生はポズドネーフ（その兄弟は有名なモンゴル語学者）と黒野義文（ロシブミ）（東京出身，ペテルブルグで日本語を教えていました）であったろうと思います。

『トルコ語語源辞典』（モスクワ1974年）の著者 E. V. セヴォルチャン先生は，私がお宅を訪れたとき（1974年12月）「シチェルバはいつも，『私のところには，私よりできる学生がいる』と言っていました。それはポリワー

ノフのことです。一度読んだ本は見ないで引用でき，ページまで覚えていたとつたえられています」と話されました。多少の誇張はありましょうが，記憶力も非凡だったようです。はじめピアニストになるつもりだったのが片腕を失ったため言語学に転じたと佐久間鼎先生に語ったそうで，音楽の才があったのでしょう。日本語の音楽的アクセントの研究の開拓者になったのは当然かもしれません。

1928年にモスクワのロシア社会科学研究所連合の言語部会で，ニコライ・マルのヤフェット言語学説を攻撃し，1929年2月にもマル批判をくり返しました。結局，中央アジアのタシケントに移ることになったのです。そして1930年代後半，スターリンの粛清工作が荒れくるい，言語学者で投獄される者が続出したとき，1937年，ポリワーノフは反ソ活動の理由で投獄され，翌年1月亡くなりました（獄中で亡くなったのかどうか，発表されていません）。死後25年たった1963年3月，ソ連科学アカデミー言語学研究所の請願によって，ソ連最高裁判所は1937年の求刑は全く無根拠であったとして，ポリワーノフの名誉を回復しました。

レニングラード時代のポリワーノフをよく知っている訳者の恩師ニコライ・ポッペ教授が訳者の願いを容れて，ポリワーノフの想い出をこの訳書のために書き，この訳書に光彩を添えて下された好意には心から感謝します。

さて，数年前，私にポリワーノフの『言語学概論』のコピーを許された吉町義雄氏と，同書の共訳を計画しましたが，翻訳の方針について意見の食い違いが生じ，結局，ひとりで，このような形でポリワーノフの著作を日本の読者に提供することになりました。吉町氏による『概論』の名訳が完成することを心から希望します。

『概論』のコピーを許された吉町義雄氏，ポリワーノフの『一般言語学論集』（モスクワ，1968年）を出版直後モスクワからエア・メールで送って下さったのみならず，その他のポリワーノフの論文のコピーを送って下されたモスクワの畏友ニコライ・アレクサンドロウィチ・セロミャートニコフ氏，専門語の訳語について助力を与えて下された上，資料の点でも援助を惜しまなかったアクセントの研究家，杉藤美代子教授，ロシア語の解釈について助けて下されたN. ヴォージュ教授（Dr. N. Voge，京都産業大学教授，スラヴ言語学者）に心から感謝します。ただ，本訳書に誤訳や不適当な訳があれ

ば，それはもっぱら訳者の浅学のためであることは言うまでもありません。

ポリワーノフの文章はソ連でも難解をもってきこえています（1974年12月，モスクワの東洋学研究所で，同言語部長 I. F. ワルドゥリ氏は「ポリワーノフは私たちにとっても難解です」と言われました）が，何とかこのような形で翻訳をまとめることができたのは，ポリワーノフの論文にみなぎる日本語研究の情熱に鼓舞されたからであります。しかし，ポリワーノフがもし生きていたなら（今年85歳のはずです），私の翻訳に満足しないのではなかろうか，とおそれています。

弘文堂の理解ある態度と，同編集部の重松英樹氏のはげましがなかったならば，印刷技術上，きわめて困難な本訳書の出版までこぎつけることができなかったでありましょう。出版社と重松氏に対してここに感謝を表明します。

1976年5月

京都産業大学外国語学部の研究室において

村　山　七　郎

事項・人名索引

あ

い

う

え

お

か

き

く

け

せ

そ

た

ち

つ

て

と

な

に

の

は

ひ

ふ

へ

ら

り

る

れ

ろ

わ

日本語索引（アイウエオ順）

あ 行

か 行

さ 行

た 行

な　行

は　行

ま　行

や 行

ら 行

わ 行

〔編訳者紹介〕

村 山 七 郎（むらやま・しちろう）

1908年茨城県生れ。1942—45年，ベルリン大学にアルタイ系諸言語，アルタイ比較言語学を学ぶ。順天堂大学教授，ルール大学（西ドイツ）客員教授，九州大学文学部教授を経て現在，京都産業大学外国語学部教授。

主著 『漂流民の言語』『北千島アイヌ語』『日本語の語源』『日本語の研究方法』『国語学の限界』『日本語の起源』（共著）

日本語研究

昭和51年7月15日　初版1刷発行

©訳者　村 山 七 郎

発行者　鯉 渕 年 祐

株式会社 弘 文 堂　101 東京都千代田区神田駿河台1の7−13

TEL (294) 4801

振替 東京 2−53909

1036-562500-2281

港北出版印刷・井上製本